

九州自動車道筑紫野 I・C 取付部県道建設に伴う発掘調査報告

# トドキ遺跡 II

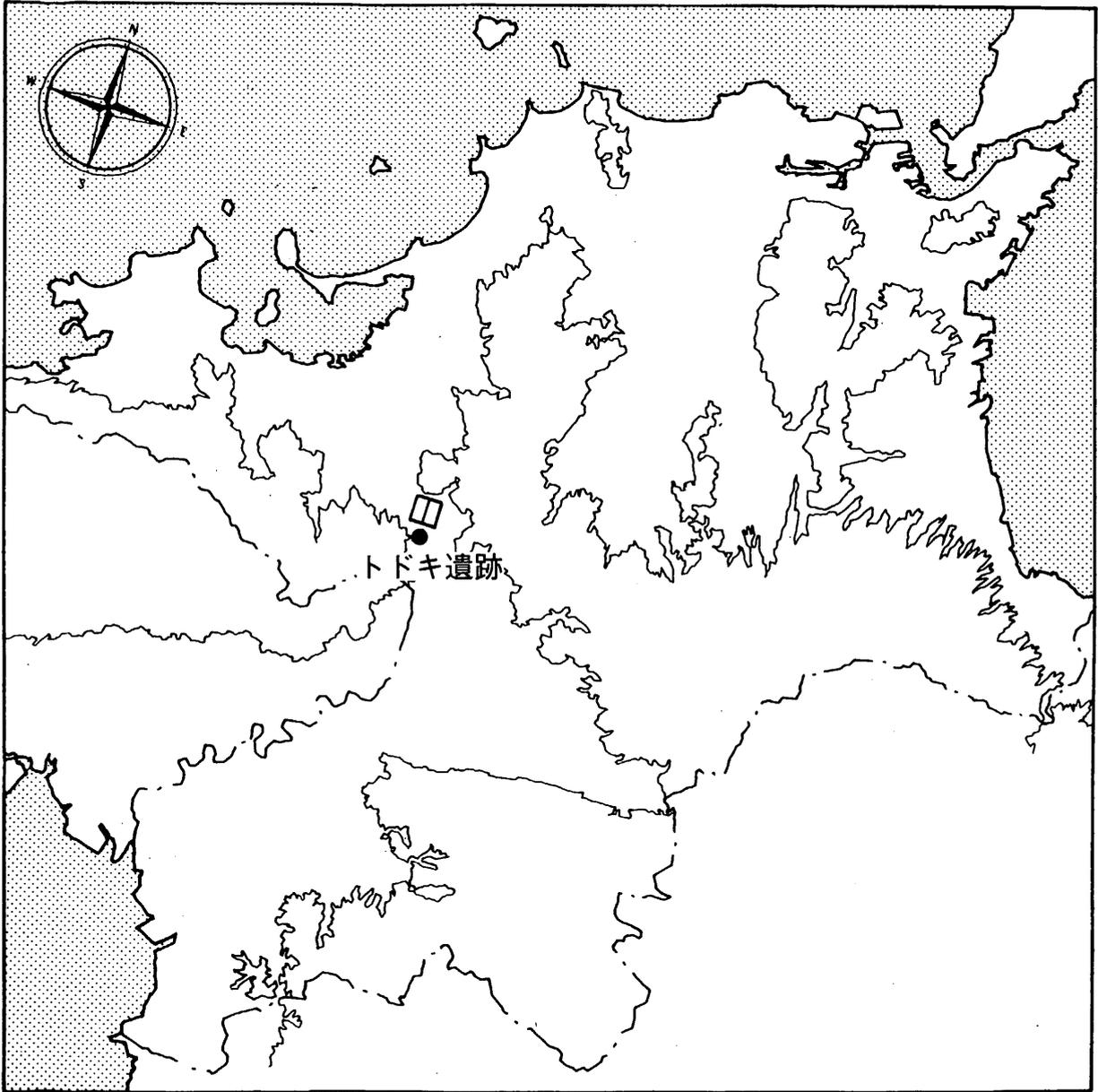
筑紫野市文化財調査報告書

第 58 集

1998

筑紫野市教育委員会

# トドキ遺跡Ⅱ



## 序

筑紫野市は、東西から山々が迫り、その間に肥沃な平野を持ち太古の昔から交通の要衝として栄えてきました。

市内には数万年前の氷河時代から現代に至るまでの多くの先人達の暮らしがあり、それらが文化財として随所に残っております。その中でも市の北部は「此府人物殷繁、天下之一都会也」と称された大宰府政庁と深い関わりをもつ条坊域の一部と考えられ、最近の調査でも大宰府の古代史を知るうえでの重要な発見が相次いでおります。

今回報告いたしましたトドキ遺跡の所在しております古賀区域は、大宰府政庁と基肄城を結ぶルート上に位置し、また条坊南郭外に位置する重要な拠点でもあります。調査は、インターチェンジ建設に伴うもので、各時代のさまざまな多くの遺物が出土しております。このように過去から連綿と続く人々の営みは、現代に生きる私たちが未来へ進む道しるべであり、後世の人々に語り伝えていくべきもので、今後とも尚一層の努力を重ねていきたいと思っております。

最後になりましたが、ご協力を賜りました地元古賀区域の住民の皆様方をはじめとする関係各位に心よりお礼を申しあげるとともに、本書が郷土の文化財に対する関心を深める、ご縁ともなれば幸いに存ずる次第でございます。

平成10年3月

筑紫野市教育委員会  
教育長 永渕 正敏

## 例 言

1. 本書は、筑紫野市教育委員会が平成8年に実施した筑紫野インターチェンジ取付部県道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 平成4年度に水資源開発事業に伴う住宅移転により同一地区内が発掘調査されているため、本報告は「トドキ遺跡Ⅱ」とした。
3. 遺構の略号は、溝をSD、土坑をSK、住居跡をSC、墓をST、性格不明遺構をSXとした。
4. 調査に係る一部の遺構実測は渡邊和子が行い、全体の遺構については国際航業株式会社（現場代理人：島田茂樹）に写真測量を委託した。
5. 本書に掲載の遺物の実測は、一部を渡邊が他は(有)埋蔵文化財サポートに委託した。
6. 遺構写真は、渡邊が撮影し、空中写真は(有)空中写真企画に、遺物写真についてはフォトハウスOKAに委託し撮影した。
7. 挿図中に使用した方位は国土調査法第Ⅱ座標系を基準にしている。
8. 遺物の挿図番号と図版番号は同一であり、遺物写真の大きさは不統一である。
9. 報告書作成に係る製図は(有)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
10. 遺物の復元および整理作業には、浅谷芳江、池田晃子、加藤美智子、北野正子、宗和代、田中紘子、高木保子、松窪美智子、松尾敦子、百田愛子、山内妙子、山内由美が従事した。
11. 本書の執筆は、石碑についてを小鹿野亮、他は渡邊が執筆、編集した。

# 目 次

## 本 文

	頁		頁
1. 調査の経過と組織	2	(4) 性格不明遺構 (SX)	54
2. 位置と環境	4	(5) 溝状遺構 (SD)	56
3. 調査の概要	6	(6) 柱穴 (Pit)	58
(1) 竪穴住居跡 (SC)	7	(7) その他の出土遺物	65
(2) 土坑 (SK)	36	(8) 石碑	66
(3) 墓 (ST)	52	4. 小 結	73

## 挿 図 (Fig)

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (S1/25,000)	5	Fig. 19 SC28・29出土遺物実測図 (S1/3)	30
Fig. 2 調査地点位置図および路線図 (S1/5,000)		Fig. 20 SC29実測図およびカマド実測図 (S1/60・1/20)	31
	【折り込み】		
Fig. 3 SC3実測図およびカマド実測図 (S1/60・1/30)		Fig. 21 SC32出土遺物実測図 (S1/3)	32
	【折りこみ】	Fig. 22 SC31~33実測図 (S1/60)	32
Fig. 4 SC3出土遺物実測図 (S1/3)	8	Fig. 23 SC33出土遺物実測図 (S1/4)	33
Fig. 5 SC4実測図およびSC4出土遺物実測図 (S1/60・1/3)	10	Fig. 24 SC34実測図および出土遺物実測図 (S1/60・1/3)	33
Fig. 6 SC4出土遺物実測図 (S1/3)	11	Fig. 25 SC35出土遺物実測図 (S1/3)	34
Fig. 7 SC5・6実測図およびSC5出土遺物実測 図 (S1/60・1/3)	13	Fig. 26 SC36実測図および出土遺物実測図 (S1/60・1/3)	34
Fig. 8 SC6出土遺物実測図 (S1/3・2/3)	14	Fig. 27 SC37出土遺物実測図 (S1/3)	35
Fig. 9 SC7実測図およびSC7・9・10出土遺物 実測図 (S1/60・1/3)	15	Fig. 28 SC38実測図 (S1/60)	35
Fig. 10 SC8・10・11実測図およびSC11出土遺物 実測図 (S1/60・1/3)	18	Fig. 29 SK3・4・5・7・8・11・12実測図 (S1/60)	37
Fig. 11 SC12・13実測図およびSC13出土遺物実測 図 (S1/60・1/3)	19	Fig. 30 SK2・4・5・7・8出土遺物実測図 (S1/3・1/4)	38
Fig. 12 SC14・16実測図およびSC14~16出土遺物 実測図 (S1/60・1/3)	21	Fig. 31 SK10出土遺物実測図 (S1/3)	38
Fig. 13 SC17・18実測図およびSC17~19出土遺物 実測図 (S1/60・1/3・1/4)	24	Fig. 32 SK13・14・16~19・21・22実測図 (S1/60)	39
Fig. 14 SC20出土遺物実測図 (S1/3)	25	Fig. 33 SK14・18出土遺物実測図 (S1/3)	40
Fig. 15 SC21実測図およびSC21・22出土遺物実測 図 (S1/60・1/3)	26	Fig. 34 SK15・17・19出土遺物実測図 (S1/4)	40
Fig. 16 SC23・25・27実測図 (S1/60)	27	Fig. 35 SK23~25・27・28・30実測図 (S1/60)	42
Fig. 17 SC25・26出土遺物実測図 (S1/3)	29	Fig. 36 SK23・28・30出土遺物実測図 (S1/3・2/3)	43
Fig. 18 SC28実測図 (S1/60)	29	Fig. 37 SK31・32・35・36・38~40・43~46実測 図 (S1/60)	44
		Fig. 38 SK35・37・38出土遺物実測図 (S1/3)	45

	頁		頁
Fig. 39 SK39・41・45・46出土遺物実測図 (S1/3・2/3)	45	測図(S1/3)	60
Fig. 40 SK44出土遺物実測図(S1/3)	46	Fig. 55 Pit153・162・193・199・200出土遺物実 測図(S1/3)	60
Fig. 41 SK48・50~56・58実測図(S1/60)	48	Fig. 56 Pit202・213・247・255・259・261・264・ 281・282・287・288・298・299出土遺物 実測図(S1/3)	61
Fig. 42 SK49・50・53・54・56・58出土遺物実測 図(S1/3・2/3)	49	Fig. 57 Pit302・314・318・322・325・346・347 ・355・361・362・399出土遺物実測図 (S1/3)	62
Fig. 43 ST1・2出土遺物実測図(S1/3)	52	Fig. 58 Pit407・432・438・463・469・478・480 ・498・499出土遺物実測図(S1/3)	63
Fig. 44 ST1~3実測図(S1/30)	53	Fig. 59 Pit505・519・527~529・539・561・ 564・567・572・573・602・615・626・ 655出土遺物実測図(S1/3)	64
Fig. 45 SX2・7実測図(S1/60)	54	Fig. 60 カクラン1・2および表採出土遺物実測図 (S1/3・1/4)	65
Fig. 46 SX4~6・7・9・10出土遺物実測図 (S1/2・1/3・2/3・1/4)	55	Fig. 61 石碑現況図(S1/50)	66
Fig. 47 SD6・8出土遺物実測図(S1/3)	56	Fig. 62 地山整形図(S1/50)	67
Fig. 48 SD14・18出土遺物実測図(S1/3)	56	Fig. 63 石碑実測図-1(S1/10)	68
Fig. 49 SD21・29出土遺物実測図(S1/3)	57	Fig. 64 石碑実測図-2(S1/4)	70
Fig. 50 SD36・41・42出土遺物実測図(S1/3)	57		
Fig. 51 Pit3・6・18・20・43・46・48出土遺物 実測図(S1/3)	58		
Fig. 52 Pit56~59・63出土遺物実測図(S1/4)	59		
Fig. 53 Pit59・65・79・85出土遺物実測図 (S1/3)	59		
Fig. 54 Pit102・107・127・134・139出土遺物実			

## 図版(PL)

PL. 1 全景(北西から), 全景(上空から)	PL. 13 出土遺物
PL. 2 住居跡群(SC4~16), SC4(西より), SC4 (北から), SC3	PL. 14 出土遺物
PL. 3 SC5, SC8, SC6, SC8・10	PL. 15 出土遺物
PL. 4 SC11・17, SC11, SC12	PL. 16 出土遺物
PL. 5 SC13, SC16, SC21	PL. 17 出土遺物
PL. 6 SC33, SC36, SK14	PL. 18 出土遺物
PL. 7 SK15・16, SK17, SK19	PL. 19 出土遺物
PL. 8 SK12, SK28, SK25, SK55, SK53, SK56	PL. 20 出土遺物
PL. 9 石碑近景(現況), 側面(近景), 東から, 南から, 北西から	PL. 21 出土遺物
PL. 10 地山整形(北東から), 北西から, 南東から	PL. 22 出土遺物
PL. 11 出土遺物	PL. 23 出土遺物
PL. 12 出土遺物	PL. 24 出土遺物
	PL. 25 出土遺物

	頁
表	
SC一覧表	50
SK一覧表	51

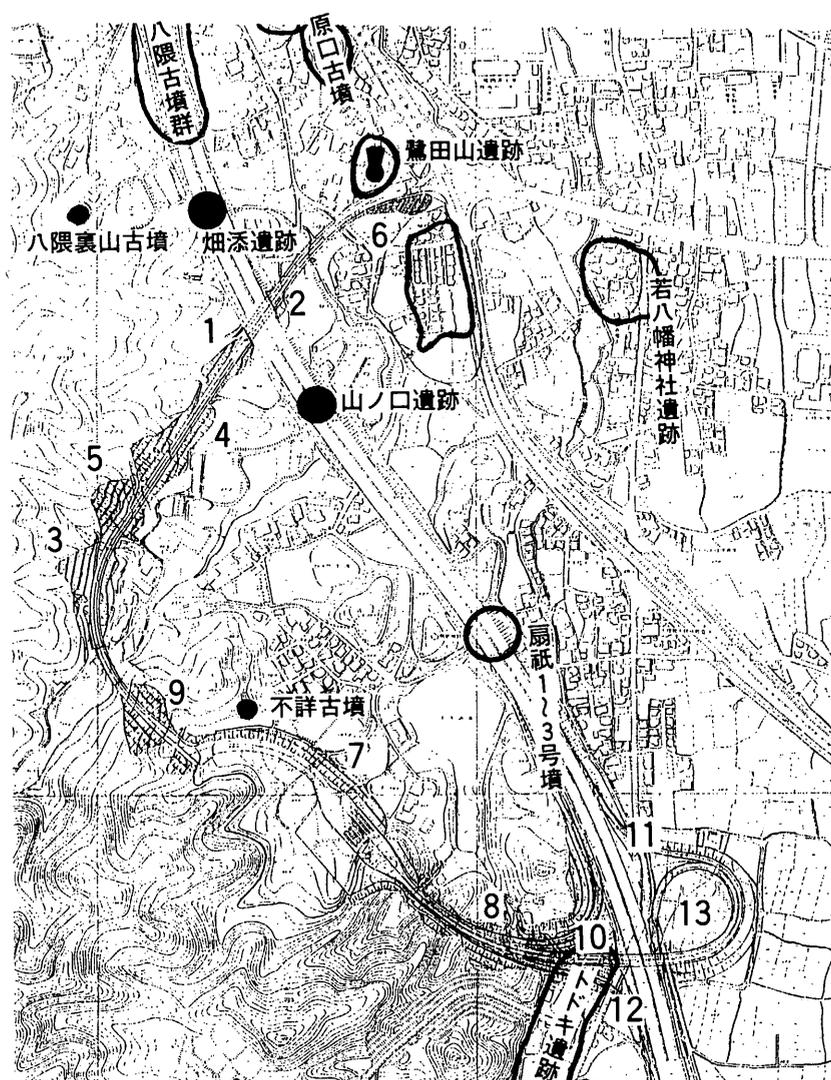
付 図

トドキ遺跡Ⅱ遺構配置図 (S1/100)

予定路線内の試掘・確認調査結果

地点	面積	試掘調査	内容
①	5,000m <sup>2</sup>	試掘調査済み	遺構なし
②	2,000m <sup>2</sup>	試掘調査済み	遺構なし
③	1,100m <sup>2</sup>	試掘調査済み	遺構なし
④	3,750m <sup>2</sup>	試掘調査済み	遺構なし
⑤	19,000m <sup>2</sup>	試掘調査済み	遺構なし
⑥	850m <sup>2</sup>	試掘調査済み	遺構なし
⑦	37,000m <sup>2</sup>	試掘調査済み	遺構なし
⑧	15,000m <sup>2</sup>	試掘調査済み	遺構なし
⑨	2,500m <sup>2</sup>	試掘調査済み	遺構なし
⑩	18,750m <sup>2</sup>	試掘調査済み	一部トドキ遺跡の範囲中
⑪	1,250m <sup>2</sup>	試掘調査済み	遺構なし
⑫	1,350m <sup>2</sup>	試掘調査済み	遺構なし
⑬	26,000m <sup>2</sup>	試掘調査済み	古墳時代～奈良時代の生活跡か

総計 133,550m<sup>2</sup> (集約上若干の誤差を含む)



筑紫野インター予定路線図

# 1. 調査の経過と組織

筑紫野市では、地元の振興策のためにインターチェンジを新たに建設する計画が策定され、平成7年度には建設予定地が決定。これを受けて市教育委員会では、福岡県教育庁福岡教育事務所職員の立会のもとに、埋蔵文化財の試掘調査を実施することになった。

試掘調査の結果を踏まえ、平成7年5月に日本道路公団福岡管理局および久留米管理事務所・福岡県土地開発公社・県教育庁文化課・福岡教育事務所・筑紫野市インターチェンジ対策室と市教育委員会社会教育課の間で文化財調査に伴う具体的協議に入った。

市教育委員会では対応を検討した結果、市教委単独では本調査は工期内では完了できないとの判断をし、福岡県文化課・福岡教育事務所に対策を相談。6月から調査体制について協議をかさね、7月には福岡管理局久留米管理事務所を含め、インター本体部分の調査の具体的協議を行い、市教委は平成7年12月より調査を開始、本体部以外の予定地は調整をしながら試掘調査を実施していくことで合議した。

平成8年5月にインターチェンジ取付部の県道建設に伴う事前の協議が、市インターチェンジ対策室と社会教育課の間でなされ、当該地における文化財の有無についての試掘調査を5月25～28日に及んで実施することとなった。

試掘調査では、予定地内3700㎡のうち2800㎡に及ぶ範囲に遺跡が所在することが確認されたため本調査について、道路公団久留米管理事務所を含めインター対策室と社会教育課で具体的協議を行わない平成8年度中に本調査完了ならば、工事工程の遅延はないとの判断がなされた。これを受けて社会教育課で対応を検討した結果、本体部分の工程との調整の中で完了させられると考え、合議にいたった。

しかしながら本体部の発掘調査は試掘調査の所見が大きくくい違い、極度の遺構の密集・重複の状況下で遅々として進まず、県道部分の現地における発掘調査はあけて平成9年1月10日から実施することになり、最終的に同年3月31日に終了させた。

このため、市教委の調査に参加していただいた作業員の方々には、かなり無理な作業内容を強いる事となった。平成7年12月から平成9年3月までの1年4ヶ月間、無理な作業内容にもかかわらず、御協力願った作業員の皆様方の労に、この場をかりてお詫びとお礼を心から申しあげる次第です。

なお、整理および報告書作成の作業は平成9・10年度にわたって実施した。

## 発掘調査の組織

総括	教育長	永渕 正敏
	教育部長	永田 晋一
	社会教育課課長	岡部 隆充
庶務	文化財担当係長	森実 秀美(平成7年度)
	課長補佐兼文化財担当係長	古賀 幸信(平成8年度～)
	臨時職員	中富貴代美
	〃	柴田 数子
	技師	渡邊 和子
事前審査	主査	長野 卓司(平成8～9年度)

事前審査	技師	草場 啓一 (～平成7年度)
	〃	渡邊 和子 (平成8年度～)
発掘調査	技師	渡邊 和子
整理報告	〃	渡邊 和子

発掘調査作業員

青柳千津子 浅谷芳江 天本加代子 池田晃子 池見敏子 石原武夫 市川美智子 市川冷子  
 井本みつえ 上原良子 内田智子 大島幸子 太田倫子 岡部康子 荻本陽子 鬼木公平 加藤  
 隆明 加藤美智子 川尻都子 久保キン子 久保田和美 古賀公子 古賀千都子 小林悦子 小  
 林えみ子 佐子山早苗 白水嘉子 高木保子 高田春江 多田フジ子 田中喜代子 田中直美  
 田中初子 田中紘子 田中泰彦 津下昭一 鶴仁 砥綿郁子 中川キヨ子 永田スエ子 永田芳  
 子 長谷川玲子 平嶋琢巳 藤本愛子 松尾亘 松尾千代子 松窪美智子 宮原美恵子 百田愛  
 子 安永豊香 八尋英一 八尋ツネミ 山内由美 山口ミノル 山下吾老 山下多恵子 吉田チ  
 ズ子 吉田トシエ

発掘調査補助員

八木健一郎 (現穎田町教育委員会)

室内整理作業員

浅谷優子 浅谷芳江 天本加代子 石田花子 池田晃子 一坊寺ふじ美 上原良子 荻本祐子  
 荻本陽子 加藤美智子 北野正子 小林えみ子 白水嘉子 宗和代 高木保子 田中紘子 浜田  
 敏子 松尾敦子 松窪美智子 百田愛子 百田千恵 山内妙子 山内由美 山下多恵子 吉田ト  
 シエ

## 2. 位置と環境

筑紫野市は福岡市と久留米市を結ぶルートのはほぼ中間に位置し、市域には国道3号線・JR鹿児島本線・九州縦貫自動車道・西鉄大牟田線といった南北九州を結ぶ幹線が縦断する。また国道・JR本線など市域の中心より分岐するなど交通の要衝としての役割を担っている。

地形的には、東から三郡山塊、西から背振山塊の山々が迫り、その間に狭長な平野が形成されていて、この狭長な平野の北西部にあたる場所に「遠の朝廷」と呼ばれた大宰府政庁が設置され、西海道九国三島の政治・経済の中心地として繁栄、筑紫野市北部を含めて条坊制が施行されたと考えられている。大宰府政庁を中心として九州各地に放射状に官道が整備され、この狭長な平野部は、やはり現代同様に交通の要となっていた。またこの狭長な平野の両岸には数多くの遺跡の存在が知られる。

九州縦貫自動車の建設に伴い、背振山系から広がる西山麓は多くの発掘調査が行なわれ、弥生時代から中世にかけての遺跡が確認・報告されている。

今回報告のトドキ遺跡は、筑紫野市大字古賀438,439-1, 440, 440-1, 446-1~3, 445-1・2番地に所在し、市中心街より南に2.7kmに位置、背後に大宰府の防衛上の施設として築かれた基肄城のぞむ。

調査地点付近は、背振山塊から派生する山麓と標高404mの基山山麓の間を走る山口川が、平野部に開口するところに立地する。この山口川は基山山麓から派生する立明寺丘陵の西側を北東方向へさらに東方向へ走り永岡付近で宝満川に合流、立明寺丘陵付近では河岸段丘を形成している。

トドキ遺跡では、弥生時代から中世の遺構・遺物が確認されているが、弥生時代を中心にした周辺遺跡の概観は、福岡県教育委員会刊による「貝元遺跡Ⅰ」で既に述べられているので、ここでは古墳時代以降を中心とした環境を述べてみたい。

トドキ遺跡周辺の古墳時代の集落は、現段階では多くは見つかっていないが、北から概観すると太宰府市の前田遺跡（弥生時代後期から古墳時代前期～中期まで続く集落）、同市の原口遺跡（5世紀終わりから6世紀前半に続く）、あるいは筑紫野市の塔原遺跡・野黒坂遺跡などがあげられる。

これら前述した遺跡の中でも6世紀を主体とする集落は7世紀代になると消滅し、それ以後出現する集落は、住居や集落の規模も縮小化してくる傾向にある。トドキ遺跡では5世紀末から6世紀後半代の遺構が検出されたが、主体は6世紀後半代の集落で、対峙する貝元遺跡でも同様な傾向をみせ、この周辺が大集落に発展した時期を示している。両者の遺跡を比較すると占地の有り方が、山裾部と平野の開口部の違いがあるとはいえ、同権力下の最小単位地域として捉えることができると考えられる。この集落を生活基盤にした権力者の墓すなわち古墳は、この両遺跡の周辺部に所在すると考えられる。これらは天拝山山麓の扇祇古墳群・古賀古墳群あるいは東側の立明寺丘陵部に位置した立明寺古墳群・萩原古墳群などに該当すると思われ、貝元遺跡の報告の中で細かく検討していきたいと思う。また今回の調査では7世紀後半から8世紀代に位置づけられる遺構も検出されていて、大宰府との関わりを示すものとして興味深いものである。このことは、やはり貝元遺跡の報告結果をふまえた中での検討としていきたい。

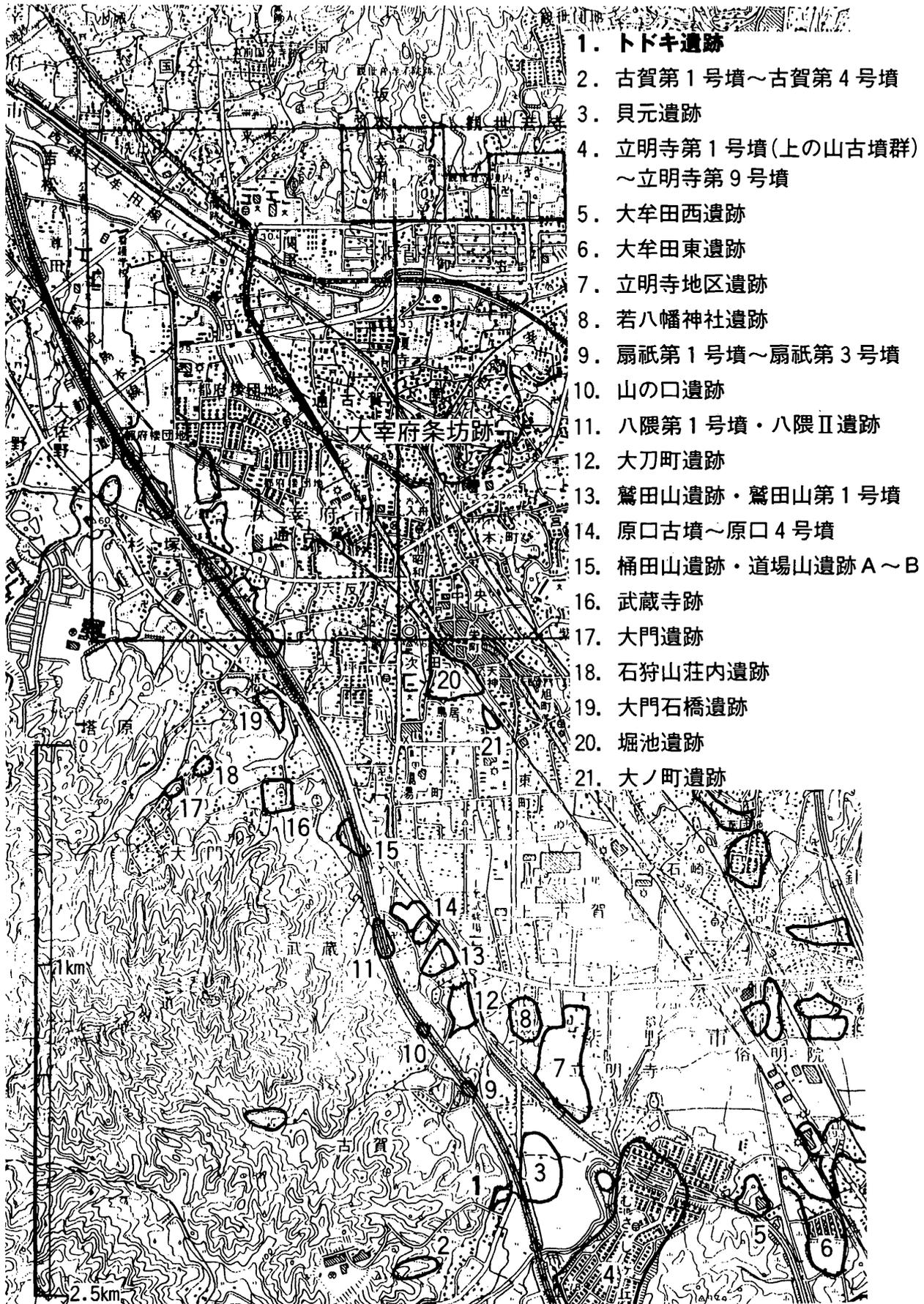


Fig. 1 周辺遺跡分布図 (S1/25,000)

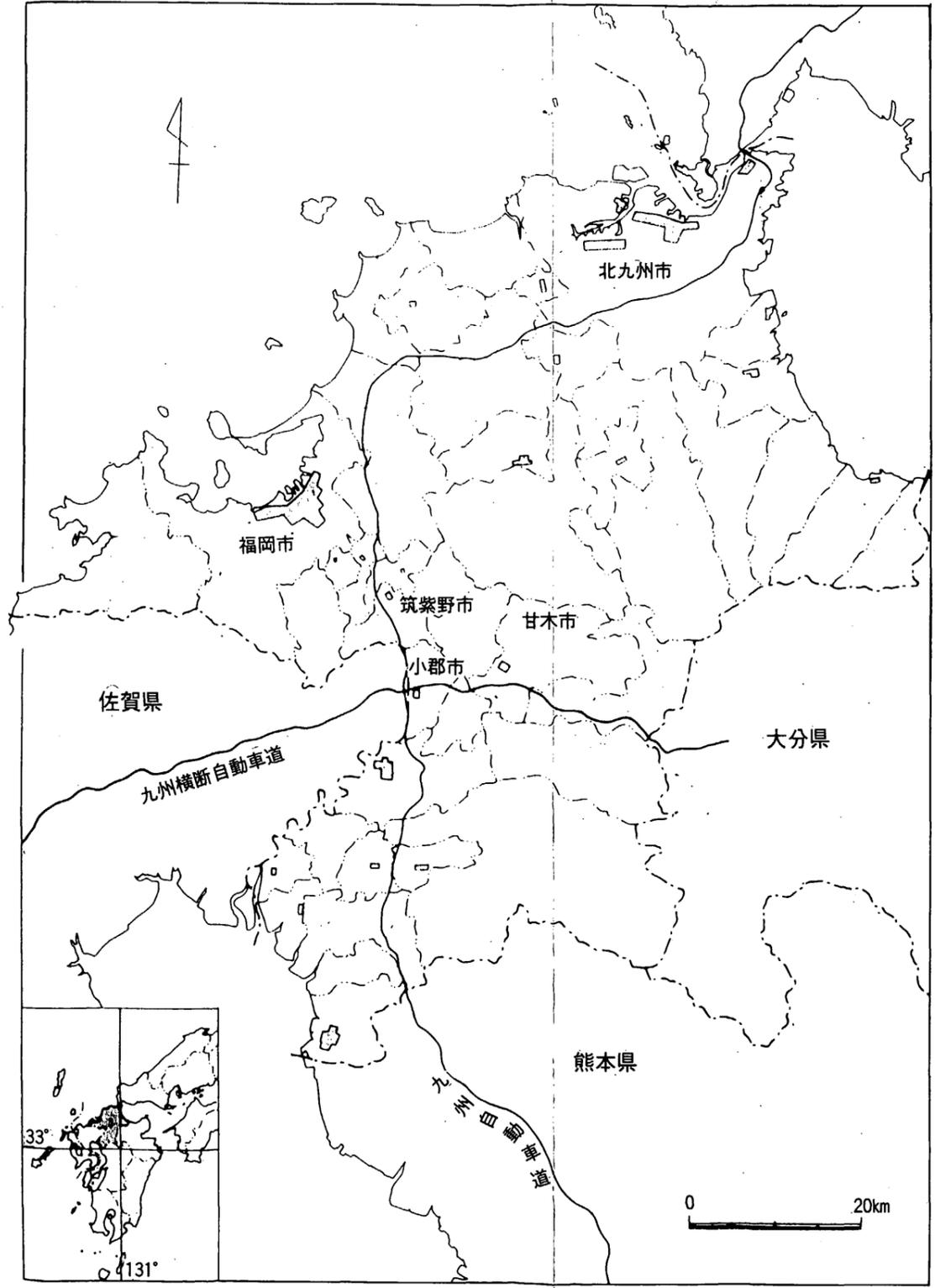
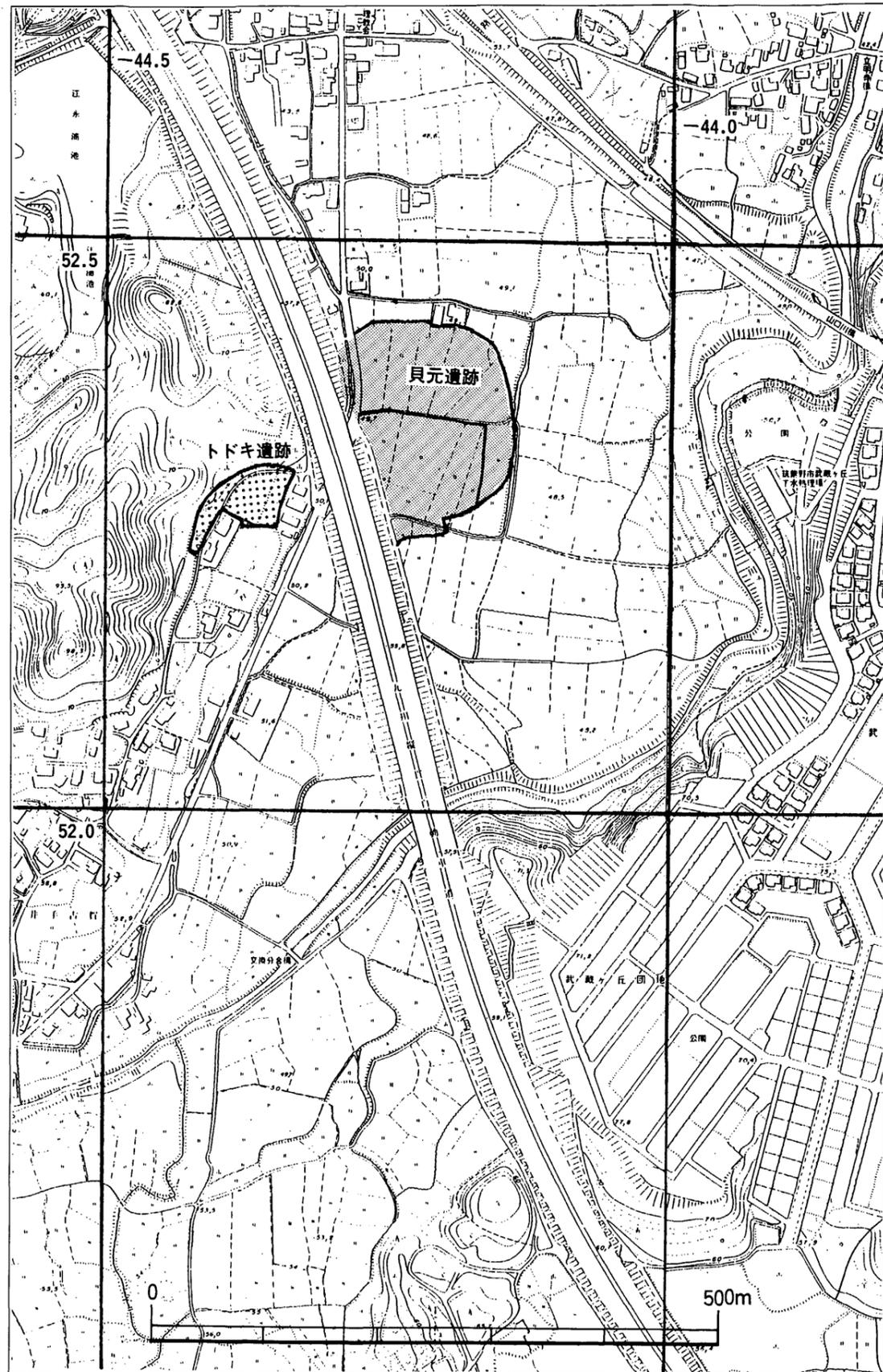


Fig. 2 調査地点位置図 および路線図 (S1/5,000)

### 3. 調査の概要

調査区は、インターチェンジ本体部の東側で貝元遺跡より山裾部に位置し、現況宅地・土捨て場および畑となっている。平成8年5月の確認調査では、本体部同様の失敗をくり返さないため、慎重かつ丁寧に実施した。この確認調査では宅地および土捨て場には1.5～2mの客土が積まれているため、本調査に先行して、客土搬出を実施しなければ調査に支障があるためインター対策室と協議し、調査とは別途契約にて工事を委託、客土を搬出した。

遺跡内の基本層は、位置と環境で述べたように背振山塊の山裾に立地するため、花崗岩パイラン土がベースとなっている。しかも周辺は、昭和38年頃の荒造成で削平が進み山裾としての景観を僅かにとどめるにすぎない。

調査区の東側、県道平等寺～筑紫野線に近い畑部分の層序は表土（耕作土）、その下に地山（花崗岩パイラン土）、調査区の中央付近から山裾よりでは、表土の下に30～35cm程度の整地層が確認され、遺構の掘り込みは、大部分整地層からなされていると考えられた。しかも、この整地層に花崗岩パイラン土が使用されているため遺構検出は困難を伴った。さらに土捨て場として使用された時点で産業廃棄物を埋めていて、カクランも所々に確認された。

本調査と周辺域の民間の試掘調査から、旧地形を考えると現在の県道（平等寺～筑紫野線）のすぐ横まで山裾が伸びていて、その斜面部を削りこんだり、積み土したり、かなりの造成工事があったものと推察できる。もちろん積み土として使用された整地層は、場所によって異なる。今回とトドキ遺跡Iで埋められた積み土は、花崗岩パイラン土であるが、僅か70mしか離れていない場所では貝元遺跡同様に暗茶褐色土層の堆積があり、遺構の掘り込みはここからも確認できた。

この造成事業の時期は、6世紀後半以降から始まるものと考えられるが、この時期以後7～8世紀段階については、いろいろな社会状況や背景、さらには大宰府成立前も考慮にいれながら貝元遺跡の報告の中でまとめ、もしくは問題提起していきたいと思う。

今回の調査では検出された遺構は、竪穴住居跡（SC）38軒・土坑（SK）58基・土坑墓（ST）3基・性格不明遺構（SX）10基・溝状遺構（SD）46条・柱穴（Pit）660・石碑1基である。

これらの遺構の時期は弥生時代から江戸時代に至るもので、概ね①弥生時代中期初頭、②5世紀末、③6世紀後半、④7世紀後葉から8世紀代、⑤16世紀頃、⑥江戸時代に大別できるが時間的な連続性はない。

また、前述したように遺構の大半は整地層から掘りこまれているため遺存状況は悪い。

遺構の時期は、6世紀後半代のもものが主流をなし、弥生時代・5世紀代のもものは僅かである。16世紀代のもも明確に捉えられる遺構は少ない。この時代、周辺には天判山城をはじめとして堂の山砦・飯盛砦・博多見城などが築かれていたため、島津勢の侵攻の影響を受けたものと思われる。

また江戸時代の「阿奈元霊神松崎因幡守」銘の石碑が調査区設定の伐採時に確認された。石碑自体については、(8)石碑で詳細に述べるが、石碑の位置する周辺は荒地となっていて地元の人達にも知られていなかった。しかしながら昭和61年頃の山口地区公民館が主体となって実施された“ふるさとの歴史調べ”の中には記載されているが、明確な位置など掌握できていなかった。発掘調査の結果、二次的な移築も考えられるが筑紫神社と関係ある可能性もあり、この古賀地域と筑紫神社の関連を考える上では興味深いものである。

## (1) 竪穴住居跡 (SC)

### SC 1

調査区の西側、SC 3 に隣接する。試掘トレンチで切られたため西側の壁部分のみ遺存する。壁の遺りは悪く、立ち上りは20cm程度しかないがU字状の浅い壁溝をもち、元来の形状は方形を呈していたと考えられる。また支柱穴は4本で各コーナーにあつて心心間は2.1mを測ると思われる。遺物は出土してなく時期は不明である。住居跡の大半は整地層に掘りこまれ、暗茶褐色の埋土。

### SC 2

SC 1 と同様に試掘トレンチに切られ、西側壁しか遺っていない。壁の遺りも悪く、立ち上がりは14cmである。支柱穴は4本の可能性があり、SC 1 と同様にコーナー部にあつたと考えられる。形状は方形と考えられる。出土遺物はなく、時期は不明である。住居跡の埋土は暗茶褐色である。これも大半が整地層より掘りこまれている。

### SC 3 (Fig. 3・4-1~13, PL. 2)

調査区の西側、やや南寄りに位置し、住居跡集中区より離れてある。住居跡の壁は、西南側と北西側そして西側を残している。中でも西側の壁は残りが良く、立ちあがりは72cmを測る。南側壁とカマドの一部は試掘トレンチ設定の際の掘削によるもので本来は北壁同様の高さまで残っていたと思われる。住居の東側および北東・南東部の壁と中央部から東側の床面部分は、宅地化の際の配水管埋置による削平のため本来の形状を失っている。現存する壁の立ち上りは全般的にやや外傾するものの、直に近いものである。西壁はカマド付近が若干、外側へ僅かに張り出し、コーナー部分も隅丸となるが、総体的には直線に近く5.8mを測る。北壁はやや中心部が外に張り出しているが、支柱穴の位置からして6m前後の長さに収まると考えられ、住居跡の形状は、ほぼ正方形を呈していたと推測される。支柱穴は西側・北側柱列方向と西・北壁方向は一致している。柱穴心心間は西側P1~P2間が3.6mを測り、他の柱穴間距離よりやや広いが、これは西壁部に設けられたカマドの位置に規制されたものであろう。柱穴の形状はP1~P3の所見から幅60cm前後の掘り方を50cm程度掘り下げ、さらにその底面の一部を30cm前後の幅で深さ50~60cm程度掘り下げた二段掘りの形状を呈すものと思われる。P4はSK4及び配水管埋置による削平のために二段掘りの浅い部分の掘り方を失っていると考えられる。また現状では床面には貼り床は認められなかった。

### カマド

前述のように西壁のやや南よりの位置に配される。検出時に土層及び本体の観察結果、遺存状況は良くないと判断された。袖部に使用されたと思われる粘土も検出されず、カマド内の埋土も前庭部付近に堆積していた。前庭部付近の埋土を除去すると長さ70cm、幅15~20cmの花崗岩が出土した。この石は熱変で、もろい状態である。大きさからして支脚として使用されたものとは考え難い。焚口にあたる部分の天井も遺存してなく、両袖を構築していたと思われる粘土なども検出されなかった。袖部にあたると思われる部分には焼土や焼土を含んだ層序が確認でき、もしかすると袖体には当初から焼土あるいは焼土を含んだ土を使用したかも知れない。また前庭部で検出された石の後、右袖にあたる部分には、上部が平坦で幅20cm程度の立石が遺存していた。この立石はカマド内側に若干、内傾して立てられた大きめの河原石でやはり多少の熱変は認められる。残念ながら左袖側には立石は検出されなかったが抜去痕が確認できることから、両袖部には立石を配し、その上坦部に

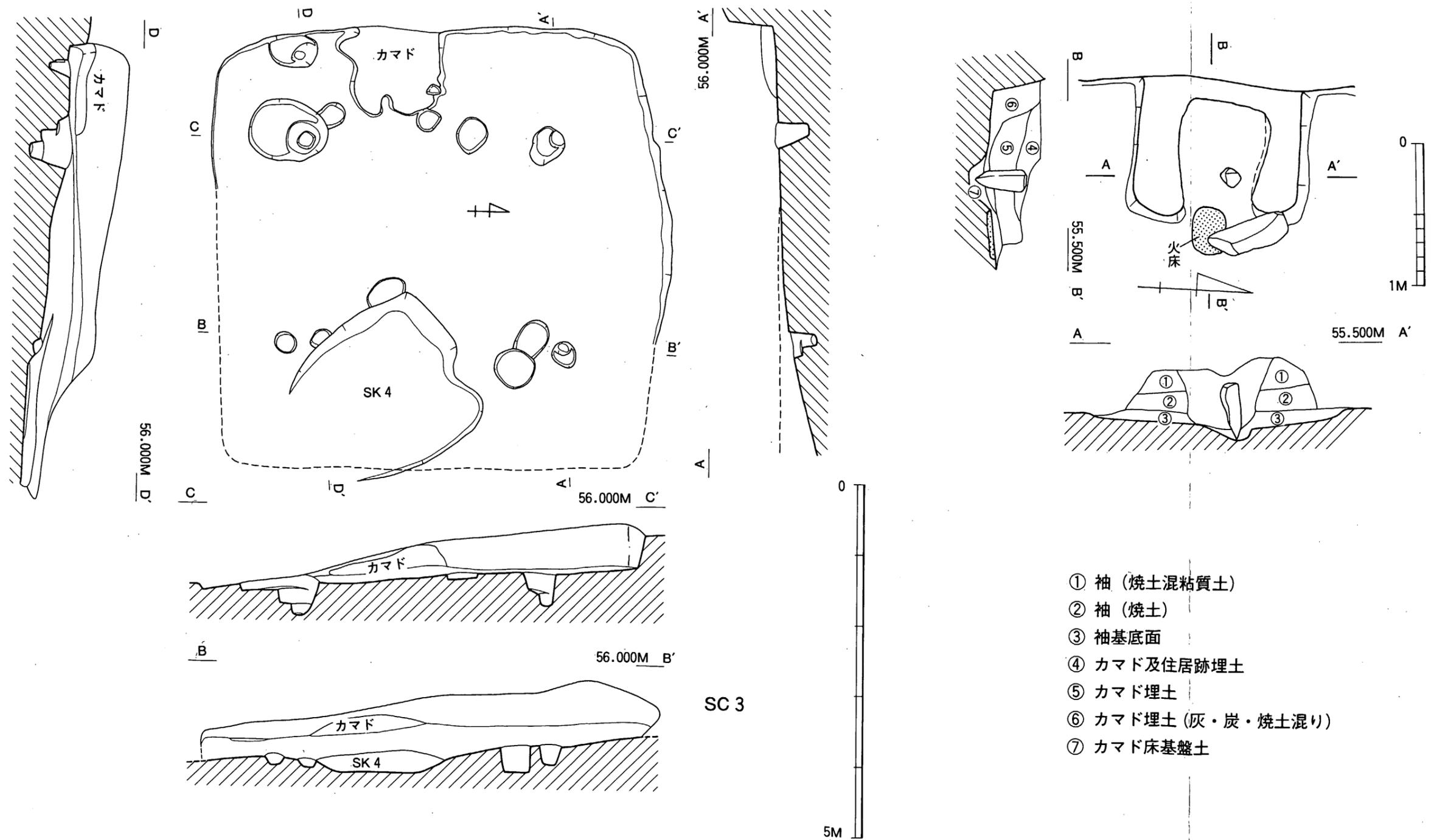


Fig. 3 SC 3実測図(S1/60) およびカマド実測図 (S1/30)

天井石を架けた構造であったものと推定され、前庭部で検出された石は焚口部の天井石で、左袖石が抜きとられた時点で落ちたものと考えられる。

燃焼部にあたる埋土中よりFig. 4-11~13の3個体分の甕が出土した。出土状況は、支脚の前方焚口に近い部分で、底面より10cm程度浮いた状態で、現況ではカマドに配されていたものが共につぶれた状態とは考え難い。

支脚は、燃焼部の中央よりやや右袖よりに配置。支脚に使用された石は、安定感のある立方体の河原石で、カマド底面に埋められたというより床面に接して置かれた状態であった。

煙道部付近は試掘時の掘削で若干削ってしまったため現状では明確に捉えられなかった。しかし住居の壁が僅かではあるが張り出した部分もあり、この部分の地山である花崗岩バイラン土が熱変していることから、煙道があったと推測できる。このカマドは試掘時に、すでに検出され、当時を思い出すとこのカマドの埋土上層より扁平な河原石を検出、もしかすると煙道の封印に関連したものであったかもしれない。

遺物出土状況は、カマド内については既述したが他の遺物は5をのぞいてカマド横（西南壁）の埋土中より出土。カマドと同一レベルの壁に接して出土した。

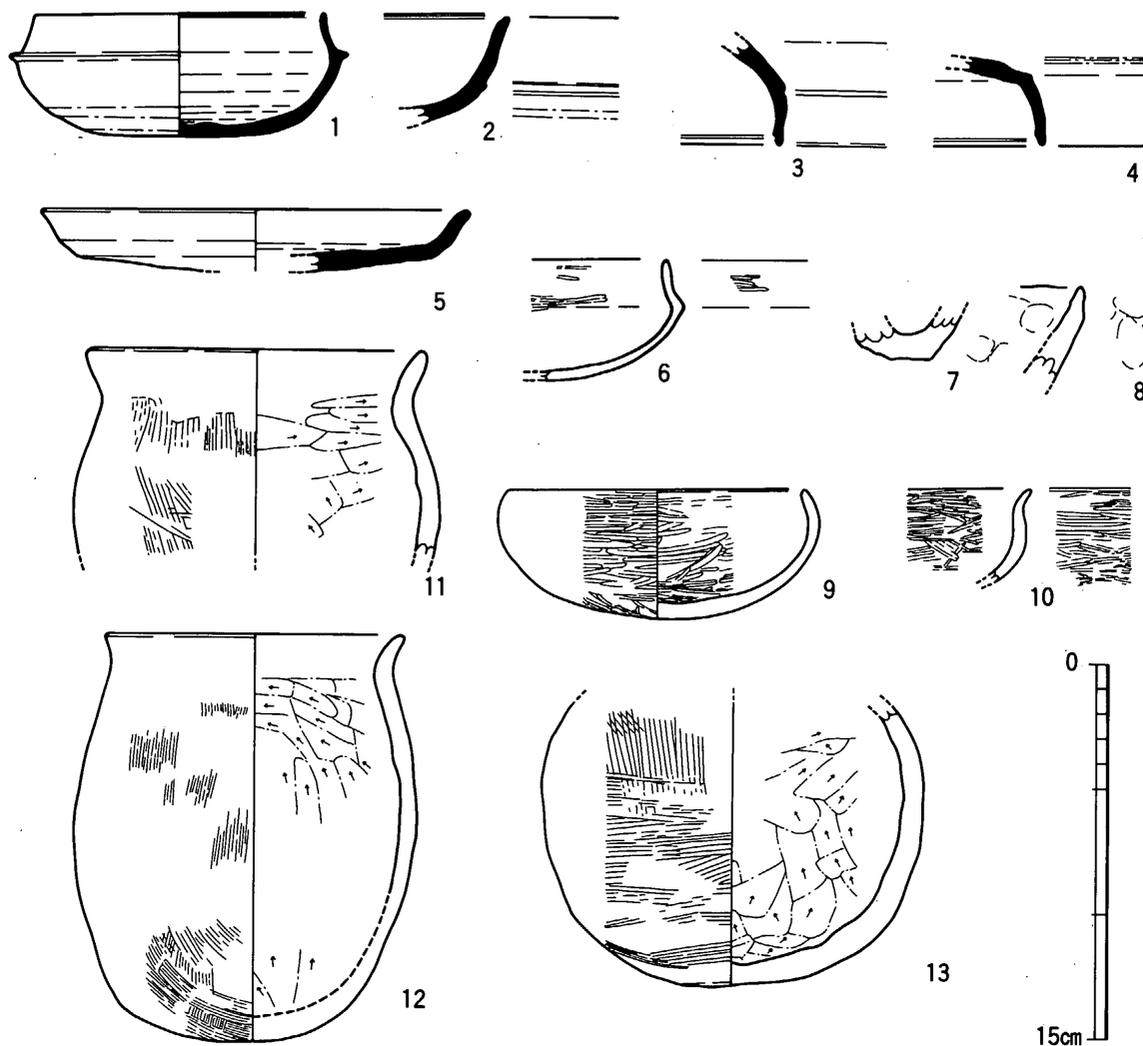


Fig. 4 SC 3 出土遺物実測図 (S1/3)

#### 坏 (Fig. 4-1・3・4・6・9・10, PL.11)

1は須恵器の坏で口径11.5cm, 器高5cm, 受部径13.5cmを測る。胎土には1mm大の砂粒を含み焼成は普通。調整は内面ヨコナデ、外面、口縁部から体部はヨコナデ仕上げ、底部はヘラケズリである。ロクロ回転は左方向で、色調は外面灰色(7.5Y5/1・N6/1)で内面は灰色(7.5Y5/1)を呈す。

蓋の破片である3は、体部から口縁部がやや直線的に延びる。口唇端部内側には沈線、外面の体部～口縁界にも沈線をもつ。焼成は普通で、色調は外面灰色(N5/)で内面、灰色(N6/)を呈す。胎土には1mm大の砂粒を含む。4は内外面ともに灰色(N4/)を呈す。焼成普通。調整は内面と外面の口縁部はヨコナデ、外面天井部はケズリを施す。6は須恵器の坏を模倣したもので、色調は内外面ともに橙色(5YR7/8)を呈し、外面の体部から底部にかけて赤色塗装を施している。調整は口縁部内外がミガキ、体部から底部にかけてはケズリの後ミガキで仕上げている。9の坏は、口径11.9cm, 器高5.2cmを測る。胎土は僅かに砂粒を含むが精製されている。焼成は良好で、外面橙色(5YR7/8)・浅黄橙色(10YR8/4)、内面は橙色(5YR7/8)を呈す。外面の口縁付近はヨコナデ後ミガキを他はケズリの後ミガキで仕上げている。10は体部が丸くなる形態と思われる坏の破片で、色調橙色(2.5YR6/8)を内外面ともに呈す。微砂粒を少量含むが胎土は精製、焼成は良好である。調整は内面と外面の口縁部がナデの後ミガキを外面体部がケズリ後にミガキを行っている。

#### Ⅲ (Fig. 4-5, PL.11)

復元口径17.1cm, 器高2.5cm, 底径14.2cmを測る。内外面ともに灰黄色(2.5Y7/2)・暗灰色(N3/)を呈す。ロクロ右回転で底面ヘラ切り後ナデ、内外面ヨコナデを施している。

#### 甕 (Fig. 4-11~13, PL.11)

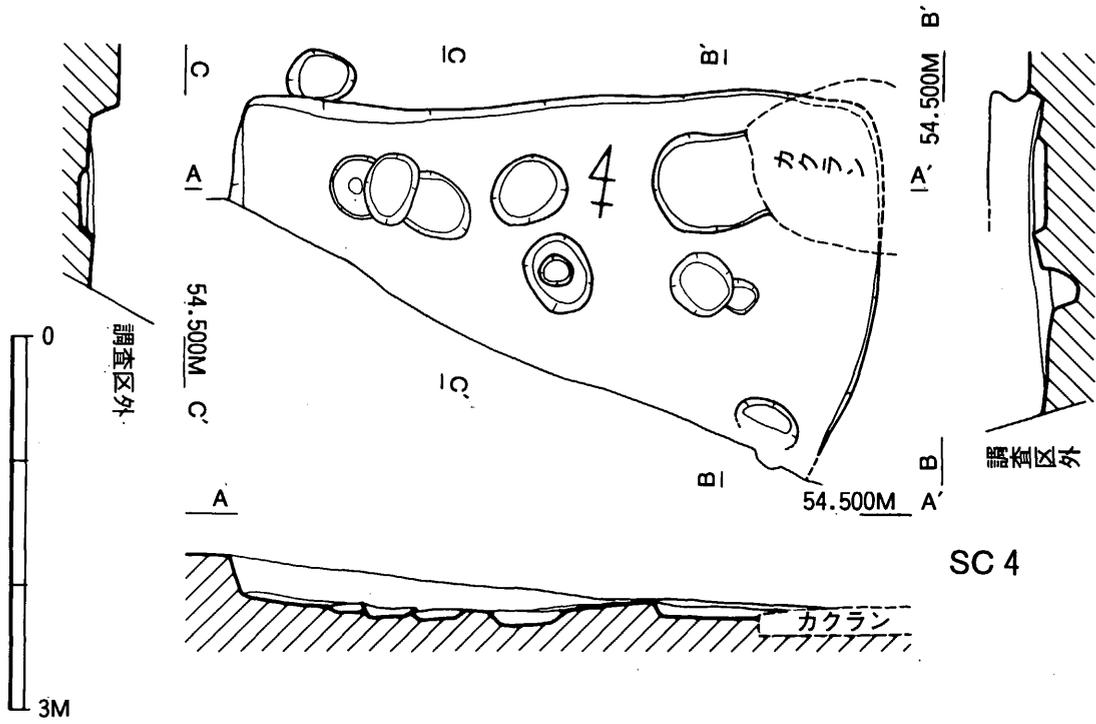
11は復元口径13.6cm、色調橙色(5YR7/6)を呈す。胎土には1~2mmの砂粒・ウンモ・角閃石を含み、焼成は普通である。12、復元口径11.9cm, 器高16.3cmを測る。焼成は普通で、胎土には1~2mmの砂粒を含む。11・12いずれも最大径は胴部中位にあって、調整は内面ケズリ、外面ハケメで仕上げている。12の色調は内外面ともに明黄褐色(10YR7/6)・橙色(5YR6/6)を呈す。外部底面と内面の一部にススが付着している。

#### SC4 (Fig. 5, PL. 2)

調査区の中央よりやや西側の南隅で検出。南側は調査対象外となるため本来の1/3程度しか確認できていない。北東コーナー部をカクランに切られ、SC7を切っていて、北壁の長さ4.2m+αを測る。東壁は否んでいるが、他の住居跡から考えて方形を呈していたと思われる。壁の遺存状況は、北壁側が20cm, 西壁側が30cmで、やや直に近い立ちあがりを見せる。支柱穴は北壁の軸に並び、4本柱の可能性をもつ。心心間は2m前後で収まると推測されるが、柱穴は割に浅く、現況では二段掘りか否か明確でない。カマドは調査区内では検出されていないため詳細は不明。床面は全般的に貼床が確認でき、その中でもP2付近の貼床は顕著である。遺物のほとんどがP2付近の北側床面より10cm程度浮いた状態で完形の坏が、あとは埋土中から破片で出土している。

#### 坏 (Fig. 5-14~24, PL.11, 12)

14はロクロ回転右で、色調、内外面ともに黄灰色(2.5Y4/1)を呈す。17は色調が外面灰色(N4/)・灰白色(2.5GY8/1)・内面灰色(N4/)を呈す。いずれも微砂粒を僅かに含むが、焼成は普通である。15は口径12cm, 器高3.45cm, 受部径13.8cmを測る。焼成は普通。胎土には砂粒が少量含まれる。色調は灰色(N5/)を呈す。内面の調整はナデ、また外面はヨコナデ、底面と



SC 4

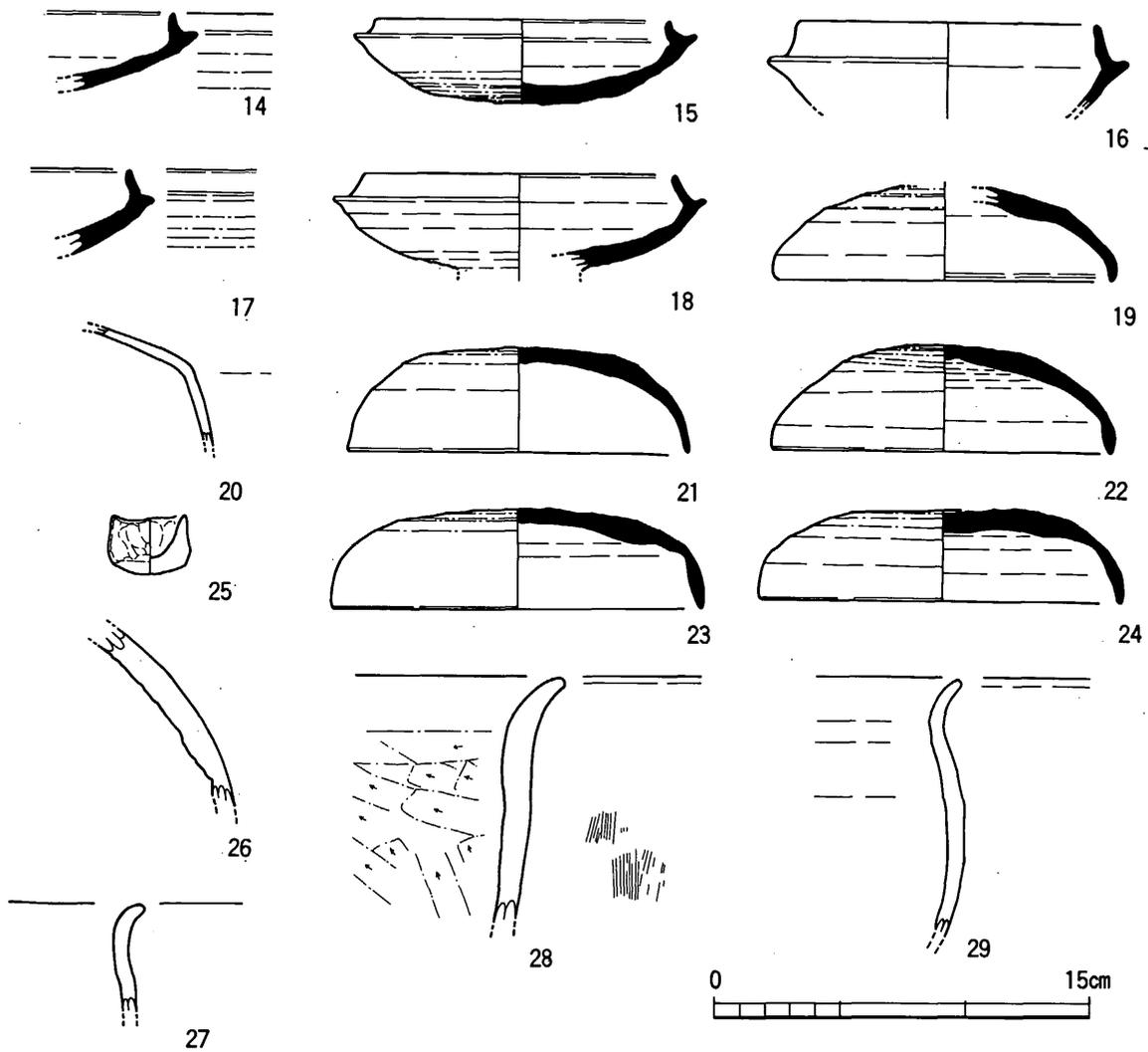


Fig. 5 SC 4 実測図およびSC 4 出土遺物実測図 (S1/60・1/3)

体部の一部をケズリで仕上げている。16は復元口径12.1cm，復元受部14.6cmで、色調は内外面ともに灰白色（7.5Y7/1）を呈す。胎土には0.5～1.5mm程の砂粒を含んで、焼成はやや不良である。調整は内外面ともにヨコナデが施されている。口縁部から体部の一部の破片である17は、やや器壁が厚め。胎土には0.5～1mmの砂粒が含まれ、焼成は普通。外面の色調は灰色（N4/ ）と灰白色（2.5GY8/1）、内面は灰色（N4/ ）を呈す。18は若干の歪みのある破片。復元口径12.4cm，受部径15cmを測り、胎土には1～3mmの砂粒が僅かに含まれていて、焼成は普通である。色調は、外面暗オリーブ灰（2.5GY4/1）、内面灰赤色（7.5R5/2）をなす。調整は外面体部から口縁内面までがヨコナデで、内底面はヨコナデ後ナデ仕上げされている。復元口径13.8cm，器高3.8cmを測る19は内外面の色調がともに灰色（N5/ ）を呈す。0.5～2mmの砂粒を含んだ胎土で、焼成は普通である。体部～口縁部の内外は、ヨコナデ仕上げ、天井部外面はヘラケズリで調整している。21は口縁部の器壁のうすいもので、胎土には少量の砂粒が含まれ、焼成は普通である。色調は外面灰色（N5/ ）と暗灰色（N3/ ）で、内面灰色（N6/ ）を呈す。復元口径13.8cm，器高4.25cmを測る。内面から外面の体部まではヨコナデ仕上げで、天井部にはヘラケズリで調整を行なっている。22は、口径13.7cm，器高4.3cmを測る。胎土には1～5mmの砂粒が含まれていて、普通の焼成である。外面の色調は灰色（5Y5/1）、内面褐灰色（10YR5/1）を呈す。調整は天井部にヘラ切りのままの部分とヘラケズリを残し、他はヨコナデで仕上げている、外面に自然釉が付着する。外面全体に自然釉の付着した23は復元口径14.95cm，器高4.05cmを測る。胎土には1mm程の砂粒を含み、普通の焼成である。色調は外面灰色（5Y4/1）と内面黄灰色（2.5Y6/1）を呈す。口縁部の内外面はヨコナデ、天井部にはヘラケズリがなされていて、ロクロ回転は右方向。24は外面に自然釉が付着する。口径14.6cm，器高3.8cmを測る。胎土には少量の砂粒を含み、焼成は普通である。外面の色調は、緑黒色（5G2/1）、内面は暗灰色（N3/ ）を呈す。天井部の一部から体部まではヘラケズリ、天井内面はヨコナデ後ナデで、他はヨコナデ調整を施している。

**甕 (Fig. 5-26~29, 6-30・31, PL.12)**

27～30は口縁部付近の破片。最大径が胴部にくるものと、口縁部にくるものに分けられる。いずれもローリングのため外面の調整は不明瞭である。26は甕の胴部片。胎土は微砂粒・ウンモを含んで焼成は悪い。色調は、外面明赤褐色（2.5YR5/6）、内面暗赤褐灰色（2.5YR3/1）を呈し、調整は内面にタタキ、外面はタタキ後にナデが施されていて、製作技法は須恵器製作技法を用いたものと思われる。31は口縁から体部上位の破片で、復元口径20.4cmを測る。胎土には1～2mmの砂粒を

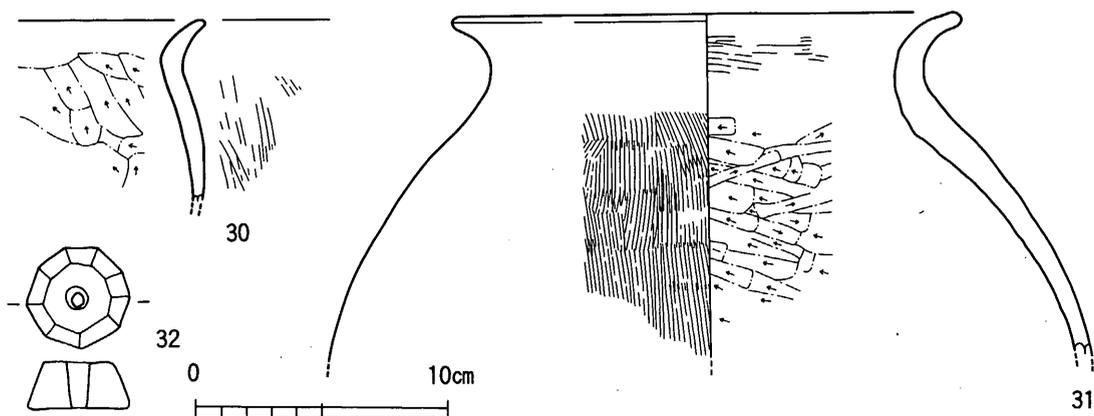


Fig. 6 SC4出土遺物実測図 (S1/3)

含んでるが、焼成は良好である。色調は内外面ともに橙色 (7.5YR7/6) を呈す。調整は体部内面ヘラケズリで仕上げる。

#### SC 5 (Fig. 7, PL. 3)

遺構集中区の西南部で検出され、SC 7 を切っている。調査区対象外へと遺構は延びていて、方形あるいは長方形を呈すかは現状では明確でない。現存では北壁2.2m、東西壁ともに1.8mを測る。壁の立ち上がりは、やや斜めで高さ30~40cm遺存している。住居跡と考えるにはやや小型すぎる傾向にあるが、柱穴の状況から住居跡として扱った。東西に検出された柱穴が主柱穴で2本柱となると推測される。柱穴は東・西壁に接して配置され、東西の軸線としては北壁方向に一致していて深さ15~20cmを測り、柱穴の底面はともに平坦である。遺物は少量の出土で、すべてが埋土中から。

#### 坏 (Fig. 7-33・34, PL. 12)

焼成の良好な33は、胎土には微砂粒と赤褐色粒を含んでいる。色調は内外面ともに橙色 (5 YR7/6) を呈す。体部から口縁部が僅かに内傾して口縁端部に延びる。34は須恵器模倣の坏の破片。胎土に微砂粒と赤褐色粒を含んで、普通の焼成。色調は外面橙色 (5 YR7/6) ・内面橙色 (5 YR6/8) を呈している。いずれもローリングのため調整は不明瞭となっている。

#### 甕 (Fig. 7-35・36, PL. 12)

最大径を胴部にもつ35は、残存高9.15cmを測る。胎土は1mm程の砂粒・ウンモ・赤褐色粒を少量含む。色調は、外面灰黄褐色 (10YR6/2) と褐色 (10YR4/1)、内面灰黄褐色 (10YR6/2) を呈す。調整は胴部内面がケズリ後ナデで、外面はナデ、口縁部内外面ヨコナデで仕上げている。36は器壁のやや厚い丸底を呈すもので、内外面の色調は橙色 (7.5YR7/6) を呈す。胎土は少量の砂粒を含んでいるが、焼成は普通。調整はローリングにより不明瞭となっている。

#### SC 6 (Fig. 7, PL. 3)

調査区内の遺構が集中し、SC 3 から2mほど離れた位置にある。住居跡の1/2程度を大きくカクランで切られ、SK13・17を切る。北・西側と南・東側の一部の壁が遺存。壁の立ち上りは西側が良好で50cm、北壁は20cmを測り、西壁は直に北壁はやや斜めに立ち上がる。遺存する北および西壁の長さは、ともに4mを測る。コーナーは北西側がやや角ばってはいるが、他の東北・西南側は隅丸となる。東南コーナー部分はカクランのため明確でない。三方の遺存状況から隅丸方形と考えられる。主柱穴の配置は北側のP1・2は北壁方向と一致している。他はカクランのため不明であるが、心間が2m前後の4本柱になると思われる。柱穴の掘り方はやや広めだが、深さは20cm前後でわりに浅く、底面は平坦である。現状ではカマドは確認されていない。遺物は埋土中からの出土。

#### 坏 (Fig. 8-37, PL. 13)

復元口径15.65cm、器高4.05cmを測る。色調は内外面ともに灰色 (7.5Y5/1) を呈している。胎土は微砂粒を少量含み、焼成は普通である。調整は外面体部から内面をヨコナデで、天井部はヘラケズリで仕上げられている。天井部内面には当て具痕が残っている。ロクロ回転は左方向である。体部から口縁部はシャープなつくりで、口縁端部に向かって直に近くのびる。

#### 瓶 (Fig. 8-39, PL. 13)

復元口径9.4cmを測る。色調は、外面灰色 (N5/ )、内面灰色 (7.5Y6/1) を呈す。胎土には少量の微砂粒を含んでいて、焼成は普通。調整は口縁部外面にカキメを残す。外面には自然釉が付着するが、ヨコナデで仕上げられている。器壁はうすく、シャープなつくりをなす。

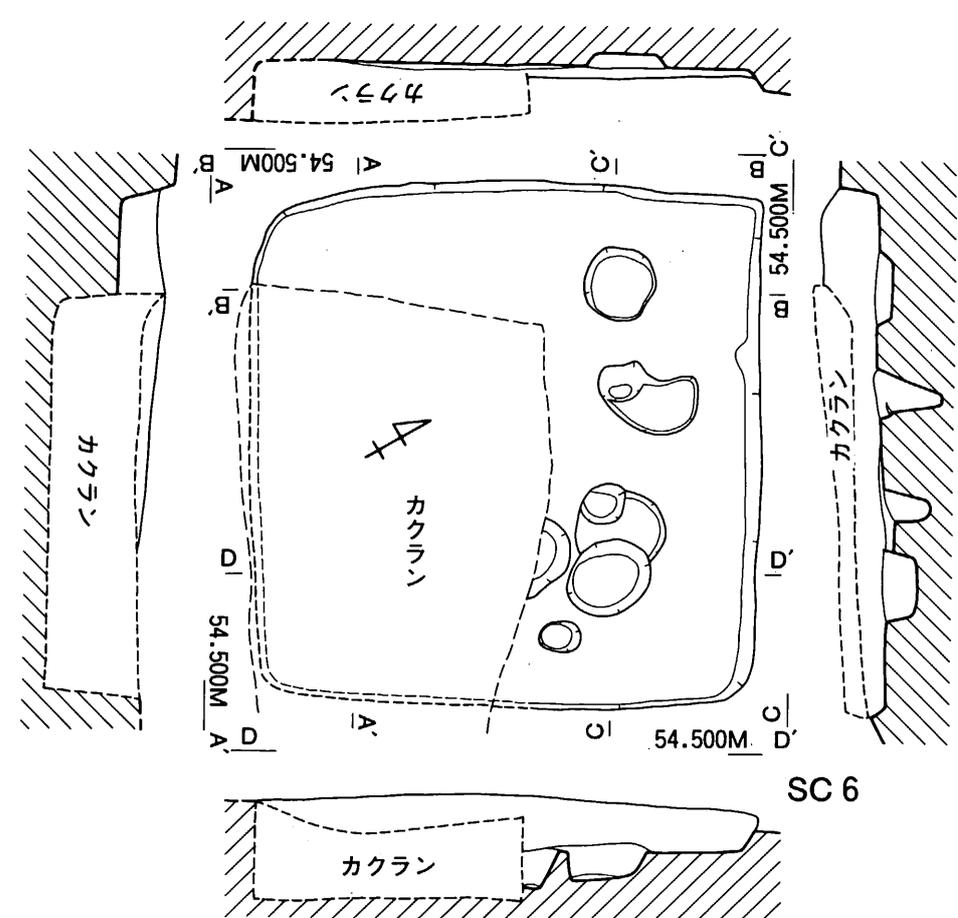
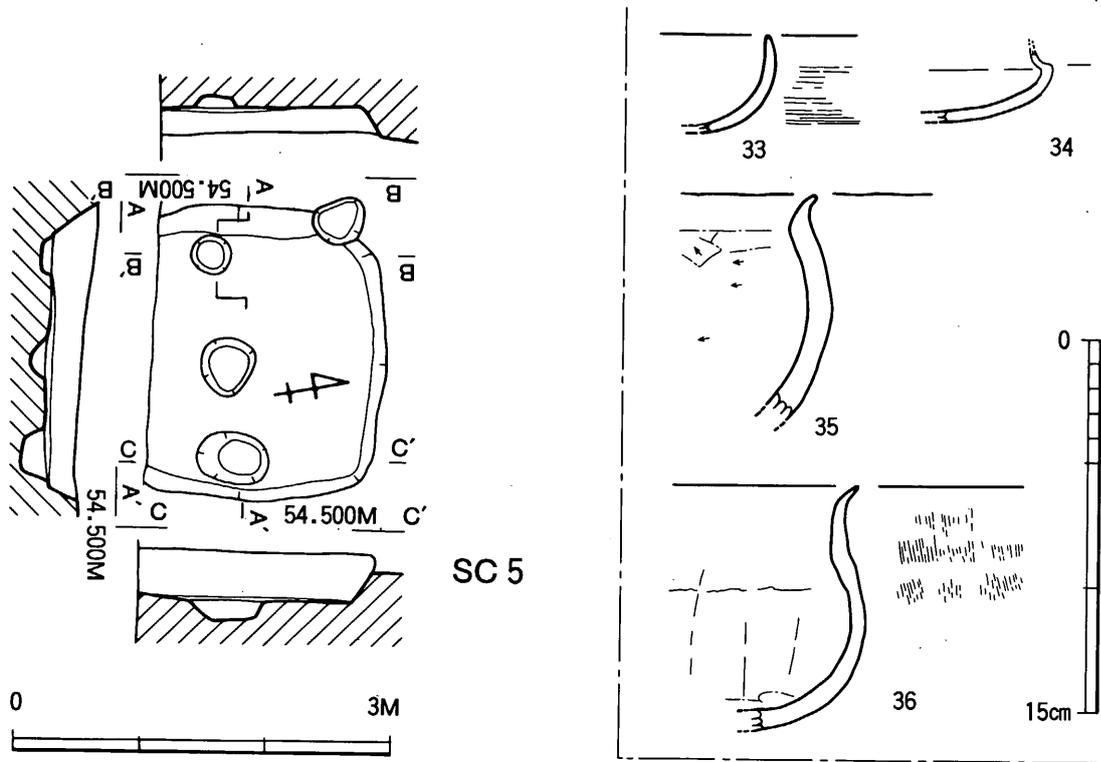


Fig. 7 SC 5・6 実測図およびSC 5 出土遺物実測図 (S1/60・1/3)

### 甕 (Fig. 8-38・40・41, PL.13)

38は口縁部付近の破片。胎土には微砂粒・ウンモが含まれていて、焼成は良好である。内外面の色調は、明赤褐色（5YR 4/6）を呈している。調整は内外面ともにヨコナデで仕上げられているが、外面にススが付着し、指頭痕が残り器壁はわりにうすい。焼成が普通の40は、胎土に0.5～2mm程の砂粒を含んでいる。色調は、外面黒褐色（10YR）、内面にぶい黄橙色（10YR 6/4）を呈す。調整は口縁端部はヨコナデ、内面ハケメ後ナデ、ケズリ後ナデがなされていて、調整は丁寧でない。粘土接合のラインが顕著に残る。41は胴部中位に最大径をもつ、かなり歪つな破片である。胎土には1mm前後の砂粒・角閃石、ウンモが少量含まれる。内外面の色調は、赤褐色（5YR 4/8）を呈している。調整は内面胴部はヘラケズリ、口縁部は内外面ともにヨコナデ、胴部外面は、ハケメ後ナデが施されている。器壁は均一化されてなく雑な感じを受ける。

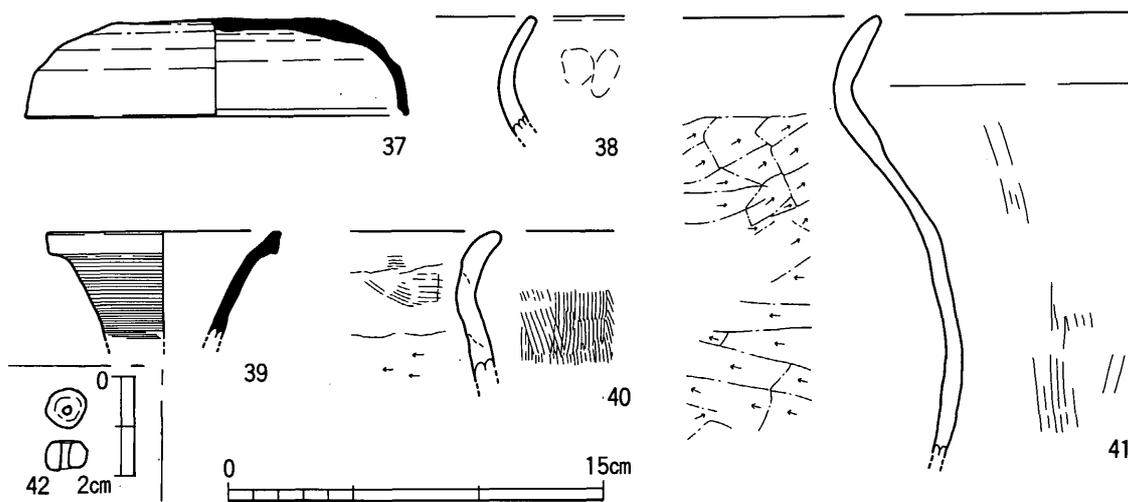


Fig. 8 SC 6 出土遺物実測図 (S1/3・2/3)

### SC 7 (Fig. 9)

遺構の集中する付近の南側で検出され、SC 4・5とカクランに切られる。北東側のコーナー部分をカクランに切れ、コーナー付近の全容が明確でない。北西側のコーナー部分はやや隅丸となる。SC 4・5に切られて、現存部は全体の1/4程度しかない。SC 7も4・5同様に調査区外に遺構は延びる。遺存している北側および西壁側から推測すると5m前後の方形を呈すると考えられる。壁は遣りの良いところで30cm程度で東側にいくほどに、遣りが悪く、立ち上りは斜めである。北壁の中央付近にカマドを付設、カマドの遣りも10cmと良好でない。カマド前庭部および焚口部の両袖の一部はSC 4で破壊されている。

カマドの支脚は、やや小さめの河原石を使用して、掘り方はカマドの基底面より15cm程度掘り下げて埋置。遣りが良好でないために天井部も削平、袖部分も焼土・焼土を含んだ層しか残っていない。支脚の前面の床面には幅25cm、長さ30cm、厚さ5cmの楕円形の火床を確認。火床もさほどの熱変化はみせない。遺物はカマド横の埋土からである。

### 坏 (Fig. 9-44・45, PL.13)

44は口径11.15cm、器高5.65cmを測る。胎土に1～2mmの砂粒を少量含み、焼成は良好である。外面の色調は灰色（N 7/ ）、内面は黒（N 2/ ）を呈す。調整は天井部から体部にかけてヘラケズリ、口縁部から内面体部までヨコナデが施される。また天井内面はヨコナデ後ナデで仕上げ。天井部から内面にかけて自然釉が付着する。1/2程度が残存するが全体的に歪みが大きい。ロクロ回

転は右方向。天井部はやや丸みをもち体部へのび、体部から口縁端部へは直に近い。口径15.7cm, 器高4.65cmを測る45は内外面の色調灰色(5Y6/1)をなし、焼成は良好である。胎土には0.5~2mmの砂粒が含まれる。天井部の調整はヘラケズリがなされ、体部から口縁の内外面はヨコナデで仕上げられ、天井内面はヨコナデ後ナデを施すが、当て具痕を残す。体部の器壁はややうすく体部と口縁界に沈線を一条めぐらせている。体部から口縁端部へはハの字状に開き、端部は丸くおさめる。また端部に工具痕と考えられるものが残っている。

**手捏土器 (Fig. 9-50, PL.13)**

カマドの埋土より出土。全体の2/3ほど残存。口径2.55cm, 器高1.8cmを測る。胎土には微砂粒・ウンモを少量含む。焼成は普通。色調は内外面ともに浅黄橙色(10YR8/3)を呈し、内外面の調整はナデで仕上げている。指頭痕を明瞭に残す。

**SC 8 (Fig.10, PL. 3)**

調査区中央南側で検出。SC 4 およびカクランで切られ、SC10を切る。詳細な全容は不明。現存の北壁の立ち上りは斜めで10~15cmを測る。主柱穴は現状では1本のみ検出、2本ないし4本の可能性を含む。遺物は全く出土していない。

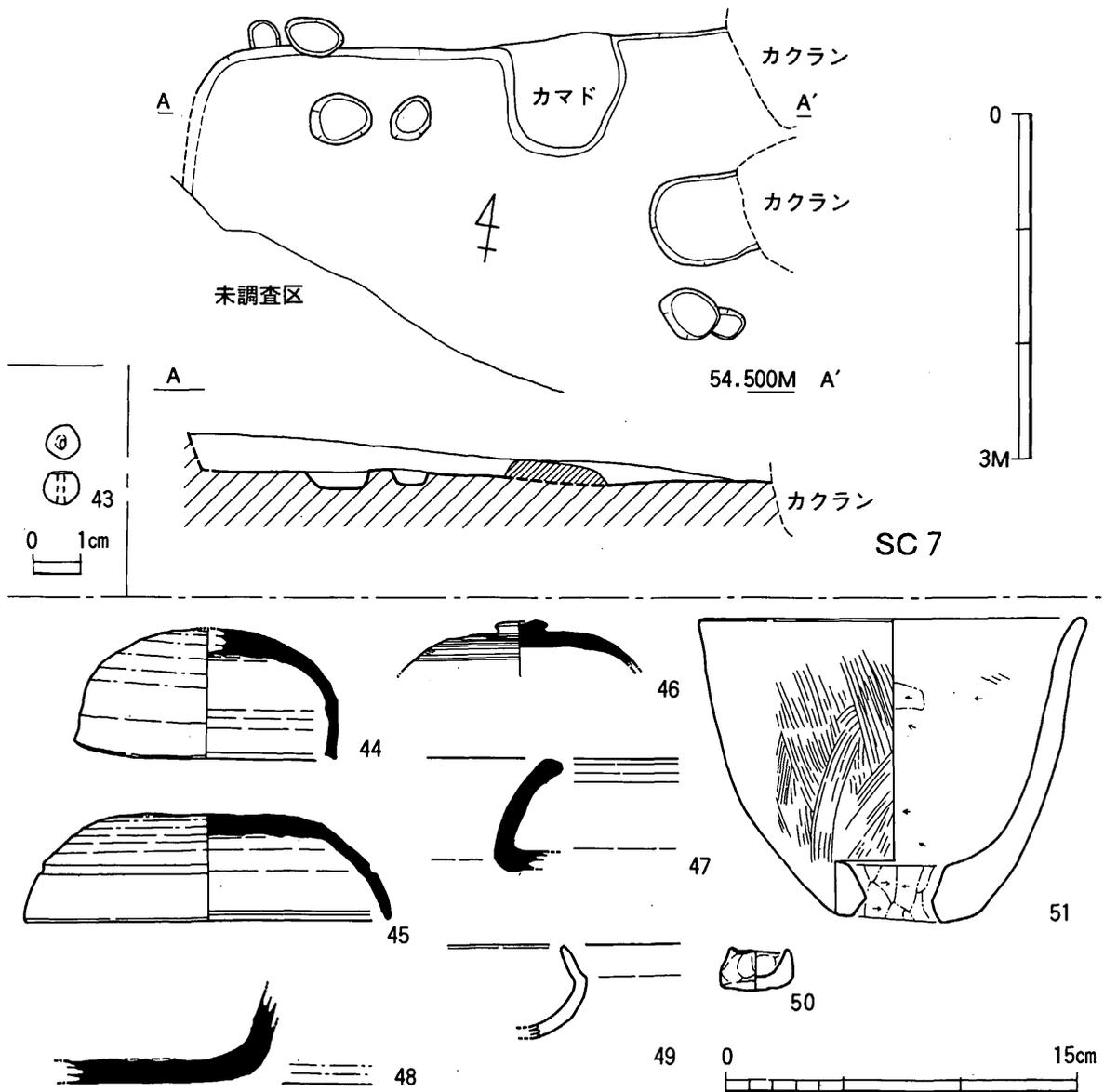


Fig. 9 SC 7 実測図およびSC 7・9・10出土遺物実測図 (S1/60・1/3)

## SC 9

調査区のほぼ中央の南側で検出された。大半はカクランで切られ、遺構の南側は調査区外へと続くため、現状では大きさ・形状など詳細は不明である。遺物の出土状況は東北コーナー部分の埋土中から一括して出土した。他は埋土上面中からである。

### 坏 (Fig. 9-49, PL. 13)

須恵器模倣の坏。胎土は精製されているが僅かに赤褐色粒を含んでいて、焼成は普通。色調は、外面橙色 (7.5YR 6/6)、内面におい褐色 (7.5YR 5/3) を呈す。ローリングを受けていて、調整は不明瞭となっているが、黒色処理がなされていたのか、部分的に黒色が残っている。

### 甑 (Fig. 9-51, PL. 13)

口径16.6cm, 器高13.2cmを測る。色調は内外面ともに、におい黄橙色 (10YR 7/4) をなす。胎土には1mm前後の砂粒を少量とウンモ・角閃石・赤褐色粒を含んで、焼成は普通である。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面はハケメで仕上げている。内面はケズリ後ナデ仕上げだが一部にハケメの痕も残る。底部は焼成前にケズリで丁寧に穿孔されている。

## SC10 (Fig. 10, PL. 3)

SC 8 および SK11 に切られる。現況では北側および東・南側の壁の一部が遺存している。北壁はほぼ直線で推定長3.5m前後を測る。壁は、やや直に近い立ち上りをみせ、30cm前後の深さを残すが、南壁は北壁にくらべ若干短いと考えられるため形状は不整形を呈すと推測される。支柱穴はP 3・4が北壁から等距離に位置し、柱列方向は東西に一致している。南壁側の柱列方向は、北壁より若干せまく、近接する可能性をもつがP 1の推定位置はカクランのため切られて現状は不明。東西間の心心は1.8m, 南北間は2.2mと考えられる。柱穴の深さは10~40cmと均一でなく、形状も不揃いである。底面は現存では平坦となっている。いちおう4本の主柱をもつ住居跡と考えておきたい。カマドは現況では検出されなかった。遺物の出土量が少ないため器形の明らかになるものだけを図示した。

### 蓋 (Fig. 9-46, PL. 13)

内外面の色調、灰色 (N 4/ ) を呈す、つまみつきの蓋。胎土は1~2mmの砂粒が含まれ、焼成は普通である。天井内面の調整はナデ、外面にはカキメと部分的にケズリで仕上げている。口縁部の内外面はヨコナデがなされていて、ロクロ回転は右方向である。

### 提瓶 (Fig. 9-47, PL. 13)

口縁部から頸部の破片。内外面の色調は、灰色 (N 5/ ) を呈している。微砂粒を僅かに含んだ胎土で焼成は普通。頸部にはカキメが残り、他はヨコナデ調整がなされている。

## SC11 (Fig. 10, PL. 4)

遺構の重複が著しい調査区中央部で検出。SK15・17およびカクランで切られ、SC14・16を切る。重複が著しいために東側および北側の壁の一部しか遺っていない。現存している東壁の長さは3.5mで、推測すると一辺が3.5m前後の不整形の可能性が考えられる。壁の遣りは10cm程度と悪い。これは整地層が削平されているためと思われる。支柱穴は切り合いが著しいため、P 1・2の2本柱と考えておきたい。この柱列方向は遣りの良い東壁側の軸線にほぼ一致。柱穴の深さは5~45cmとバランスがとれていない。この点を考えるとやや不明確さが残る。また床面に若干の貼り床が認められる。

### 蓋 (Fig.10-52~54, PL.13)

内外面の色調、灰色 (N 6 / ) を呈す52は胎土に僅かな微砂粒を含んでいて、焼成は普通。調整はナデが施されているが、残存部に自然釉が付着する。53は胎土に微砂粒が含まれ、焼成は普通。色調は内外面ともに灰色 (N 5 / ) を呈す。体部と口縁部界に一条の沈線をめぐらせ、口縁部は僅かに外に開くが直に近い。調整はナデによって仕上げる。54は須恵器模倣の蓋。内外面の色調は、にぶい橙色 (7.5YR 6 / 4) を呈す。胎土には微砂粒が僅かに含まれ、焼成は良好。内面はヘラミガキ、外面は天井部がケズリ後ミガキで仕上げられ、黒色処理が内外面になされる。

### SC12 (Fig.11, PL. 4)

宅地開発の際、配水管を埋置。遺構集中地区の整地層はかなり削平。このためSC12も遺りは良好でない。SX 7 およびカクランに切られ、SK25・SC13を切る。壁は南側と東側の3/4ほど、また西側の一部を残すだけである。壁の立ち上りは斜めで深さ20cm前後を測る。西南側および東南側のコーナー部は隅丸を呈し、南壁はほぼ直線で、3mの長さを測る。推測すると3×3mの隅丸方形の可能性をもつ。主柱穴は、P1～3で、その中でP1・3は南壁からの距離も等しく、軸線上に一致している。各々の心心間1.5m前後を測り、ほぼ等間隔に配される。柱穴の大きさはP1・2が同一で、P3が若干大きめだが深さは20cm前後とほぼ一致。P4にあたる柱穴はカクランのため未検出であるが4本柱と思われる。床面の中央付近は溝状遺構が検出されたが、床面精査の際に埋土に差異は認められない。溝は北壁側へと続くがカクランで切られて壁際の詳細は不明。ただこの溝状遺構は南壁にほぼ直交し、P1・2の柱穴配列とほぼ並行している。溝の形状は緩やかに立ち上る壁で深さは20cm前後と主柱穴に等しい。主柱穴は全般的に壁は直に近く、底面は平坦で、溝状遺構とは異なっているが、断面形状はU字状を呈す。住居跡床面は平坦で貼り床は認められない。またカマドも検出できなかった。遺物は図示しうるものはなく少量の破片だけの出土である。

### SC13 (Fig.11, PL. 5)

SC12の東側にあって一部SC12に切られる。また北側部分もカクランにより1/4切られている。西南コーナー部と東南コーナー間は、おおよそ3.1mでSC12と大きさは同程度と考えられる。南側の壁は東南側が歪みをもち、また西南コーナー部は明確に角がつく。このことからSC13の形状は不整形の可能性がある。壁の立ち上がりは斜めで遺りの良いところで10cm程度である。主柱穴はSC12の壁除去後、精査したが検出されず、現状ではP1とカクランの位置に想定して2本柱としておきたい。またP1以外の柱穴との埋土の差はなかったが、他の柱穴は主柱穴とは判断しなかった。

### 蓋 (Fig.11-56, PL.14)

内外の色調、褐灰色 (7.5YR 5 / 1) を呈す。焼成は不良。天井部のみケズリ、他はヨコナデ調整。

### 甕 (Fig.11-58, PL.14)

58は復元口径19.8cmを測り、胴部に最大径をもつ。調整は摩耗のため内外面ともに不明。

### SC14 (Fig.12)

遺構集中部で検出。SC11・SK17・18およびカクランに切られSC16を切る。遺存状況は悪い。東壁の長さ3.1mを測る。北東・南東の各々コーナーは丸みをもつ。北西側のコーナー部分の深さは30cmを測り、他は10cm前後となる。遺存の壁から不整形長方形と考えられる。主柱穴はSC11とSK17を除去後、精査したが確認できず、P1～4を主柱穴とした。P1・3は北壁の軸線上と一致して、心心間は2.4m前後を測る。配された柱穴は北壁からの距離もほぼ等しい。柱穴の形状の大きさは

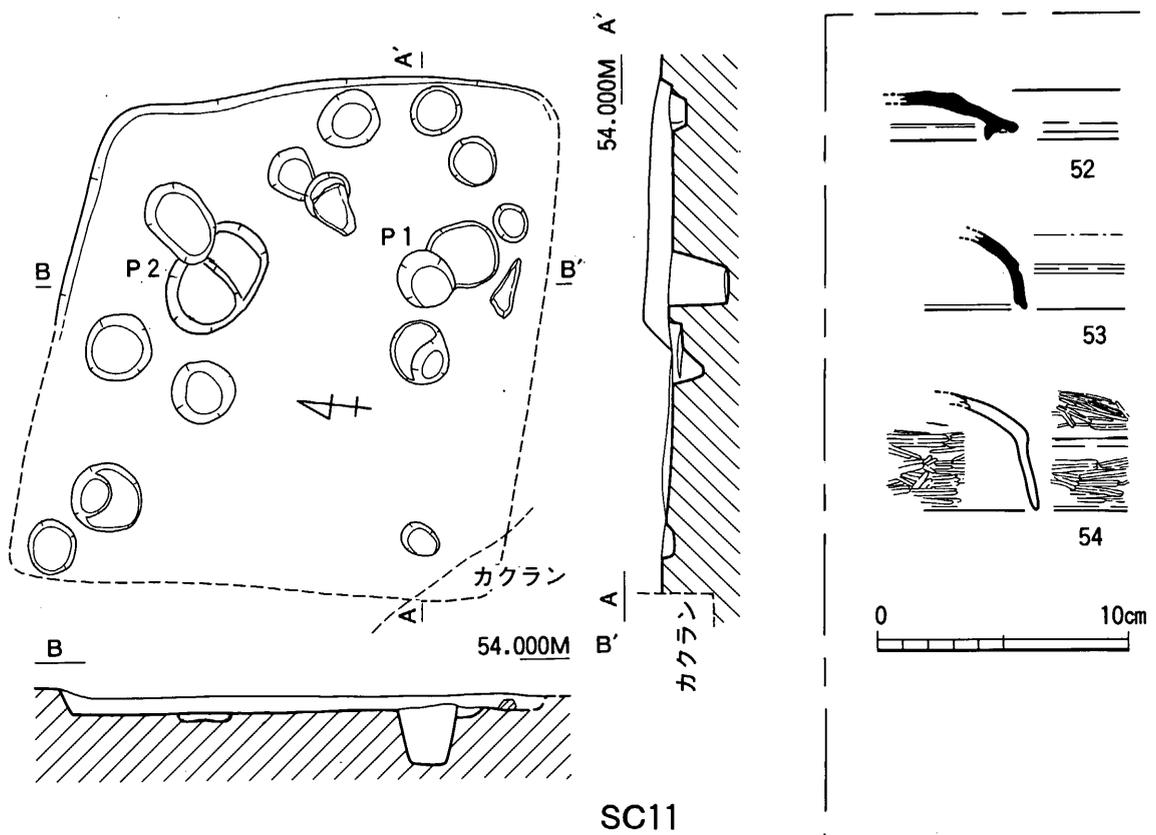
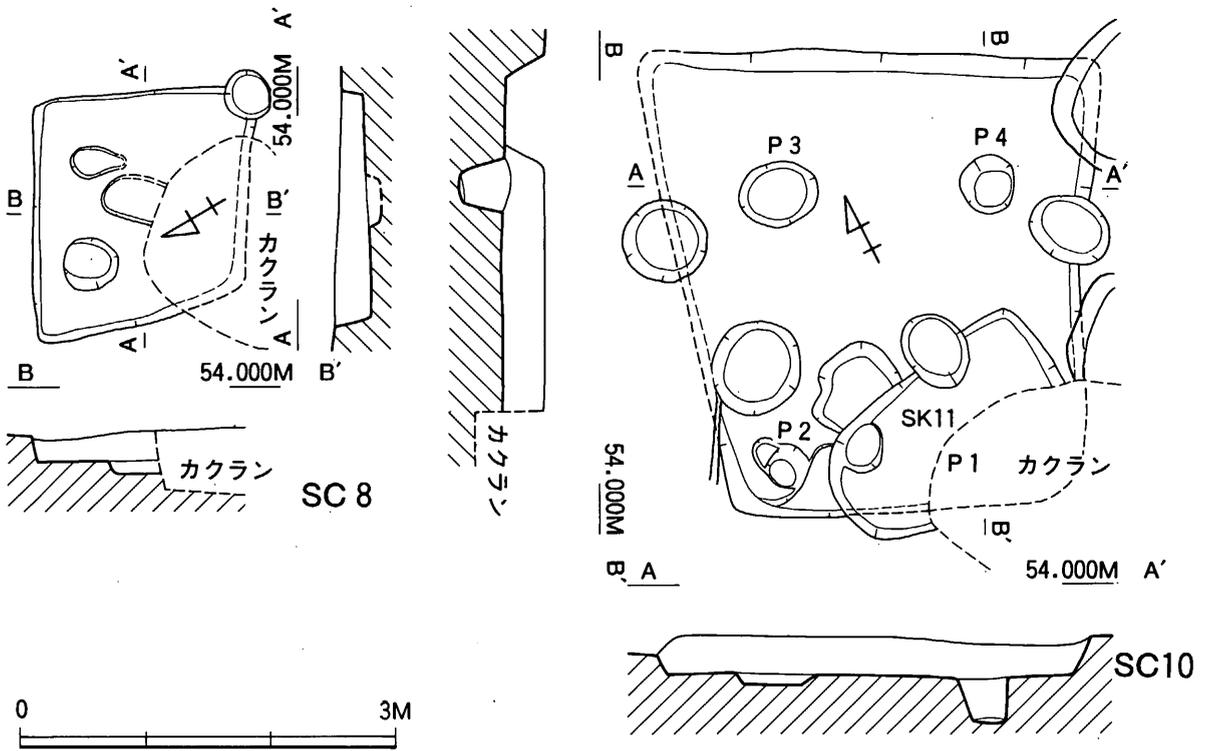


Fig. 10 SC 8・10・11実測図およびSC11出土遺物実測図 (S1/60・1/3)

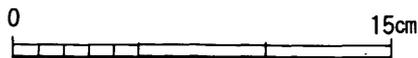
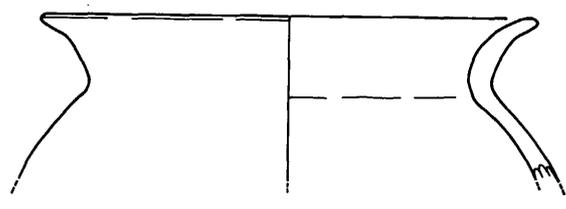
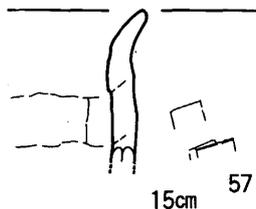
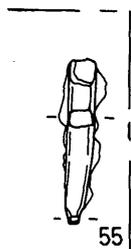
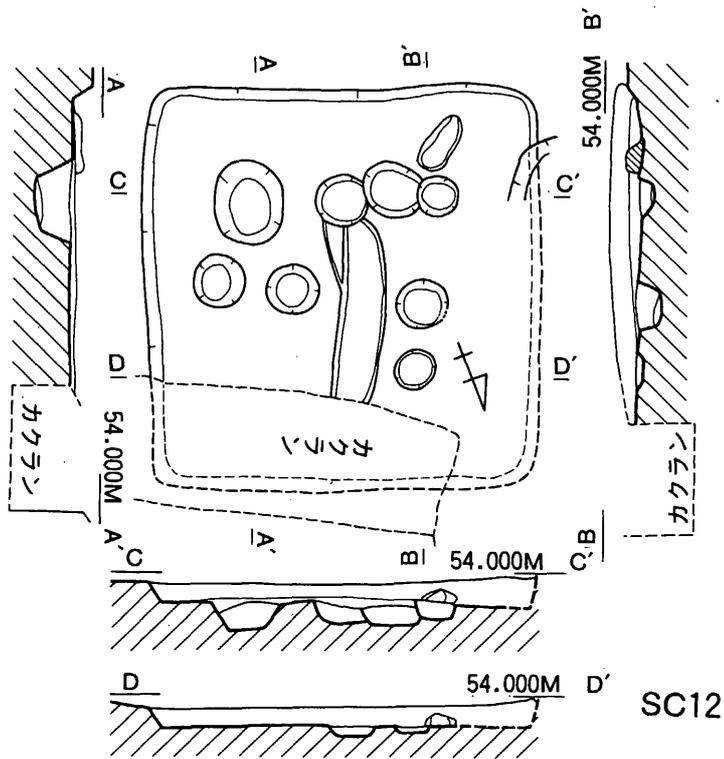
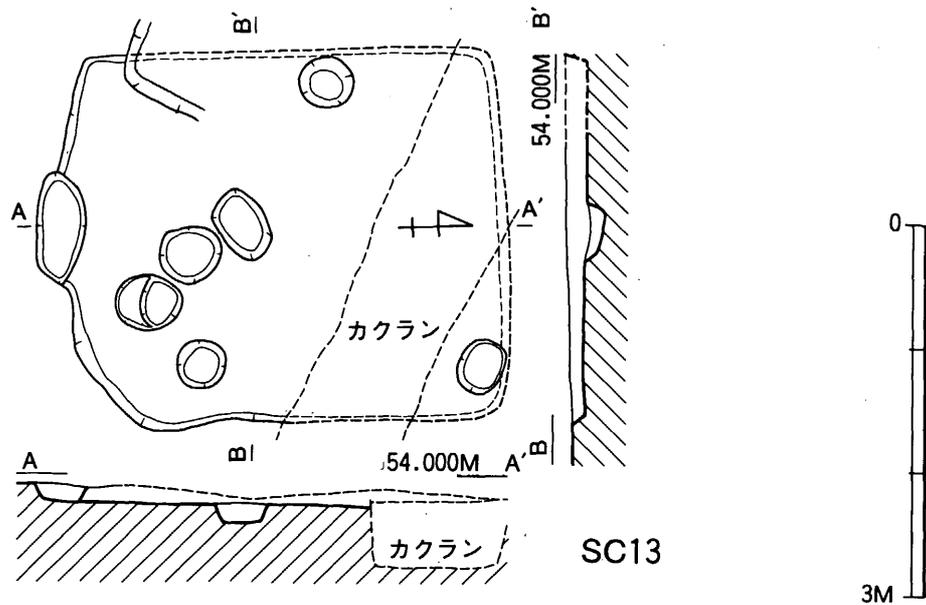


Fig. 11 SC12・13実測図およびSC13出土遺物実測図 (S1/60・1/3)

不揃いで、深さも20～30cmと一定していない。遺物は埋土中からの一点のみである。

#### 蓋 (Fig.12-59, PL.14)

やや丸みのある天井部をもち、口縁部がハの字状に外反し延びる土師器の蓋。口縁部の伸びは緩やかな屈曲をみせる。復元口径13.6cm、器高4.85cmを測る。胎土は微砂粒および赤褐色粘土を含むが精製されているほうである。焼成は良好。調整は内外面ともに手持ちヘラミガキがなされている。色調は内外面ともに(10YR 6/6)を呈す。内外面ともに黒色処理が施されているが、外面の黒色が顕著に残る。

#### SC15

調査区中央部で検出。SC10とSK28に切られ、SK26を切っている。遺存状況は北壁の一部と東壁および東南コーナー部分を残すのみである。壁の深さは50cmを測り、立ち上りはやや直に近い。東壁は長さ1mを測り、北・南側の壁の推定ラインの長さは3.5mを想定。土坑に分類した方がよいかも知れないが、住居跡とした。中央部の心の間1.2m前後を測る柱穴を主柱穴とした。柱穴の大きさ、形状には若干差異があるが、深さは25cm前後と一致する。また柱穴の軸線は南側および北側に並行している。遺物は埋土中からのみ1点出土。

#### 甕 (Fig.12-60, PL.14)

弥生前期末の甕の口縁部片で、焼成は普通。色調は外面黒色(7.5YR1.7/)で、内面黒褐色(10YR 3/1)を呈す。胎土には少量だが1～2mmの砂粒が含まれる。口縁部と体部界に貼付突帯を一条巡らせる。外面の調整は体部にハケメ、口縁付近はヨコナデを施し遺存部にはススが付着している。内面の口縁付近はハケメの後でヨコナデを施している。

#### SC16 (Fig.12, PL. 5)

SC14・SK14に切られ、SC21を切って検出された。北壁および東壁が遺存している。壁の立ち上りは直に近く、遣りの良いところで30cmの深さを測る。北壁は長さ2.3m前後を測り、両コーナーともに隅丸を呈す。北東コーナーから東壁へはやや拡がり、南壁は北壁より長いと推定できる。推定形状は略方形を呈すると思われる。床面精査で検出した際、柱穴などの埋土には一部をのぞき差異は認められなかったが、ここでは東西間の中央部にあたるP1で断面作成をおこなった。柱穴の規模などから考慮するとP2・3が一致をみせるが、ここでは主柱穴は不明としておきたい。出土遺物は埋土中から弥生時代の底部・口縁に混じって須恵器の壺が出土した。

#### 壺 (Fig.12-61, PL.14)

小型の無頸壺で、胴部の屈曲はやや丸みをもつ。口唇端部は丸くおさめて、復元口径8.5cm、胴部最大径12.4cm、残存高7.1cmを測る。胎土には1mm大の砂粒を少量含む。色調は内外面ともに灰色(10Y 5/1)を呈す。ロクロの回転は右で、調整は外底部はケズリ、体部から口縁部はヨコナデを施す。また内面は同様にヨコナデで仕上げられていて、焼成は普通である。

#### SC17 (Fig.13, PL. 4)

調査区のほぼ中央部で検出され、SC18およびカクランに切られSC19を切る。遺構の大半は明確でない。現況では西側から西南側の一部だけを遺す。壁は緩やかに斜めに立ち上る。良好な所で深さ80cmを測り、底面は平坦となる。遺構周辺は水の湧出がひどく、底面の精査はかなり苦慮した。現状では柱穴は明確にならず不明。遺物は少量しか出土していない。

#### 坏 (Fig.13-65, PL.14)

口縁部の一部が遺存。焼成は普通で、胎土には微砂粒を僅かに含む。色調は内外ともに灰色

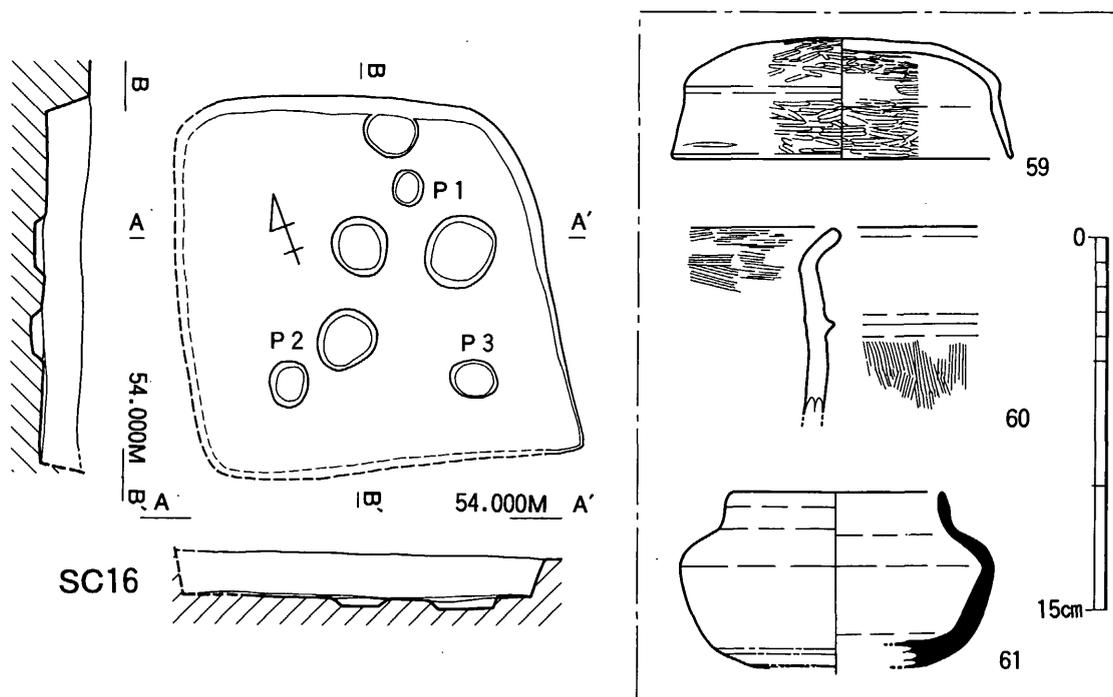
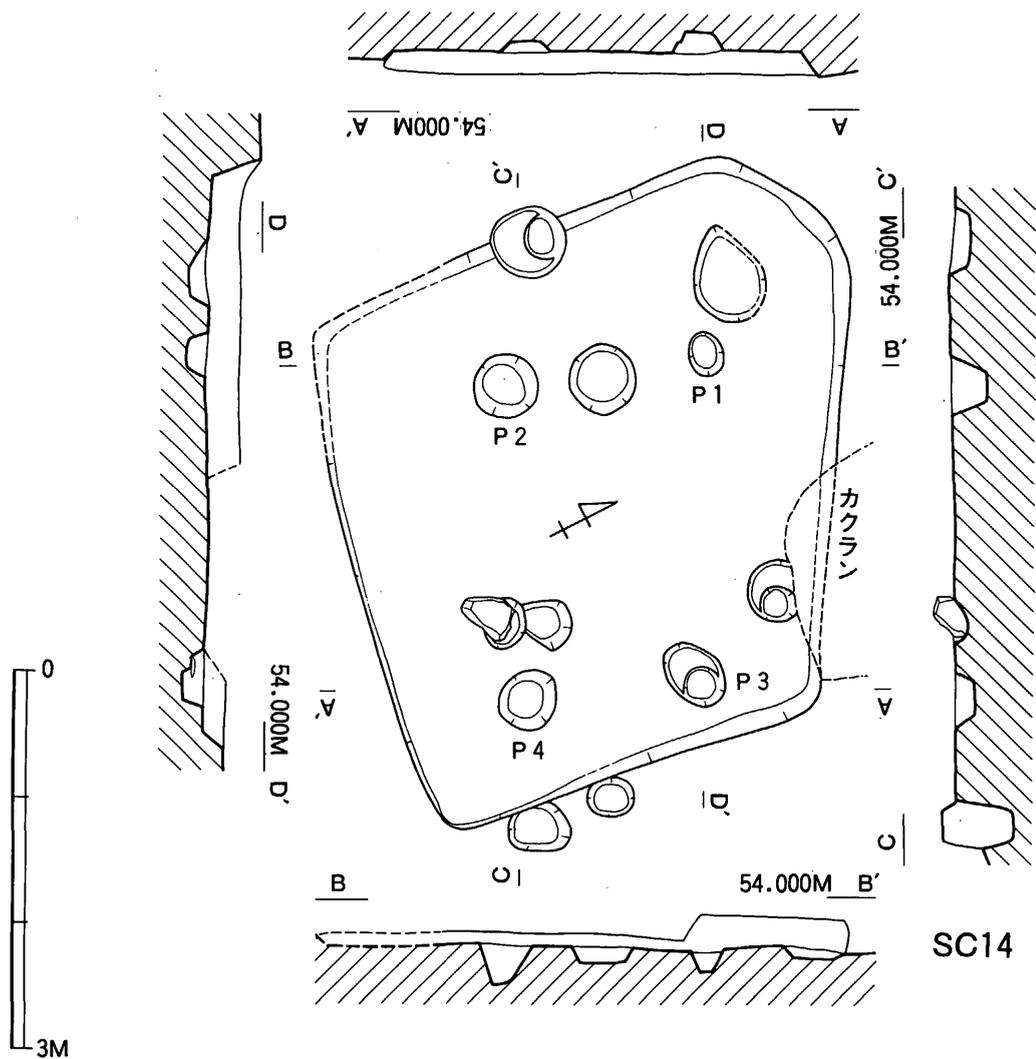


Fig. 12 SC14・16実測図およびSC14~16出土遺物実測図 (S1/60・1/3)

(N 6 / ) を呈す。調整はヨコナデで仕上げ。受部・かえりの部分は肥厚。遺物は検出時のものである。

#### 高坏 (Fig.13-66, PL.14)

口縁付近の破片。焼成は普通。胎土には0.5～2mmの砂粒を含む。調整は内外ともにヨコナデを施している。色調は外面暗オリーブ灰 (2.5GY 3 / 1)、内面暗灰色 (N 3 / 1) を呈す。

#### SC18 (Fig.13)

SC17と重複するSC18はカクランに切られて南側の壁と東・西側のコーナー付近のみ検出。遺存は1/2弱のため明確でない。南壁・東側および西側壁から推測すると方形を呈すると考えられる。壁の立ち上りは直線的で斜めになる。深さは70cm程度で、ほとんどSC17と差異はない。検出時にはSC17・18の埋土は、かなり差異があった。埋土は黒褐色 (5 YR 3 / 1) 混りの浅黄橙色 (10YR 8 / 3) で整地層から掘りこまれたものと思われる。現状では柱穴は確認できない。出土した遺物は少なく図示しえたものは3点である。62・64は遺構の中位層から、72は遺構検出時からのものである。

#### 坏 (Fig.13-62, PL.14)

口縁部から天井部の一部の破片で焼成は普通である。胎土は精製されているが、赤褐色粒を含んでいる。形態的には須恵器模倣の坏蓋で、内面にはミガキが施されているが、外面は摩耗のため調整は不明となっている。天井部から口縁部はやや直線的で僅かに外側に開く。器壁はうすくシャープな作りをしている。

#### 高坏 (Fig.13-64, PL.14)

色調が内外面ともにオリーブ灰 (2.5GY 5 / 1) を呈す。胎土に1mm程度の砂粒を含み、焼成は普通。調整は内面と外面体部まではヨコナデがなされている。体部下位に二条の沈線がめぐり、底面にはヘラ記号の一部を残すが詳細は不明。ロクロ回転は右方向で調整はナデ仕上げである。

#### 壺 (Fig.13-72)

台付壺の破片。底部の一部だけを遺して、底部外面と胴部に自然釉がのこっている。色調は外面が暗灰色 (N 3 / ) と灰色 (7.5Y 6 / 1)、内面、灰赤色 (2.5YR 4 / 2) を呈す。胎土には0.5～1mm程度の砂粒が含まれていて、焼成は普通である。ロクロ回転は右方向で、底部の内外面はナデで、高台部分と体部内外面はヨコナデが施されている。器壁はやや厚めで体部下位の破片であるため、形態は不明。

#### SC19

SC17・18・カクランに切られ、SC20を切る。湧水の所であるため検出時より、かなり壁が崩壊して、現状では遺構の1/4程度しか残っていないため詳細は不明である。西壁側を一部残すが崩壊している。調査途中の所見では、直線的で長さ2.8mを測り、壁の立ち上りは僅かに斜めで深さは50cmを測る。主柱穴はSC18の壁近くで検出され、深さは30cm前後であったが、湧水の汲みあげで壊れてしまった。遺物は埋土中からで、カクラン近くの壁際、底面近くから多く出土した。

#### 坏 (Fig.13-63・67～71・73, PL.14)

63は色調、外面灰色 (N 4 / )、内面灰色 (N 5 / ) を呈する須恵器の蓋。胎土には0.3～1mm程度の砂粒が少量含まれ、焼成は普通である。調整は現存破片の内外面ともにヨコナデで仕上げられている。外面の体部と口縁部界に沈線が1条めぐり、また内面口縁端部下位にも浅く、せまい沈線が一条めぐっている。器壁は体部に比べ口縁部がやや厚めである。71は須恵器模倣の土師器の蓋。内外面ともにローリングを受けているが黒色処理の痕跡を残す。復元口径13.25cm、器高5.2cmを測

る。色調は内外面ともに、にぶい赤褐色（5 YR 5 / 4）を呈す。胎土は微砂粒を少量含んで、焼成は普通である。調整は内外面にミガキを施す。天井部はやや丸みをおび口縁部にくらべてやや厚い。天井部と口縁部界には明瞭な稜がつく。口縁部は直線的で僅かに外側へ開き、口縁端部はやや丸くおさめている。67の坏身は復元口径10.7cm、器高4.8cm、受部径13cmを測る。0.1～4mm程の砂粒を胎土に含んで、普通の焼成である。外面の色調は灰白色（2.5Y 7 / 1）・灰色（N 6 / ）で、内面は灰白色（2.5Y 7 / 1）を呈する。ロクロ回転は右方向で、内面の調整はヨコナデ、外面は体部中位から底部がケズリ、他はヨコナデにて仕上げている。口縁部の器壁はわりにうすく、内面は明瞭な稜がつき端部直下に浅い沈線が1条めぐり、68は全体の3 / 4を残し、色調は灰色（N 4 / ）を内外面ともに呈す。口径11.1mm、器高5cm、受部径13.25cmを測る。1～3mm程の砂粒を多量に含んでいるが普通の焼成である。ロクロ回転は右方向で、内底面には当て具痕が残る。調整は内面ヨコナデ、外面の体部から口縁部はヨコナデ、底面はケズリを施している。器壁は全体的にやや厚みがある。口縁部から受部までの破片である69は、色調を内外面ともに暗灰色（N 3 / ）を呈す。胎土には0.5～1mm程の砂粒を含んでいて普通の焼成である。内面口縁端部に浅い沈線が1条めぐり、器壁はわりにうすい。口径11.8cm、器高4.6cm、受部径14.75cmを測る70は、1 / 3程欠損する。内外の両面は灰色（N 6 / ）の色調を呈す。胎土は1～2mmの砂粒を含み焼成は普通である。内面の調整はヨコナデで底面に当て具痕がのこる。外面は口縁から体部中位までがヨコナデ、底面から体部中位まではケズリで仕上げている。また底面から受部までに自然釉が付着する。73の坏は体部が丸く深い形態のもので、復元口径11.4cm、残存高6.1cmを測る。色調は内外面ともに橙色（5 YR 7 / 6）を呈し、胎土には微砂粒を少量と赤褐色粒を含む。器壁はわりに厚く丸い体部から口縁部は内傾する。調整は外面体部はケズリ後ナデ、口縁部はヨコナデを施す。内面の調整はローリングのため不明瞭。

#### 鉢 (Fig.13-74, PL.14)

ローリングの著しい破片で器表は剥落している。色調は外面を浅黄橙色（5 YR 8 / 4）、内面を淡橙色（5 YR 8 / 4）を呈す。胎土には2mm程の砂粒を多く含んで精製されていないが焼成は普通である。口縁部に最大径があって器壁はわりに厚い。

#### 甕 (Fig.13-75, PL.14)

復元口径23.6cm、器高20.3cmを測る。外面はローリングのため器表剥離が著しいが底面に黒斑が認められる。内面も同様に器表剥離していて調整は不明瞭である。現存部の内外面は浅黄橙色（10YR 8 / 4）を呈す。胎土は1～2mmの砂粒を含んで焼成は普通。最大径は口縁部と胴部にあつて、器壁はわりに厚い。体部から頸部は緩やかに内傾し、頸部から口縁部は外反する。

#### SC20

SD11とSC19およびST 2に切られ検出。西側および南側と北側の壁を残す。壁は、やや斜めに立ち上り深さ50cmを測る。遺存状況から推測すると北壁長2.5m前後となり隅丸方形が想定される。底面は平坦で、埋土は灰白色（2.5Y 7 / 1）に黄灰色（2.5Y 4 / 1）混りである。主柱穴は底面の中央北壁よりに検出された径45cm、深さ20cmを測る柱穴と東側のSC19の壁近くの2本を推定した。遺物の多くは埋土から出土したが床面からではない。

#### 坏 (Fig.14-76-82・84・85, PL.15)

76は若干口縁部に歪みのある蓋で、口径13.05cm、器高4.7cmを測る。外面の色調は灰色（N 6 / ）内面の色調は灰色（N 5 / ）と（N 4 / ）を呈し、胎土には1mm程の砂粒を少量含んでいる。焼

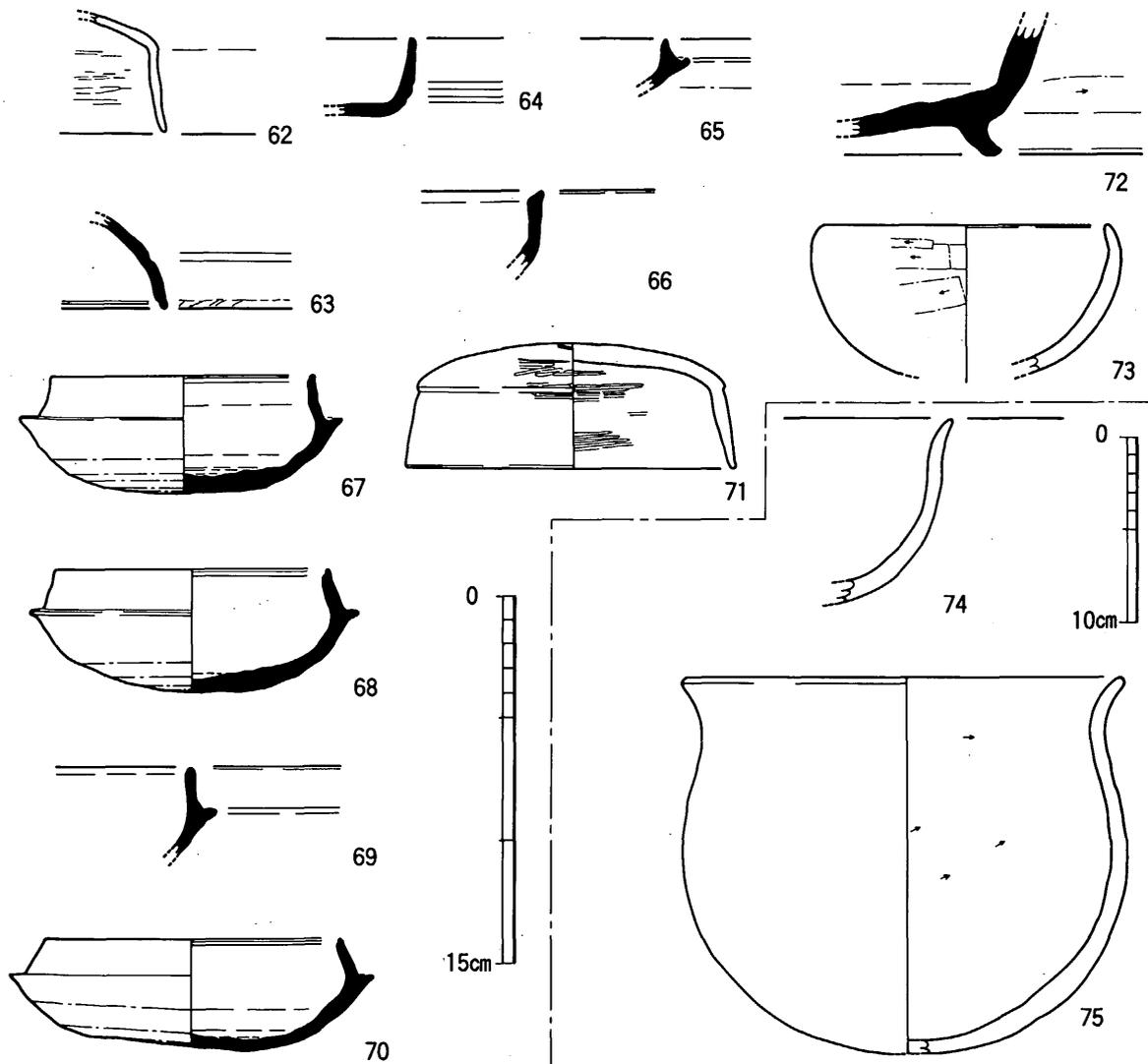
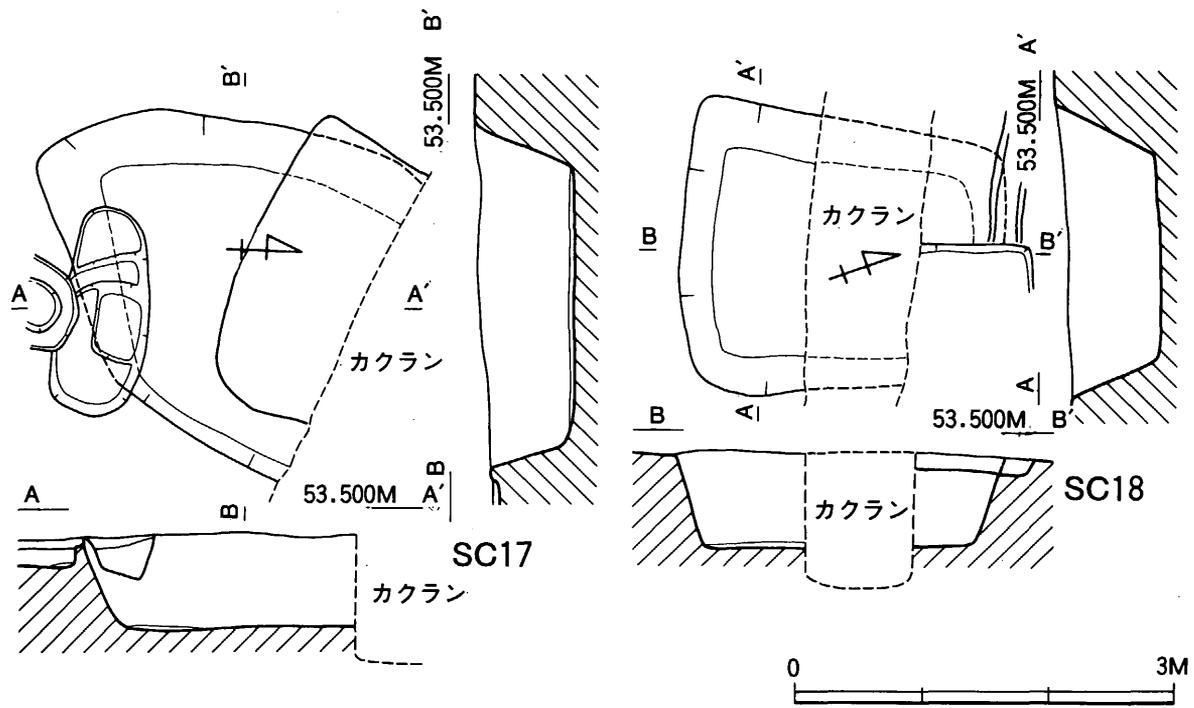


Fig. 13 SC17・18実測図およびSC17~19出土遺物実測図 (S1/60・1/3・1/4)

成は普通。ロクロ回転方向は右で、調整は内面の口縁部から外面の口縁部まではヨコナデで、外面の天井部はヘラケズリ、内面はナデ仕上げがなされる。外面には自然釉が付着。口縁部から天井部の一部を残す破片の77は、焼成は普通で胎土には少量の1～3mmの砂粒を含む。外面灰色(7.5Y6/1)、内面灰色(N5/)を呈す。78の破片は、外面黒褐色(10YR3/1)、内面褐灰色(10YR4/1)の色調を呈す。胎土には1～3mmの砂粒が含まれ焼成はやや不良。79は外面灰色(7.5Y6/1)と内面灰白色(7.5Y7/1)の色調で、胎土には0.3～2mm程の砂粒を含んでいて、焼成は普通である。80は器壁の厚い坏身の破片。外面灰色(5Y6/1)、灰色(N6/)を内面灰色(N6/)を呈す。微量の砂粒を含んで焼成は普通。81は復元口径11.6cm, 受部径13.6cm, 残存高4.6cmを測る。胎土には1mm程の砂粒を少量含んでいて、焼成は普通である。色調は内外面灰色(5Y6/1)、外面の一部は暗灰色(N3/)を呈す。受部から体部の外面に自然釉が認められる。やや器壁は厚めである。焼成のやや不良な82は、内外面の色調灰色(5Y6/1)をなす。胎土は多量の砂粒が含まれて、復元口径11.4cm, 受部径13.8cm, 残存部の高さ4.7cmを測る。ローリングのため調整は明確でないが内面底面には当て具痕がのこる。器壁は底面がやや厚めである。84は須恵器模倣の坏。口径11.2cm, 器高5cmを測る。胎土には1mm程の砂粒や赤褐色粒を含んでいて、焼成は普通である。調整は内外面ともにミガキによる仕上げである。黒色処理のなされた85は、84同様に須恵器模倣の坏身。胎土には微砂粒・赤褐色粒を少量含み焼成は普通。外面の色調は、明褐色

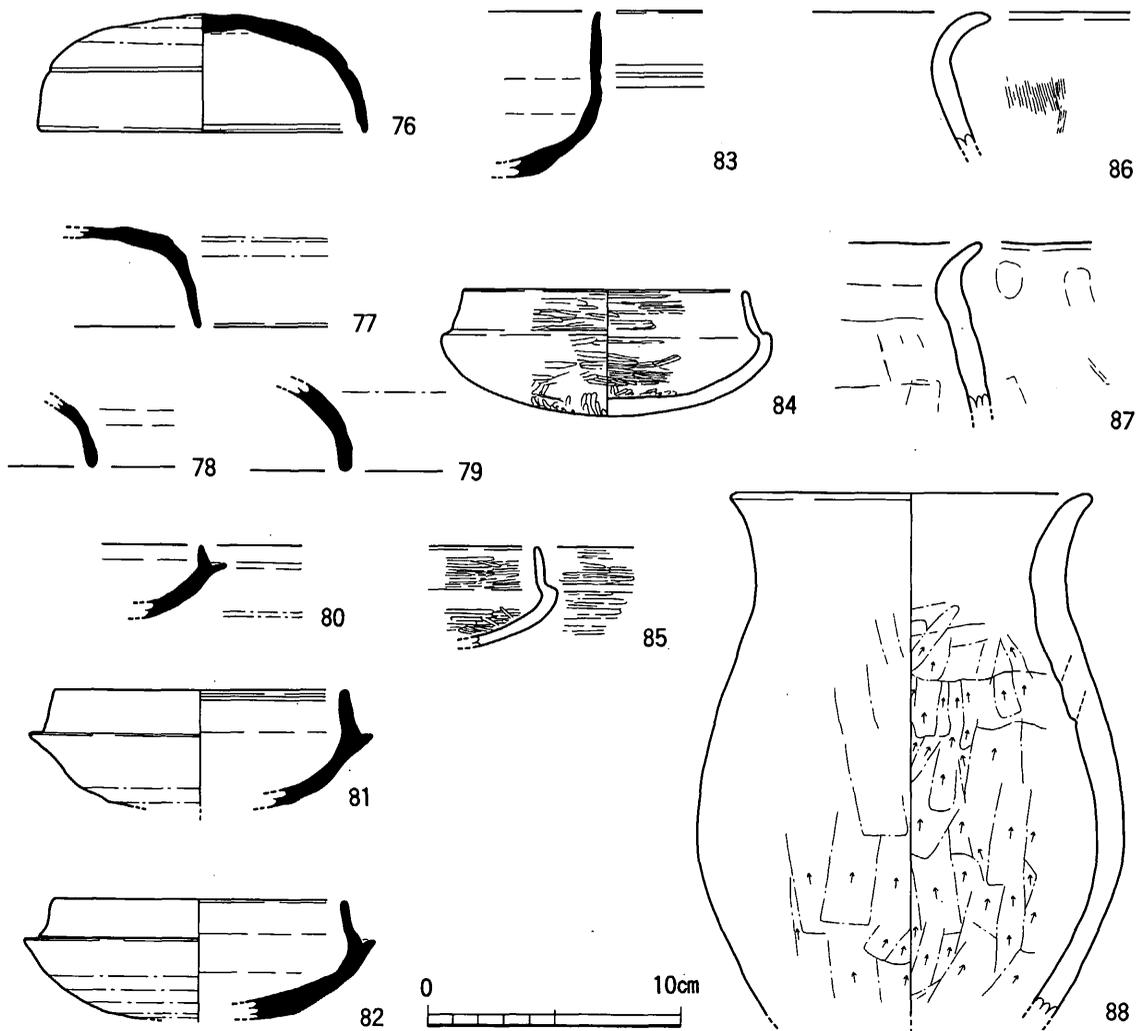


Fig. 14 SC20出土遺物実測図 (S1/3)

(7.5YR 5 / 6)と褐色 (7.5YR 4 / 4)、内面は橙色 (7.5YR 6 / 6) をなす。

**甕 (Fig.14-86・87, PL.15)**

色調内外ともに橙色 (5 YR 6 / 6) を呈す86は、胎土には赤褐色粒・角閃石および1mm程の砂粒を含む。87はにぶい黄褐色 (10YR 5 / 3) の色調を呈し、胎土は86と同様の砂粒を含む。ともに焼成は普通。86の調整はローリングのため不明瞭。87は内外ともにナデ調整を施す。内面は雑な調整で粘土帯の痕跡が残る。

**壺 (Fig.14-88, PL.15)**

復元口径14.3cm, 残存高20.75cmを測る。色調は内外面明赤褐色 (5YR 5 / 6) と明赤褐色 (5 YR 5 / 8) を呈し、焼成は良好。内面頸部から体部はヘラケズリ、外面口縁から体部中位はナデ。

**SC21 (Fig.15, PL. 5)**

遺構の集中する中央で検出、SC16とカクランに切られる。北・東壁さらに南と西側の壁の一部を遺す。壁の深さも10cm程度である。主柱穴は現状では不明。出土遺物は埋土中からで、しかも細片ばかりで図示しえなかった。

**高坏 (Fig.15-89, PL.15)**

胎土には微砂粒が含まれ焼成は普通。外面灰色 (N 6 / ) と暗灰色 (N 3 / ) , 内面は暗オリブ灰 (2.5GY 4 / 1) を呈す。内外面に自然釉が付着して調整はナデ仕上げである。器壁はうすい。

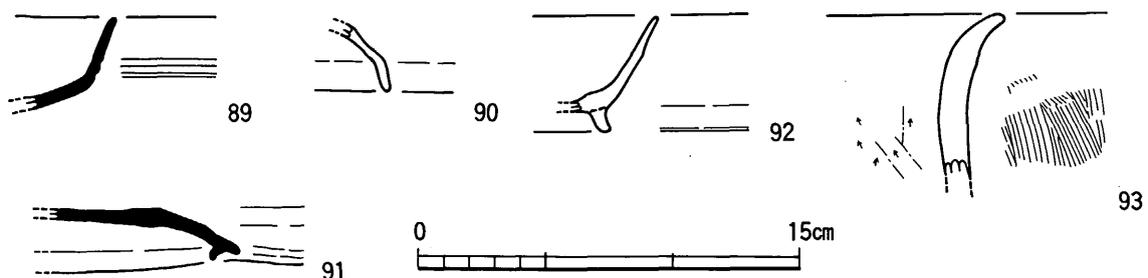
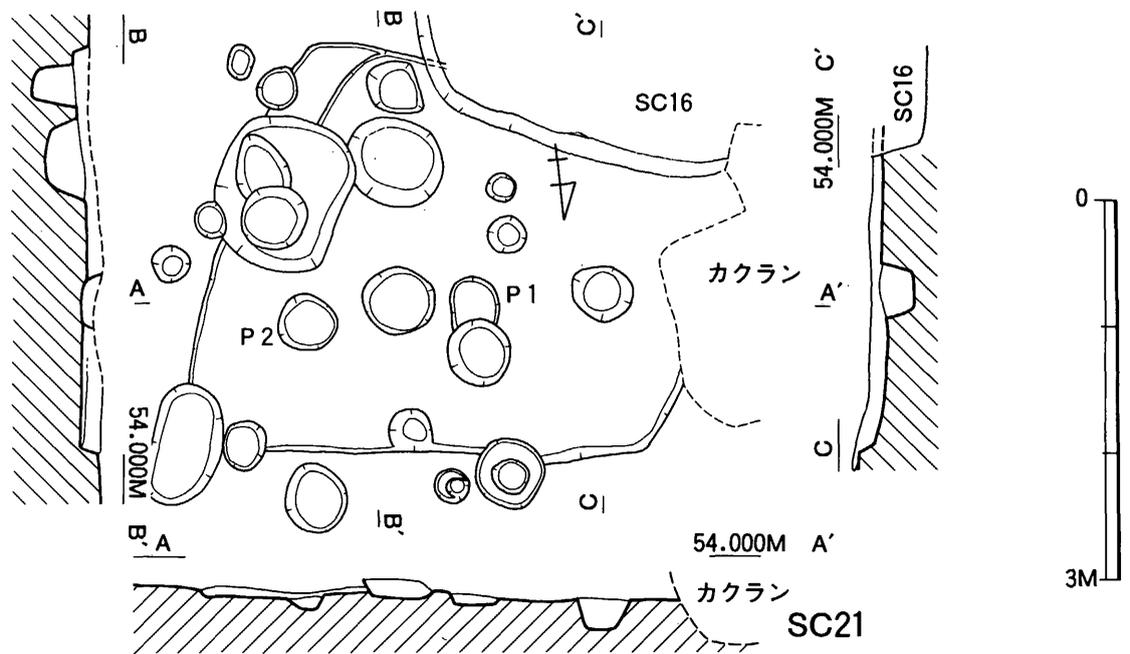


Fig. 15 SC21実測図およびSC21・22出土遺物実測図 (S1/60・1/3)

坏 (Fig.15-90, PL.15)

口縁部近くの蓋の破片。内外面の色調は橙色 (7.5YR 7/6) を呈す。胎土には微砂粒が含まれていて、焼成は普通。調整は内外ともにヨコナデを施している。

甑 (Fig.15-93, PL.15)

口縁部付近の破片で、色調は内外面ともに浅黄橙色 (10YR 8/4) を呈す。胎土には0.5~2 mm程の砂粒、赤褐粒とウンモを含み、焼成は普通である。調整は外面体部にハケメを施している。

SC22

調査区中央部で検出。遺構の大半はカクランに切られる。検出部は北側・西側コーナー・東側コーナー部付近で、壁の立ち上りもやや直に近く、遺存の良いところで10cm程度である。現存部の北壁は長さ3.2mを測り、北壁側の壁は僅かに曲線を描くが、ほぼ直線と想定されることから、方形と推測される。東・西コーナーで検出された柱穴は、北壁の軸線と一致し、各々のコーナー壁からの距離も等しいことからコーナー部に支柱穴をもつものと想定。

坏 (Fig.15-91・92, PL.15)

91は若干歪みのある須恵器の蓋。胎土には0.5~1 mm程の砂粒を含み焼成は普通。内外面の色調は灰色 (N 5/ ) を呈す。調整は天井部はヘラ切り後ナデ体部から内面体部まではヨコナデが施される。92の坏は焼成不良。胎土に1 mm程の砂粒、赤褐色粒とウンモを含む。外面の色調は灰白色 (5 YR 8/1)、内面にぶい黄橙色 (10YR 7/2) を呈す。摩耗で調整は内外面ともに不明瞭。

SC23 (Fig.16)

SC22の北側で検出。カクランに北西コーナー部を切られる。壁の立ち上りは斜めで、遺存良好

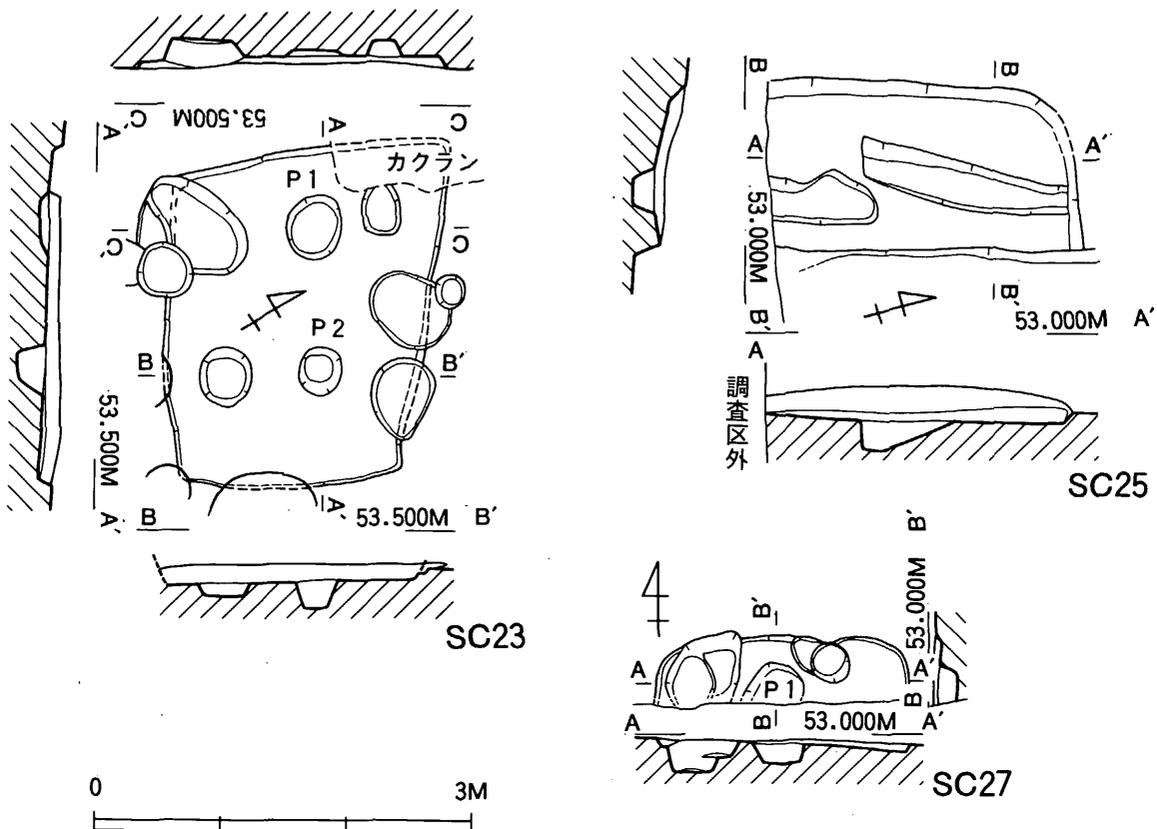


Fig. 16 SC23・25・27実測図 (S1/60)

なところで15cm程度と全体的に遣りは悪い。南壁の長さ2.3m、東壁の長さは2.2mを測る。歪みがある略方形を呈すると考えられる。主柱穴は南壁の軸線に一致し、南壁からの距離も等しいP1・2と判断。出土遺物は細片ばかりである。

#### SC24

調査区中央やや北よりで検出。SK45とカクランに切られる。南壁と西壁の一部を残すのみで全容は不明。壁の遺存も悪く、深さ10cm程度しかない。壁の立ち上りはやや斜めとなり、床面は平坦をなす。遺物の出土もなく時期も明確でない。

#### SC25 (Fig.16)

調査区の東側で検出。SC26を切るが、新しい溝と宅地開発の際にかなり削平されている。しかも南側が調査対象外に延びるため、SC24と同様詳細は不明。壁は西側から西北コーナー部が残り遺存の良い所で深さ30cmを測る。壁の立ち上りは緩やかに斜めに立ち上る。現況では主柱穴についても不明。遺物の出土は少なく、図示したものも遺物とりあげの際に混りこんだものかも知れない。

#### 碗 (Fig.17-94, PL.16)

白磁の碗で高台付近の破片である。色調は、胎土が灰白色(2.5Y8/1)、釉がオイスター色(5Y7.5/11.0)を呈す。高台径は5.35cmを測る。胎土は精製されていて、内外面ともに釉が施されている。また高台底面は釉の掻き取りが行われている。

#### SC26

SC25・SD30・SK50に切れ、SC30を切る。SC25と同様に遺構の東側は宅地開発の際にかなり削平されて詳細は不明。壁の遺存は西側および北西コーナー付近のみで、深さも10~20cmと良くない。壁の立ち上りは直に近い。やはり現況では主柱穴も不明である。遺物の出土は少ない。

#### 坏 (Fig.17-95, PL.16)

口縁部付近の破片。焼成は普通で、胎土には1~2mmの砂粒を含む。色調は内外面ともに灰色(N6/)を呈す。ロクロ回転は右方向で、内外面ともにヨコナデ調整を施している。器壁はやや厚い。

#### 高坏 (Fig.17-96, PL.16)

器壁の厚い口縁部付近の破片。胎土は1mm程の砂粒を少量含み、焼成は普通である。色調は、外面暗灰色(N3/)、内面灰色(N5/)と一部暗灰色(N3/)を呈す。受部の外面には自然釉が付着している。調整は内面ヨコナデ、外面の体部はカキメとケズリ、体部に近い底面はカキメ、脚部に近い部分がヨコナデで仕上げられている。ロクロ回転は右方向である。

#### 壺 (Fig.17-97, PL.16)

壺の口縁部の破片である。胎土には0.5~1.5mm程の砂粒が含まれていて、焼成はややあまい。色調は内外面ともに暗灰色(N3/)を呈す。調整は内外ともにヨコナデが施されている。

#### SC27 (Fig.16)

調査区の中央よりやや東側で検出され、南側は調査対象外である。遺構の北壁と東・西コーナー部が検出されただけで、ほとんどが未調査区に延びる。北壁側の長さは約2mを測り、東・西コーナー部は角ばらずに隅丸を呈す。壁は遣りが悪く、深さ10cm程度しかない。壁はやや斜めの立ち上りとなる。床面は平坦で、精査の際、検出できた柱穴は埋土に差異が認められるため、SC27に伴う柱穴はP1と判断。このP1は東・西壁のほぼ中央にある。この柱穴の底面は平坦で深さ20cmを測る。これを主柱穴とするならば、2本柱を想定しておきたい。遺物は細片ばかりの出土で図示で

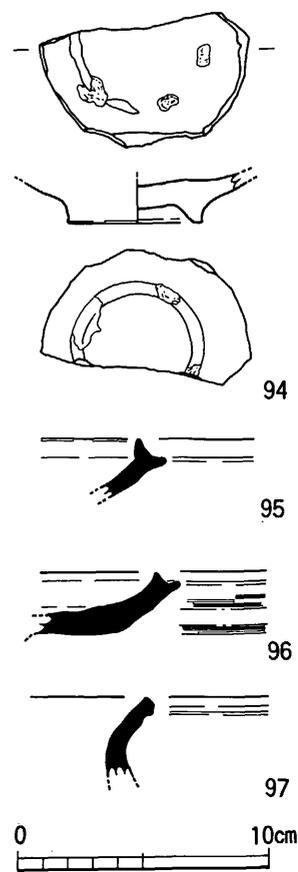
きなかった。

**SC28 (Fig.18)**

SD14を切る。遺存良好な遺構で東南コーナー部だけが未調査区へと延びる。西壁3.2m、北壁2.5mを測る。各々のコーナー部は若干丸みをもつ隅丸長方形を呈す。住居跡内の埋土は、整地層に使用されたと考えられる花崗岩バイラン土に浅黄橙色(10YR 8/3)の混ったものが中位層まで、その下層はにぶい黄橙色(10YR 6/3)混りのものであった。底面は平坦となり、主柱穴を検出するため精査をおこなったが湧水のため検出できなかった。壁の立ち上りは、南壁側が直に立ち上り、その他はやや斜め気味となる。遺構の上面で、柱穴が検出されたが、埋土に大きな差異があつて、時期的にはこの遺構より新しいものとする。遺構自体の遺存状況は、良好であつたにもかかわらず遺物は細片が多く、図示したのも5点のみである。

**坏 (Fig.19-98~100, PL.16)**

残存高4.2cmを測る98は蓋の破片で、口縁から天井部の一部だけを遺す。胎土には微砂粒を含んで普通の焼成である。色調は外面灰色(N 6/ )と一部灰色(N 4/ )で、内面は灰色(N 6/ )を呈す。器壁はやや薄い。天井部から体部はやや外側に開き、口縁部との界に沈線が一条めぐって、口縁部は直となる。調整は体部の内外面がヨコナデで、天井部内面はナデ、天井部外面はヘラケズリで仕上げている。Fig.17 SC25・26出土遺物実測図(S1/3)



また外面体部から口縁部に自然釉が付着する。99は器壁のやや厚い破片。胎土には1mm程度の砂粒を含んでいる。焼成は普通。色調は内外面ともに灰色(N 5/ )を呈す。調整は内外面ともにヨコナデが施されている。ロクロ回転は右方向である。器壁にやや厚みのある100は、灰色(N 6/ )の色調を内外面ともに呈している。焼成は普通で、胎土には1mm程の砂粒を含んでいる。ロクロ回転は右方向で、内外面の調整にはヨコナデを施している。101は、胎土に1mm程

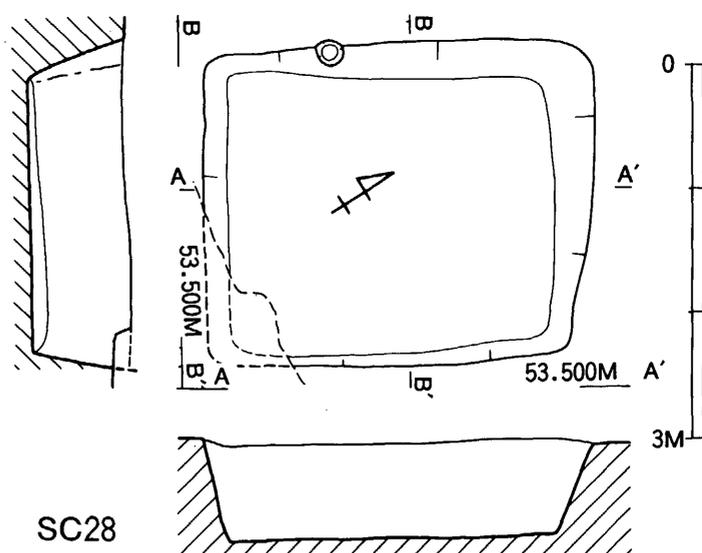


Fig. 18 SC28実測図 (S1/60)

の砂粒を含んでいて、焼成は普通である。内外面の色調はともに灰色(N 5/ )をなす。調整は内外面ともにヨコナデで仕上げられている。ロクロ回転は右方向である。

**甕 (Fig.19-103)**

口縁部から頸部にかけての破片。色調は内外面ともに浅黄橙色(10YR 8/4)を呈す。焼成は普

通で、胎土には0.5～2mmの砂粒・ウンモ・角閃石を含む。調整は外面が著しく器表剝離して不明。頸部と胴部の内面は、ヘラケズリかと考えられるがローリングのため不明瞭。形態の特徴は胴部に最大径をもち、胴部から頸部まで内傾し口縁部でやや直になり、さらに外反している。口縁端部はやや丸くおさめている。

#### SC29 (Fig.20)

調査区中央の北よりで検出。カクランに西壁コーナー部分をSD24に東南コーナーを切られる。西壁はSX 9を切る。遺存は良くない。壁は状況のよい所で僅か5cmで、遺っていない所がほとんどである。カマドは北東部の壁の中央に付設されている。調査区中央部の北側は宅地開発で、かなり削平をうけて、柱穴以外の遺構の遺りは悪い。このためカマドも床面から5～6cm程の高さしかなく、基底面しか遺存していない。支脚は抜きとられていて現存しない。支脚のあったと考えられる位置に深さ10cm程の抜き跡が確認された。またその手前焚口部には35×23cmの火床があるが、若干の熱変化している程度で極度の焼きしまりはなかった。また残存部の層から袖部には粘土及び側石は使用されていたとは考え難い。基底面に残る積み土は焼土混りの淡赤橙色(2.5YR 7/4)で、カマド内部と思われる部分には同様な層に若干の灰・炭が混っていた。壁の遺りが悪いため煙道部付近の詳細は不明。また住居跡内の床面は貼り床などはないが、踏み締まった痕跡があり、壁のない所でも内外部の差異が認められ、住居跡の推定ラインは明瞭に捉えられる。主柱穴は4本で、東壁側のP2・4の柱列は壁からの距離が等しく東壁の軸線上に一致して、心の間は3m前後を測る。北側の柱列P1・2は、北壁の軸に一致して壁までの距離もほぼ等しい。心の間は、やはり3m前後となる。西壁柱列P1・3は西壁の軸線に一致して、壁からの距離も等しい。しかしP3は他の柱穴に比べ形状・大きさ・深さに差異があるが、柱穴が重複したと判断。遺物の出土は少ない。

#### 甕 (Fig.19-102, PL.16)

口縁部から頸部付近の破片。胎土には1mm程の砂粒を僅かに含むが、わりに精製されている。焼成は普通。色調は外面灰色(N5/ )、内面が灰色(N6/ )を呈している。ロクロ回転は右方向で、調整は口縁内外面にヨコナデを施している。頸部の内面はナデ仕上げで、また外面と内面の一部には自然釉が付着する。口縁部は頸部から外反して端部を横につまみ出し、平坦に近く整形。一条の沈線をめぐらしている。

#### SC30

SC26・SD30に切られ、宅地開発で大半は削平されている。このため全容は不明。遺存部は西壁の一部と北西コーナー部付近のみ。壁は緩やかに斜めに立ち上る。遺存の壁の深さは2～5cmを測る。床面は平坦で貼り床はない。遺物の出土はない。

#### SC31 (Fig.22)

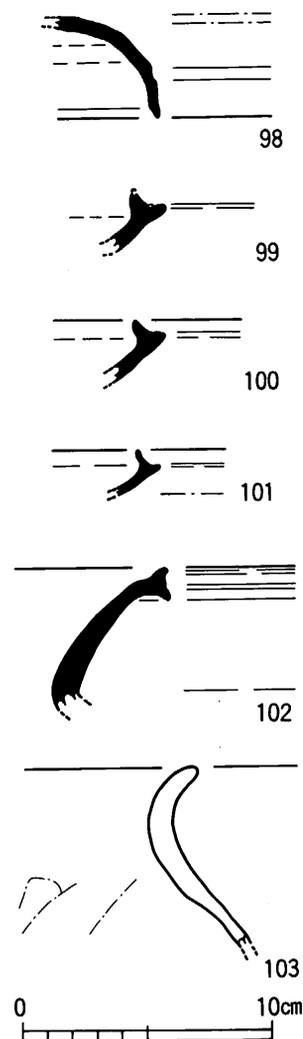


Fig. 19 SC28・29出土遺物実測図 (S1/3)

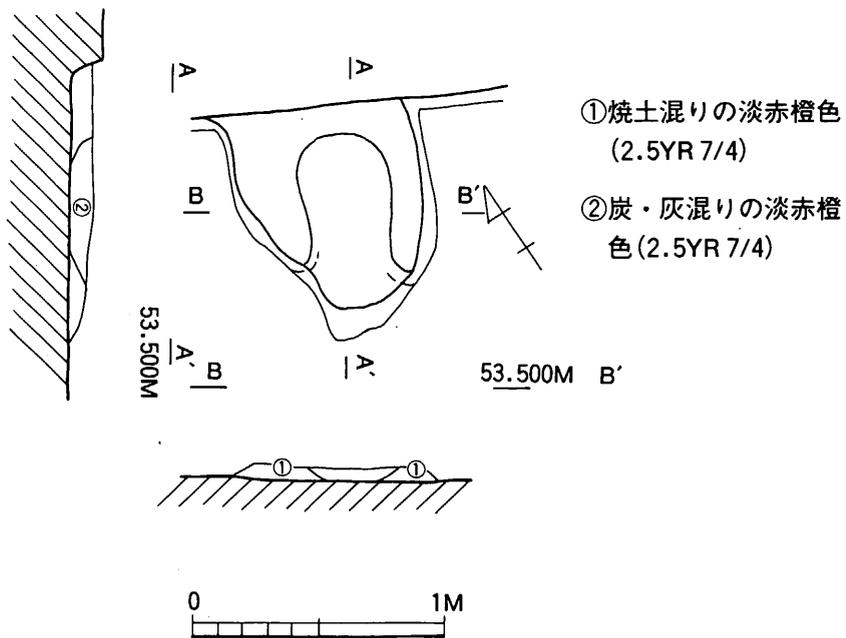
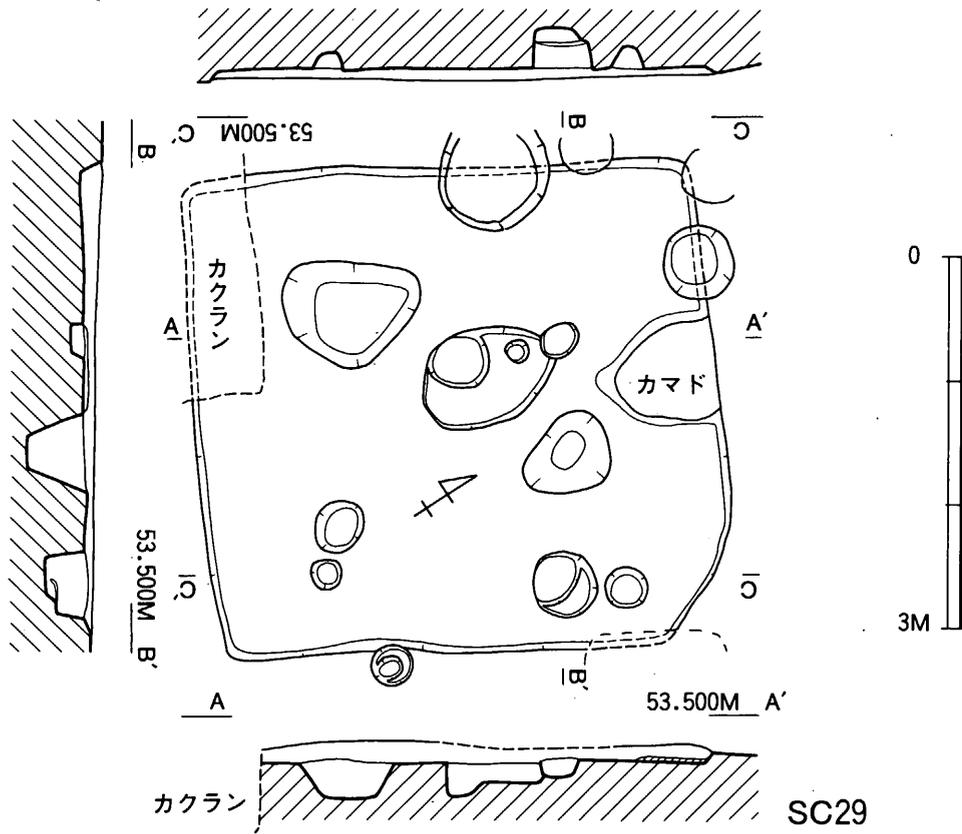


Fig. 20 SC29実測図およびカマド実測図 (S1/60・1/20)

調査区の最東部で検出。北西コーナー部だけで、遺構の大半は未調査区へ続く。このため全容は不明。壁は直に近く立ち上り、深さは10cm程である。床面は平坦で踏み締められた痕が認められ、住居跡とした。遺物は出土してない。

**SC32 (Fig.22)**

調査区最北東部で検出。SC31と同様に遺構の大半は未調査区へ続くため全容は明らかでない。SC36を切る。検出された壁から推定すると不整形もしくは不整長方形を呈すると思われる。壁の立ち上りはやや斜めで深さは10cm前後と浅い。このことは宅地開発の際に削平があったことを示唆している。遺物の出土状態は埋土中からである。

**坏 (Fig.21-105, PL. 16)**

口縁部から体部上位の破片。胎土には少量の微砂粒が含まれている。焼成は悪く、やや軟質である。外面の色調は、にぶい赤褐色 (5 YR 5 / 4) と明褐色 (5 YR 7 / 1) で、内面は明オリブ灰色 (2.5GY 7 / 1) を呈す。器表の調整は内外面ともにヨコナデで仕上げている、器壁はややうすく作られている。

**SC33 (Fig.22, PL. 6)**

調査区の最東部よりやや西で検出した。SC34を切ってSD44に切られる。壁の立ち上りは斜めで、深さ10cm前後を測る。床面はほぼ平坦で貼り床は認められない。南壁の長さ3m前後、西壁2.3m、東壁3m、北壁2.5mを測り、不整形を呈す。北壁と東壁はやや直線的に延びるが、南壁は東南コーナーから南西コーナーに向かって内側にせばまる。西北

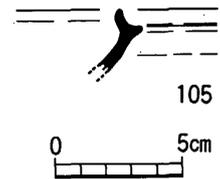


Fig. 21 SC32出土遺物実測図 (S1/3)

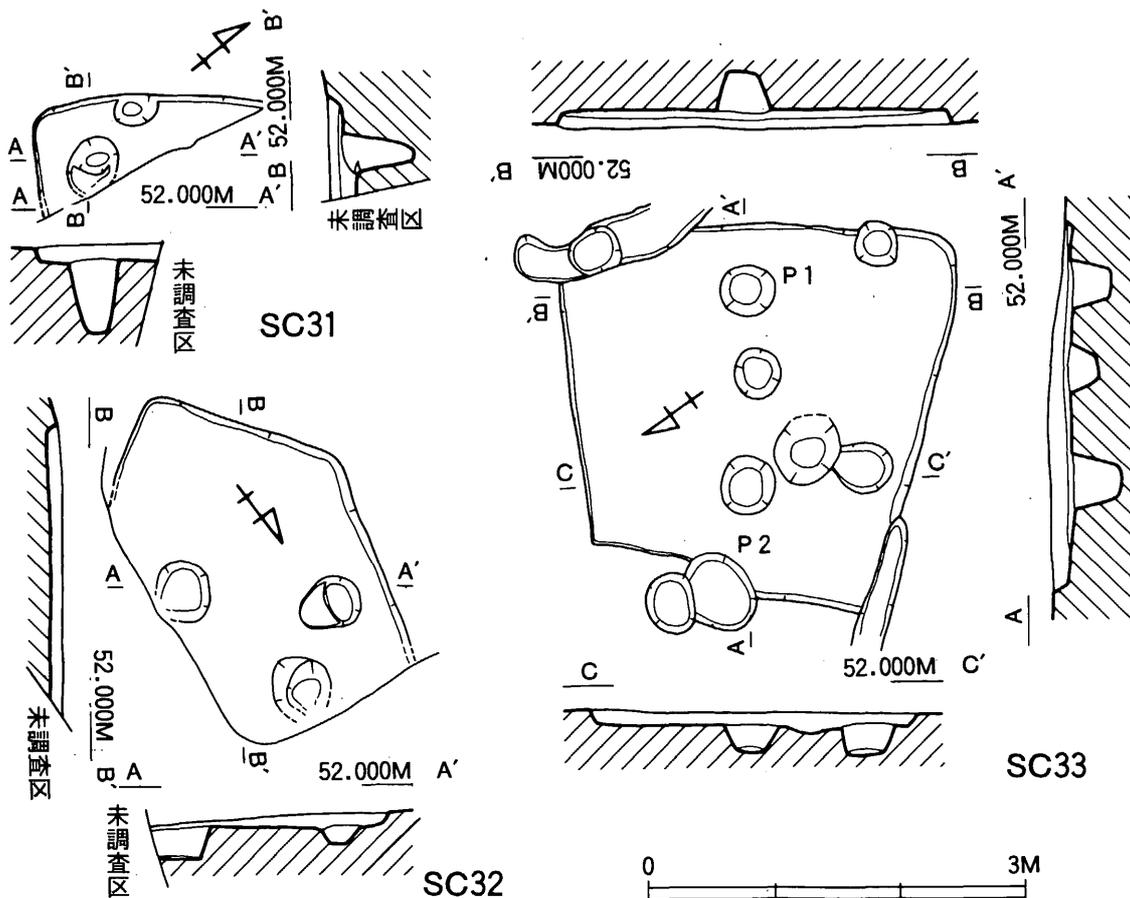


Fig. 22 SC31~33実測図 (S1/60)

コーナー部付近は、壁の遺りも悪く検出時に見誤った感是否定できない。北壁のやや西よりにカマドが付設されていたと考えられる。現況では明確なラインとして捉えることはできなかったが、熱変化した焼土が遺り火床らしいものも存在していた。宅地開発の時に大半が破壊され痕跡として検出されたと判断。主柱穴は、遺構の中央部のP1・2に想定した。P1・2の柱列は、北壁の軸にほぼ一致して、各々の柱穴からと北壁までの距離も、ほぼ等しい。遺物はカマド付近の焼土の中から出土した。

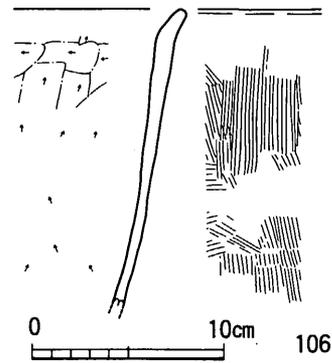


Fig. 23 SC33出土遺物実測図(S1/4)

**甑 (Fig.23-106, PL.16)**

残存器高15.9cmを測る破片。口縁部付近に歪みがある。内外面の色調は、浅黄橙色 (10YR 8 / 4) を呈す。胎土には1～3mmの砂粒を含んで精製されていない。焼成は普通。調整は口縁部の内外はヨコナデ、体部内面上位はケズリを中位から下位はケズリ後ナデを施し、体部外面は、ハケメを施し仕上げている。器壁は、わりにうすい。

**SC34 (Fig.24)**

SC33に切られ、遺構の南側は未調査区へと続く。現存部の西壁2.7m + α, 東西間2.3m前後を測る。これから推測すると不整長方形を呈すと考えられる。壁は緩やかに斜めになって、深さ10cm前後である。床面はわりに平坦で、貼り床などは確認できなかった。遺物はすべて埋土から出土したもので床面のものはなかった。

**坏 (Fig.24-107, PL.16)**

口縁部から体部上位までの破片。色調は、外面灰色 (N 5 / ) と暗灰色 (N 3 / )、内面灰色 (N 5 / ) を呈す。胎土には1mm程の砂粒を含んで、焼成は普通。調整は内面と受部付近にはヨコナデを体部外面はケズリを施す。また外面の体部には自然釉が付着している。

**高坏 (Fig.24-109・110, PL.16)**

坏部の破片である109は外面の色調は灰色 (N 4 / ) と灰色 (N 3 / )、内面の色調、灰色 (N 5 /

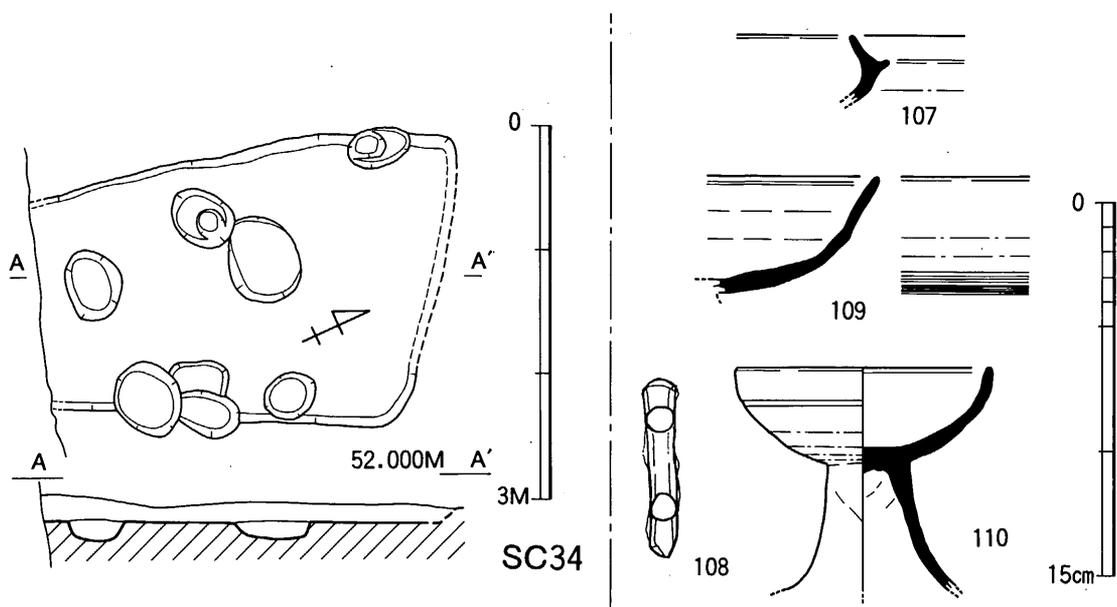


Fig. 24 SC34実測図および出土遺物実測図 (S1/60・1/3)

)を呈す。胎土に0.5~3.5mm程の砂粒を少量含んで焼成は普通である。仕上げは外面の口縁部から内面体部までがヨコナデ調整。内底面はヨコナデ後にナデ調整を、部分的に当て

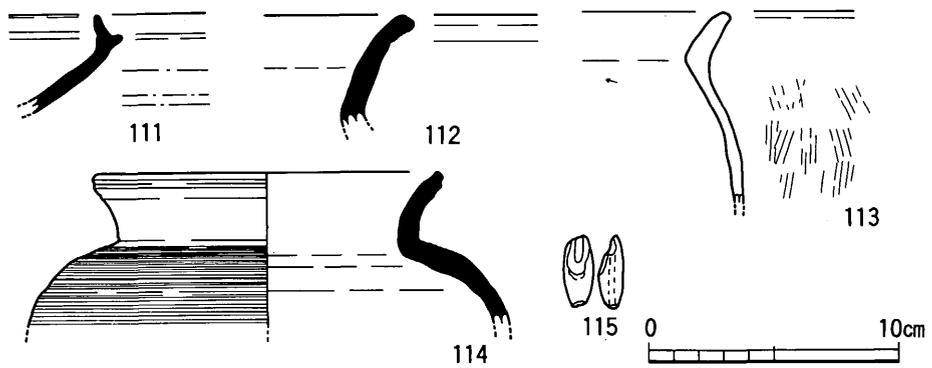


Fig. 25 SC35出土遺物実測図 (S1/3)

具痕を残す。外底面にはカキメが遺り、残存高4.7cmとなる。110は裾部を欠損した高坏。復元口径10.3cm, 残存高9cmを測る。内外面の色調は、いずれも暗緑灰色(5G4/1)を呈す。胎土には1~4mmの砂粒が少量含まれ、普通の焼成である。口縁部付近は歪みがあり、ロクロ回転は右方向である。坏部内面の調整はヨコナデ後ナデを施し、外面口縁部はヨコナデ、体部はケズリ後ナデで仕上げる。脚部の内外面はヨコナデを施すが、内外面ともに一部にシボリ痕が残っている。

**SC35**

調査区中央よりやや北側で検出。SD22・34・41に切られている。壁は北側・東側の一部のみ遺っている。壁は、深さ10~15cmで、緩やかに斜めに立つ。床面は平坦で貼り床はなかった。遺物はすべて埋土からの出土。

**坏 (Fig.25-111, PL.16)**

内外の色調、灰色(N7/)を呈し、胎土には微砂粒が含まれ、焼成は普通である。調整は体部外面はケズリで、他はヨコナデ仕上げである。体部の器壁はややうすく、口縁部の器壁は体部に比べ厚みをもつ。

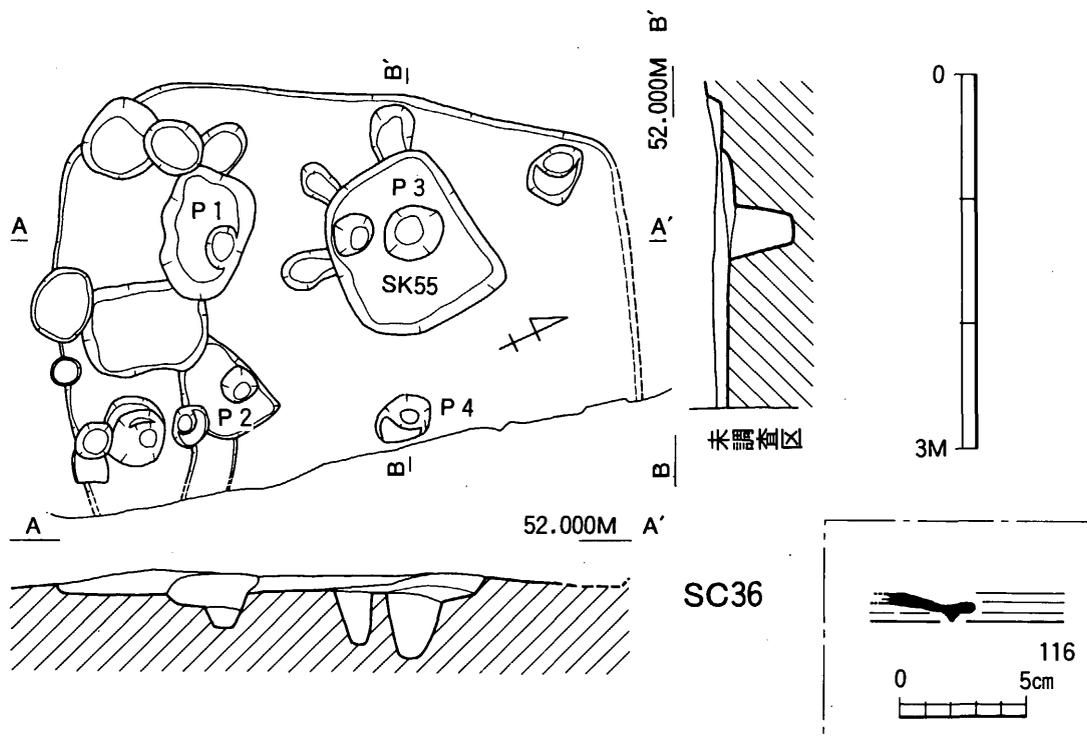


Fig. 26 SC36実測図および出土遺物実測図 (S1/60・1/3)

**壺 (Fig.25-114, PL.16)**

復元口径14.2cm, 残存高6.3cmを測る破片。色調は、内外ともにオリブ黒 (7.5Y 3/1) を呈す。焼成は普通で、胎土には微砂粒が含まれる。頸部から体部にカキメが施され、他は内外ともにヨコナデ調整で仕上げる。胴部と頸部界は、やや角ばった趣があり、直に口縁部へ延びる。口縁部から端部へは直に近く立ち上って、徐々に外反する。口縁端部直下に一条の沈線がめぐる。

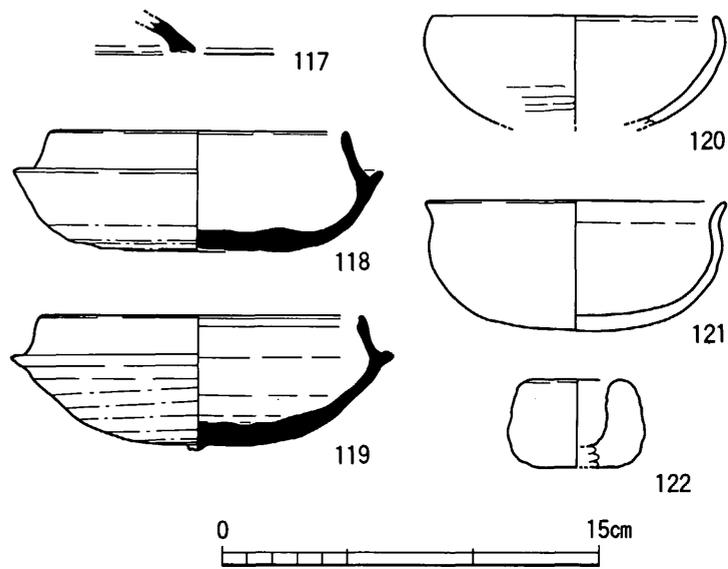


Fig. 27 SC37出土遺物実測図 (S1/3)

**甕 (Fig.25-113, PL.16)**

1～3mm程の砂粒を含む胎土で、焼成は普通。色調は外面橙色 (5 YR 6/6) と灰黄褐色 (10 YR 4/2)、内面にぶい黄橙色 (10YR 5/3) を呈す。全体的に摩耗の著しい口縁部片である。

**SC36 (Fig.26, PL.6)**

調査区東端、SC32に切られ、SC38を切って検出。遺構の東側は未調査区へと続く。遺存部分は西・南壁の一部で、壁の立ち上りは斜め、深さ15cm前後である。床面も新しい遺構に切られ部分的にしか観察できないが、貼り床はなかった。柱穴のP1・2は南壁の軸線に一致。しかも南壁までの距離は等しい。各々の心心間1.5m前後を測り4本柱と考えたい。遺物は埋土からの出土。

**蓋 (Fig.26-116, PL.17)**

胎土に多量の1～3mm程の砂粒が含まれた蓋の破片。口縁部から天井部の一部を遺し、器壁はややうすい。色調は外面灰色 (N 6/ )、内面灰色 (N 5/ ) を呈す。ロクロ回転は右方向で、全体的に自然釉が付着する。天井外面はケズリがなされ、外面の体部から口縁部の内面はヨコナデ調整で仕上げ。

**SC37**

SC29の東側で検出されたSC37はSD24とカクランに切られる。壁がほとんど遺っていないため、住居跡と判断するには床面の精査しかなかった。壁は、西側に一部があり、この内側の床面部分を観察。この観察結果、床面は踏みしめと思われる汚れのある範囲で、この汚れのほかには貼床はなかった。この観察結果によればSD24の北側の壁まで、北側のカクラン付近までつづくと考えられたが、

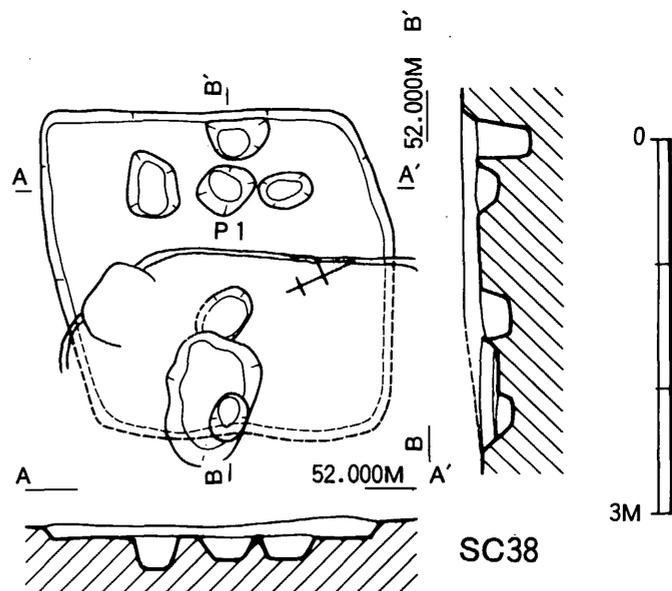


Fig. 28 SC38実測図 (S1/60)

各々の完結線に達してはいずれ南北軸の長さは不明で、また西壁から3 m以東は、宅地開発による削平のため明確に捉えられなかった。一辺が4.2 m前後の長さを測る隅丸方形を想定した。支柱穴は、4本柱の可能性をもつ。柱穴は床面の中央から西側に多く検出された。埋土の状況は、ほとんど差異がなく他の時期とは考え難い。住居跡の埋土中から僅かな遺物が出土していて、今回図示しえた柱穴内の遺物と時期的には変化がないため、柱穴の遺物を住居跡のものと想定。

#### 坏 (Fig.27-117~121, PL.17)

118は、口径12cm、器高4.9cm、受部径14.9cmを測る。内外面の色調は、いずれも灰色(N5/)を呈す。胎土は1 mm程の砂粒を僅かに含んで、焼成は普通。器壁は体部から口縁部までが、やややすい。調整は外底面がケズリ、内底面はヨコナデ後ナデを他はヨコナデで仕上げる。ロクロ回転は左方向で、口縁部付近が若干の歪みをみせる。ロクロ回転右方向の119は、口径12.9cm、器高5.4cm、受部径14.8cmを測る。色調は、内外いずれも灰色(N6/)を呈し、0.5~2 mm程の砂粒を含んだ胎土で、焼成は普通である。器壁は体部上位から口縁部にかけてが底面よりやややすい。内面から外面体部上位はヨコナデで、体部から底部まではケズリ後ヨコナデ調整を施す。しかし底面の中心部は未調整のままである。120は底面付近を欠損していて、復元口径11.4cm、残存高4.4cmを測り、外面の色調は橙色(5 YR 7/6)、内面は浅黄橙色(7.5 YR 8/4)を呈す。微砂粒・ウンモ・赤褐色粒を含む胎土で、焼成は普通である。器壁はやややすく、口縁部は端部に向かって僅かに内傾する。調整は口縁部から内面体部上位までがヨコナデ、内底面はナデ仕上げ、外面体部はヘラミガキを施すが、ローリングのためやや不明瞭。121は、復元口径12cm、器高5.2cmを測り、内外面の色調は橙色(5 YR 6/8)を呈す。微砂粒・角閃石・赤褐色粒を含んだ胎土で、焼成は不良。全体的に摩耗のため、調整は不明瞭である。外底面に黒斑が残る。口縁部は頸部から緩やかに外反する。

#### 手捏土器 (Fig.27-122, PL.17)

復元口径4.3cm、器高3.5cmを測る。1~2 mm程の砂粒が多量に含まれた胎土で、焼成は普通である。色調は、内外面ともに、にぶい褐色(7.5 YR 6/3)を呈す。ローリングを受けているため、調整は不明。全体的に指頭痕も残っていない。

#### SC38 (Fig.28)

調査区の東端、SC36に切られて検出。西壁と北壁・南壁の一部を残す。西壁は長さ2.4mを測り、やや直線的に北西および南西のコーナーへと続く。この両コーナーは角ばらず丸みをもって各々東壁へと延びる。遺存する壁は、緩やかに斜めに立ち上り、深さ10cm前後を測る。床面は平坦で貼床は認められない。支柱穴にP1を想定すると北・南壁までの距離は、ほぼ等しく、南・北壁に若干の歪みがあるが、西壁軸のほぼ中央に位置している。これらから考慮して2本柱を想定した。

## (2) 土坑 (SK)

### SK1・2

調査区の西南端で切り合って検出。検出時には新旧関係を明確にすることができなかった。遺構の西壁側は未調査区へ続く。ともに隅丸長方形を呈すと思われる。遺物はSK2からの出土。

#### 坏 (Fig.30-123)

焼成不良で1 mm程の砂粒と赤褐色粒を含む胎土を呈す。色調は内外ともに橙色(5 YR 7/8)、摩耗のため調整は不明瞭である。

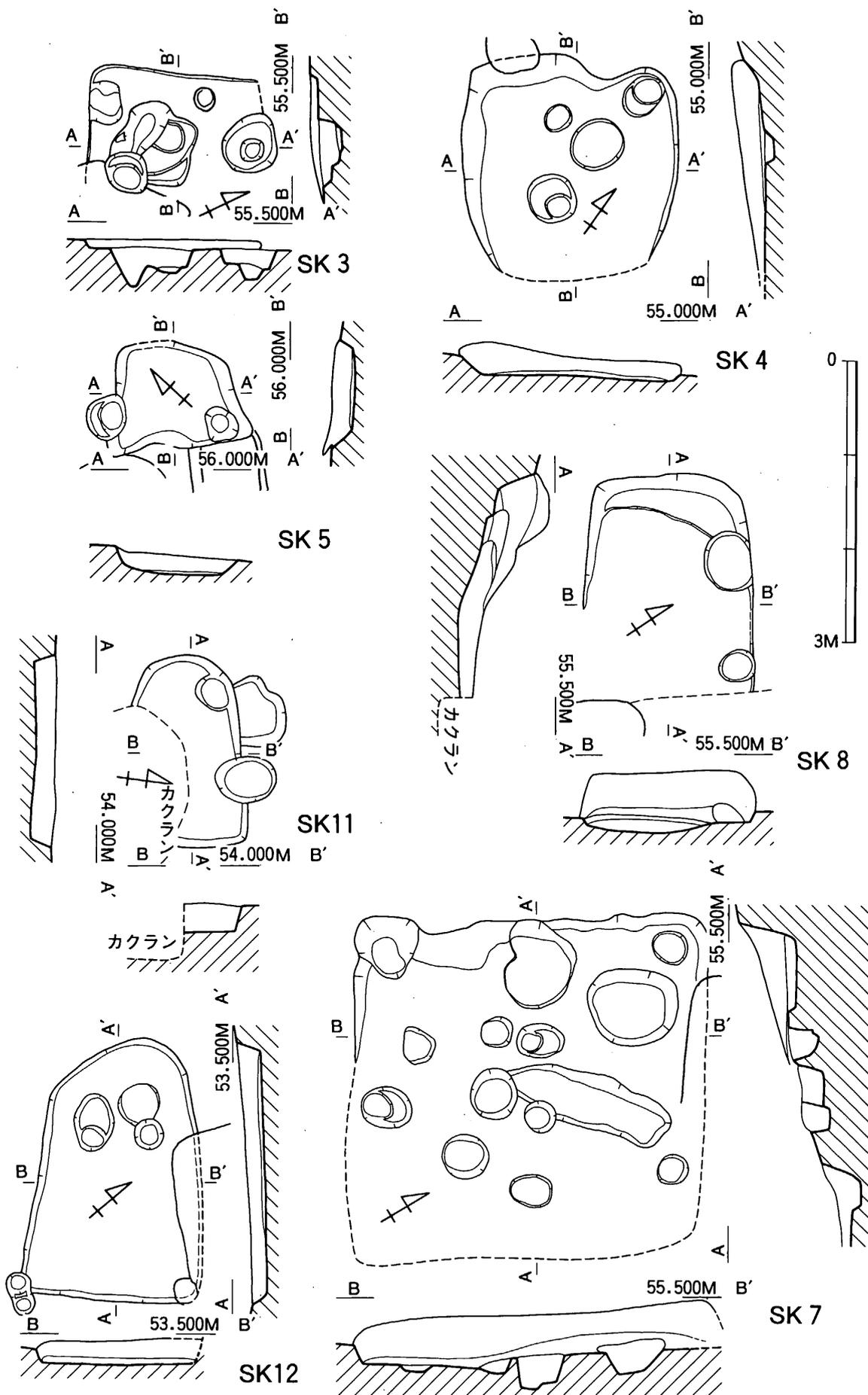


Fig. 29 SK 3・4・5・7・8・11・12実測図 (S1/60)

**SK 3 (Fig.29)**

SC 3の西南コーナー近くで検出。遺構の東側はSK 5に切られ、さらに削平により失われていて形状は不明。遺物の出土はない。

**SK 4 (Fig.29)**

SC 3と切り合う。宅地開発により削平されている部分にあたる。不整形を呈すと考えられ、SC 3の主柱穴と推定したP 4を切ることから、SC 3より新しい。遺物は埋土からのみ出土。

**SK 5 (Fig.29)**

SK 3を切って検出、不整形の形状を呈す。壁の深さは15～20cm前後を測り、立ち上りは緩やかに斜めとなる。遺構の東側は、本来より削平を受けている。遺物は埋土からの出土である。

**皿 (Fig.30-124, PL.17)**

0.5mm程の砂粒を少量含んだ胎土で、焼成が普通の破片。内外の色調は明赤褐色 (2.5YR 5/6) を呈し、残存高 2 cmを測る。

**SK 6**

SK 7に切られ、削平のため大半が失われていて、詳細は不明。

**SK 7 (Fig. 29)**

SK 6を切って、SK 8に切られる。遺構の東側は宅地開発で削平されている。現存部から隅丸長方形か、隅丸方形を呈すと考えられる。床面などの精査から、土坑として扱った。遺物はローリングの著しい瓦片と少量の土器片が埋土から出土。

**高坏 (Fig.30-126, PL.17)**

脚部を欠損した坏部の破片で、色調は内外面ともに暗緑灰色 (10G 4/1) を呈す。調整は外面体部下位にカキメとケズリが交互に施され、他はヨコナデとナデによって仕上げられている。

**SK 8 (Fig.29)**

SK 7を切って検出。床面は平坦でなく、壁の西側は階段状になっている。遺物は埋土からの出土。

**坏 (Fig.30-125, PL.17)**

口縁部、受部のやや肥厚したもの。調整はヨコナデ仕上げ。

**SK 9**

SK 7の東側にあつて削平により詳細は不明。SX 5と重複する。

**SK10**

SK40を切って、形状は楕円形を呈す。壁の深さ10cm前後、壁は緩やかに斜めに立ち上る。長さ1.4m、幅1m、床面は、ほぼ平坦である。遺物は埋土からの出土。

**皿 (Fig.31-130・132・133, PL.17)**

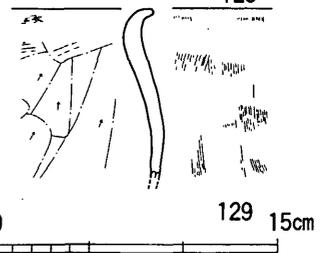
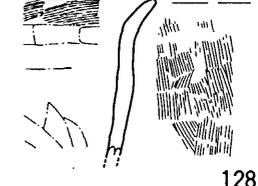
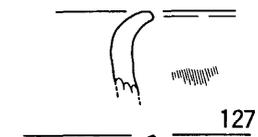
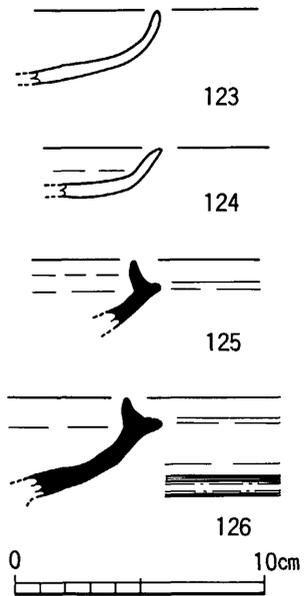


Fig. 30 SK 2・4・5・7・8 出土遺物実測図 (S1/3・1/4)

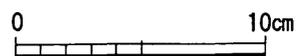
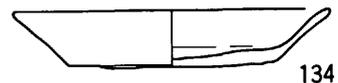
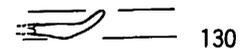


Fig. 31 SK10出土遺物実測図 (S1/3)

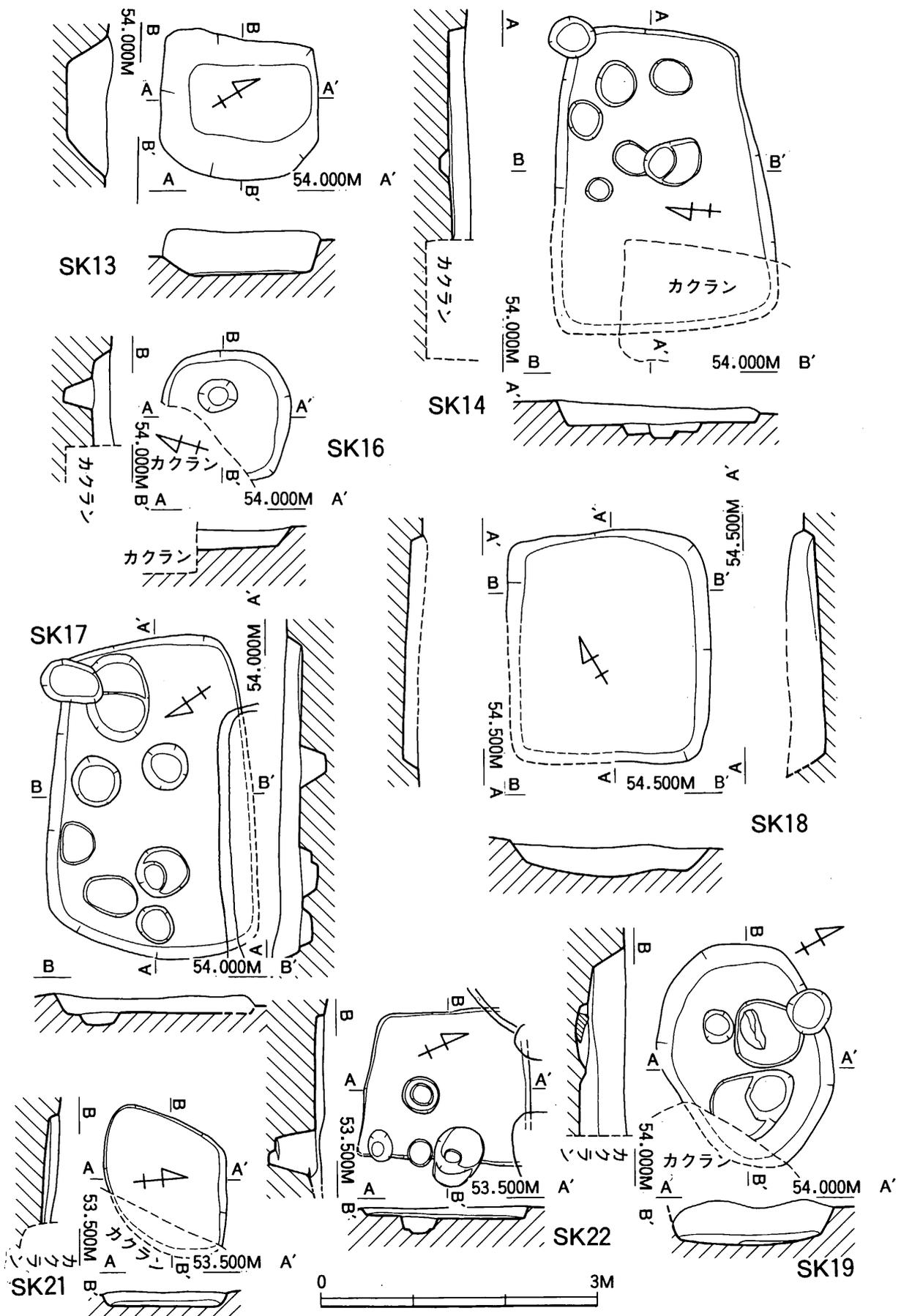


Fig. 32 SK13・14・16~19・21・22実測図 (S1/60)

132は復元口径7.6cm, 底径6.2cm, 器高1.3cmを測り、ヨコナデによる調整を施す。底面には板状圧痕が残る。色調は内外ともに浅黄橙色(7.5YR 8/4)を呈す。133は復元口径7.5cm, 底径5.6cm, 器高1.2cmで、底面の他はヨコナデとヨコナデ後ナデ調整で仕上げている。132・133は糸切り、焼成も普通である。

**坏 (Fig.31-131・134, PL.17)**

134は復元口径12.65cm, 底径8.1cm, 器高2.45cmで、内外面の色調は、におい黄橙色(10YR 7/3)をなす。焼成は普通で、胎土には0.5~1mm程の砂粒と赤褐色粒が少量含まれる。内底面はナデにて、口縁部はヨコナデで調整。また底面は糸切離しで、板状圧痕を残している。

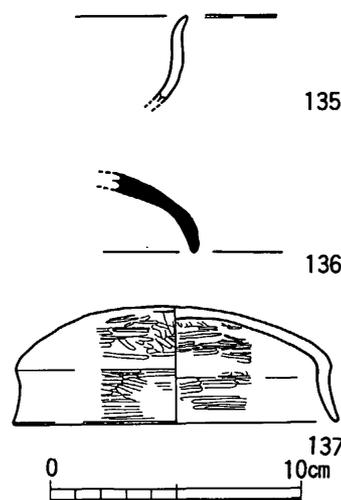


Fig. 33 SK14・18出土遺物実測図 (S1/3)

**SK11・12 (Fig.29, PL. 8)**

SK11はカクランに切られ、SC10を切る。短軸の壁が形状、長さとも差異があつて不整な長方形を呈す。深さは20~30cm前後で、壁は斜めに立ち上がる。同様の形状を呈するSK12は、SK22に切られる。SK11に比べSK12が僅かに長さ・幅ともに大きく、遺物の出土をみない。

**SK13 (Fig.32)**

SC 6に切られ、SK18を切つて検出、やや寸づまりの不整長方形を呈す。壁は、深さ50cm前後を遺す。壁は東西方向が急な斜めに、北側のみが直に近く立ち上っている。遺物は出土していない。

**SK14 (Fig.32, PL. 6)**

SC10・16およびSK26を切つて、カクランに切られている。北・東・南壁を残すだけで、深さも10~30cmとなつて、やや直に立ち上つたり、斜めと一定していない。壁は東・北側はやや直線的だが南壁側が歪つである。床面は平坦。遺物は埋土からの出土で、小片しかない。

**坏 (Fig.33-135, PL.17)**

内外の色調が橙色(5YR 6/6)を呈し、胎土に1mm前後の砂粒と赤褐色粒・ウンモを少量含んで、焼成は普通。調整はローリングのため不明だが、外面には黒色処理がウッスラと残っている。

**蓋 (Fig.33-136, PL.17)**

1mm程度の砂粒を少量含んだ胎土で、焼成は普通。内外面の色調は、灰色(7.5Y6/1)をなす。調整は、内外の口縁部付近から体部までがヨコナデを天井外面はケズリ、また天井内面にはナデが施されている。

**SK15 (PL. 7)**

SK16・SC 7・11およびカクランに切られて検出。北壁と西壁の一部を残すだけで詳細は不明。遺存部分の壁は直に近く立ち上つて、深さ10~20cm程度である。遺物は埋土からのみ出土。

**SK16 (Fig.32, PL. 7)**

カクランに切られ、SK15を切る。形状は隅丸方形を呈すと考えられる。壁は遺存部で20cm前後の深さを測り、

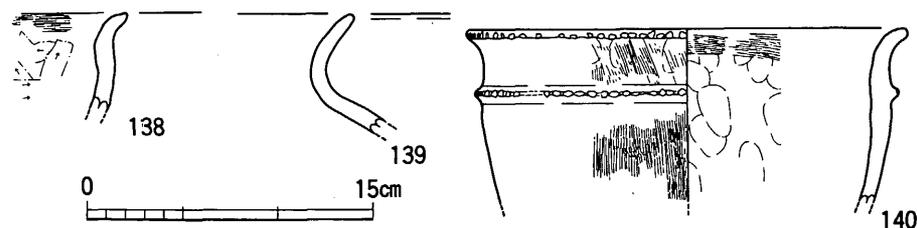


Fig. 34 SK15・17・19出土遺物実測図 (S1/4)

斜めに立ち上った壁をなす。遺物は細片ばかりが埋土中から出土した。

#### SK17 (Fig.32, PL.7)

遺構集中区で検出。SC6に切られ、SK13・18・SC11を切っている。北壁は長さ2.8m、東壁1.7mを測る。西・南壁は対面する壁より僅かに長いと思われ、さらに外に丸みをもって張り出す。形状は隅丸長方形を呈すと推測される。壁の深さは15～25cmで、やや斜め方向に立ち上る。

#### 鉢 (Fig.34-138, PL.18)

0.3～2mmの砂粒とウンモを含んだ胎土で、焼成は普通である。外面の色調は、にぶい赤褐色(2.5YR 5/4)、内面は赤灰色(2.5YR 4/1)を呈す。内面胴部の調整はケズリ後ナデを施し、外面口縁部はヨコナデで、胴部はナデにて仕上げ。口縁端部付近はハケメ後ナデが施されている。

#### SK18 (Fig.32)

SK13・17に切られ、SC14を切って検出。遺存する壁は、斜めと緩やかな斜めに立ち上って同一でない。深さも10～25cm程を測る。推定すると南北間の長さ2.5m前後、東西間2.2mとなってやや寸づまりの隅丸長方形を想定される。

#### 坏 (Fig.33-137, PL.17)

復元口径13cm、器高4.75cmを測る須恵器模倣の蓋。少量の微砂粒を含んだ胎土で、焼成は普通。内外の色調は褐色(7.5YR 4/6)を呈す。調整は内外面ともにミガキで、黒色処理もされている。

#### SK19 (Fig.32, PL.7)

カクランに切られ、SK20・25を切る。南壁の一部と西・北壁を残す。西壁側のみ、やや直線的だがコーナー部は隅丸となり、南北の壁は丸みをもって東壁へと続く。壁は緩やかに立ち上って、深さ30cm前後を測る。床面は平坦でなく、やや曲線を描く。

#### 甕 (Fig.34-140, PL.18)

復元口径23.2cm、残存高9.3cmを測る。胎土には0.5～2mmの砂粒・ウンモを含んでいて、焼成は普通である。口縁端部と体部界に刻み目を持ち、内外の色調、浅黄橙色(10YR 8/4)を呈す。内面体部はナデ仕上げだが指頭痕を残し、口縁部まではハケメ後ヨコナデを施す。外面はハケメで調整しているが、口縁部付近にウッスラと指頭痕を残している。

#### SK20

SK19とカクランに切られて検出。北東コーナー付近しか遺存せず、詳細は不明である。

#### SK21 (Fig.32)

カクランに遺構の1/3程を切られ、SK22を切る。西側と北・南側の一部の壁を残す。壁は緩やかに立ち上って、深さ10～15cmを測る。西・北壁は直進するが、南壁が丸みをもつ。

#### SK22 (Fig.32)

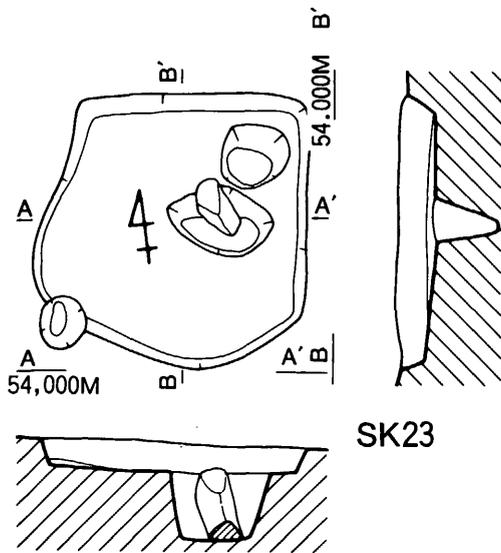
SK21に北東のコーナー部を、SK23に北西コーナー部を切られる。壁の遺存は10～15cmの深さ。床面は平坦となる。形状は不整形を呈すと思われる。遺物は細片ばかりで図示しえなかった。

#### SK23 (Fig.35)

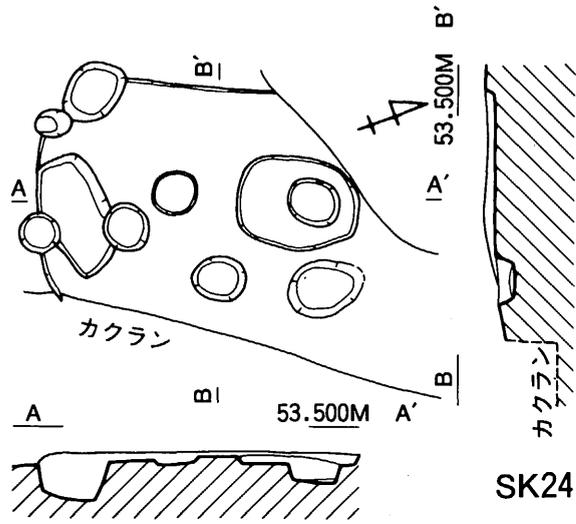
SK22・27・29を切る。北・東壁は直線的に延びるが、南および西壁は丸い不整形を呈す。壁は、深さ20cm前後、立ち上りは緩やかである。床面の柱穴は埋土の状況から土坑に伴うものとは考え難い。

#### 壺 (Fig.36-141, PL.18)

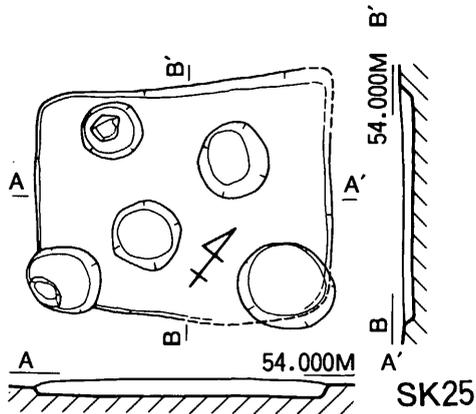
復元口径14.6cm、残存高5.2cmを測り、内外の色調、灰色(N 4/ )を呈す。胎土には多量の砂



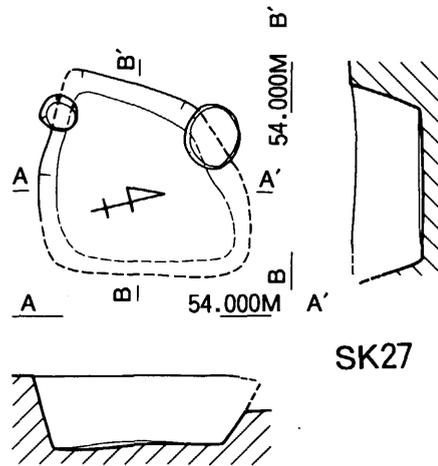
SK23



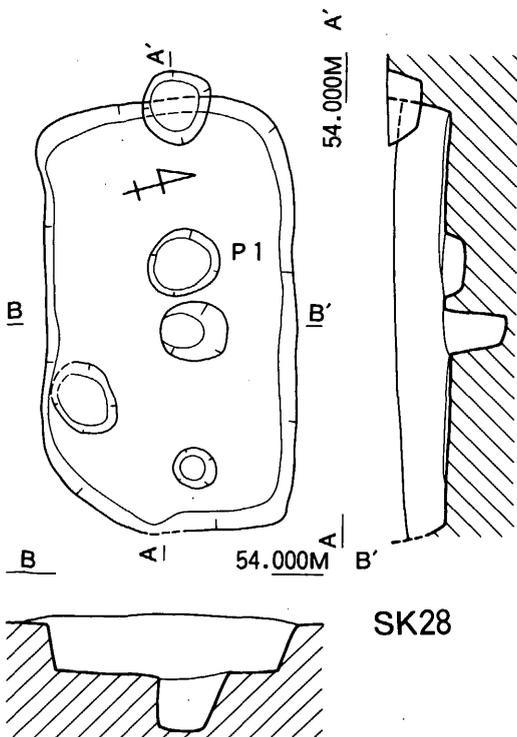
SK24



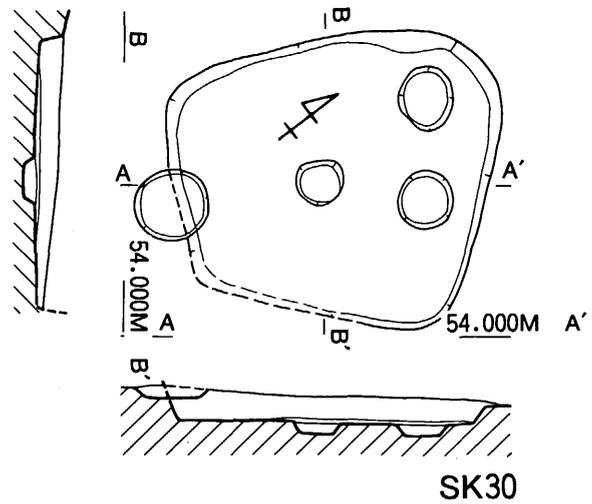
SK25



SK27



SK28



SK30



Fig. 35 SK23~25・27・28・30実測図 (S1/60)

粒が含まれ、焼成は普通である。内外面の調整はヨコナデ仕上げで、外面に自然釉が付着する。

**SK24 (Fig.35)**

カクランとSC17に切られる。壁の遺存も深さ5cm程度と残りも悪いため、詳細は不明。

**SK25 (Fig.35, PL. 8)**

SK19とSC12に切られる。遺構は削平されているため壁も残りが悪く、深さ10cm前後である。長軸2.4m、短軸1.8mの隅丸長方形を呈すと考えられる。

**SK26**

SC10・15・SK14・28に切られて検出。詳細は不明。

**SK27 (Fig.35)**

遺構の大半がSK23に切られて、壁も西・南壁の一部を残すだけである。壁はやや斜めに立ち上り、深さ60cmを測る。不整形を呈すると考えておきたい。

**SK28 (Fig.35, PL. 8)**

SC15とSK26を切る。隅丸長方形の土坑で長軸3.4m、短軸2mを測る。壁の立ち上りは直に近く、40cmの深さである。床面の柱穴は検出時の観察でも埋土に差異はなく、明確な新旧関係を捉えることはできなかった。しかしP1からFig.36-142が出土していることから、新しい時期の柱穴を確認できないまま底面まで掘り下げた可能性は否定できない。

**甕 (Fig.36-143, PL.18)**

胎土に1~2mmの砂粒と赤褐色粒を含み、焼成は普通。外面の色調、橙色(2.5YR 6/8)と浅黄橙色(10YR 8/4)、内面は浅黄橙色(10YR 8/4)を呈す。復元底径6.1cm、残存高6.05cm、内面はナデが施されるが、外面はローリングのため不明瞭となっている。

**壺 (Fig.36-144, PL.18)**

底径9.3cm、残存高3.2cmを測り、内外ともに色調は橙色(7.5YR 7/6)を呈す。焼成は普通で、胎土に1~5mmの砂粒を多く含んでいる。調整はナデが施されるが、内面は摩耗のためやや不明瞭。

**SK29**

遺構の大半は、SK23に切られる。北壁側の一部を残すだけで詳細は不明。遺存部の壁は緩やかに立ち上り、深さ10cm前後を測る。

**SK30 (Fig.35)**

遺構集中区より、北側でSD9に切られて検出された。西・北壁と北東コーナー部を残す。各コーナー部は丸みをもつ。遺存の状況から不整形隅丸方形とを考えておきたい。壁は削平されているため20cm前後の深さしかなく、斜めに立ち上りを見せる。床面は凸凹もなく平坦である。

**壺 (Fig.36-145)**

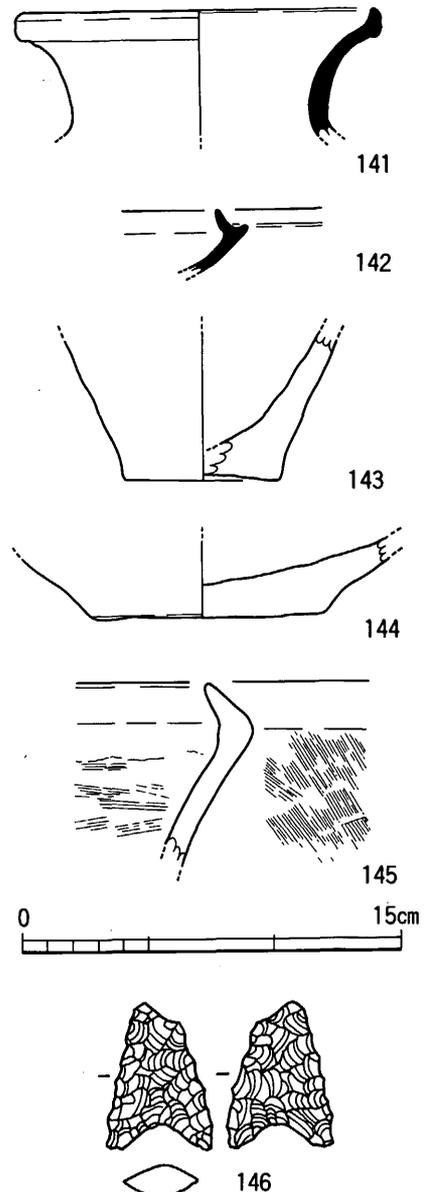


Fig. 36 SK23・28・30出土遺物実測図(S1/3・2/3)

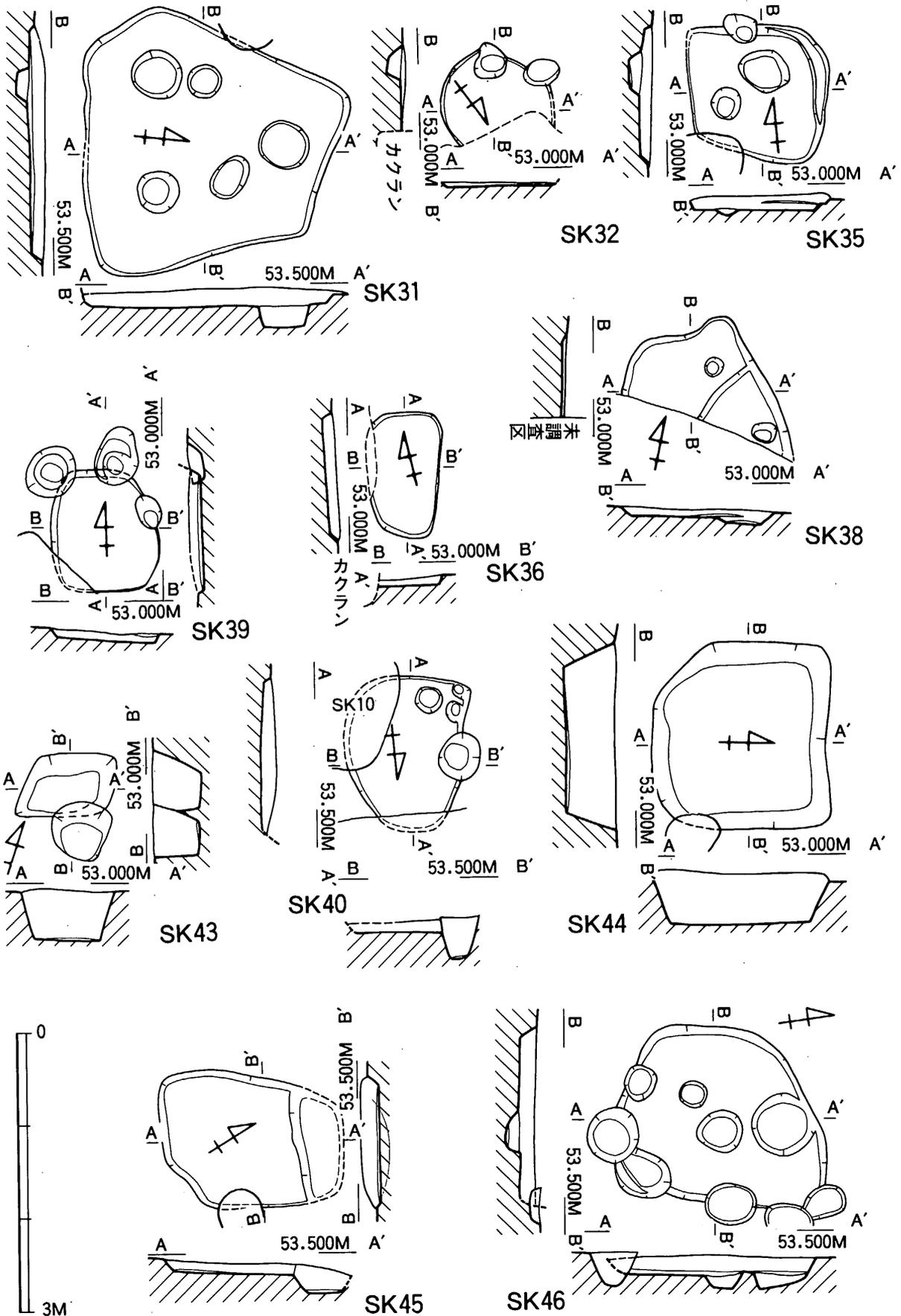


Fig. 37 SK31・32・35・36・38~40・43~46実測図 (S1/60)

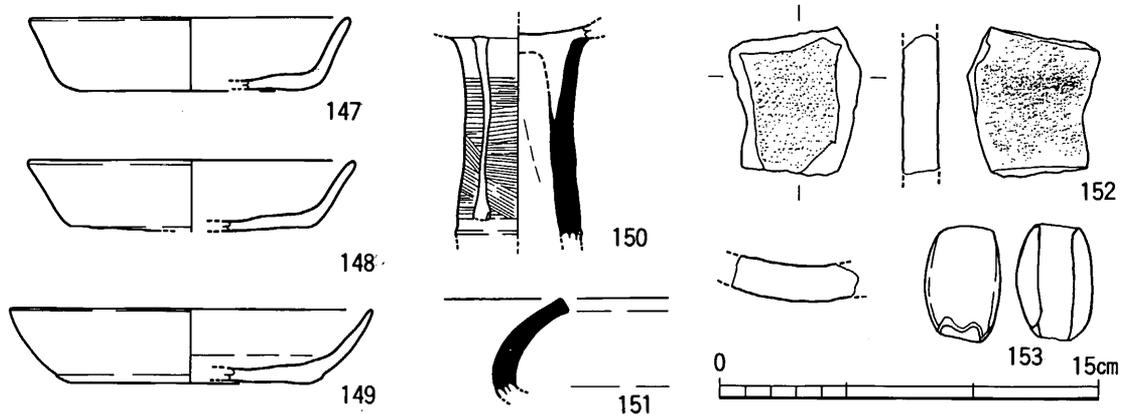


Fig. 38 SK35・37・38出土遺物実測図 (S1/3)

内外の色調が、にぶい黄橙色 (10YR 6/3) をなし、胎土に1mm前後の砂粒・ウンモを含む袋状口縁の破片。焼成は普通で、頸部の外面はハケメ、内面はハケメ後ナデを施す。口縁部は内外面ヨコナデ調整で仕上げている。また内面には、粘土接合痕もウッスラ確認できる。

**SK31 (Fig.37)**

SK30に隣接して検出、やはりSD9に切られる。北壁の長さ1.6m, 西壁3m前後, 南壁推定長2.3m, 東壁長2.2mとなり、台形状を呈す。壁は削平のため深さ5~10cm前後である。

**SK32 (Fig.37)**

SD28とカクランによって遺構の北側が切られる。遺構の残りは悪く、壁の深さ5cm程度しかない。遺存部から推測すると、径1.2m前後の不整円と考えられる。床面は平坦をなす。

**SK33**

SD14に切られ、SK34と40を切る。遺構の東側部分は削平により明確に捉えることができなかった。この付近は試掘からの所見によれば、整地層が堆積していたところで遺構は整地層に切り込まれていたと思われる。

**SK34**

SK41とSD14に切られて検出された。北壁と西壁の一部を残すのみ。SK33同様、削平のため遺存状況は良くない。壁の深さも10cm前後である。壁の遺存状況から住居跡とも考えられたが、SD14より南でも明確になしえなかった。

**SK35 (Fig.37)**

SK36に切られ、SK44を切る。北壁長1.3m, 東壁長1.3m, 西壁長1.1mを測る。形状は不整隅丸方形を呈す。北・西・南側の壁は直に近い。深さは10~15cmを測る。北東コーナー部から東壁は段がつく。段は平坦で壁は直に近い。

**坏 (Fig.38-147・148, PL.18)**

147は復元口径12.8cm, 底径10.3cm, 器高2.9cmを測り、色調は内外面ともに浅黄橙色 (7.5YR 8/4) をなす。0.5~1mmの砂粒・赤褐色粒・ウンモを含んだ胎土で、焼成は普通である。調整は摩耗のため不明。復元口径13cm, 底径9.4cm, 器高2.85cmの148は、外面にぶい橙色 (7.5YR 6/4)、内面にぶい橙色 (5YR 7/4) の色調を呈する。胎土には砂粒・赤

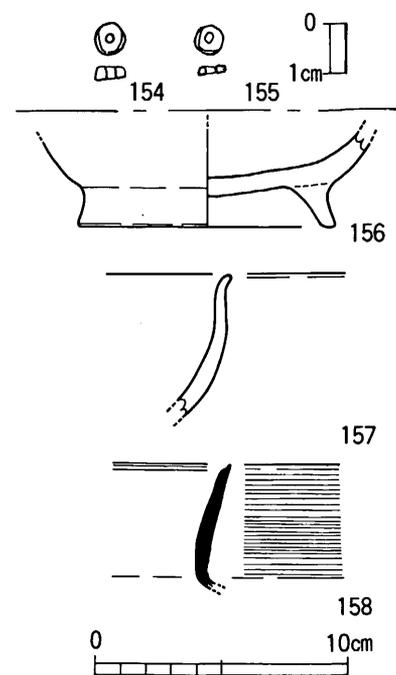


Fig. 39 SK39・41・45・46出土遺物実測図 (S1/3・2/3)

褐色粒を含み、焼成は普通である。調整は内面ナデ、底面をのぞいてヨコナデで仕上げる。

**SK36 (Fig.37)**

カクランに切られ、SK35・44を切る。北壁長0.7m、南壁長0.6m、長軸1.3mを測る。コーナー部は丸く、隅丸長方形を呈す。壁の深さ10cm前後で斜めに立ち上っている。床面は平坦。

**SK37**

SK38に隣接し、遺構の大半は南側の未調査区へ続く。北壁長1.8mを測り、深さ5cm前後と残りは悪い。遺物は土坑内の柱穴からの出土である。

**坏 (Fig.38-149, PL.18)**

復元口径14.5cm、器高3cm、底径9.4cmを測る。内外ともににぶい橙色(7.5YR7/3)・灰白色(10YR8/2)の色調を呈する。1mm程の砂粒・ウンモを含んだ胎土で、焼成は普通。器表は摩耗のため調整は不明瞭。内面はヨコナデ、内底面はナデ仕上げ。

**高坏 (Fig.38-150, PL.18)**

脚の上半部のみ残存。内外面の色調は、暗灰色(N3/)を呈す。微砂粒を少量含んだ胎土で、焼成は普通。内面の調整はナデによるが、シボリ痕を残す。外面は摩耗のため不明瞭となっている。

**SK38**

SK37と同様に遺構の大半は南側の未調査区へと続く。壁は、深さ5~10cm程度で、緩やかな部分と、斜めに立ち上るものがある。床面は中央付近から東側が一段下がる。2つの土坑が重複した可能性もあるが、検出時には明確にならなかった。床面は僅かな凸凹があるものの、ほぼ平坦をなす。遺物は下段の柱穴から出土したもの。

**瓦 (Fig.38-152, PL.18)**

内外面、灰白色(2.5Y7/1)の色調を呈する平瓦の破片である。胎土には0.3~2mm程の砂粒を含んで、焼成は普通。凹面には布目痕、凸面にはナデ調整がある。

**SK39 (Fig.37)**

SK38に切られて検出。やや寸づまりの隅丸長方形を呈す。壁は遣りが悪く、10cm前後の深さしかな

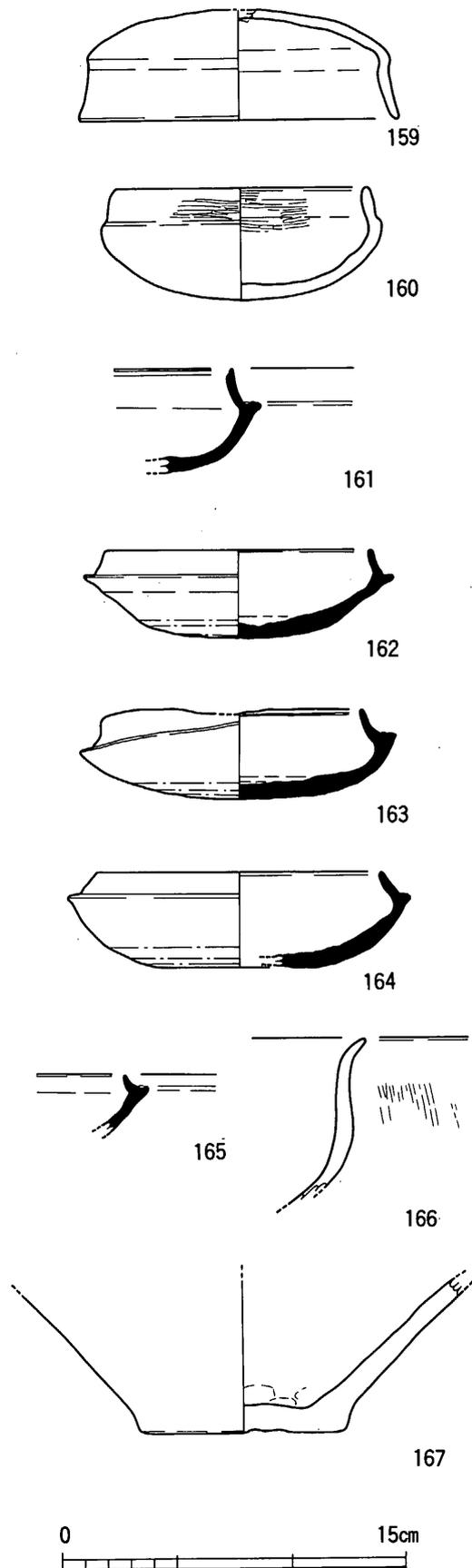


Fig.40 SK44出土遺物実測図 (S1/3)

い。壁は斜めに立ち上り、床面は平坦をなす。

**碗 (Fig.39-156, PL.18)**

著しいローリングを受けた高台付近の破片。外面橙色 (7.5YR 7/6)、内面浅黄橙色 (10YR 7/6) の色調を呈する。0.5~2mmの砂粒・赤褐色粒・ウンモを含んだ胎土で、焼成は普通。

**SK44 (Fig.37)**

SK35・36に切られる。東西長1.8m, 南北長1.8m前後で、北壁・東壁は直線的に延び、コーナーは丸みをもつ。西南コーナー部は、長めで直線的に曲がる。このため全体の形状を歪つにしている。壁の遺りもよく、50~60cmの深さで、斜めに立ちあがる。床面は平坦となる。

**蓋 (Fig.40-159, PL.19)**

黒色処理のされた須恵器模倣の蓋。復元口径14cm, 器高4.9cmを測る。焼成は普通で、胎土に微砂粒・ウンモ・赤褐色粒を少量含む。内外ともに灰白色 (7.5YR 8/2) とにぶい橙色 (7.5YR 7/4) を呈す。外天井部はケズリ後ミガキ、内天井部はナデ後ミガキを、内外の口縁部の調整は摩耗のため不明となっている。

**坏 (Fig.40-160~165, PL.19)**

須恵器模倣の坏である160は、内外の色調は橙色 (5 YR 7/8) をなす。1mm程の砂粒・赤褐色粒を含んだ胎土で焼成は普通である。復元口径10.9cm, 器高5cmで、外面の調整は、摩耗のため不明瞭。内面体部はナデ後ミガキ、口縁部内外は、ヨコナデ後ミガキが施されている。161は、内外ともに灰色 (N 6/ ) で、焼成がやや不良。胎土には、1mm程の砂粒を少量含んでいる。内体部から口縁外部まではヨコナデ、外底面にはケズリが施される。体部に自然釉が付着している。復元口径11.8cm, 器高3.9cmを測る162は、焼成は普通。胎土には0.5~1.5mmの砂粒を含んでいる。ロクロ回転右方向、内部から外体部まではヨコナデで仕上げ、外底面はヘラケズリで調整している。また内底面には当て具痕がのこる。歪つな163は、口径11.3cm, 器高4cm, 受部径13.9cmを測る。色調は内外面、灰色 (N 4/ ) を呈し、普通の焼成。調整は、外底面ヘラケズリ、内底面ヨコナデ後ナデで他はヨコナデを施している。口縁端部はヘラ切りで整えている。164は、復元口径12.6cm, 受部径15cm, 器高4.2cmを測り、内面灰赤色 (2.5YR 6/2)、外面灰赤色 (2.5YR 6/2) と灰白色 (7.5YR 7/1) の色調を呈す。調整は外底面がヘラケズリ、他はヨコナデが施される。また内底面には当て具痕を残す。胎土は1mm程の砂粒を少量含んでいて、焼成は普通である。165、口縁部から体部上位の破片で、内外ともに灰色 (N 4/ ) の色調を呈し、焼成は普通。胎土には1mm前後の砂粒が含まれる。器面の調整は、残存部すべてにヨコナデを施している。

**鉢 (Fig.40-166, PL.19)**

外面、橙色 (5 YR 6/8・7/6)、内面、浅黄橙色 (7.5YR 8/6) の色調をなし、胎土には、僅かな微砂粒及び赤褐色を含んで、焼成は普通である。内面の調整は不明。外面の頸部はハケメ後ナデ仕上げ。

**壺 (Fig.40-167, PL.19)**

底部付近の破片。摩耗が著しく調整不明。内外の色調は、にぶい黄橙色 (10YR 7/4) を呈す。

**SK49**

SD28に切られる。東・南壁を遺し、深さ10cm前後で緩やかに立ち上がる。床面は平坦をなす。

**坏 (Fig.42-169, PL.19)**

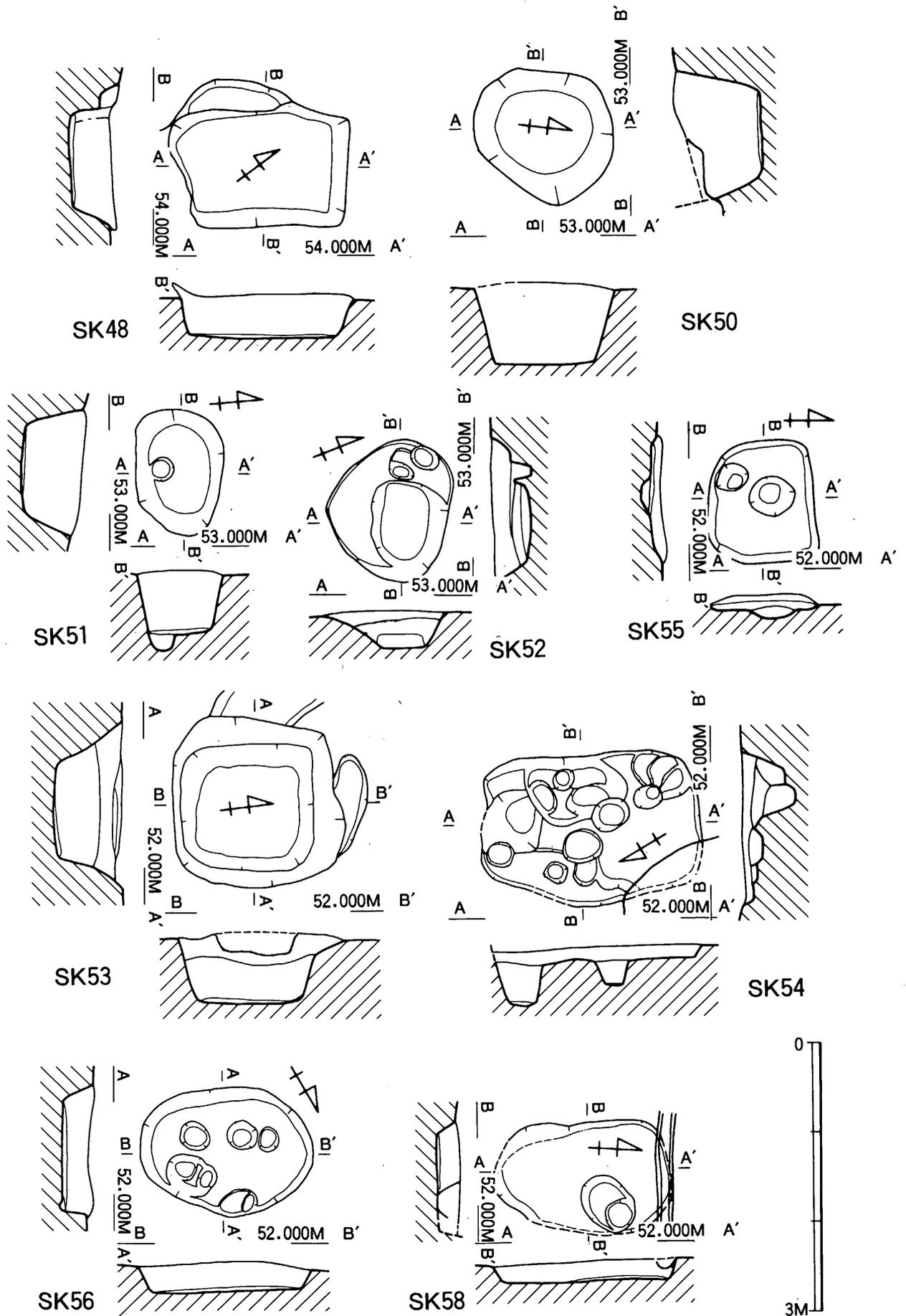


Fig. 41 SK48・50~56・58実測図 (S1/60)

外面灰色 (N 5 / ) と灰色 (N 4 / )、内面灰色 (N 5 / ) の色調をなす。僅かな微砂粒を含む胎土で焼成普通。復元口径12.1cm, 残存高3.2cmを測り、調整は残存部すべてがヨコナデである。

**SK50 (Fig. 41)**

SC26とSD30に切られる。不整円を呈し、壁は深さ90cm前後を測り、斜めに立ち上がる。

**坏 (Fig.42-171, PL.19)**

171は、内外の色調灰色 (N 4 / ) を呈し、胎土には0.5~3mm程の砂粒を含み、焼成は普通。調整はヨコナデがなされる。外面には自然釉が付着している。

**高坏 (Fig.42-172・173, PL.19)**

172は、色調内外ともに灰色 (N 5 / ) を呈す。胎土は1mm程の砂粒を含んで、焼成は普通。体部にはカキメ後ナデ調整、他はヨコナデで仕上げ。内底面に当て具痕を残す。173の色調は、外面灰色 (N 5 / )、内面灰色 (N 6 / ) をなす。0.5mm程の砂粒を含んだ胎土で、普通の焼成。

**SK54 (Fig.41)**

SK53に西コーナーを切られ、さらに床面も多くの柱穴に切られる。遺存の良い所で、壁は深さ10~15cmを測り、直に近く立ち上る。床面も部分的には凸凹があるが、平坦をなす部分もある。

**蓋 (Fig.42-175)**

著しい摩耗のため、内外の調整は不明瞭。内外ともに橙色 (5 YR 6 / 6) の色調を呈し、胎土には微砂粒・ウンモ・赤褐色粒を含み、焼成は普通である。残存高1.45cmを測り、天井の低いものである。

**SK56 (Fig.41, PL. 8)**

SD44を切り、長軸1.9m, 短軸1.5mを測る楕円形を呈す。壁は深さ20~30cmで、斜めに立ち上がる。床面は平坦をなす。

**坏 (Fig.42-170)**

残存高3.4cm、内外の色調は暗灰色 (N 3 / ) を呈す。調整は外底面ケズリ、他はヨコナデ。

**SK58 (Fig.41)**

SD42・44に切られる。北・西壁の一部を遺すのみ。長軸2m, 短軸1.2mの不整隅丸長方形と考えられる。床面は僅かに凸凹があるが、ほぼ平坦である。床面には柱穴は検出されなかった。

**蓋 (Fig.42-176・177, PL.19)**

176は器壁がうすく、シャープ。色調は両面ともに灰色 (N 4 / ) を呈す。焼成の悪い177は胎土に微砂粒を少量含む。調整は残存部すべてヨコナデである。器壁はやや厚めとなる。

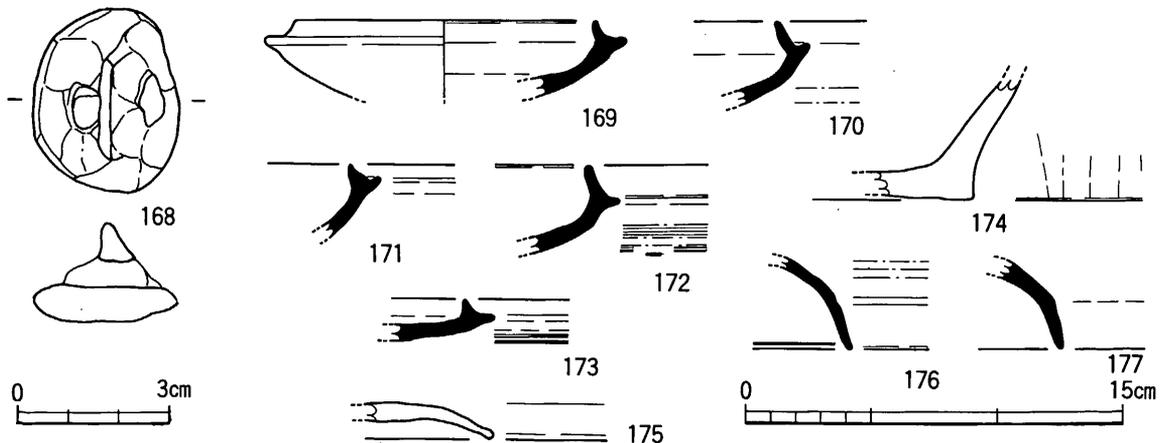


Fig. 42 SK49・50・53・54・56・58出土遺物実測図 (S1/3・2/3)

SC 一 覧 表

号	形 状	大きさ(m)			炉・ カマド	主柱穴数	面 積	備 考
		長	幅	深				
1	方 形	2.5	2.5	0.23		4	6.25+ $\alpha$	
2	不 整 方 形	3.3+ $\alpha$	3.3	0.14		4	10.89+ $\alpha$	トレンチに切られる
3	隅 丸 方 形	5.8	4.3	0.27	西	4	24.94+ $\alpha$	
4	不 整 方 形	5	2.5+ $\alpha$	0.39		4 ?	6.25+ $\alpha$	カクラン・未調査区に続く
5	方 形 or 長 方 形	2.3	1.8+ $\alpha$	0.21		2 ?	4.14+ $\alpha$	カクラン・未調査区に続く
6	略 方 形 ?	4	4	0.28		4	16.0	カクラン・SK15に切られる
7	不 整 方 形	4.5	3+ $\alpha$	0.18	北	4 ?	13.5+ $\alpha$	カマド有. SC 4・SC 5に切られる. 未調査区に続く
8	方 形	1.8	1.7	0.21		1	3.06	カクラン・P124に切られる
9	不 整 方 形			0.45				カクランに切られる. 未調査区に続く
10	方 形	3.32	3.28+ $\alpha$	0.3		4	10.89+ $\alpha$	SC 8・SK11・P153・P115・P71・P116に切られる
11	不 整 方 形	3.6	1.55+ $\alpha$	0.10		2	5.58+ $\alpha$	カクラン・P17・SC 6・SC15に切られる
12	不 整 方 形	3.1	2.3+ $\alpha$	0.17		4	7.13+ $\alpha$	カクラン・SX 7に切られる
13	略 方 形 ?	3.1	1.4+ $\alpha$	0.14		2 ?	4.34+ $\alpha$	SC12・P129. カクランに切られる
14	略 長 方 形	4	3.1	0.30		4	12.4	SC11・SK17・SK18・カクラン・P16に切られる
15	不 整 方 形	3.5 3.5	1.0 0.6	0.48		2	3.5 2.1	SK28・SK26・SC10・P132・P178に切られる
16	略 方 形 ?	2.3	2.3	0.39		1	5.29	SC14・SK14に切られる
17	不 整 方 形	0.6+ $\alpha$	1.0+ $\alpha$	0.73		?	0.6+ $\alpha$	SC18・ST 1に切られる
18	不 整 方 形	2.3	0.9+ $\alpha$	0.75		?	2.07+ $\alpha$	カクランに切られる
19	不 整 方 形	2.2 3.1	2.9 2.7	0.75		?	6.38 8.37	SC18・SC17に切られる. 未調査区に続く
20	不 整 方 形	2.5 2.5	2.4 2.1	0.46		2	6.0 5.25+ $\alpha$	SC19・ST 2・P202・P213に切られる
21	略 長 方 形	3.6	3.2	0.19		2	11.52	
22	長 方 形 or 方 形	3.2 3.2	3.2+ $\alpha$ 1.0+ $\alpha$	0.35		4	10.24+ $\alpha$ 3.2+ $\alpha$	カクラン・P243・P228・P218に切られる
23	略 方 形	2.3	2.2	0.13		2	5.06	P481・P307・P230・P229・P232・カクランに切られる
24	不 整 長 方 形	2.4 1.3	2.3	0.17		2	4.255+ $\alpha$	未調査区に続く
25	不 整 方 形	2.48	1.28+ $\alpha$	0.24		?	3.17+ $\alpha$	SD25に切られる. 未調査区に続く
26	不 整 方 形	3.0+ $\alpha$	3.4+ $\alpha$	0.14		4 ?	10.2+ $\alpha$	SD30・SC25に切られる
27	不 整 方 形	2	0.5+ $\alpha$	0.04		1 ?	1+ $\alpha$	未調査区に続く
28	隅 丸 長 方 形	3.5	2.5	0.03		1	8.75	SD20に切られる
29	不 整 方 形	3.8	3.8	0.07	北東	4	14.44	カクラン・SD24・SK42に切られる
30	略 方 形	3.0+ $\alpha$ 2+ $\alpha$	3.4+ $\alpha$ 1+ $\alpha$	0.20		4	10.2+ $\alpha$ 2+ $\alpha$	SC26・SD30に切られる
31	長 方 形 or 正 方 形	1.8+ $\alpha$	0.8+ $\alpha$	0.32		1 ?	1.44+ $\alpha$	未調査区に続く
32	不 整 方 形	2.2	1.65	0.24		1 ?	3.63	未調査区に続く
33	不 整 方 形	2.5	3	0.12		2	7.5	SD44・P592に切られる
34	不 整 方 形	2.7+ $\alpha$	2.3	0.15		1 or 2	6.21+ $\alpha$	未調査区に続く
35	不 整 方 形	2.3 2.3+ $\alpha$	1.9+ $\alpha$ 2.6	0.24		4	4.37+ $\alpha$ 5.98+ $\alpha$	SD34・P464に切られる
36	方 形 or 長 方 形	4.2	3.2	0.20		4	13.44	SC31・SC32に切られる
37	不 整 方 形	4.8+ $\alpha$	4.1+ $\alpha$	0.12		4	19.68+ $\alpha$	SD24・カクランに切られる
38	不 整 方 形	2.7	1.1+ $\alpha$	0.13		2	2.97+ $\alpha$	SC36に切られる

S K 一 覧 表

号	形状	大きさ(m)			備 考	号	形状	大きさ(m)			備 考
		長	幅	深				長	幅	深	
1	隅丸方形	1.9+α	1.25	0.12	P22に切られる 未調査区に続く	30	隅丸方形	2.27+α	2.18+α	0.19	P222・P221・SD 9 に切られる
2	不整形	2.1+α	1.75+α	0.13	未調査区に続く P27に切られる	31	略 方 形	2.6+α	2.55	0.18	SD 9・P426に切 られる
3	不整形 or 長方形	1.4+α	1.35+α	0.12	SK 5に切られる	32	不整形	0.83+α	1.16	0.03	カクランに切ら れる
4	隅丸方形	2.26	2.25+α	0.23		33	隅丸方形			0.12	カクラン・P208・ P474・P475・P660に 切られる
5	略 方 形	1.15	1.27	0.26		34	不整形			0.10	SD14・P241に切 られる
6	楕 円 形			0.21	P50に切られる	35	不整形	1.47	1.48	0.08	SK36・P244に切 られる
7	隅丸長方形	3.5+α	1.5+α	0.37	SK 8・P51に切ら れる	36	隅丸長方形	1.35	0.65+α	0.04	カクランに切ら れる
8	隅丸長方形	1.78	2.4+α	0.65	カクラン・SX 6 に切られる	37	不整形	1.6+α	0.42+α	0.03	未調査区に続く
9	不整形				SX 5に切られる	38	不整形	1.35+α	1.43+α	0.09	未調査区に続く
10	楕 円 形					39	隅丸方形	1.15+α	1.13+α	0.10	SK38・P251・P291 に切られる
11	不整形	0.58+α	2.05	0.25	カクランに切ら れる	40	不整形	1.48+α	0.7+α	0.10	SK 3・SK 9に切 られる
12	不整形	1.43+α	2.78	0.18	SK22・P77・P64に 切られる	41	不整形	1.13	2.78+α	0.19	SD14・P302・P306 ・P305に切られる
13	隅丸方形	0.93+α	1.5	0.38	SC 6・SK17に切 られる	42	不整形	2.6+α	4.2	0.07	SD24・SC29・カク ランに切られる
14	隅丸長方形	1.75+α	2.3+α	0.22	P116・カクラン に切られる	43	不整形	5.3+α	0.97	0.53	P101・P322に切 られる
15	不整形	2.6+α	2.6+α	0.08	SK16・カクラン に切られる	44	隅丸方形	1.62+α	1.94+α	0.53	SK35・SK36に切 られる
16	隅丸方形	0.95+α	1.03+α	0.26	カクランに切ら れる	45	不整形	1.37+α	1.38+α	0.11	SD26に切られる
17	隅丸長方形	1.83+α	3.52	0.15	SC 6に切られる	46	隅丸方形	1.9+α	1.68+α	0.16	P377・P319・P320 ・P381に切られる
18	不整形	1.8+α	1.53+α	0.38	SK13・SK17に切 られる	47	長 方 形			0.23	P374・P371・カク ランに切られる
19	楕 円 形	1.68+α	2.5+α	0.39	カクラン・P127・P128 ・P136に切られる	48	隅丸長方形	1.85+α	1.3+α	0.42	
20	不整形			0.29	カクラン・SK19 ・P128に切られる	49	不整形			0.73	SD28・P438・P439 に切られる
21	不整形	1.32	1.16+α	0.15	カクランに切ら れる	50	円 形	1.05+α	0.8+α	0.84	SD30に切られる
22	隅丸方形	1.8	1.25+α	0.08	P135・P136・SK21 ・SK23に切られる	51	隅丸長方形	0.95	1.41	0.67	
23	隅丸方形	2.15	2.1	0.26	P136・P177に切 られる	52	楕 円 形	1.27	1.6	0.37	
24	不整形	1.0+α	1.9+α	0.07	ST 1・P143・P148 ・P175に切られる	53	隅丸方形	1.8	1.9	0.71	
25	隅丸長方形	1.85+α	2.35	0.10	SK19・SC12に切 られる	54	隅丸長方形	1.73+α	1.68	0.15	SK53に切られる
26	不整形			0.38	SK28・SK14・SC10・ SC15に切られる	55	隅丸方形	1.15	1.37	0.13	
27	不整形	1.35+α	0.9+α	0.57	SK23・P153・P177 ・P75に切られる	56	楕 円 形	1.42	1.9	0.34	
28	隅丸長方形	3.5+α	2.0	0.45	P364・P354・P353 ・P203に切られる	57	不整形			0.10	未調査区に続く・ SK33・P526・P525・ P531に切られる
29	不整形			0.32	SK23に切られる	58	楕 円 形	1.8+α	0.65+α	0.17	SD42・44に切ら れる

### (3) 墓 (ST)

#### ST 1 (Fig.44)

SC17・24を切り、Pit150に切られる。主軸はN-4°-Eで、プランは、寸づまりの隅丸長方形を呈すと考えられる。長軸は1.2m前後、短軸は60~70cmの幅をもつ。壁は緩やかに立ち上り、深さ20~25cmとなる。床面は、僅かに中心付近が凹むものの、ほぼ平坦をなす。東壁側へ床面が僅かに下がっていくが、これは本来の地形に沿っていると思われる。遺構内の埋土は、淡黄色 (2.5Y 8/3) に暗赤褐色 (7.5R 3/2) が混じったもので、SC17・24の埋土とは明らかに差異が認められた。出土遺物は、床面からではなく埋土からのみである。

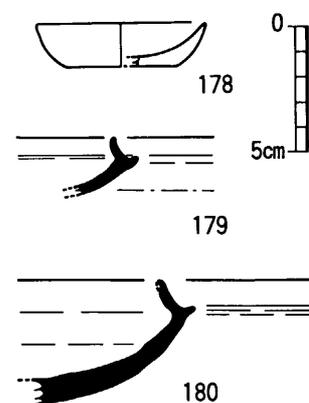


Fig. 43 ST 1・2 出土遺物実測図 (S1/3)

#### 小皿 (Fig.43-178, PL.19)

復元口径6.8cm, 底径4.3cm, 器高1.8cmを測る。胎土は微砂粒とウンモを含んでいて、焼成は普通である。色調は、内外面ともに褐灰色 (10YR 4/1) を呈す。調整は内面から外面体部までは、ヨコナデを施すが、部分的に摩耗して不明瞭な部分もある。底部は糸切り離し。

#### ST 2 (Fig.44)

SC20を切る。主軸はN-26°-Eで、プランは隅丸長方形を呈し、北側小口幅80cm, 南側小口幅80cm前後を測る。壁は直に近く立ち上がり、深さ50cmである。床面は平坦。遺構の埋土は暗赤褐色 (7.5R 3/2) 混じりの灰白色 (2.5Y 8/2) で、SC20の埋土とは異なっていた。木棺埋葬を想定して、長軸・短軸に土層観察用ベルトを設定したが、調査中の雨の際、崩壊してしまったため図面作成ができなかった。しかしメモの所見では、現況の壁の内側5cm前後に立ち上りを確認しているため木棺埋葬と考えておきたい。しかし埋土中からは釘は出土してない。遺物も床面直上は出土せず、僅かに浮いた状態のものだけだった。

#### 坏 (Fig.43-179・180, PL.19)

179は、器壁のうすい口縁から体部の破片。内外面ともに暗青灰色 (5BG 4/1) の色調を呈する。胎土は微砂粒を含んでいて、焼成は普通。調整は内面から外面体部まではヨコナデがなされ、外底面はケズリが施されている。口縁部にくらべ底部が肥厚する破片の180は、外面の色調、オリーブ灰 (5GY 5/1)、内面灰色 (N 6/ ) を呈していて、焼成は普通。胎土は、0.5~2mm程の砂粒を含んだものである。内底面の調整はナデ、内面体部から受部まではヨコナデが施されている。また受部から底面までに自然釉が付着しているため、調整が不明になっている。

#### ST 3 (Fig.44)

SC35の東側で検出されたST 3は、Pitに切られ東壁を失なう。ST 1・2にくらべ、プランは細長い隅丸長方形である。検出された場所はカクランも多く、宅地開発の際にかなり削平を受けていて、壁の残りもST 1・2より悪い。西側小口幅50cm、東側小口幅約38cmと東側が狭い。壁の残りも西壁側で10cmの深さである。上バの検出面も東側から西側へ僅かながら傾斜をみせる。これは元来の地山の傾斜に一致する。主軸は、N-9°-Wで、壁の立ち上りも緩やかであり、床面も僅かな凸凹があるものの、ほぼ平坦をなす。遺構内の埋土は、にぶい橙色 (7.5YR 7/3) 混りの灰白色 (2.5Y 8/2) で、Pitの埋土にぶい黄褐色 (10YR 5/3) とは異なる。遺物は削平により失われているためか細片しか出土していない。

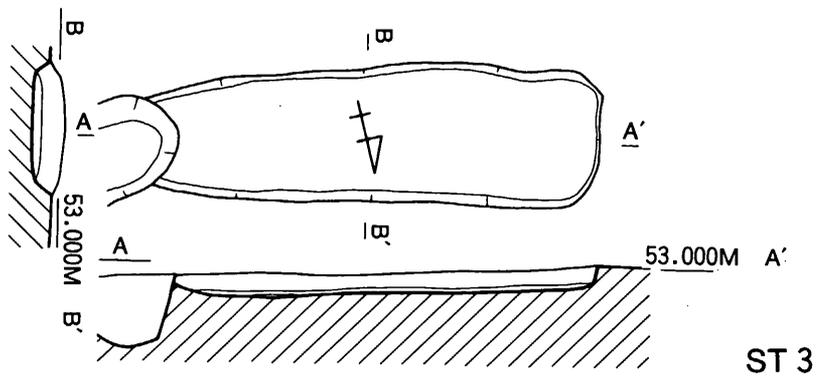
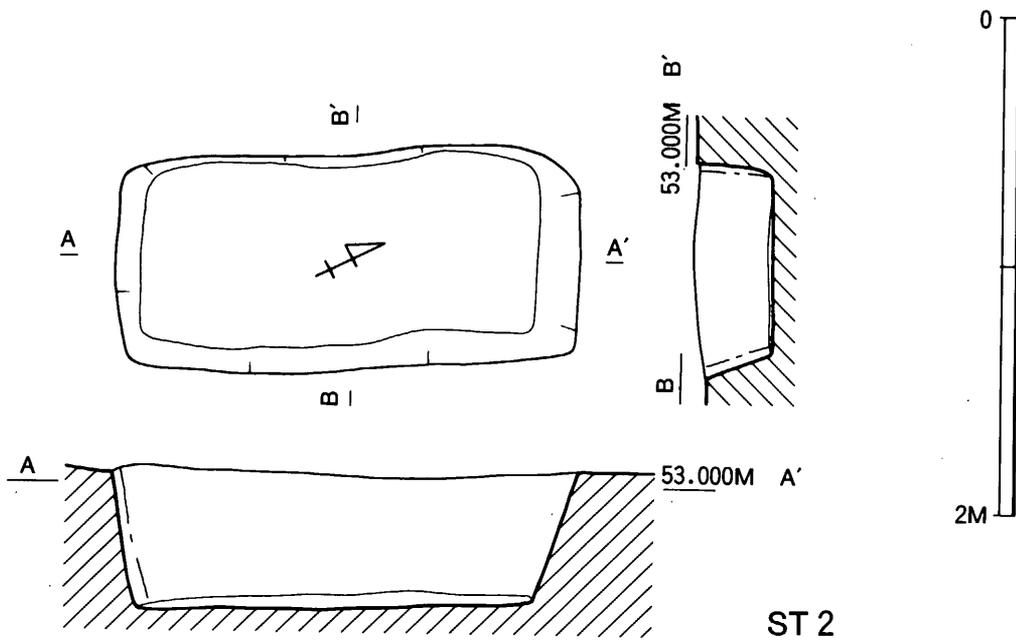
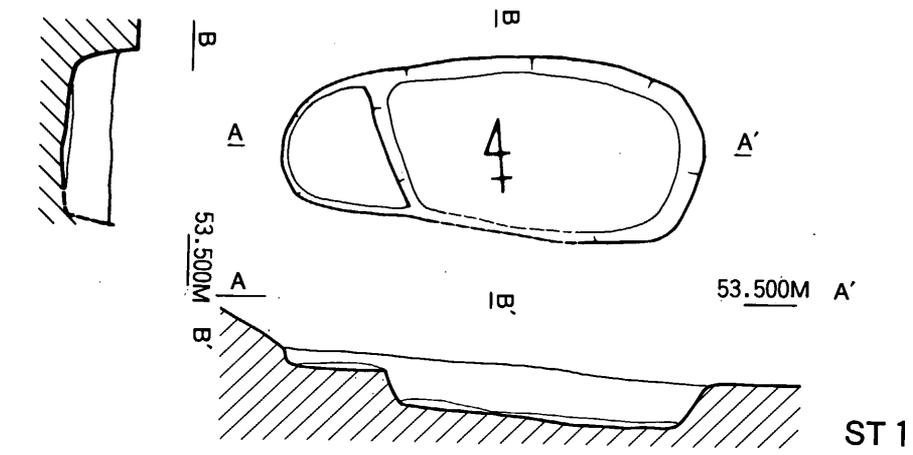


Fig. 44 ST 1 ~ 3 実測図 (S1/30)

#### (4) 性格不明遺構 (SX)

##### SX 4

調査区の北西部で検出。遺構がほとんど検出されない斜面にある。壁は北・西・南側に遺存して、西壁だけが残りがよく、深さ60cm前後を測る。床面直上には集石があるが、意図的に組み合わせたものでなく、廃棄したかのように雑然としている。遺物は石の間からの出土である。

##### 坏・高坏 (Fig.46-182・183, PL.20)

稚拙な作りの182は、色調内外ともに、にぶい黄橙色 (10YR 7/2) を呈す。外底面はヘラ切後ナデ、他はナデ・ヨコナデにて仕上げ。183は高坏の坏部の破片。内底面から体部まではヨコナデ後ナデ、外底面はケズリ、外体部はヨコナデ調整。胎土は微砂粒が含まれ、焼成は普通である。

##### SX 5

SK 9 と重複する。カクランに切られて新旧関係は不明。土坑が重複していた可能性もある。

##### 坏 (Fig.46-184・185, PL.20)

体部～底部の破片である184は、良好な焼成。内外ともに橙色 (7.5YR 7/6) の色調を呈す。185は器高4.35cmを測り、焼成良好。ともにミガキによる調整だが、一部摩耗のため不明瞭となる。

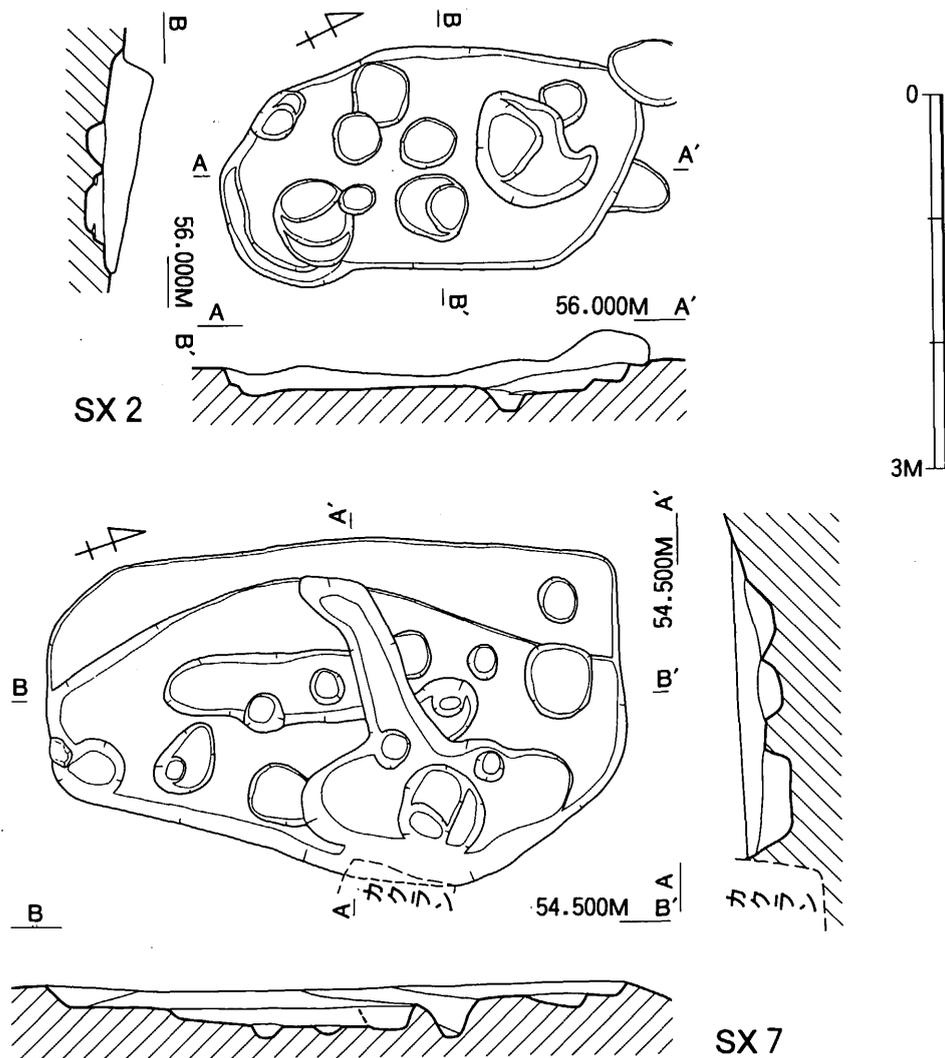


Fig. 45 SX 2・7 実測図 (S1/60)

**SX 6**

SX 9・5と重複する。新旧関係は不明。

**坏 (Fig.46-186, PL.20)**

内外ともに橙色 (5 YR 7/8) を呈し、焼成良好。外底面～体部まではケズリ後ナデ調整。口縁内外はヨコナデ後ナデ仕上げ。

**SX 7 (Fig. 45)**

SC12, SD 6・7を切る。床面が一定せず、土坑が重複している可能性もある。柱穴との埋土には差異はない。

**摺鉢 (Fig.46-191, PL.20)**

歪みのある口縁付近の破片。残存高10.8cmを測る。焼成は普通。内部はハケメ後ナデ、外面はススが附着して調整は不明瞭。

**SX 9**

SC29とSK42およびカクランに切られる。住居跡の可能性もあるが、遺存状況が良くないため性格不明遺構とした。壁の深さ5～7cmを測り、北壁しか残っていない。

**坏 (Fig.46-196, PL.20)**

著しい摩耗のため、調整は不明瞭。微砂粒を僅かに含む胎土で、焼成不良。残存高4.25cmを測る。

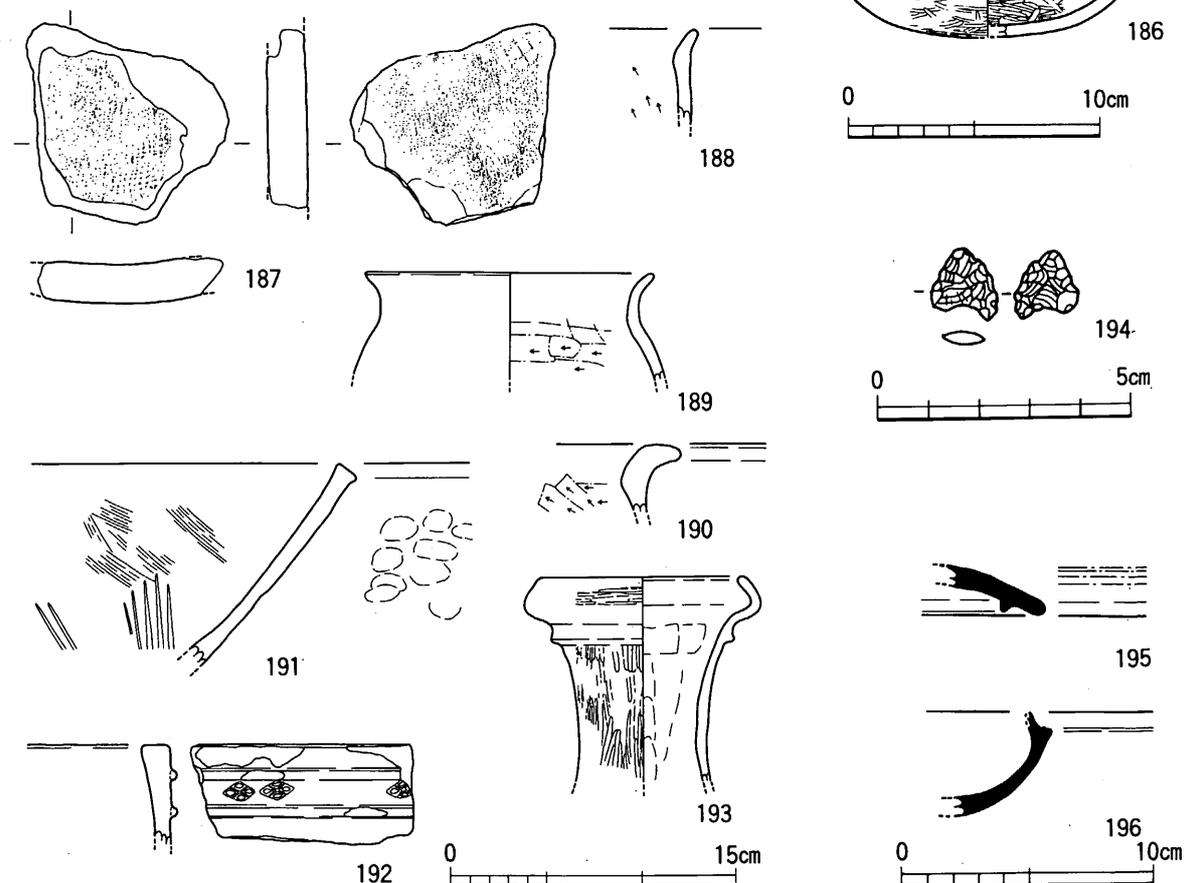


Fig. 46 SX 4～6・7・9・10出土遺物実測図 (S1/2・1/3・2/3・1/4)

## (5) 溝状遺構 (SD)

溝は全部で46条検出された。調査区の北側、削平の著しい所に多くあり、SD 6～10・25～27・32・33となる。これらの溝は併行するように南西から北東側へ向かい、調査区内ですべてが終息している。またSC24からSC35の付近には形状が土坑状を呈し、北北西から南東側へ向かうもの、SD22・24・34・35・40・41がある。これらの溝も調査区内で終息をみせる。遺構が集中する付近には、南西方向から北へ向かい途中東側へと曲がるSD11がある。同様に途中で曲がり方向を変えるものにSD14が該当する。調査区東側では、北西から東南方向に検出された溝群は、埋土の状況・検出時の所見からすると耕作時のものの可能性が高い。

### SD 8

幅1.1m前後で、壁は斜めに立ち上り、深さ40cm前後となり断面形状は逆台形をなす。床面は凸凹がある。

### 坏 (Fig.47-197, PL.20)

復元口径12.4cm, 器高4.05cmを測り、内外の色調灰色(10Y5/1)・灰白色(7.5Y8/1)を呈す。口縁内外はヨコナデ、内天井はヨコナデ後ナデ、天井部付近はケズリ後ナデの調整。

### SD11

SK28・SC20を切ってカクランに切られる。南西から約4.8m北へ向かって、ここで直角に曲がり東側へ延びる。壁は20cm前後の深さを測り、直に近い立ち上りをなす。床面も平坦であまりに機械的な溝の感じに受けとれるが、埋土の状況で確認はできなかった。また区画溝の可能性も考慮に入れて、周辺の検出を行なったが、対応する溝も検出できず現状では性格的なものも不明。遺物は出土してない。

### SD14

南西から北東へ向かい約8mのところ、緩やかに東側へ方向を変える。南西側は、未調査区へと延びる。東側は、カクラン付近で壁の幅も狭くなり、壁の立ち上りも低くなることから、カクランの途中で終息すると考え、SD28と同一溝としては扱わなかった。溝の深さは20cm前後で、断面浅いU字状をなし、床面は平坦である。

### 坏 (Fig.48-199・200, PL.20)

口縁付近の破片である199は、色調、内外面ともに灰色(N5/)をなし、微砂粒を含んだ胎土で、焼成は普通。調整は残存部すべてがヨコナデである。200は高台付近の破片。内外面灰色(N4/)の色調を呈す。復元高台径10cmを測り、胎土に1mm前後の砂粒を含んで、焼成は普通。調整は内外の体部と外底部・高台部はヨコナデ、内底部にはヨコナデ後ナデが施される。

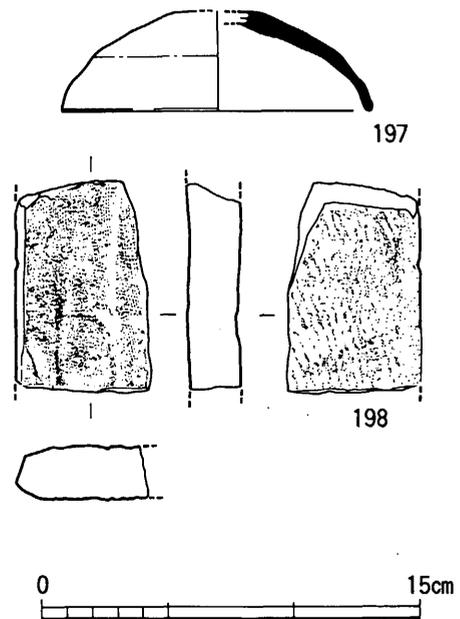


Fig. 47 SD 6・8 出土遺物実測図 (S1/3)

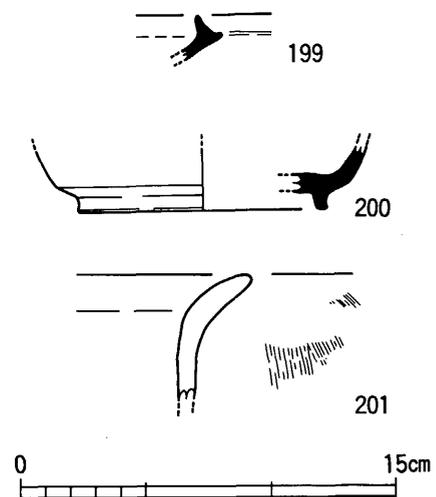


Fig. 48 SD14・18出土遺物実測図 (S1/3)

### SD18

Pit 275・322に切られ、土坑状となる。北西から南東へ向かう。壁は深さ10cm前後を測り、断面は浅いU字状を呈す。遺物は細片ばかりが埋土より出土。

### 甕 (Fig.48-201)

口縁付近の破片。色調は内外面ともに明赤褐色 (5 YR 5/6) を呈す。焼成は普通で、0.3~3mmの砂粒・ウンモ・赤褐色粒を含む胎土である。内面の胴部・口縁部は摩耗のため調整は不明瞭。外面口縁部はハケメ後ヨコナデ、胴部はハケメを施す。

### SD36

SC34を切って北西から南東方向へ走る。SD38と併行して走る。全長5.3m、幅40cm、深さ6~17cmを測り、浅いU字状の断面を呈す。

### 坏 (Fig.50-205, PL.21)

外面の色調、灰色 (N 5/ ) と暗灰色 (N 3/ )、内面の色調、灰色 (N 5/ ) を呈す。少量の微砂粒を含んだ胎土で焼成普通。遺存部の調整は、すべてヨコナデ仕上げ。

### SD41

SC35を切って北西から南東方向に向きSD22と並行して走る。溝の全長4m、幅50~80cm、深さ5cm前後と遺りは極めて悪い。平面プランは土坑状をなしてSC23の手前とカクランの手前で終息する。

### 小皿 (Fig.50-206, PL.21)

復元口径6.75cm、復元底径5.1cm、器高1.35cmを測る。内外面の色調は、明黄褐色 (10YR 7/6) を呈す。胎土には1mm程の砂粒・赤褐色粒を含んで、焼成は普通である。器壁の調整は、内面および外面にはヨコナデがなされ、底部は糸切りにより切り離しが行なわれている。

### SD42

調査区東側で検出された。SK53とPit 552・642に切られ、SK58を切って、未調査区へと延びる。北側から南東方向へ走り、ちょうどSK53付近で、僅かに東側へ弧を描いて未調査区へ続くと考えられる。北側部分もここで終息し、以北へと延びる可能性は少ない。断面の形状は浅いU字状をなす。深さも20~24cmを測る。これは削平のため本来の高さが失われているためである。区画的な性格をもつ可能性もあったが、調査区東側は極度の削平のため現況では不明。

### 高坏 (Fig.50-207)

復元口径16.3cm、残存高4.6cmを測る。色調は、外面暗灰色 (N 3/ ) と暗灰色 (N 5/ ) で、内面灰色 (N 4/ ) を呈す。胎土には、1mm程の砂粒が含まれ、焼成は普通である。ロクロ回転は右方向、調整は、内面体部から外面体部にはヨコナデ、内面底部はヨコナデ後ナデを施す。外面底部には、カキメがなされ、脚部接合付近には、ヨコナデがなされている。

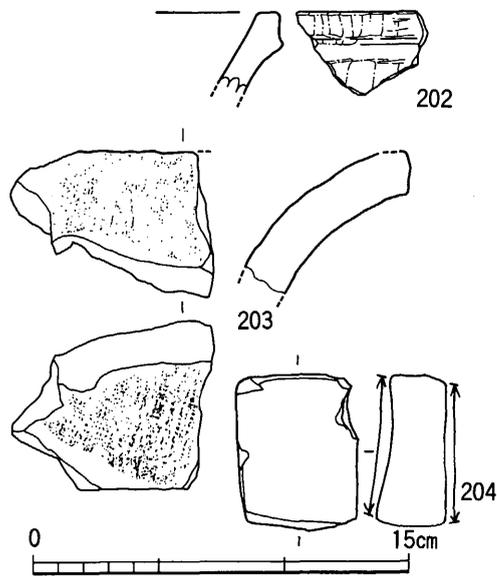


Fig. 49 SD21・29出土遺物実測図 (S1/3)

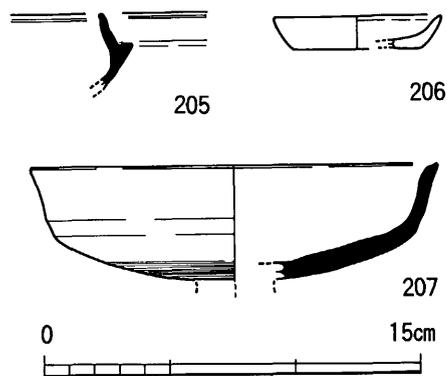


Fig. 50 SD36・41・42出土遺物実測図 (S1/3)

## (6) 柱穴 (Pit)

Pit は660検出。遺物は、ほとんどの Pit から出土するが総体的に時期決定できるものは少ない。また検出された Pit には掘方として、しっかりしたものも見受けられたが建物跡として、まとまりのあるものは検出できなかった。遺物の説明は変則的だが Fig. ごとにしていきたい。

### 坏 (Fig. 51-208~210, PL. 21)

208は器壁の非常にうすいもので内外の色調黄灰色 (2.5Y6/1) を呈す。胎土に微砂粒を僅かに含み、普通の焼成。調整は著しい摩耗で不明瞭。209、復元口径12.2cm, 底径8.3cm, 器高2.8cmを測る。内外の色調にぶい橙色 (5YR6/4) を呈し底面には板状圧痕を残す。いずれも Pit 3 出土。Pit 18出土の210は胎土に微砂粒を少量含み、焼成は普通。内外の色調暗緑灰色 (10G4/1) を呈し、調整はヨコナデと体部外面はケズリを施す。焼成が普通で胎土に微砂粒を含む214は46の出土。色調は内外ともに灰オリブ (5YR6/2) を呈す。調整は口縁部内外がヨコナデ、天井部内面がナデである。

### 瓦 (Fig. 51-212・213, PL. 21)

212は丸瓦の破片で色調は内外ともにオリブ灰 (2.5YR6/1) を呈す。1~7mmの砂粒と黒色の粒を含む胎土で、焼成は普通。表面はタタキ後ナデ、裏面には布目痕を残す。6の出土。43から出土した213は内外面の色調

は灰白色 (7.5Y8/1) で、胎土には1~2mmの砂粒を僅かに含む。タタキと布目痕を残す。

### 甕 (Fig. 51-211, PL. 21)

色調、明褐色 (7.5YR5/6) を内外ともに呈す。焼成は普通で胎土には1mmの砂粒・赤褐色粒を含む。

### 壺 (Fig. 51-215, PL. 21)

胎土に微砂粒とウンモを含み焼成は普通。色調は内外ともに、にぶい黄褐色 (10YR5/3) を呈す。調整は、すべてヨコナデ。211は20、215は48からの出土。Fig. 52・53に掲載の図は、Pit 56~59・63・65・79・85から出土のものである。

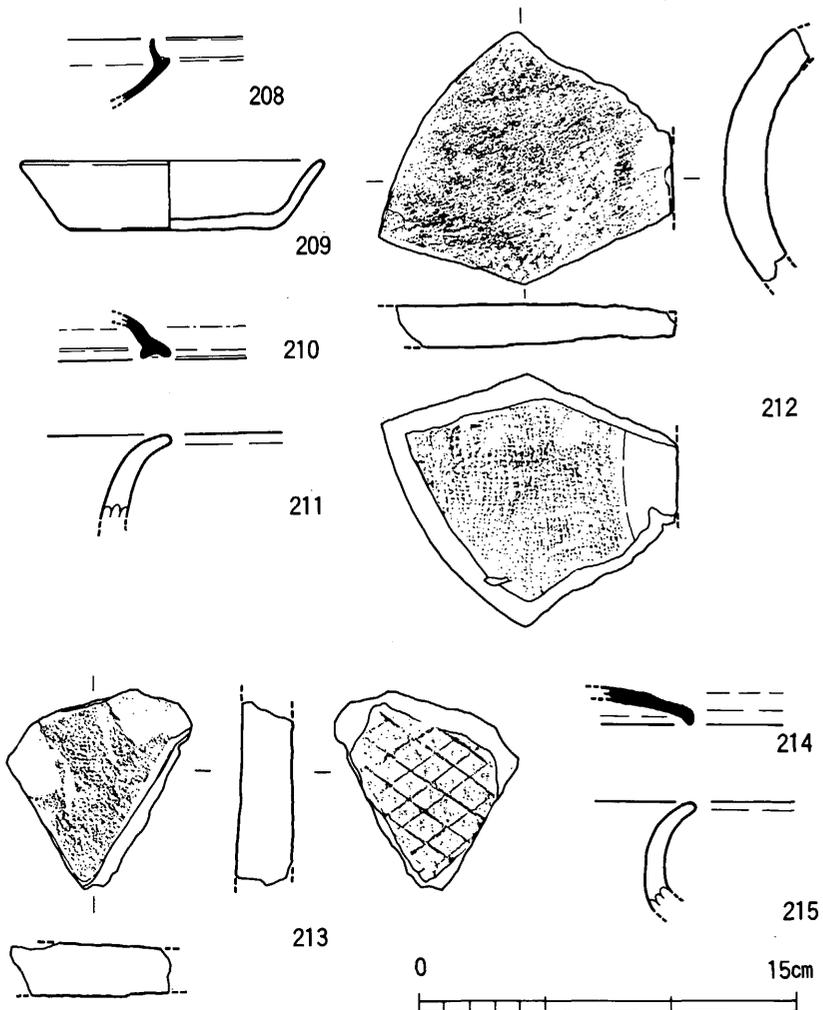


Fig. 51 Pit 3・6・18・20・43・46・48出土遺物実測図 (S1/3)

**甕 (Fig. 52-217・219・220, PL. 21・22)**

217は外面の色調、  
にぶい橙色 (7.5YR  
6/4)、内面灰黄褐色  
(10YR6/2)を呈し、  
胎土に1~2mmの砂  
粒・赤褐色粒・ウンモ  
を含む。焼成は普通。  
口縁部の内外の調整ヨ  
コナデ、胴部外面ハケ  
メ、内面強いナデを施

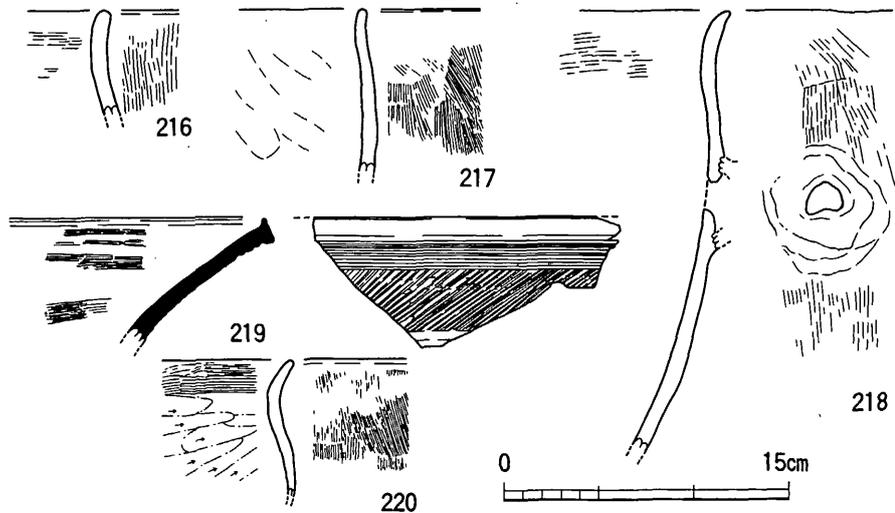


Fig. 52 Pit 56~59・63出土遺物実測図 (S1/4)

し、63からの出土。57から出土した甕の口縁部片219は色調外面オリーブ灰 (7.5Y3/1)と灰色 (N4/ )、内面灰色 (5Y6/1)をなす。焼成は普通で、胎土には0.3~1.5mmの砂粒が含まれる。内面の調整ナデ後部分的にハケメを、外面の端部直下に沈線その下にカキメ後ヘラ描文を施す。220は残存器高7.3cmを測る。外面にぶい橙色 (7.5YR6/4)と内面灰褐色 (7.5YR6/4)の色調。微細砂粒・ウンモ粒を少量含んだ胎土で焼成は普通である。内面胴部にはケズリ外面にはハケメ、口縁端部から頸部まではハケメ後ナデがなされて、59より出土。

**甑 (Fig. 52-218, PL. 21)**

内外の色調、赤褐色 (5YR4/8)を呈す。1~3mmの砂粒を含んだ胎土で焼成は普通である。内面はナデ、外部はハケメ後ナデで、口縁内外ハケメ後ナデで一部ヨコナデが施されている。把手は剝離していて接合面が顕著に観察できる。58からの出土である。

**高坏 (Fig. 53-221, PL. 22)**

59から出土した坏部のみの破片。復元口径8.55cm, 残存器高4.5cmを測り、色調は内外ともに浅黄橙色 (5YR8/4)をなす。焼成は普通。胎土には1mm程の砂粒・赤褐色粒・角閃石を含む。器壁はうすい。全体的に摩耗のため調整は不明瞭となっている。

**小皿 (Fig. 53-222, PL. 22)**

復元口径7.5cm, 器高1.8cm, 底径4.1cmで、内外ともに浅黄橙色 (10YR8/4)を呈し、普通の焼成である。調整は摩耗のため不明瞭。65より出土。

**坏 (Fig. 53-223・224, PL. 22)**

79より出土した223は焼成が不良で胎土には1mmの砂粒が含まれる。外面、黄灰色 (2.5Y6/1)と褐灰色 (10YR5/1)、内面は浅黄色 (2.5Y7/4)をなし、現存部の調整は内外ともにヨコナデである。224は85より出土の底部から体部の破片で、復元底径5.3cmを測る。色調は内外面いずれも浅黄橙色 (7.5YR8/4)とにぶい橙色 (2.5YR6/3)を呈す。胎土には微砂粒とウンモを含んで、焼成は普通。内面体部から底部までと外面の体部の調整は摩耗のため不明瞭である。また底部は糸切りがなされる。

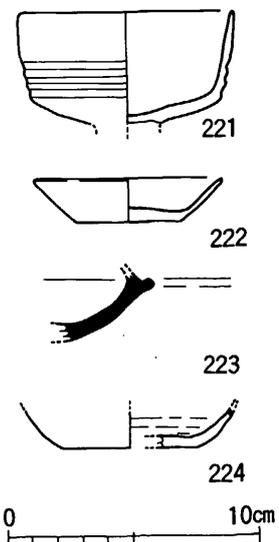


Fig. 53 Pit 59・65・79・85出土遺物実測図 (S1/3)

**蓋 (Fig. 54—225, 55—231・232, PL. 22)**

内外面、灰色 (N 5 / ) を呈し、微砂粒を含んだ胎土で焼成は普通。ロクロ回転右方向で、天井部にケズリ、他はヨコナデ調整がなされ、102からの出土である。231はロクロ回転右方向で外面天井はケズリ、内面にナデが他はヨコナデが施される。色調は内外面、暗灰色 (N 3 / ) を呈し、胎土に1mm前後の砂粒を含み、焼成は普通である。153の出土。232は器壁がうすく、内外の色調灰色 (N 5 / ) をなす。1mmの砂粒を含み焼成は普通。193から出土。

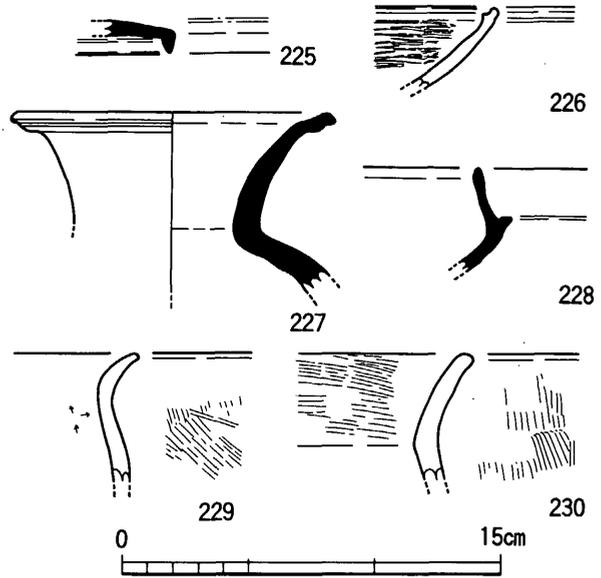


Fig. 54 Pit102・107・127・134・139出土遺物実測図 (S1/3)

**坏 (Fig. 54—228・55—236, PL. 22)**

内外の色調、灰色 (N 5 / ) を呈す。228は胎土には0.3~3mmの砂粒を含み焼成は普通。調整はすべてがヨコナデ仕上げで134からの出土。236は微砂粒を少量含む胎土で、焼成は普通。色調は内外面いずれも灰色 (N 6 / ) をなし、調整はヨコナデで外底面がケズリとなる。200からの出土。

**埴 (Fig. 55—233, PL. 22)**

199から出土。内外面の色調、橙色 (5 YR 7/6) を呈し、胎土には赤褐色粒含む。焼成は普通だが摩耗が著しいため、調整は不明瞭となっている。

**提瓶 (Fig. 54—227, PL. 22)**

口径13cmを測る口縁部から頸部にかけての破片で107から出土。0.3~1mmの砂粒を少量含んだ胎土で、焼成は普通。色調は内外面オリーブ黒 (7.5Y3/1) を呈す。調整は内面口縁から外面肩部にかけてヨコナデが施され、頸部内面がヨコナデ後ナデ、肩部内面がヨコナデで調整。肩部の調整の方向などから提瓶と考えた。外面には自然釉が付着。

**甕 (Fig. 54—229・230, 55—234・235, PL. 22)**

229は外面褐色 (7.5YR4/3)、内面にぶい黄褐色 (10YR6/4)の色調を呈す。胎土に1mmの砂粒が含まれ普通の焼成である。口縁部内外がヨコナデで、外面胴部がハケメ後ナデ、内面はケズリ後ナデ調整がなされている。134よりの出土。

摩耗のため調整不明の230は139から出土。内外面の色調、浅黄橙色 (10YR8/4) をなす。234は弥生の甕の口縁部片で162から出土した。口縁端部にキザミメ、口縁直下に一条の凸帯を有す。胎土には1mmの砂粒・ウンモが多く含まれて焼成は普通。199より出土した235は内外の色調褐色 (7.5YR4/3) を呈し、胎土に1mmの砂粒・ウンモ・角閃石を含み、焼成は普通である。口縁部はヨコナデ調整を施す。

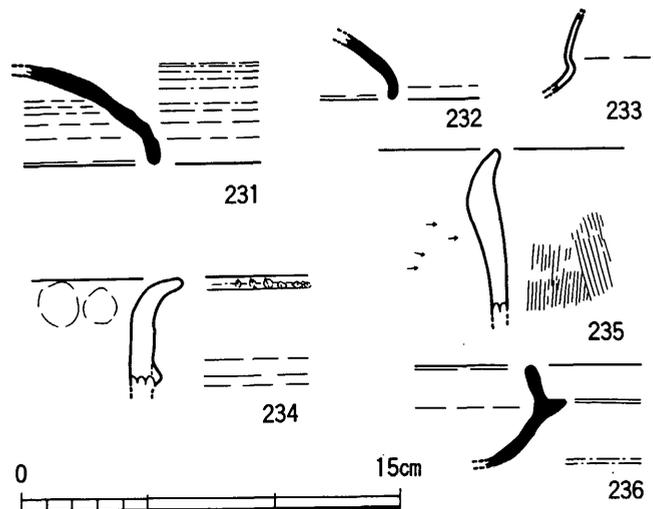


Fig. 55 Pit 153・162・193・199・200出土遺物実測図 (S1/3)

蓋 (Fig. 56—239・244, PL. 22)

239は282より出土したもので、内外の色調灰白色 (5 YR7/1)を呈す。少量の微砂粒を含んだ胎土で焼成は普通。調整は天井外面がケズリで、他はヨコナデで仕上げる。244は口縁の一部が残存する。色調は内外ともに灰色 (N 6/ )をなし、胎土に0.3～2 mmの砂粒を少量含み、焼成は普通である。調整は残存部のすべてにヨコナデを施している。247からの出土。

坏 (Fig. 56—238・240～242・246・250, PL. 22・23)

202から出土の238は色調が内外ともに灰色 (N 6/ )を呈し、普通の焼成で、胎土に微砂粒を少量含む。調整は受部から内面はヨコナデで、外面体部は摩耗のため不明。240は調整がすべてヨコナデ仕上げで、外面の色調灰色 (N 6/ ・N 4/ )と内面灰色 (N 4/ ・N 5/ )を呈す。焼成は普通。胎土には0.5～1.5mmの砂粒を含み、282の出土である。213から出土した241は全体の1/3程残存して、復元口径12.1cm, 器高3.7cm, 復元受部径14.5cmを測り、色調は内外ともに暗青灰色 (5 B3/1)を呈す。普通の焼成で、胎土には1 mmの砂粒を少量含む。内底面の調整はヨコナデ後ナデで、外底面はヘラケズリ後ヨコナデを施し、他はヨコナデ仕上げ。器壁のうすい242は調整がすべてヨコナデで、色調は内外ともに暗灰色 (N 3/ )で、微砂粒を少量含んだ胎土である。外面に自然釉が付着し、287よりの出土。246は高台付の坏の破片で261から出土。色調は内外ともに、にぶい黄橙色 (10YR7/4)をなし、胎土に微砂粒を少量含む。外面の調整は高台までがヨコナデで高台内面がヘラ切後ナデ内面体部はナデ仕上げ。

皿 (Fig. 56—243・245・

247・251, PL. 22・23)

298から出土の243は内外ともに褐灰色 (10YR4/1)の色調。底面は糸切り他はヨコナデ調整。245は橙色 (7.5YR7/6)の色調を内外ともに呈す。焼成は普通。口縁部の調整は内外ヨコナデで内底面ヨコナデ後ナデ、外底面ヘラ切り後板状圧痕を残す。255の出土。247は261からの出土で、摩耗のため調整不明。胎土に赤褐色粒を含み焼成は普通である。内外の色調は橙色

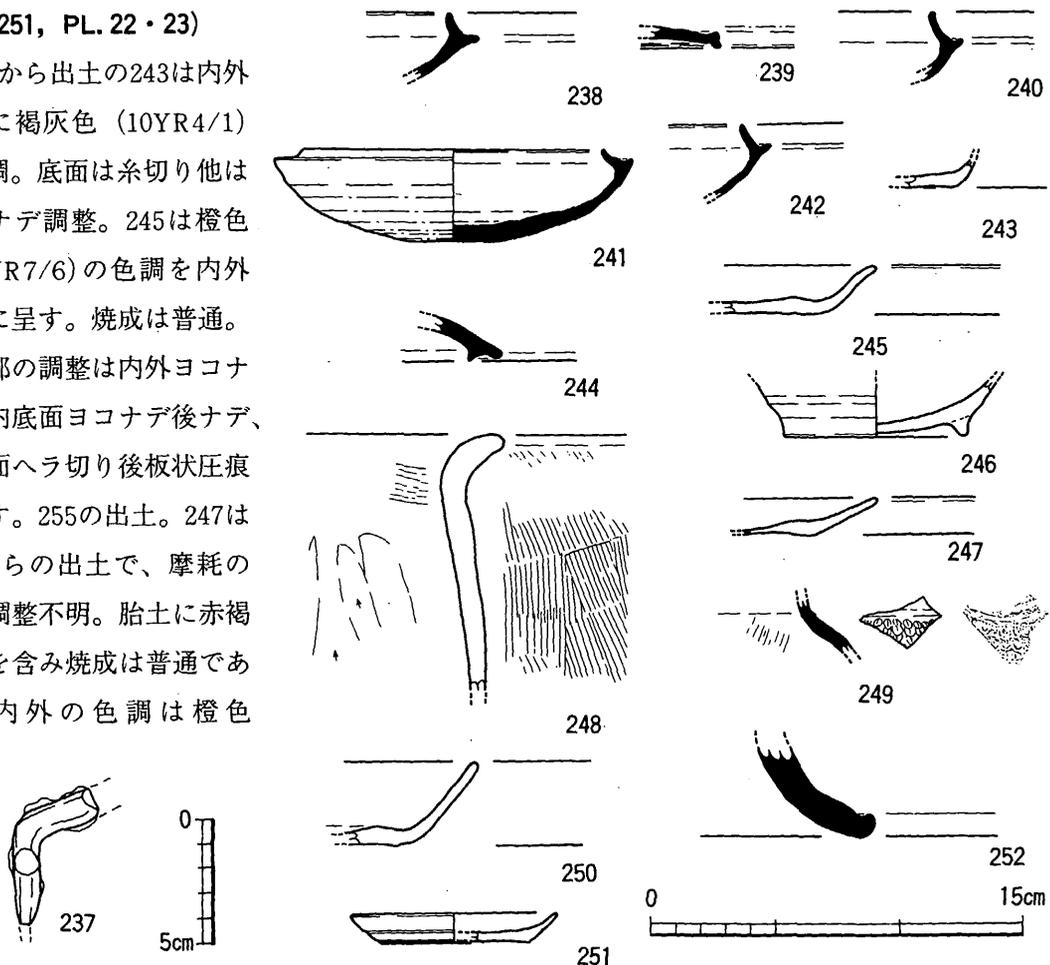


Fig. 56 Pit 202・213・247・255・259・261・264・281・282・287・288・298・299出土遺物実測図 (S1/3)

(2.5YR6/6)・にぶい黄橙色 (10YR7/4)を呈す。251は復元口径8.4cm, 底径5.9cmを測る。底面糸切り、口縁ヨコナデ内底面ナデ調整を施し、胎土に微砂粒・ウンモ・赤褐色粒を僅かに含み焼成は普通。288からの出土。

**甕 (Fig. 56-248, PL. 23)**

264より出土した口縁付近の破片。焼成は普通で胎土に1~2mmの砂粒・ウンモを含む。外面浅黄橙色 (7.5YR8/6)、内面浅黄橙色 (10YR8/4)の色調をなす。口縁内外面の調整はハケメ後ヨコナデで胴部内面はケズリ後ナデで一部にハケメまた外面はハケメを施し、ススが附着している。

**壺 (Fig. 56-249, PL. 23)**

色調はオリブ灰 (2.5GY5/1)を呈し胎土に微砂粒を含み焼成は普通。内面の調整はヨコナデを施すがシボリ痕を残す。外面には印花文の文様を施す。頸部はヨコナデ調整の陶質土器。

**高坏 (Fig. 57-253・259~261・263, PL. 23)**

253・259・261は脚裾部の破片。302から出土の253は、調整はヨコナデ仕上げ。外面色調、暗青灰色 (5B3/1)、内面灰色 (N5/)をなし、焼成は普通で胎土には微砂粒を含む。259は焼成普通。僅かな微砂粒を含んだ胎土をなす。調整は内外ともにヨコナデで、322から出土。260は坏部の破片で、調整は外面体部と底面界に櫛描波状文を施し、他はヨコナデ仕上げである。焼成は普通で、361から出土。261は焼成普通、内外ともにオリブ灰 (2.5GY5/1)の色調で、347から出土。内外面の調整はすべてヨコナデの263は、1~3mmの砂粒を僅かに含んだ胎土で、焼成は普通。外面灰色 (N4/)、内面灰色 (N4/・N6/)の色調を呈し、362から出土した。

**蓋 (Fig. 57-254・255・257・262, PL. 23)**

254・257は314、255は355、262は399からの出土。いずれも調整は外天井付近がケズリで他はヨコナデを施す。焼成も同様に普通。

**皿 (Fig. 57-258, PL. 23)**

摩耗のため調整不明。復元口径6.8cm, 底径4.95cmを測る。焼成は普通で318より出土。

**甕 (Fig. 57-264, PL. 23)**

復元口径17.6cm、内外の色調橙色 (5YR7/6)を呈す。焼成は普通で、胎土に1~3mmの砂粒・

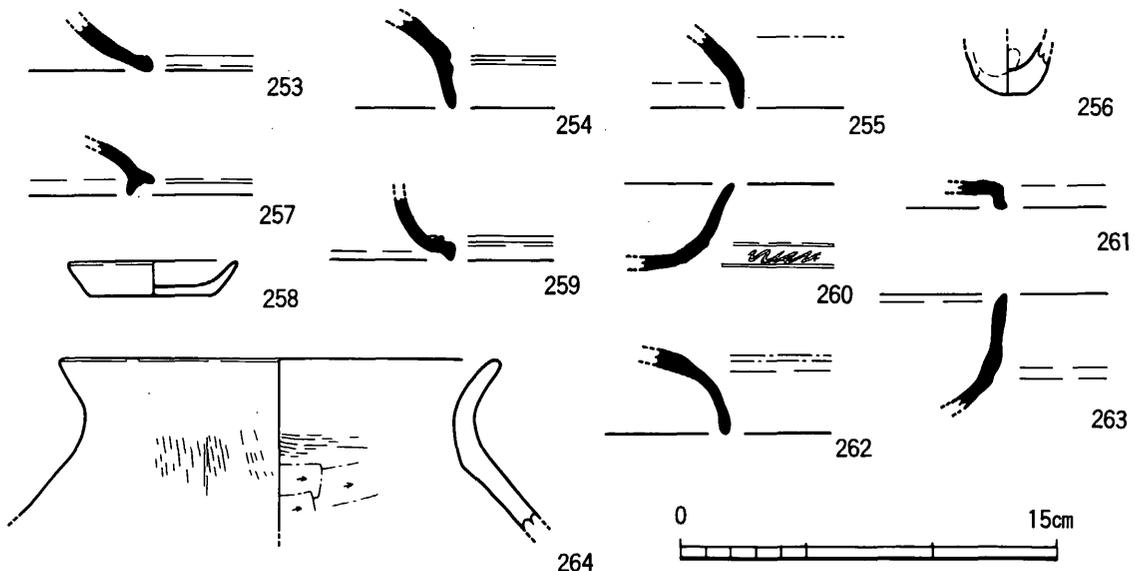


Fig. 57 Pit 302・314・318・322・325・346・347・355・361・362・399出土遺物実測図 (S1/3)

ウンモを含む。調整は内面胴部はケズリ、他はハケメ後ナデを施している。325より出土。

**鉢 (Fig. 58-265, PL. 23)**

焼成が普通で胎土にウンモを少量含む。口縁付近の破片で、内外の色調にぶい黄色 (2.5Y6/4) を呈す。精製土器である。内外ともにヘラミガキが施されていて、407からの出土である。

**蓋 (Fig. 58-266, PL. 23)**

469から出土。調整は外天井部がケズリで、他はヨコナデを施す。普通の焼成で、胎土に1mmの砂粒を含んで、外面灰色 (N4/ )・N6/ )、内面灰色 (N4/ ) の色調をなす。

**坏 (Fig. 58-268・269・271・273, PL. 23・24)**

268は口縁付近の破片で432から出土。調整はすべてがヨコナデ仕上げ。色調は内外ともに灰色 (N6/ ) を呈し、焼成は普通。胎土に1mmの砂粒を含む。269は退化した高台付の破片。内外ともに暗灰色 (N3/ ) を呈し焼成は普通である。1mmの砂粒を含んだ胎土をなす。内面から高台付近はヨコナデを施し底部はヘラ切り後ナデを行って、463から出土。271は口縁付近の破片で438より出土。胎土は微砂粒を少量含み、焼成は普通。色調は明オリーブ灰 (2.5GY7/1) を内外ともに呈す。調整は残存部はすべてヨコナデにて仕上げる。273は復元口径10.7cm, 器高4.2cm, 復元受部径13cmを測る。内外の色調は灰色 (N4/ ) を呈し、胎土には1~2mmの砂粒を含んで焼成は普通である。ロクロ回転は右方向で底部にくらべ口縁部は器壁がうすい。外底部はヘラケズリで、他はヨコナデ調整を施すが、内底面は、かなりの凹凸が残る。また内面の口縁端部直下に一条の沈線をもつ。499より出土。

**皿 (Fig. 58-267, PL. 23)**

摩耗で内面の調整不明。外面体部はヨコナデ、底面糸切りで板状圧痕が残る。復元口径8cm, 底径6cm, 器高1.35cmを測る。色調内外ともに、にぶい橙色 (7.5YR5/3) を呈す。480より出土。

**壺 (Fig. 58-270, PL. 23)**

復元口径12.2cm, 器高10.25cmを測り、色調は、にぶい赤褐色 (5YR5/4)・灰黄褐色 (10YR6/2) を内外ともに呈す。調整は口縁内外をヨコナデ内体部~底部はナデ、外体部~底部はケズリ後ナデを施している。内面に

は僅かに工具痕を残す。

焼成は普通で498から

出土。

**甕 (Fig. 58-272, PL.**

**24)**

478より出土の口縁

部片。内外の色調は橙

色 (7.5YR7/6) を呈す。

焼成は普通。内面胴部

にはケズリ、外面胴部

にナデ、他はヨコナデ

仕上げを施している。

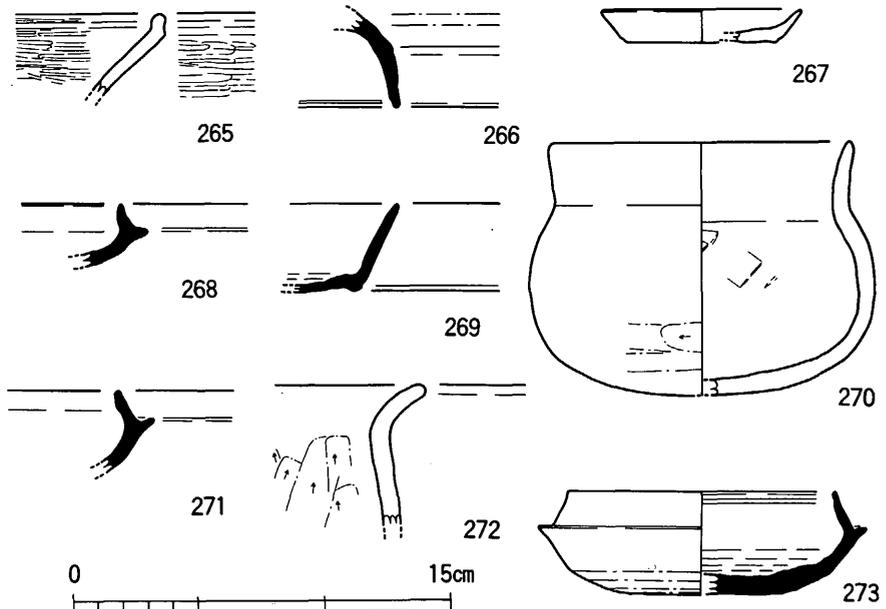


Fig. 58 Pit 407・432・438・463・469・478・480・498・499出土遺物実測図 (S1/3)

**蓋 (Fig. 59—274・276・278・279・286~288, PL. 24)**

505から出土の274は復元口径10.6cm, 器高2.8cm。ロクロ回転右で天井部ヘラ切り後ナデ他はヨコナデを施す。276は摩耗のため調整は不明で528より出土。278は内外ともに明褐色 (7.5YR5/8) の色調を呈し、天井外面はヘラ切り後ナデ内面はヨコナデ後ナデ他はヨコナデ調整で、529から出土。279は539の出土。天井部はヘラケズリ他はヨコナデを施す。288は器壁が肥厚し復元口径11.6cm, かえり径14.6cm, 残存高2.4cmを測る。調整はナデで、かえり部にヨコナデを施す。626の出土。

**坏 (Fig. 59—275・277・283・284, PL. 24)**

275は摩耗で調整不明。胎土に微砂粒・赤褐色粒を少量含み焼成は普通。519より出土。527から出土の277は復元口径12.8cm, 器高3cm, 底径4.9cmを測る。内外の色調は明褐色 (7.5YR5/8) をなし焼成は普通である。底部は糸切り内底面はナデ、他はヨコナデを施す。283は復元口径11.2cm, 受部径13.6cmを測る。ロクロ回転は右で体部下位から底部にはヘラケズリ、他はヨコナデ調整。572の出土。284は573から出土。

**甕 (Fig. 59—280・281, PL. 24)**

280は弥生の口縁部片。内外ともに黄灰色 (2.5YR5/1) の色調をなし、胎土に0.5~2mmの砂粒を含み、焼成は普通。調整は摩耗のため不明瞭だが内頸部ナデ、口縁部内外ヨコナデで仕上げ。561の出土。281は564の出土。色調は、にぶい黄橙色 (10YR7/4) を内外ともに呈す。焼成は普通で、胎土に1mmの砂粒・赤褐色粒を含む。ヨコナデによる調整である。

**高坏 (Fig. 59—282, PL. 24)**

567から出土。脚部の破片で、色調は外面灰オリーブ (5 YR6/2)、内面灰白色 (5 YR7/1) を呈す。1mm前後の砂粒を含む胎土で焼成は普通。調整は残存部の内外ヨコナデで仕上げるが、外面の一部にシボリ痕を残す。残存高は4.05cmである。

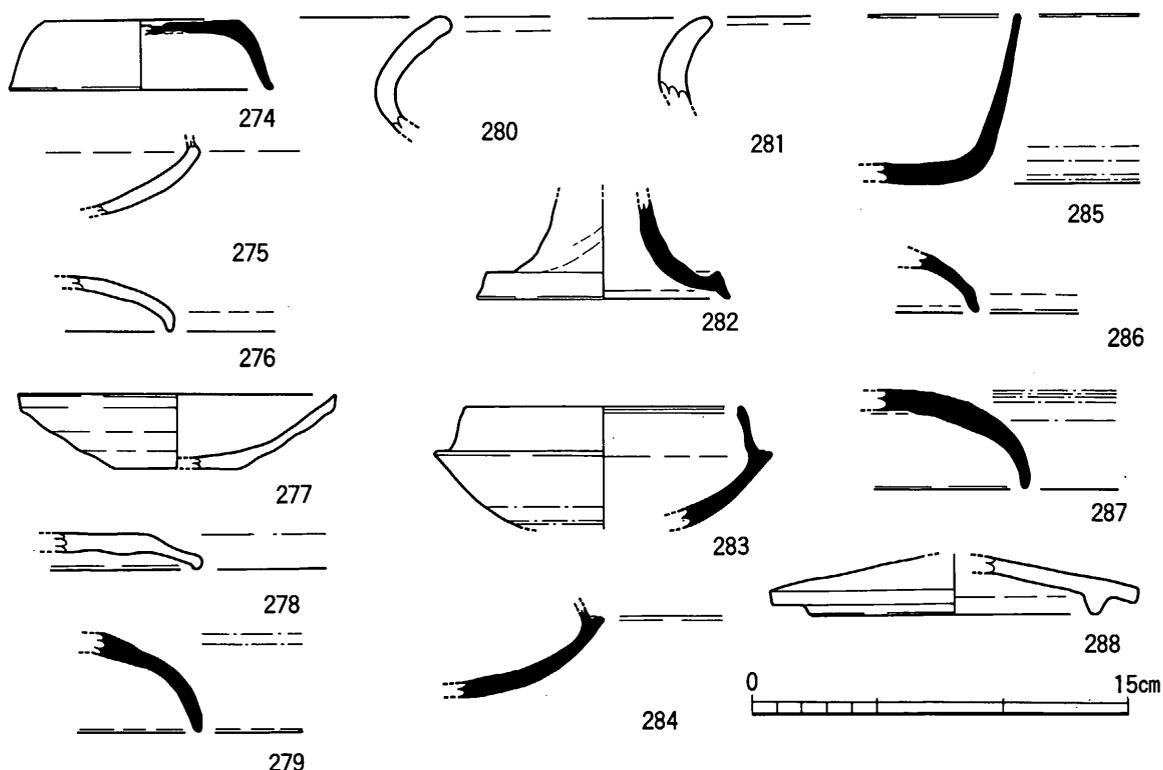


Fig. 59 Pit 505・519・527~529・539・561・564・567・572・573・602・615・626・655出土遺物実測図 (S1/3)

## (7) その他の出土遺物

カクラン2からの出土が主である。カクラン2はSC4・7・8を切る。またカクラン1は、SC6・11およびSK15・16を切る。遺物は本来いずれかの遺構に伴うものであろう。

### 蓋 (Fig. 60-289・290, PL. 24)

289は復元口径13.8cm, 器高4.2cmを測り、外面灰色(N5/ )・暗灰色(N3/ )、内面灰色(N5/ )を呈す。天井部はヘラ切り後ナデ、体部はケズリ、他は内外ともにヨコナデの調整である。290、復元口径13.5cm, 器高4.1cmを測る。内外の色調暗灰色(N3/ )を呈し焼成は普通。ロクロ回転右方向で、口縁部内外はヨコナデ内天井部はヨコナデ後ナデ、体部はヘラケズリ調整。

### 坏 (Fig. 60-291・292・293・294, PL. 24・25)

カクラン1から出土の291は、色調暗灰色(N3/ )を内外ともに呈す。外底面はヘラケズリ、内底面はヨコナデ後ナデ他はヨコナデ調整を施す。292は、焼成が普通で、胎土に少量の砂粒を含む。外底面ヘラケズリ、他はヨコナデ仕上げとなる。全体的に歪んだ293は口径10.6cm, 器高3.65cmを測り、色調暗灰色(N3/ )を呈す。外底面ヘラケズリ内底面ヨコナデ後ナデ、他はヨコナデとなる。294は器壁がうすく全体的に歪みがある。口縁内外の調整はヨコナデを施す。

### 高坏 (Fig. 60-295, PL. 24)

復元裾部径11.25cmを測る。色調は内外ともに灰色(N6/ )・N5/ )を呈し普通の焼成である。脚部内外の調整はヨコナデ、坏部外面はヘラケズリ内面はヨコナデとヨコナデ後ナデで仕上げる。

### 甕 (Fig. 60-296, PL. 25)

頸部から体部の破片で、内外面浅黄橙色(7.5YR8/6)の色調を呈す。内体部はケズリ、外面はハケメで調整されている。

### 磨石 (Fig. 60-297, PL. 25)

凝灰岩を素材にし、形状は楕円形を呈す。表・裏面ともに使用。周囲の側辺には敲打痕がみられ、磨石と敲石の機能を合わせもったもの。長さ11.5cm, 幅8.7cm, 厚み3cm前後を測る。表採品である。

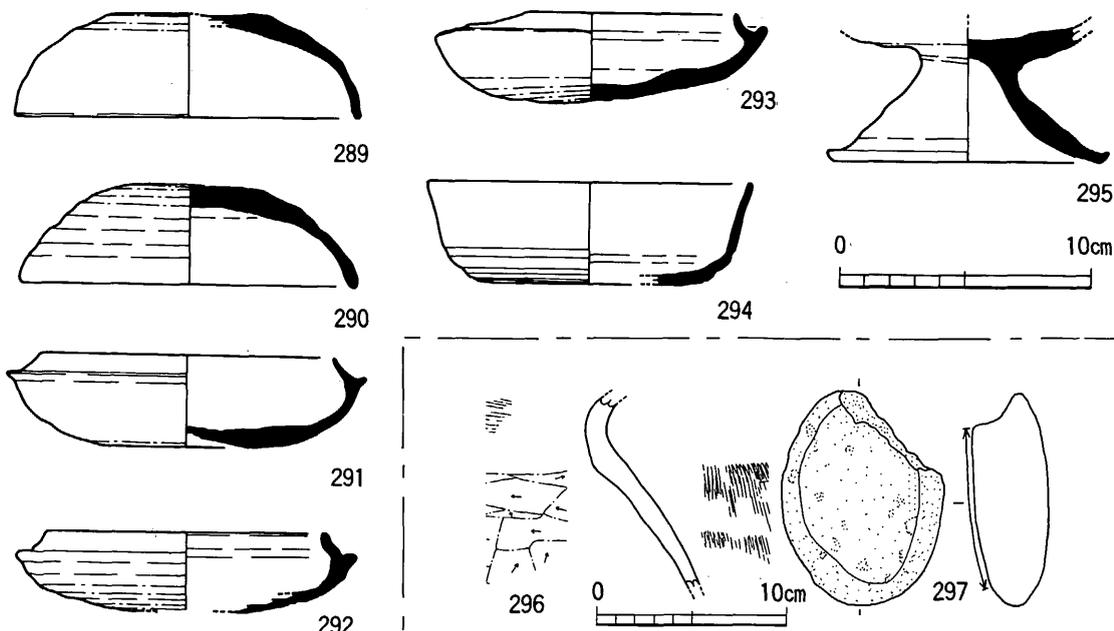


Fig. 60 カクラン1・2および表採出土遺物実測図 (S1/3・1/4)

## (8) 石碑

路線予定地の東側にあたり、発掘調査対象地から離れた場所に位置し、地元の人達にも所在は知られてなかった。しかし昭和62・63年の地元公民館が主体で、調査された“ふるさとの歴史調べ”のまとめによれば明確な所在地は把握できないが、現況の写真などが掲載してある。やはりその調査後は藪におおわれ存在すら忘れられていたと思われる。

石碑の位置は標高60m前後を測る山裾部にあたり、背後は崖、前面は西側がカクランや削平のため若干低くなつては、いるもののほぼ平坦面となっている。

調査は石碑を中心にA～Dの4本のトレンチを設定し、埋置方法・区画溝の有無を確認した。

基本層は地山が花崗岩バイラン土で、全体的に10～20cm前後の腐植土で覆われている。腐植土を除去すると地山が直下に遺存することが確認でき、山陵裾部を削りだして整形したことが明らかとなった。Aトレンチでは、石碑より西に98cmの位置から掘りこみが始まり、深さ10cm前後の平坦面

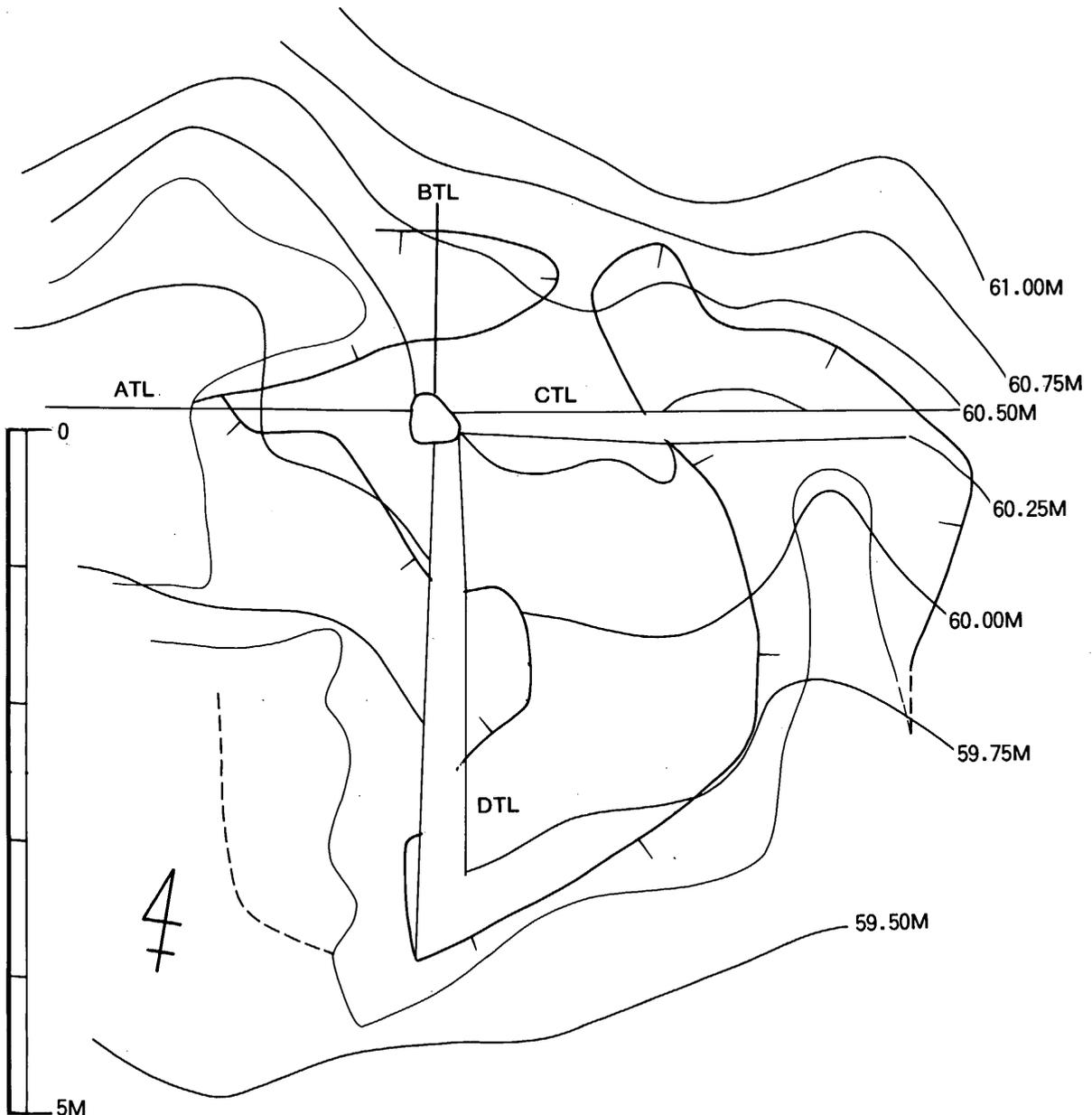


Fig. 61 石碑現況図 (S1/50)

となって90cm程続く。その箇所より緩やかに傾斜しながら深さ25cmの溝を形成する。西側の壁は急に立ち上がる。石碑背後のBトレンチでは80cmの箇所から溝の掘りこみとなる。溝の深さ40cmで、断面U字状を呈し、北側は切り崩しの地山へと続く。Cトレンチでは石碑から東へ1m程で深さ10cm前後の平坦面が1.1m続いて、溝の掘りこみとなる。深さは30cm前後で、形状はU字状を呈す。前面のDトレンチでは、地山の傾斜に沿って1.2mの位置から、深さ10cm前後の平坦面が60cm続いて溝の掘りこみとなる。深さ30cm前後を測り、やはり形状はU字状をなす。A～Dトレンチの溝内の層序の堆積は地山と極めて近似した同一の層相を呈している。トレンチによる確認の結果、東西5.9m、南北3.9～4.8mの不整な長方形プランを検出した。また内側には東西3.1m、南北に2.1m前後の不整長方形が確認され、トレンチ内で確認された幅1m前後、深さ10cm前後の平坦面を考慮すると浅い階段状を呈し、長方形の二段の壇状を形成していたことが明確になった。この壇状の平坦面の周囲、東・西・南・北には幅60～90cm、深さ25～40cmを測る溝があり周辺部と区画されている。この区画溝を形成することによって、この壇状の平面プランが強調されている趣きがある。また主体である石碑は壇状の中心には位置せず、僅か30cm前後西側に、また北側に若干寄って埋置されている。このことは石碑の前面に広めの平坦部を残し祭祀的な設備を設けていた可能性をもつため、一段目の平坦面について精査を行なったが検出できなかった。

石碑の埋置については、「阿奈元霊神松崎因幡守」銘が刻まれていることから墓石の可能性もあるために石碑の周辺部で墓壇を確認するため精査を行なったが、墓壇は確認できなかった。

塔身には「享保五年」・「子ノ七月十七日」の年紀もあるが、溝および塔身周辺では、なんらかの遺物もまったく出土せず、壇状のものが石碑と同一時期に付設されたか否かも現状では、手がかかりはない。

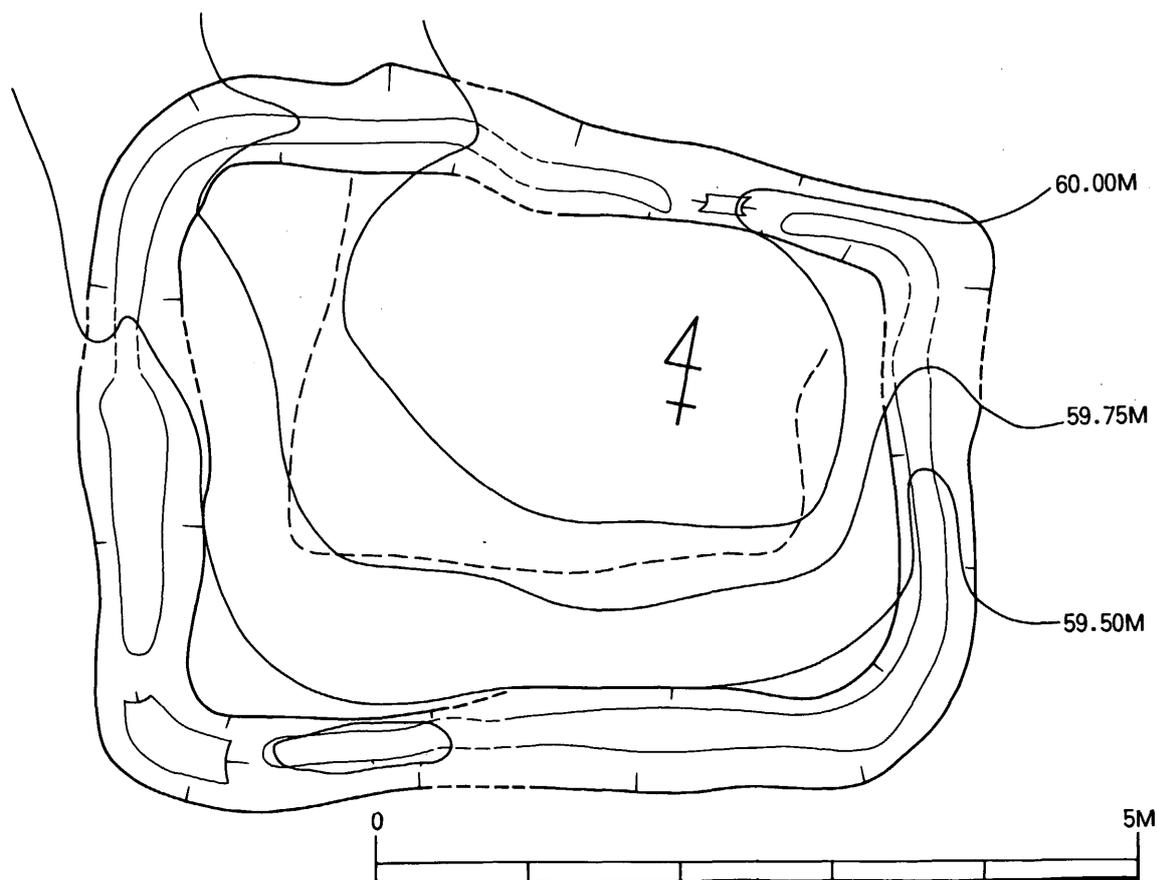


Fig. 62 地山整形図 (S1/50)

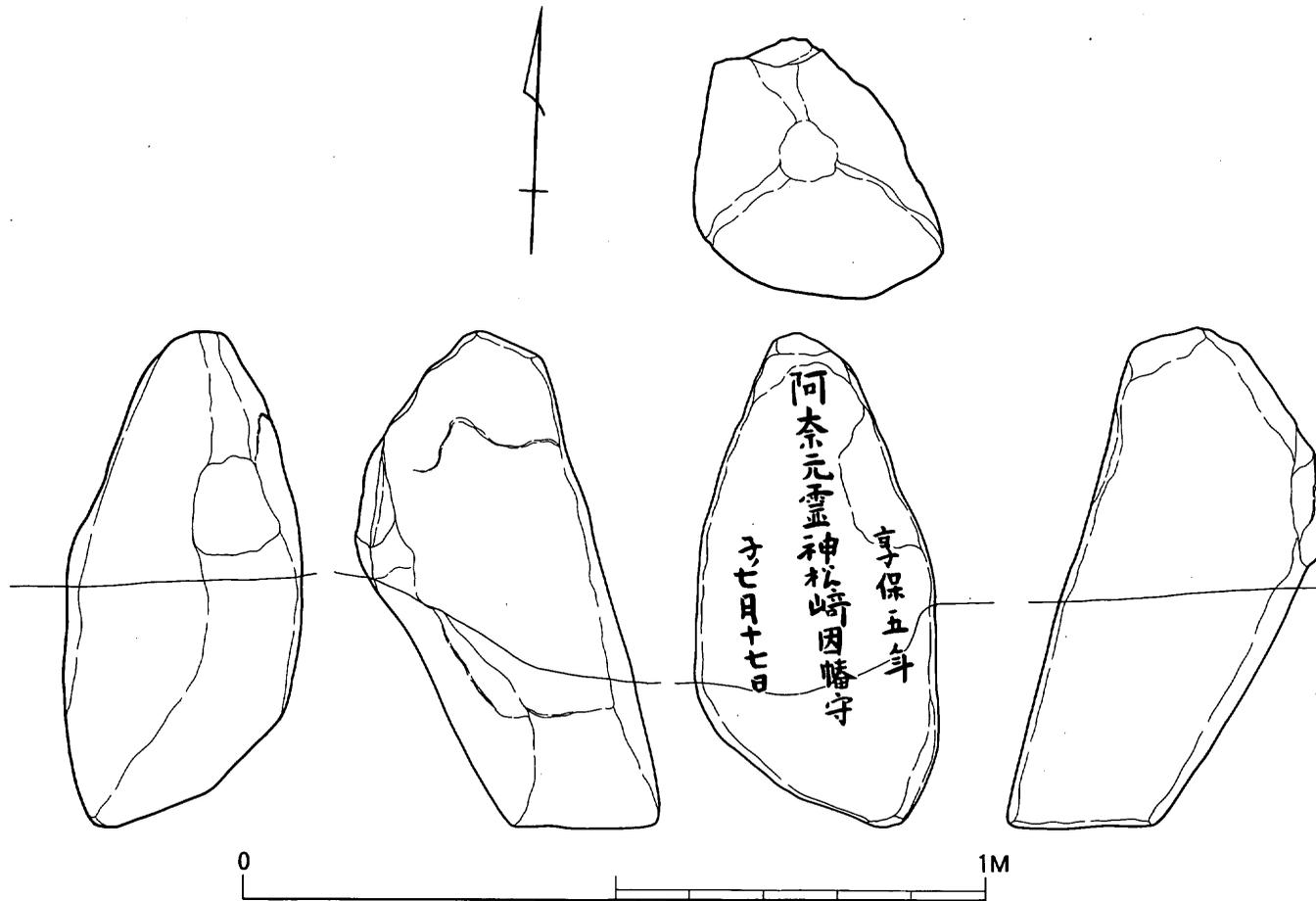


Fig. 63 石碑実測図-1 (S1/10)

## 「阿奈元霊神松崎因幡守」銘の石碑について

1. 所在地 筑紫野市大字古賀字トドキ
2. 年記 「享保五年」・「子ノ七月十七日」
3. 銘文 「阿奈元霊神松崎因幡守」
4. 刻み方 通し薬研彫り（刻みの深さ1.3～2 cm）
5. 寸法 全長134cm 地上高96cm 最大幅64cm 最大厚64cm
6. 碑の主軸 N-3°12'-W（碑身の正面は東南方向を向く）
7. 形状 自然石。背面および側面は自然面を残し、前面のみを平滑にするために若干の加工を施す。石材はやや軟質の花崗岩を用いている。

### 8. 文字の配置

主文である「阿奈元霊神松崎因幡守」の中心軸から左に25.0cm、右に22.5cmに年紀を展開する。上下には、「子」・「享」の第1画のラインが「霊」と「神」の真ん中を抜けており、ここを中心にした場合に「阿」の上端のラインと「幡」の下端のラインとに52.5cmで割り付けられる。また、「年」・「幡」・「日」の下端のラインは一致している。このことから、文字の大きさと配置は均整がとれているといえる。

### 9. 立地状況ならびに現況

山口川が形成した河岸段丘と背振山系から派生した山の裾部との境目で、山地が開折されて崖状にせり出した場所に位置している。現況での平地からの比高差は8 mで非常に開けた「場」を占地しており、下方の平地を一望にできる。現状は荒地で、周辺地形はかなりの改変が進んでいる。

### 10. 銘文などの解釈について

銘文については、造立主義などを明確に示す文言が刻まれていなかったことや、菅見の限りで他の類例が見られないことから、主文である「阿奈元霊神松崎因幡守」と「享保五年」・「子ノ七月十七日」という年紀についてそれぞれの字句を分解し、さらにそこから推測し得る事柄を統合して検証した。その内容について以下に記すこととする。

#### ①「享保五年」

享保五年には『御笠郡筑紫神社縁起』<sup>註1</sup>が筑紫神社に奉納されている。縁起の詳細についてはここではふれないが、これによると、社殿再建に際してハード面の整備が段階的に行われていったことが確認できる。これら一連の整備事業の集大成としての縁起の作成を行なうことによって、神社の社殿再建プロジェクトが完成されたのであろう。本石碑は、銘文から推測する限りではやや特殊な状況下で造立された可能性が高いと考えられ、こういった一連の背景の下に創出された石碑である可能性が考えられる。

#### ②「子ノ七月十七日」

陰暦の盂蘭盆<sup>註2</sup>の時期に当たっており、供養による造立であると考えられる。

#### ③「阿奈」または「阿」

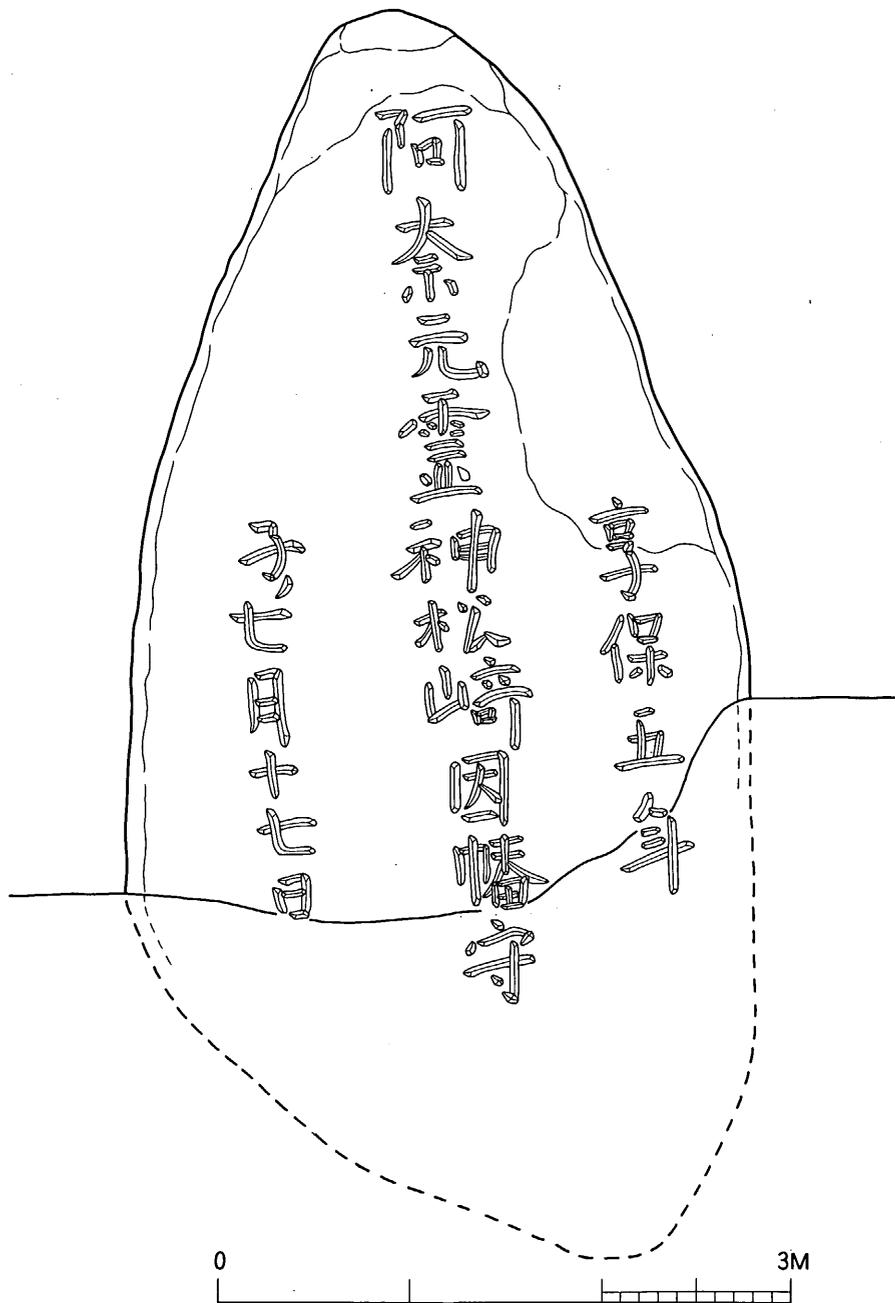


Fig. 64 石碑実測図-2 (S1/4)

「あな」という音の示す意味と「あ」単独の示す意味との2つのケースが考えられる。前者の場合は、感動詞の「あな」<sup>註3</sup>か、または動詞の「あななう」<sup>註4</sup>を省略したものと推測できる。ただし全体の語句から考えると感動詞「あな」を示す可能性が高い。

④「元（気）」

「元気」とは、「気」の根元である。前後の語句から推測すると「万物生成の原因、万物の活動の根元」を示すものと考えられる。

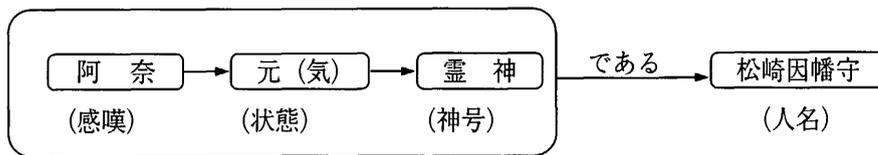
⑤「靈神」

靈験あらたな神を示す「神号」であると考えられる。「神号」とは、神に名づけられる称号で、その神の性質や格式を示す呼び名である。<sup>註5</sup> 人名・事物名・状態を表す語などの下につけて神に見立て、それに対する尊崇・感嘆・喜び・願望などの強いことを示している。「靈神」は、その家の父祖を神として祭るときに用いられるものである。

⑥「松崎因幡守」

現段階では神社にどのように関わった人物なのかは不明確であるが、筑紫神社の神官の系譜をたどる城山家（岡山県倉敷市）の過去帳のなかに「阿奈元気神山内云々」という記述が随所に用いられていることなど<sup>註6</sup>から、筑紫神社の宮司であった人物である可能性が高い。意味的には、全ての語句はここにかかってくるものであろう。

今までの一連の検証を統合してその語句の関係を模式化すると次のようになるものと考えられる。



## 11. 石碑の位置づけについて

本石碑は、近世の墓石や供養塔の形状による分類によると、自然石のものに該当する。庚申塔や二十三夜塔には、近世末期から全国的に自然石のものが多く用いられているが、墓石には珍しいものである。前述10-⑥の文献から素直に解釈した場合は、筑紫神社の神官の墓石である可能性が高いと考えられる。調査時も、このことを前提として周辺の精査を行ったが、残念ながら墓壙は確認できなかった。

また、塔身の周辺には周溝がやや歪んだ方形に巡っていたことが確認されているものの、遺物が皆無であったため石塔と同時に併存していたのかどうかは不明である。仮に併存していたとしても、石碑の立っているエリアは、周溝の範囲から推測すると3m×4mの場を占有しており、墓所としては考えにくい。江戸時代の墓塔にはさまざま規制がみられ、慶安2（1649）年に幕府が高野山に対して国持大名といえども石塔場は二間四方を超えることを禁じている。

これらの一連の状況から、この場所が原位置である可能性は低く、現地における石碑は「供養塔」としての性格が強いものと考えられる。ただし、銘文などの状況を考え合わせると、本義的には墓石であったものが供養塔として祭られ、信仰の対象として移説された段階で周溝が付設されたとしておくのが妥当であろう。しかしながら現段階では、それらの性格を含めてその創出された背景ま

で検討し得る材料は何もない。今後の類例に期待するとともに、その際に改めて論じることとした  
い。

註1 『御笠郡筑紫社神縁起』

- 寛文二年壬寅年（1662）「寢殿破壊に及びしを寛文二年壬寅年村民力を合せ、新に今の御社を造立（中略）十一月初めの卯の日を以て奉る」
- 元禄十二年巳卯（1699）「石の鳥居は元禄十二巳卯の春建立せり、額の文字八花山院内府定誠公かき給ふ」
- 享保五年庚子（1720）五月吉旦 原田宿の代官梶原作左衛門が『筑紫神社縁起』を著し寄進する。

筑紫野市教育委員会『筑前 原田宿』筑紫野市文化財調査報告書第44集 1994年

註2 陰暦七月一五日を中心に行なわれる仏事。祖先の霊を自宅に迎え供物をそなえ、経をあげる。

註3 〔感動詞〕何ごとかに感動したり驚いたりした時に発する言葉。ああ。あれ。

註4 〔動詞〕助ける。補佐する。

- 続日本紀一慶雲四年七月一七日・宣命「阿奈々比（アナナヒ）奉り、輔佐（たすけ）奉らむ事に依りて」

註5 他に稻荷大明神の「大明神」・天照皇大神の「皇大神」・天満天神の「天神」・東照大権現の「大権現」などがある。

註6 鷲山智英氏ご教示。

参考文献

- 小花波平六「形態の研究と課題」『石仏研究ハンドブック』雄山閣出版 1985年
- 縣 敏夫「墓塔」『日本石仏事（第二版）』雄山閣出版 1995年
- 森 章二『碑刻手帖―見方と技法―』木耳社 1988年
- 筑紫野市教育委員会『筑前 原田宿』筑紫野市文化財調査報告書第44集 1994年

## 4. 小 結

トドキ遺跡は、平成4年の発掘調査時に名付け、遺跡の範囲はインターチェンジ建設に伴う発掘調査および民間の試掘調査の結果により推定し、平成9年度刊行の「筑紫野市内遺跡分布図」に掲載した。遺跡は背振山系から派生した山の裾部に占地し、概ね標高51～54mの中に位置する。

今回の調査区はトドキ遺跡の推定範囲の1/5程度にすぎないため、現段階の状況のみで本遺跡の性格を決定することは極めて難しく、解明しなければならない問題は数多い。ただトドキ遺跡を形成する時期の基礎材料を提出できることを目的として調査の事実報告を中心に記載した。遺跡の形成される時期については今年度から報告予定の「貝元遺跡」を含めた中で、細かな分析をすることが重要だと考えられるので、ここでは今回得られた特徴を整理し問題点を提示したい。

今回の調査の特徴は以下のとおりで、

① 対峙する「貝元遺跡」では、弥生時代中～後期を中心にした遺構が確認されているにも、かわらず、本遺跡では弥生時代の遺構・遺物は極めて少ない。

② 古墳時代後半の遺構・遺物は確認されているが、弥生時代からすると若干拡大の傾向にあるが、やはり少ない。

③ 遺跡の主体は6世紀前半から7世紀後葉にかけてであるが、主流をなすのは6世紀後半の時期である。集落としての存続は5世紀後半から7世紀にかけて確認できる。

④ 遺跡は造成がなされているが、時期的には今回の調査では6世紀後半から7世紀後葉の範囲の段階でなされている。

⑤ 土器について6世紀代から7世紀代の須恵器の中には、粗雑品というより稚拙な作りのものが認められ、牛頸窯跡群産のものか疑問がのこる。

⑥ 「阿奈元霊神松崎因幡守」銘の石碑の所在に関して、「筑紫神社」に関わるものが発見されたことは、当地域と筑紫神社の関連など興味深いものである。

以上のような特徴をもつことが今回の調査では確認できた。この中の①～③については、トドキ遺跡自体が、まだ山裾に沿って拡がりを見せると推測できるので、①～③についてはあくまで今回の調査地点の範囲での見解にすぎない。トドキの1次調査では、整地層上の遺構の調査にとどまったため、整地層下の遺構の把握が詳細でないが、整地層上でも6世紀後半代の遺構は少ないが確認されていて、6世紀後半代の遺構は、1次調査地点へ延びるものと推測される。

むしろ1次の調査の主体をなす中世の遺構については、今回の調査では1次調査から見ると少ない。これは今回の調査地点が宅地開発により大幅に削平および攪乱を受けていることに起因し、遺構として明確に捉えられるものが少ないことにある。今回の調査で中世代の遺構が面てきに確認できていたなら島津勢の攻略の戦下の中で、この地域の集落のあり方など明確になったと思われる。しかしながら前述する様にトドキ遺跡はまだ西側へと拡がりを見せるため、あるいは、もっと遺存良好な地点も残っていることと思うので中世代の当地域のことは今後委ねたい。

③の遺跡の主体をなす6世紀代の集落については、インターチェンジ本体部分の「貝元遺跡」が、同様な展開を見せることから、当地域における集落のあり方つまり地域性など考えるためには、貝元遺跡を合わせて考える必要がある。古墳時代後半代集落の拡大した遺跡は、裏ノ田遺跡しかなく、この時期における集落の比較検討など興味深い史料になりうると考えられる。また現段階では、

明確な時期の抽出はできていないが、柵状の区画を確認できており、仮にこの時期のものと断定できるならば、この地域における集落の形成のあり方など史料としては、非常に興味深いものであると思われる。ただ貝元遺跡とトドキ遺跡を合わせて考慮すると、この地域における集落の地域性などの特徴を捉えることができるので、貝元遺跡の報告の中で述べていきたいと思う。

④の造成については遺跡の概要でも述べたが、今回の調査地点では、表土もしくは客土直下に厚さ20～30cmの花崗岩バイラン土による整地層が確認された。遺構は、この整地層面からの切りこみと、この下の層からの切りこみの二面が試掘調査の結果から確認できている。この調査区では6世紀後半代と7世紀後葉の遺構がこの層からの切りこみであるため、造成の時期を6世紀後半代以降、7世紀後葉の間に設定したが、先に述べた如く宅地開発により削平されていることを考慮すると、6世紀後半以降、7世紀後葉に限定するには積極的な根拠に欠ける。1次調査では整地層の把握はできていないが、調査終了後埋めもどしに立ちあつた際の観察によれば遺構検出面下には6世紀前半代の遺物などが堆積していた部分もあるため、2次調査の時期の見解より新しい時期の可能性も考えられる。ただ地山面までの確認ができていないため、これも積極的な根拠とはならない。ただ1・2次調査地点ともに花崗岩バイラン土を使用した造成であることは明確である。

やはり概要で述べたが、1次調査地点より南へ約70m付近の試掘・確認調査では、1・2次調査区とは、造成に使用された土に違いを見せる。花崗岩バイラン土の堆積は、まったくなく、貝元遺跡に見られたような茶褐色粘質土が約50～70cmの厚さで堆積している。遺構は表土直下のこの茶褐色粘質土から切りこみをするものとこの下層からの切りこみをするものの二面に分かれる。これら3ヶ所の造成に使用された土の違いは、背後の山裾の違いに起因するものと考えられ、試掘・確認調査部分の背後は小谷があることが要因の一つと思われる。それにこの場所は、竹林に近いので、根による攪乱があり、詳細つまり整地層が二面ないか否かを捉えることができていない。ただ近所の人達からの聞きとりによると、現表土(畑)から匂玉や土器を採集したことがあることの確認はできている。このような結果をふまえて、造成の時期は概ね6世紀後半以降のものであると今回はとどめておき、今後に委ねたいと思う。

⑤の土器については、遺物番号14・15・17・52・65・80・95・96・99・116・117・126・173・182・195・196・210・214・278の土器が該当する。特徴でも述べたが粗雑品というより稚拙な作りを見せるものが多く出土している。これらは底部付近が肥厚し、体部の受け部付近がかなり薄くなり、受け部から口唇部にかけて、やや厚みを増すなどの特長を示す。また返りや受部が非常に肥厚しシャープさに欠けたものなど、稚拙というより、むしろ完成度が低く、洗練されていないと云った方が妥当かも知れない。この特長を須恵器作りの陶工のクセとして捉えるならば、須恵器生産の需要元を知るための有力な手がかりとなりうる。現段階では、遺物を直接的に比較したわけではないが、図面上での比較では小郡市苅又窯跡群出土の土器に類似点が見い出せる。この窯跡出土の土器は、陶工自身の技法のクセとして、形や調整あるいはヘラ記号に特長をもつ。技法上の形などに類似点はあるものの、特長的なヘラ記号は、確認できていない。これは、トドキ遺跡出土の土器がヘラ記号の遺存する部分を残さず、細片が多いことに起因している。また今後この特長的な須恵器が貝元遺跡でも出土しているか否か、貝元遺跡の報告の中でさらに比較検討する必要がある。この比較検討あるいは、苅又窯跡の出土遺物と比較し分析することにより、苅又窯跡群の供給先が拡がるのか、あるいは、またトドキ遺跡周辺に技法上特徴的なクセをもち須恵器生産にかかわる最小

単位の陶工集団が存在していたのか、非常に興味深いものである。このことについては、貝元遺跡の報告の中で改めて論じることとして、今回は問題提示としておきたい。

⑥「阿奈元霊神松崎因幡守」の石碑については本文で既に述べられているが、筑紫神社に関連すると考えられる供養塔が、なぜ古賀地区にあるのかという問題点について考えてみたいと思う。

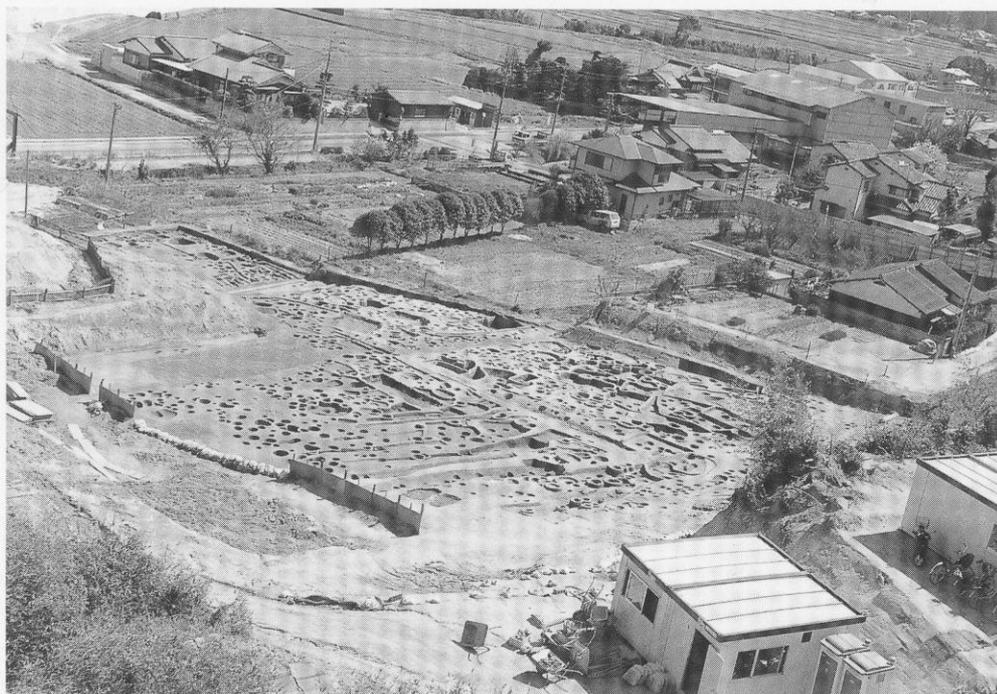
まず「筑紫神社」については、「式内社調査報告・第24巻・西海道」に詳細に述べられているが、これを元に古賀区域内における民間信仰の対象となっている神社の祭神などに共通点はないか調査を行った所、まず筑紫神社の祭神自体が所説をとり明確でないことから共通点は見いだせなかった。

また同様に民間信仰の対象である薬師堂・観音堂などの年紀を調べた結果、享和の年紀のものが多く認められたことであった。ここにも共通の年代を見いだすことはできなかった。石塔自体の年代は享和5年銘とあるが、石塔自体は原位置を保たず、移築された可能性をもっているため、享和年間に移設されたと考えられなくはないが、発掘調査でも決定的な根拠の資料はない。ただ享和年間には、九州のみならずして全国に災害が多く発生した時でもあり、あたかも筑紫神社の宮司としての神職の力をしらしめるべき効果をねらった可能性もある。さらには岡山県在住の筑紫神社の宮司の子孫の方の文献によれば、正確な所在地は確認できないものの同様な石塔が3ヶ所に所在することが記載されており、筑紫神社の結界を示すものとしての可能性も考えられるが、現存の場所が3ヶ所とも明確になっていず、あくまで憶測の域を出ない。これも類例の増加により改めて稿をもうけたいと思う。

#### Fig. 56-249の土器について

この土器片は、焼成・胎土・色調・形態ともに普遍的に見られる国内産の須恵器とは異なりをみせる。いわゆる新羅系の土器で、統一新羅様式のものと考えられる。形態的には細片であったにもかかわらず、頸部から肩部にかけて遺存していたため長頸扁球壺と断定できた。肩部には細かな半重圈文を印花技法によって施している。ただ、ここで見られる半重圈文は現在まで出土している土器には類品を見出すことはできない。半重圈文の名称を用いたが半重圈というよりは、やや楕円形をなす。現存部の文様を詳細に観察すると三列の配置で施文されていることが窺える。次にこの遺物の共伴遺物であるが、この土器はピット261からの出土のため共伴の遺物は細片で時期が確定できるものはない。ピットの所在する位置を配置図で見ると周辺は20~30cm前後の整地層が遺存していた所でもあり従前たるピットの出土遺物なのか、あるいは整地層中の混入品なのか現段階では明確になしえない。先に述べた如く整地層の明確な時期決定も現段階では時期幅をもたして6世紀後半以降としてしか捉えていないが、この土器の時期は最近の韓国考古学の成果を参考にすると、統一新羅様式の特徴をもつことから7世紀後半代のものとしておきたい。

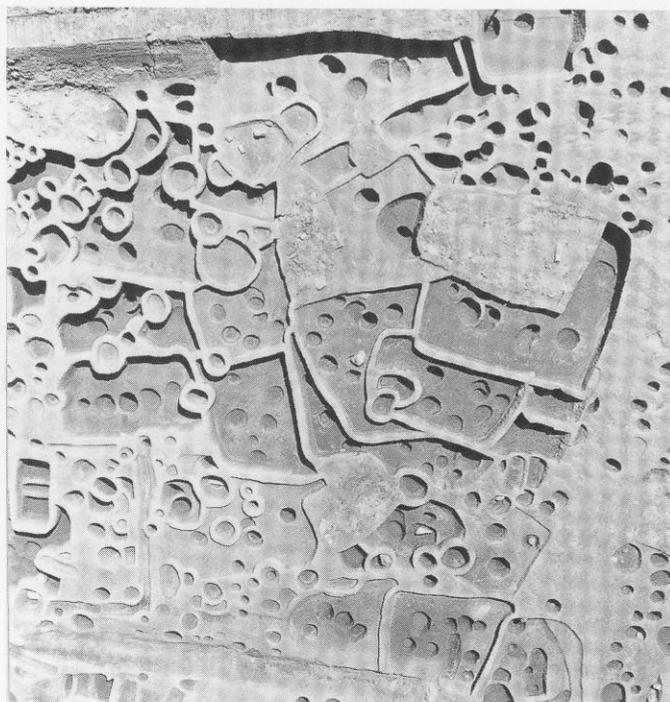
# 圖 版



全景 (北西から)



全景 (上空から)



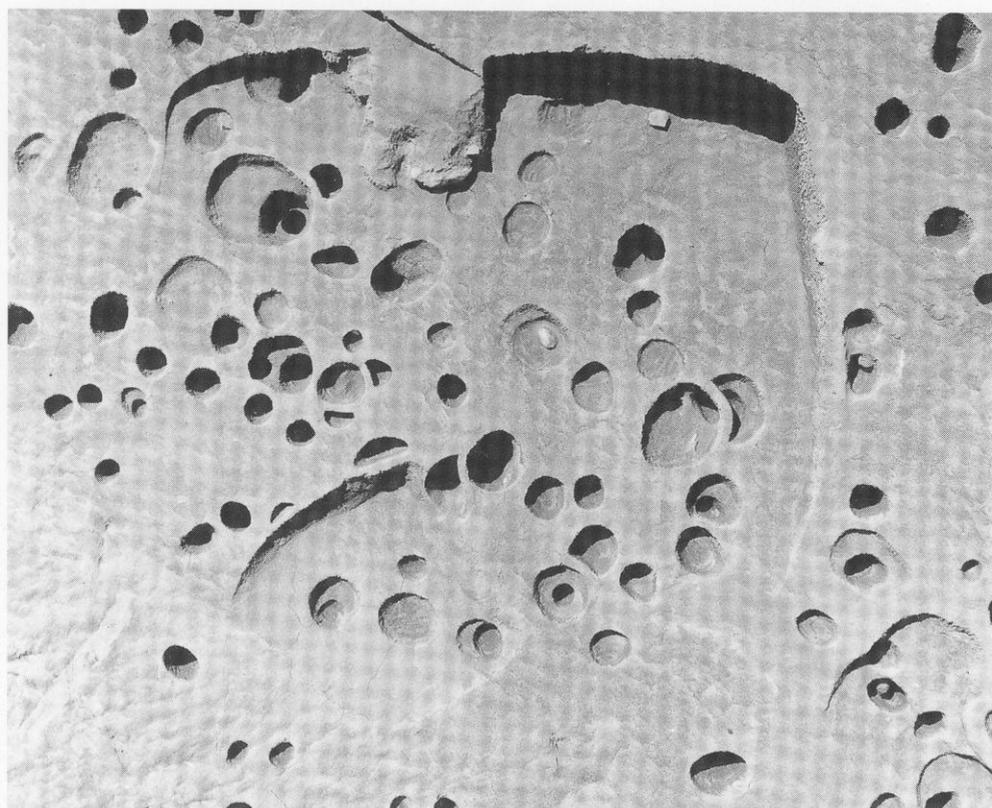
住居跡群 (SC 4 ~16)



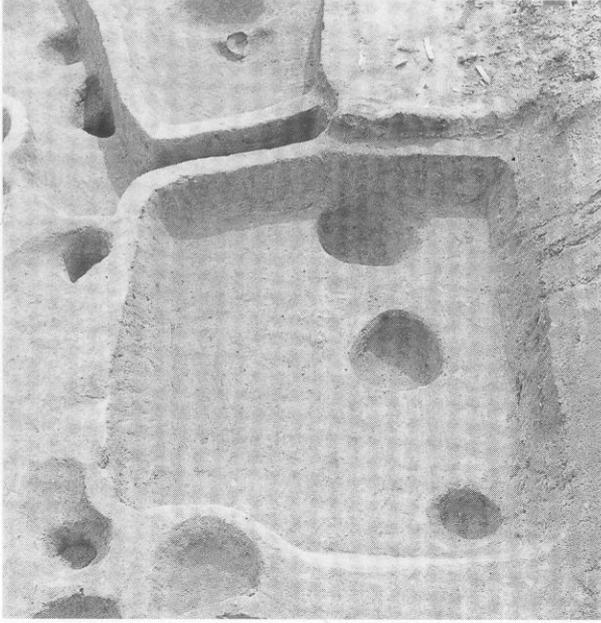
SC 4  
(西より)



SC 4 (北から)



SC 3



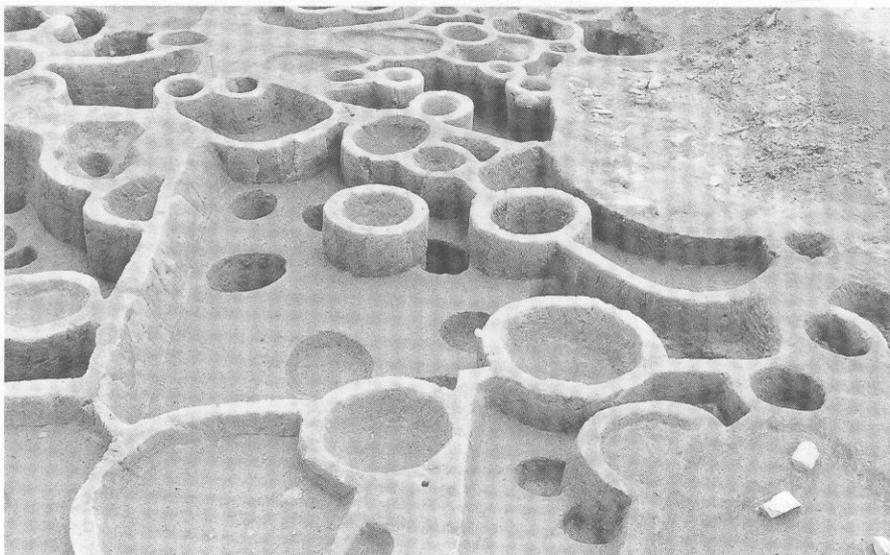
SC 5



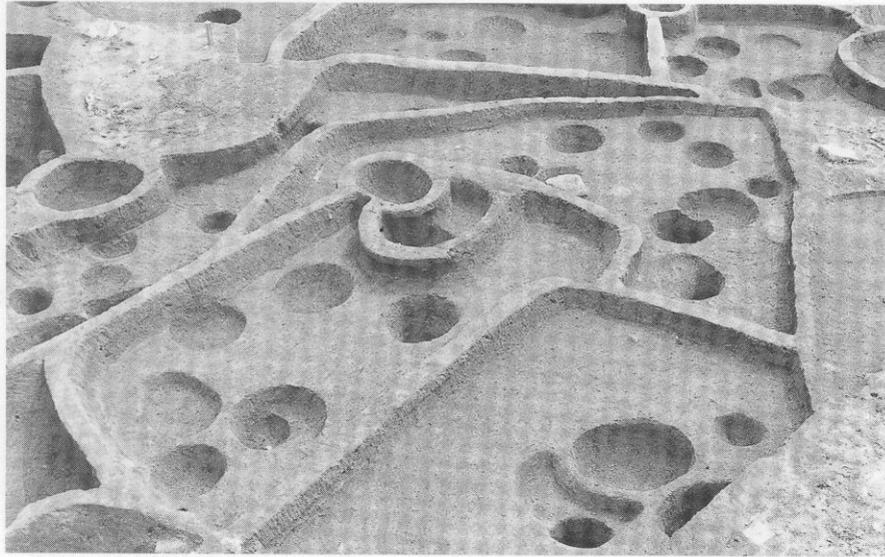
SC 8



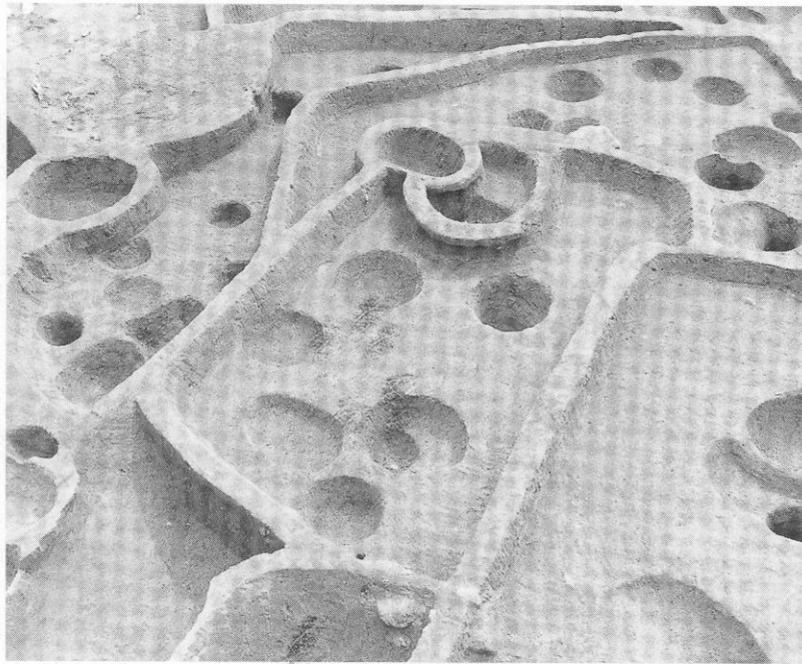
SC 6



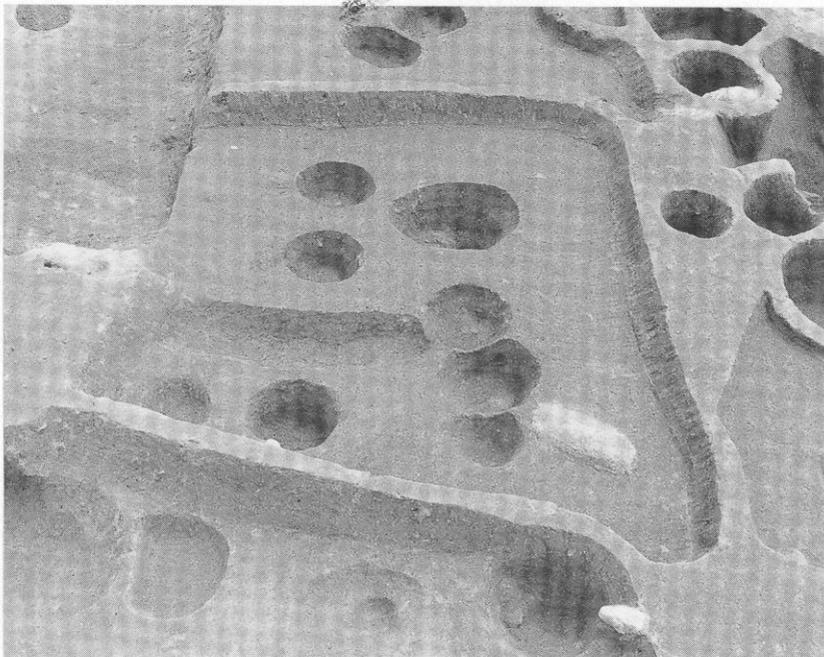
SC 8 · 10



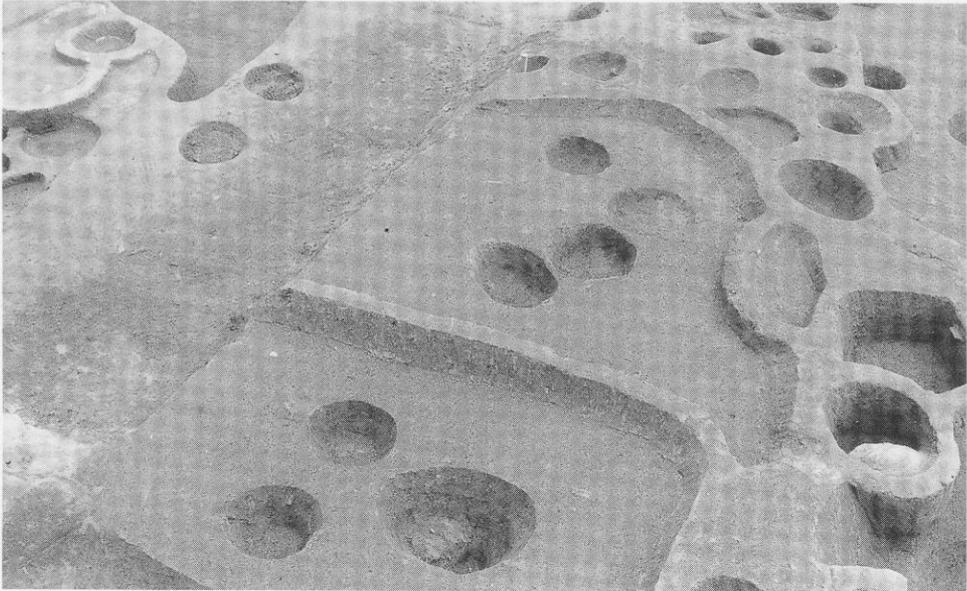
SC11 · 17



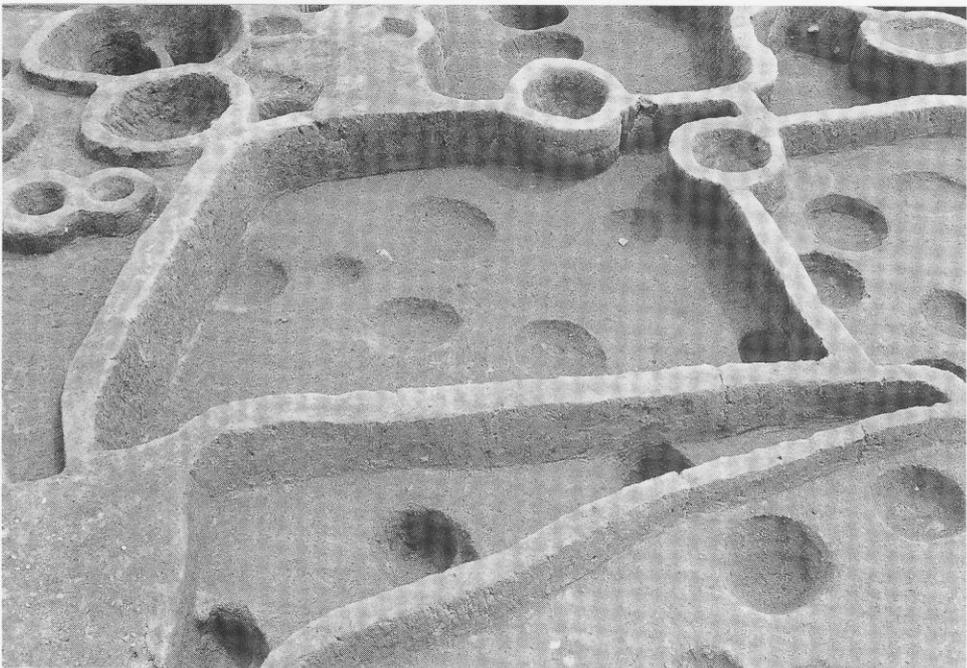
SC11



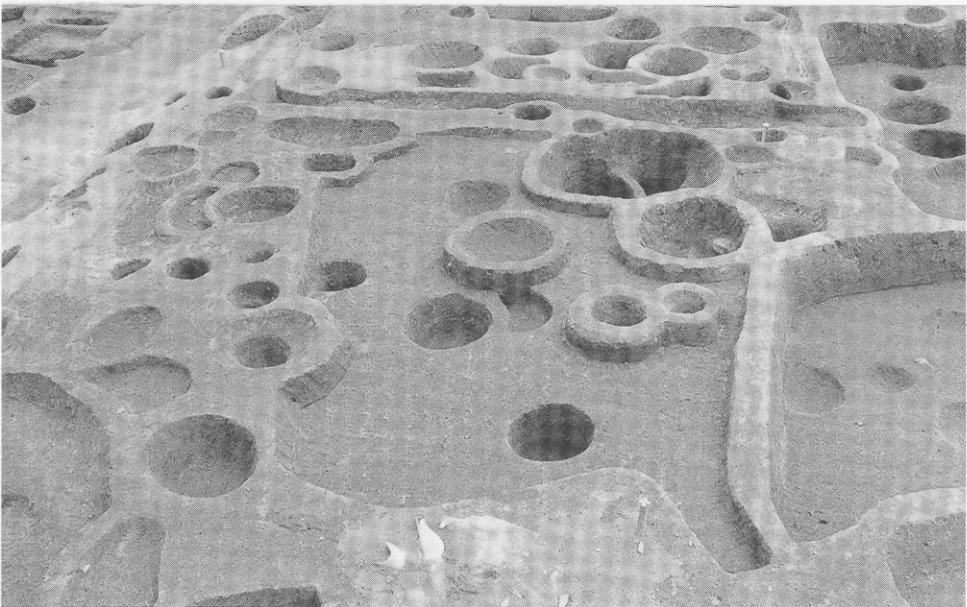
SC12



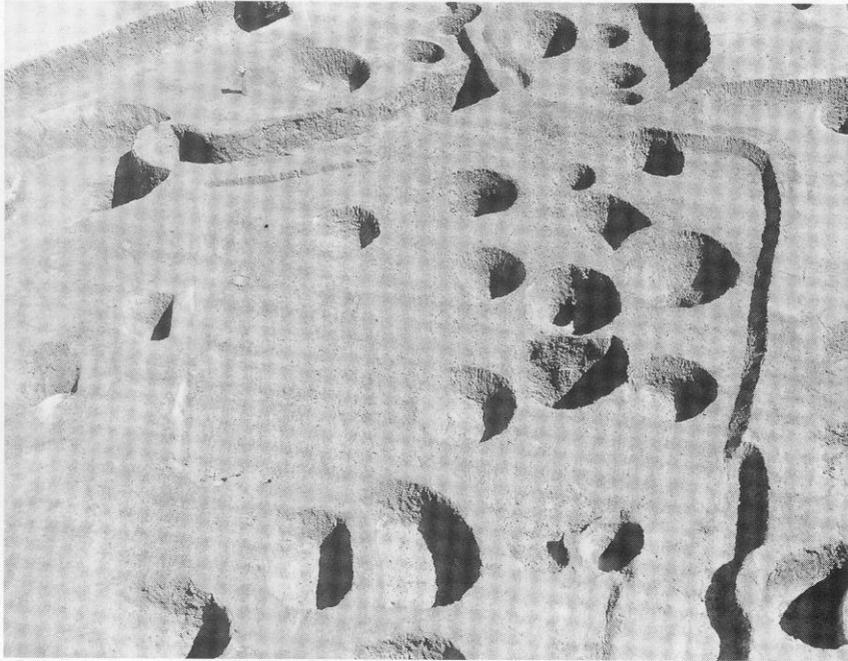
SC13



SC16



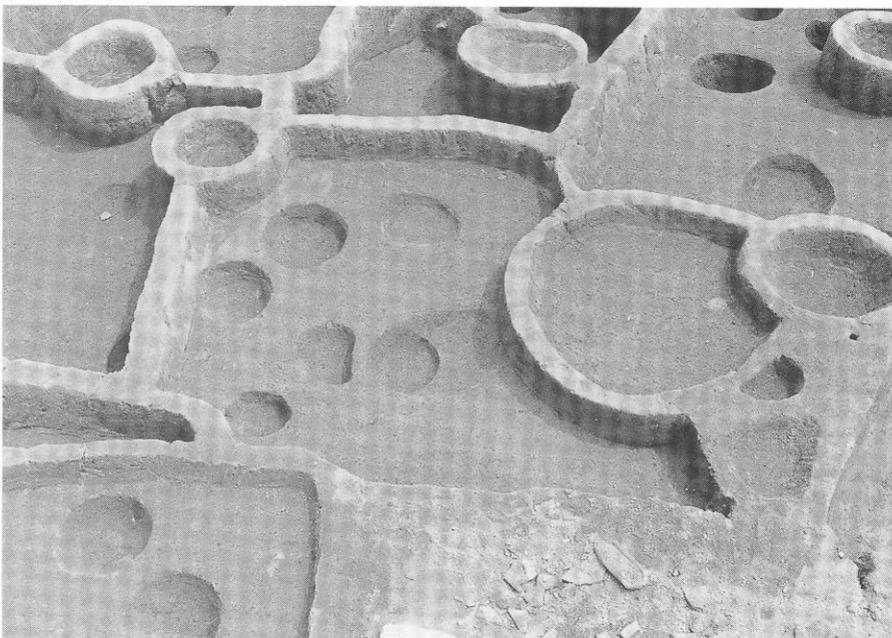
SC21



SC33



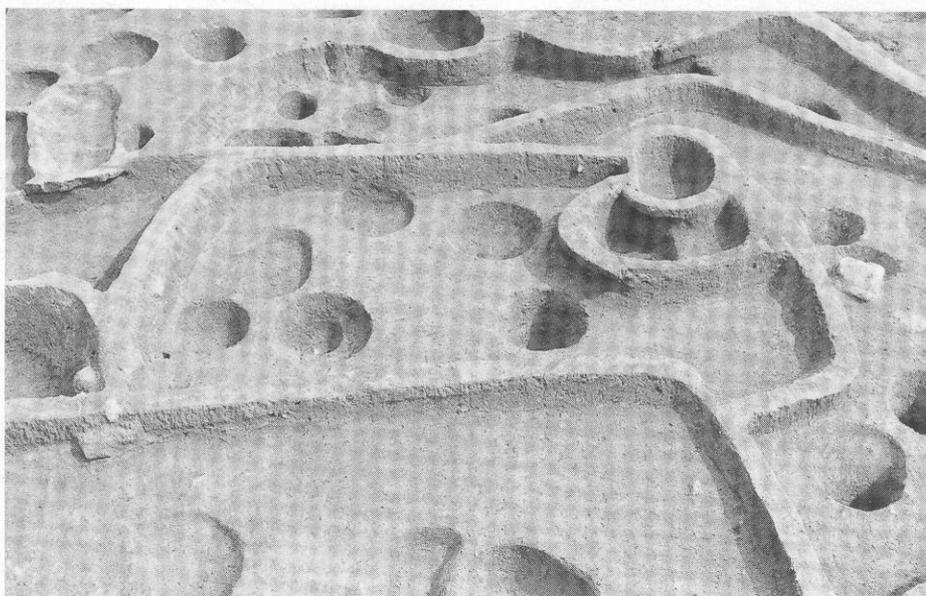
SC36



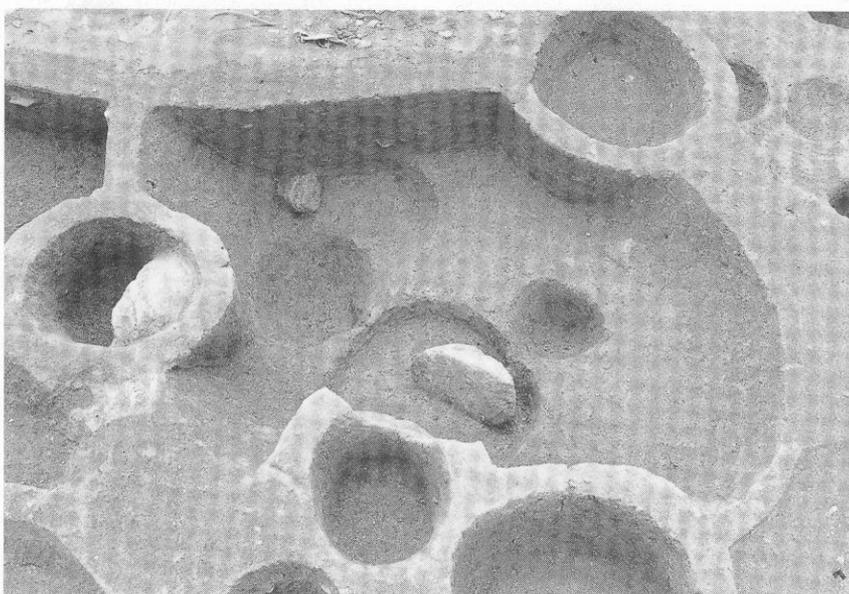
SK14



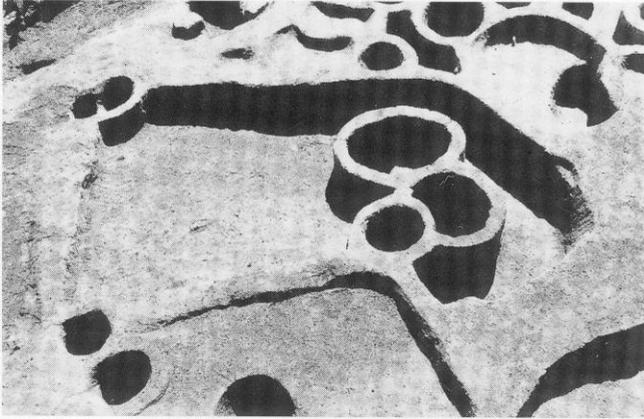
SK15 · 16



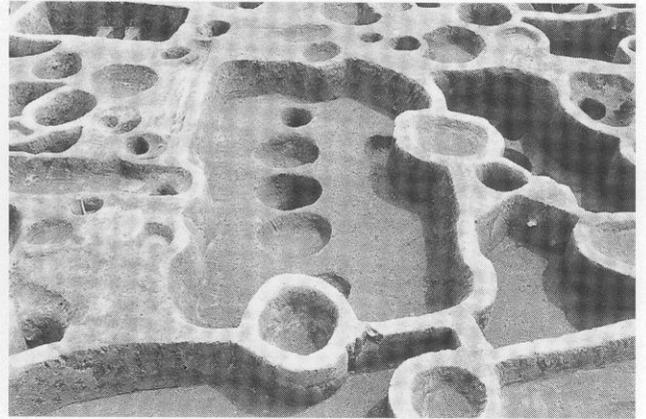
SK17



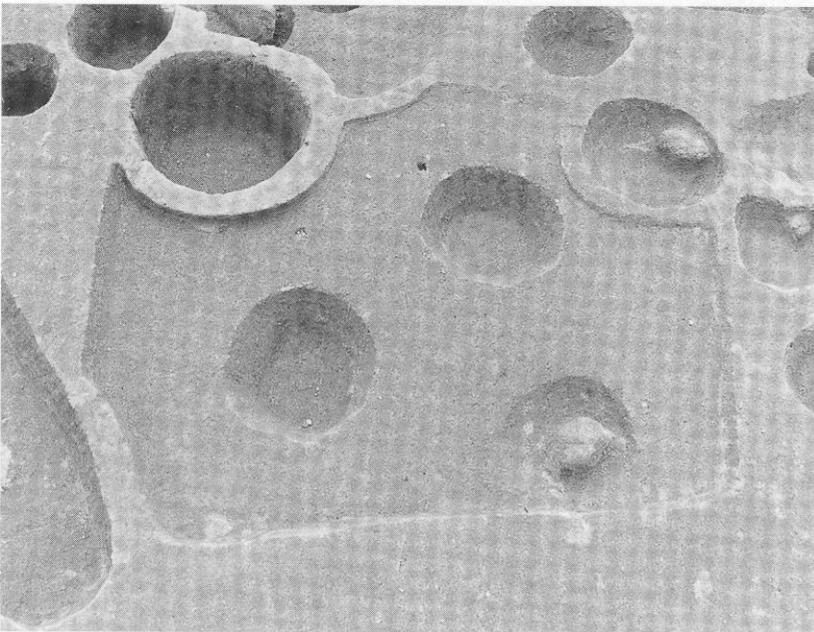
SK19



SK12



SK28



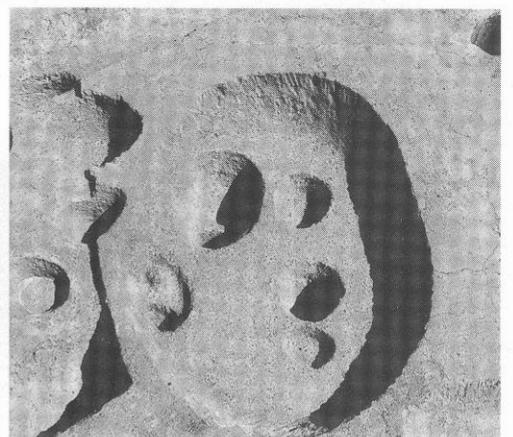
SK25



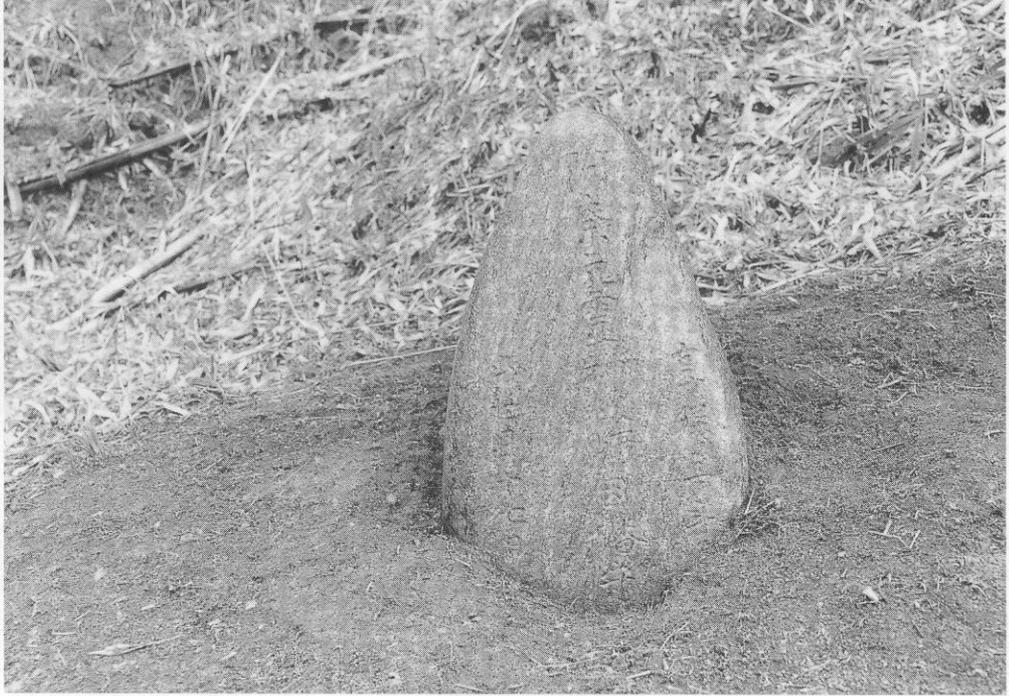
SK55



SK53



SK56



石碑近景 (現況)



側面 (近景)



東から



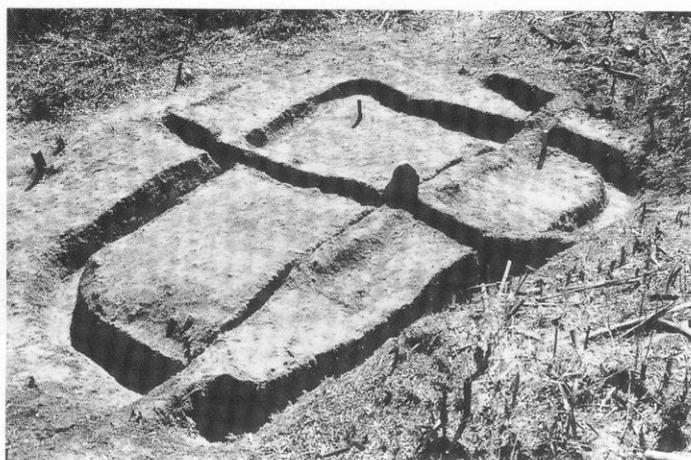
南から



北西から



地山整形（北東から）



北西から



南東から

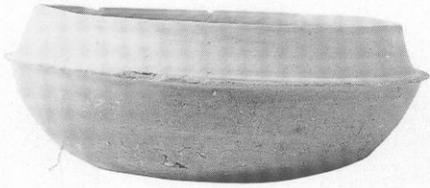


Fig. 4-1

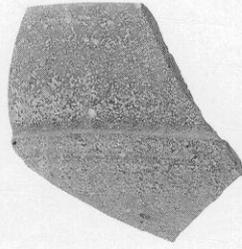


Fig. 4-2

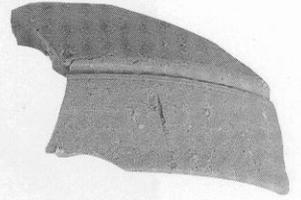


Fig. 4-3

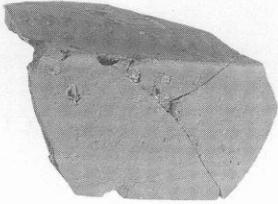


Fig. 4-4



Fig. 4-5



Fig. 4-6

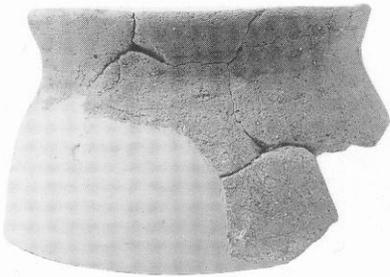


Fig. 4-11

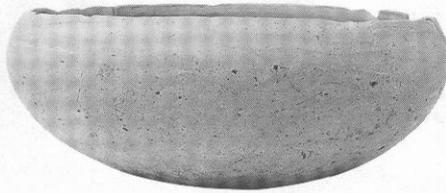


Fig. 4-9

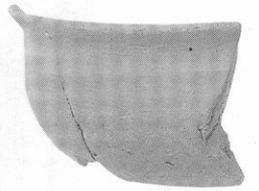


Fig. 4-10

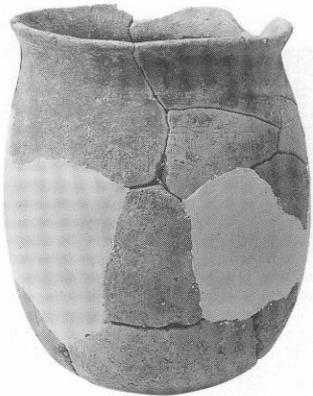


Fig. 4-12



Fig. 4-13

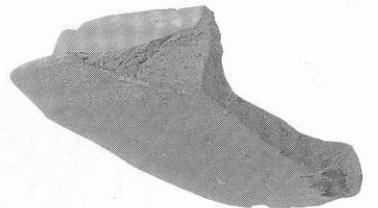


Fig. 5-14

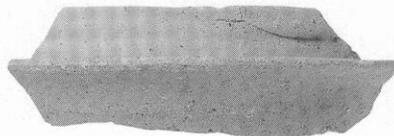


Fig. 5-16

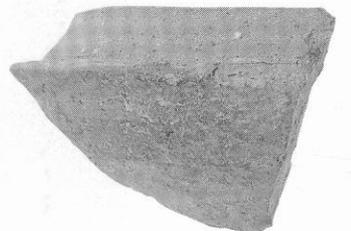


Fig. 5-17



Fig. 5-15



Fig. 5-18



Fig. 5-19

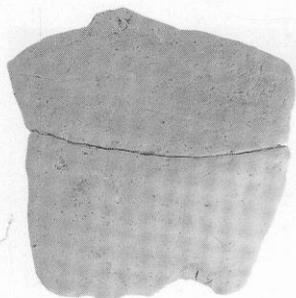


Fig. 5-20

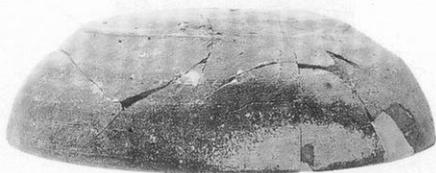


Fig. 5-21

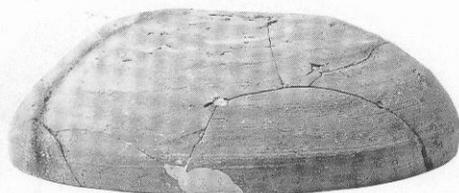


Fig. 5-22



Fig. 5-24



Fig. 5-23

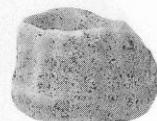


Fig. 5-25

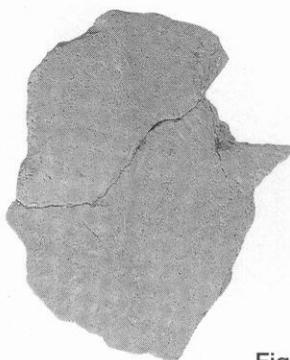


Fig. 5-26



Fig. 5-27

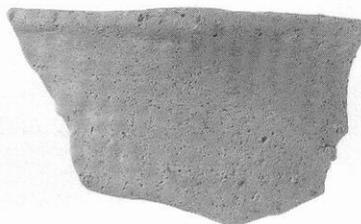


Fig. 5-28



Fig. 5-29

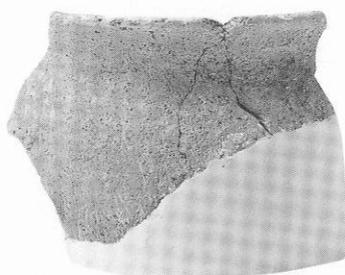


Fig. 6-30

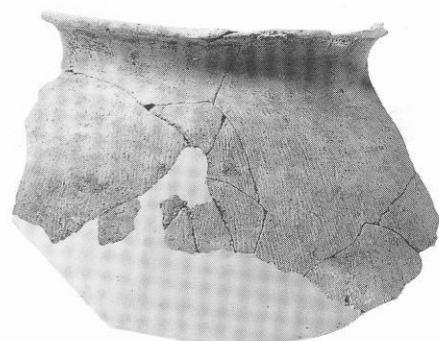


Fig. 6-31



Fig. 7-33



Fig. 7-34



Fig. 7-35

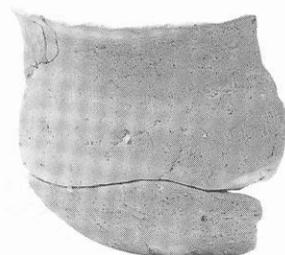


Fig. 7-36

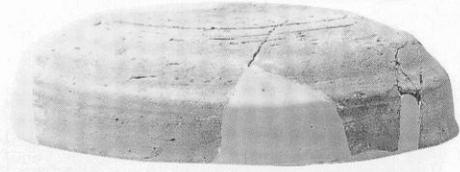


Fig. 8-37

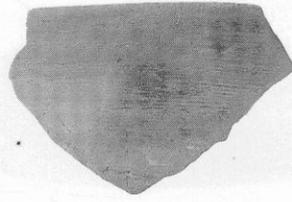


Fig. 8-38

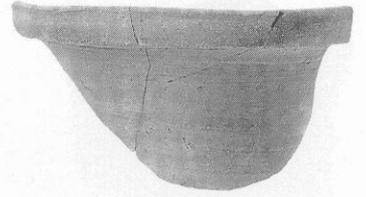


Fig. 8-39



Fig. 8-40

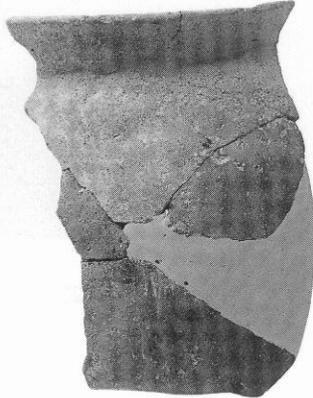


Fig. 8-41

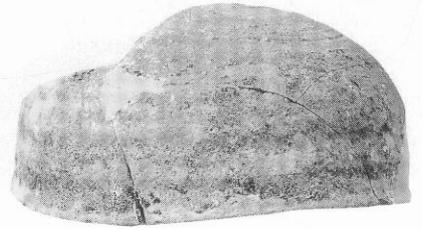


Fig. 9-44



Fig. 9-46

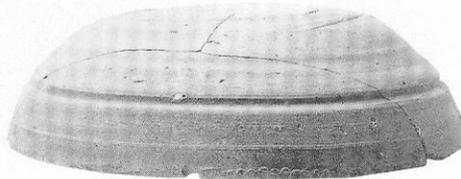


Fig. 9-45



Fig. 9-47

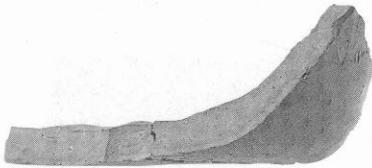


Fig. 9-48



Fig. 9-49



Fig. 9-51



Fig. 9-50

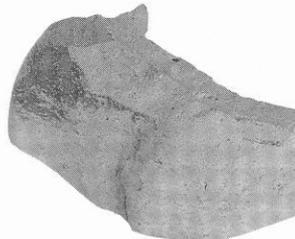


Fig. 10-52



Fig. 10-54

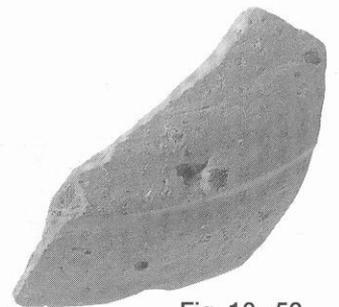


Fig. 10-53

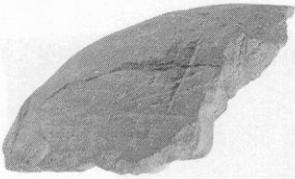


Fig. 11-56



Fig. 11-57

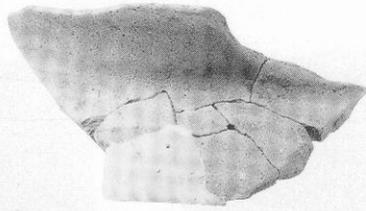


Fig. 11-58

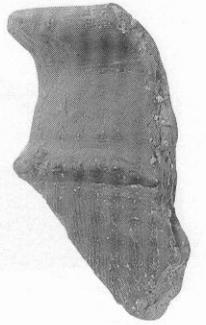


Fig. 12-60



Fig. 12-59



Fig. 12-61

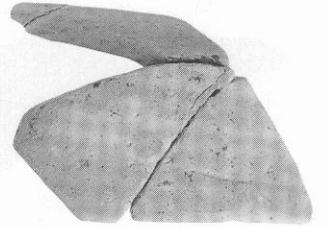


Fig. 13-62

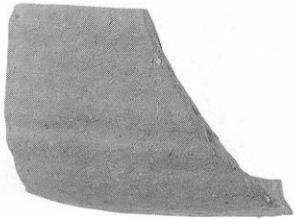


Fig. 13-64



Fig. 13-65



Fig. 13-72

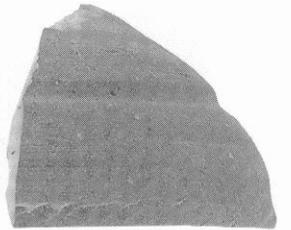


Fig. 13-63

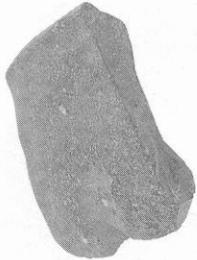


Fig. 13-66

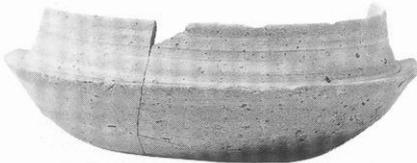


Fig. 13-67



Fig. 13-68

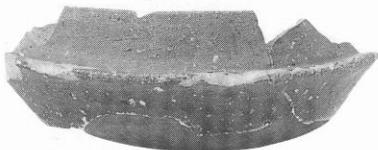


Fig. 13-69



Fig. 13-70

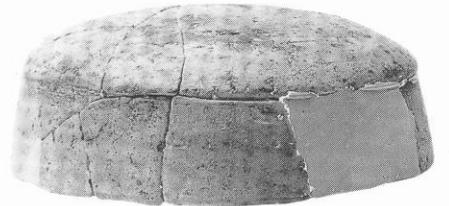


Fig. 13-71

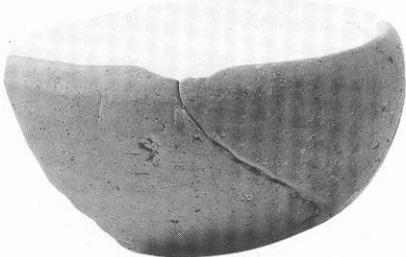


Fig. 13-73



Fig. 13-74

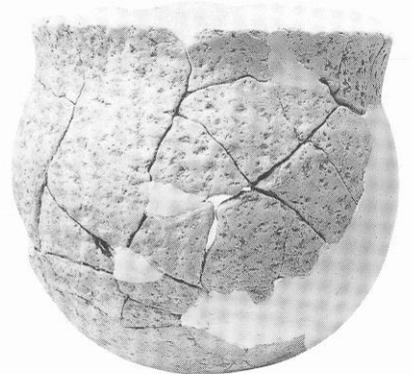


Fig. 13-75

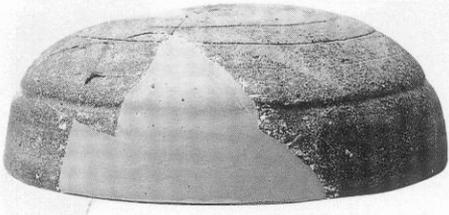


Fig. 14-76

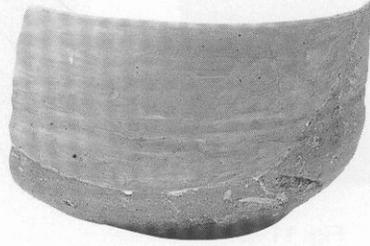


Fig. 14-83

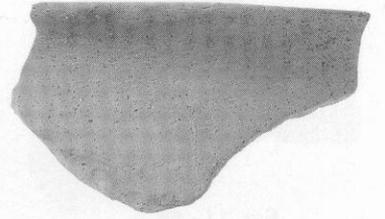


Fig. 14-86



Fig. 14-77

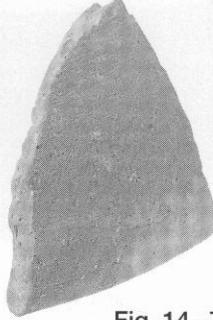


Fig. 14-79



Fig. 14-84

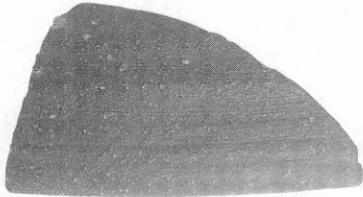


Fig. 14-78

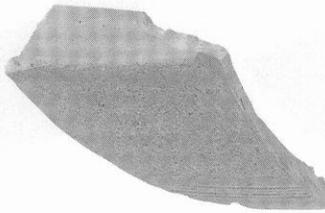


Fig. 14-80

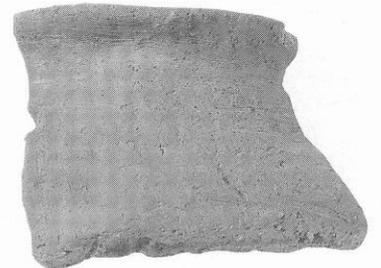


Fig. 14-87

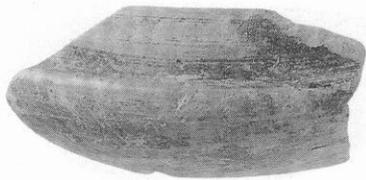


Fig. 14-85



Fig. 14-81

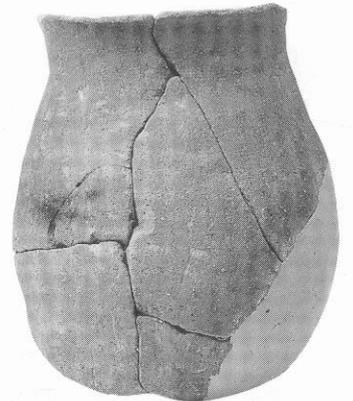


Fig. 14-88



Fig. 15-89

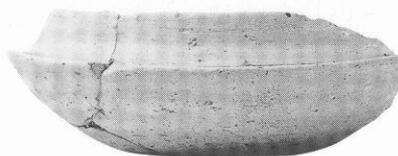


Fig. 14-82

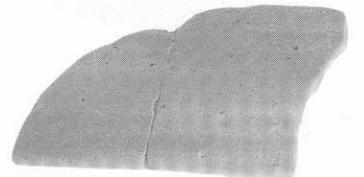


Fig. 15-90

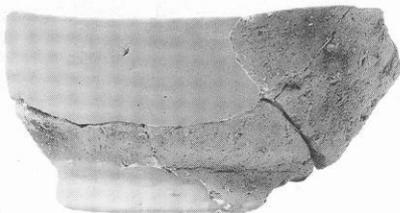


Fig. 15-92



Fig. 15-93



Fig. 15-91



Fig. 17-94

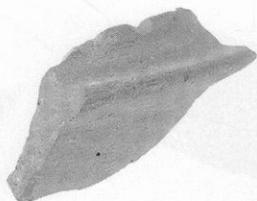


Fig. 17-95

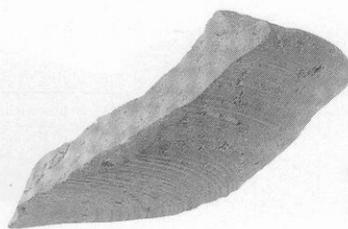


Fig. 17-96

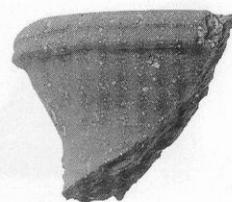


Fig. 17-97



Fig. 19-98

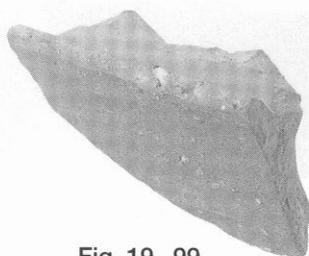


Fig. 19-99

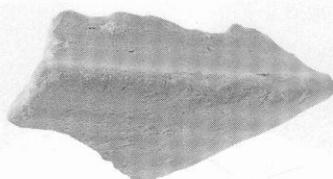


Fig. 19-100

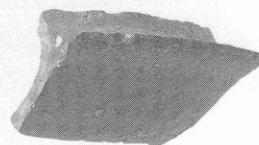


Fig. 19-101



Fig. 19-102

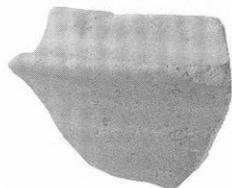


Fig. 21-105



Fig. 23-106

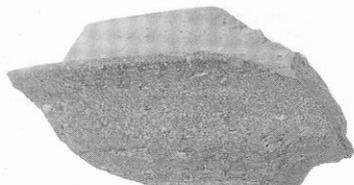


Fig. 24-107

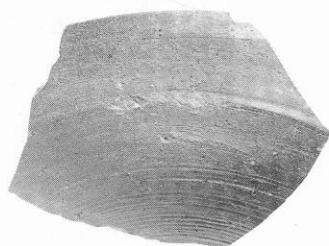


Fig. 24-109

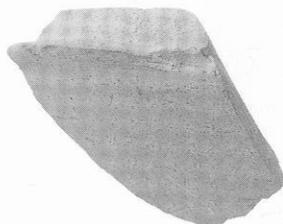


Fig. 25-111

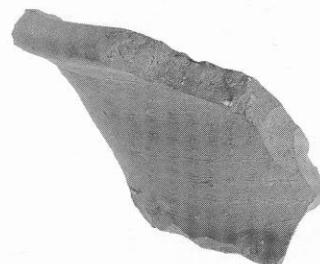


Fig. 25-112



Fig. 25-113



Fig. 25-114



Fig. 24-110

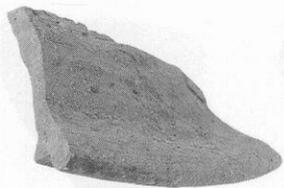


Fig. 26-116

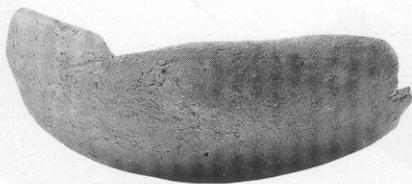


Fig. 27-120

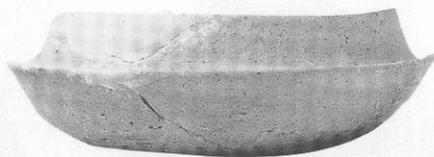


Fig. 27-118



Fig. 27-119



Fig. 27-121



Fig. 27-122

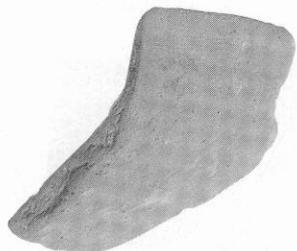


Fig. 30-124

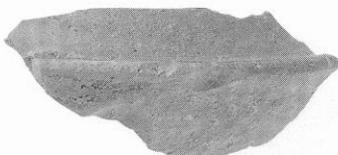


Fig. 30-125

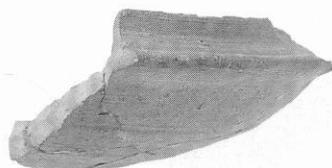


Fig. 30-126

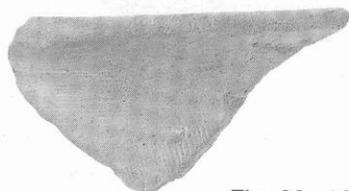


Fig. 30-127

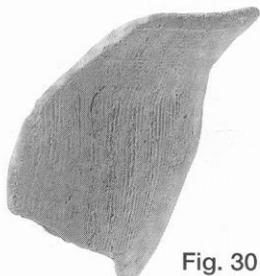


Fig. 30-128



Fig. 30-129

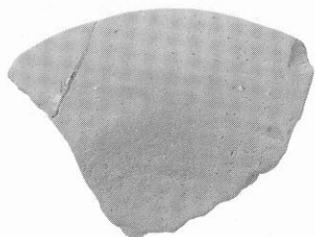


Fig. 31-130

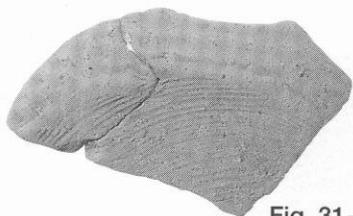


Fig. 31-131



Fig. 31-132



Fig. 31-134



Fig. 31-133



Fig. 33-135

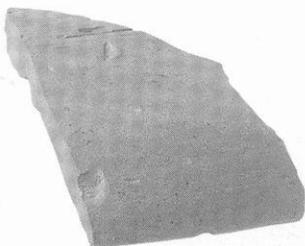


Fig. 33-136



Fig. 33-137



Fig. 34-138



Fig. 34-139

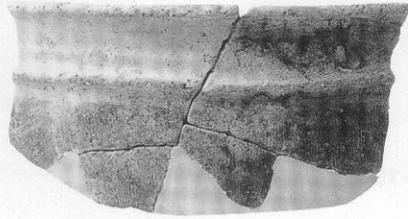


Fig. 34-140



Fig. 36-146

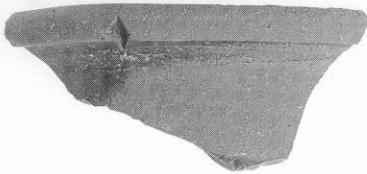


Fig. 36-141

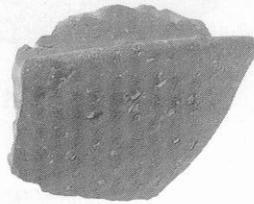


Fig. 36-142



Fig. 36-143



Fig. 36-144



Fig. 38-147

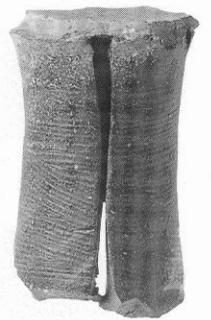


Fig. 38-150



Fig. 38-148



Fig. 38-149



Fig. 38-151

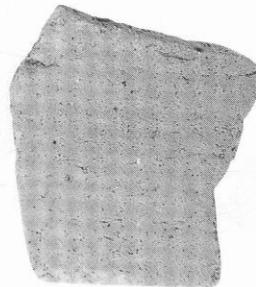


Fig. 38-152

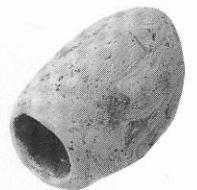


Fig. 38-153



Fig. 39-156



Fig. 39-157



Fig. 39-158



Fig. 39-154



Fig. 39-155

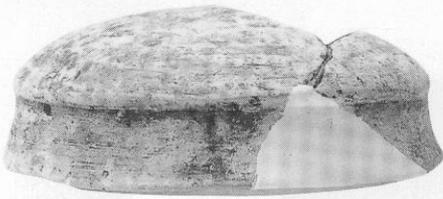


Fig. 40-159

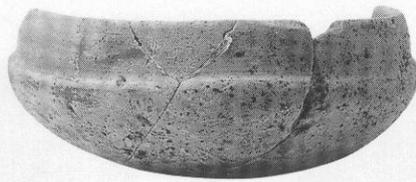


Fig. 40-160

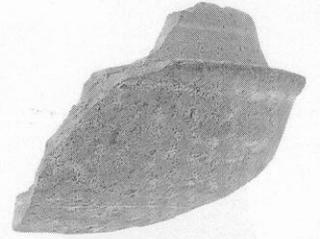


Fig. 40-161

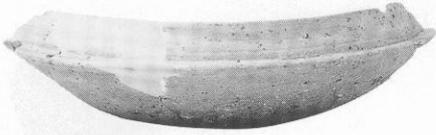


Fig. 40-162



Fig. 40-163



Fig. 40-164

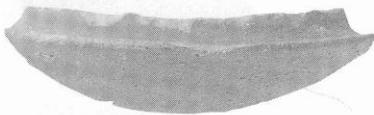


Fig. 40-165

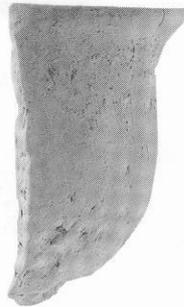


Fig. 40-166



Fig. 40-167

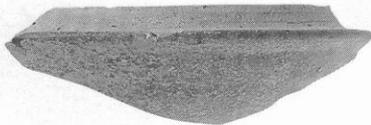


Fig. 42-169

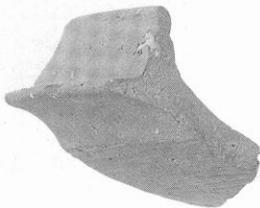


Fig. 42-172



Fig. 42-171



Fig. 42-174

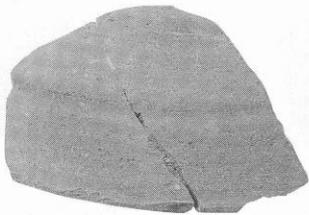


Fig. 42-176

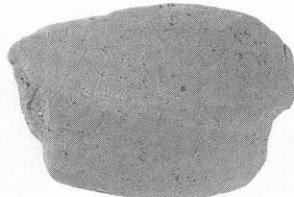


Fig. 42-177



Fig. 42-168



Fig. 43-178



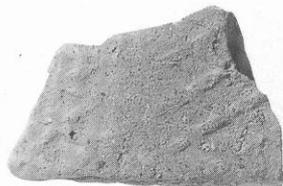
Fig. 43-179



Fig. 43-180



SX7



SX7



Fig. 46-194

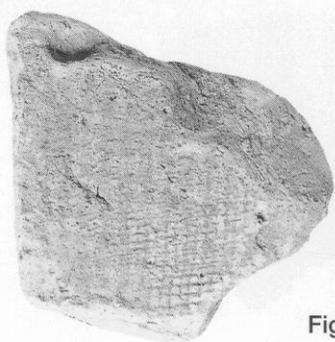


Fig. 46-187

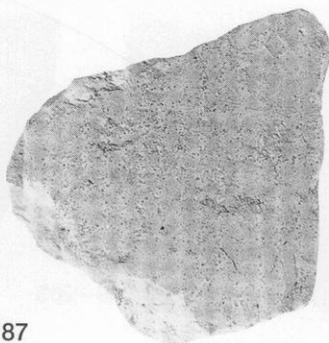


Fig. 46-188

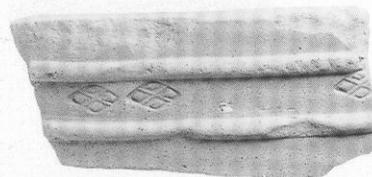


Fig. 46-192

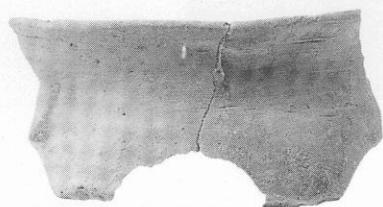


Fig. 46-189



Fig. 46-191



Fig. 46-193



Fig. 46-190



Fig. 46-181



Fig. 46-182

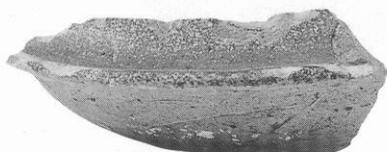


Fig. 46-183



Fig. 46-184

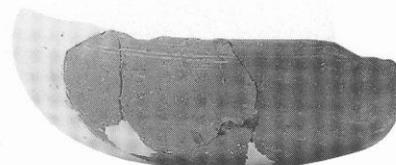


Fig. 46-185



Fig. 46-186

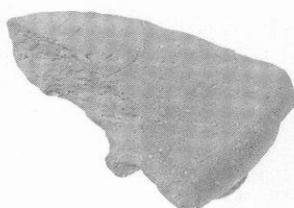


Fig. 46-195

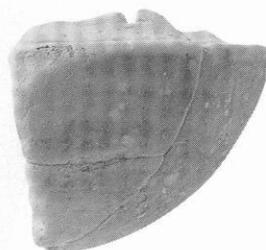


Fig. 46-196

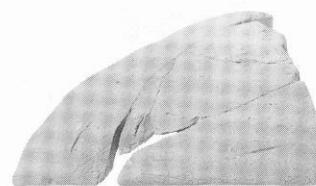


Fig. 47-197

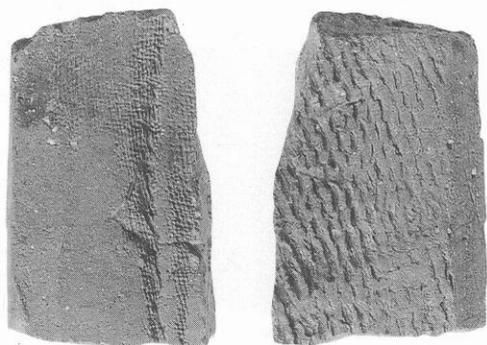


Fig. 47-198



Fig. 48-199

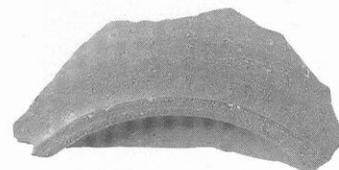


Fig. 48-200

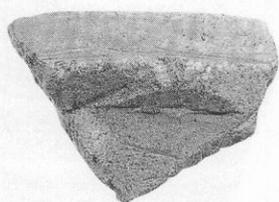


Fig. 49-202

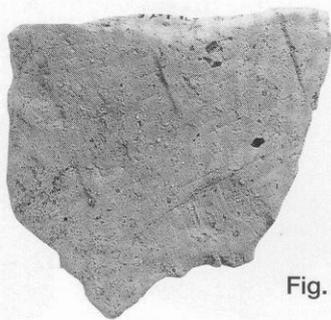


Fig. 49-203



Fig. 49-204

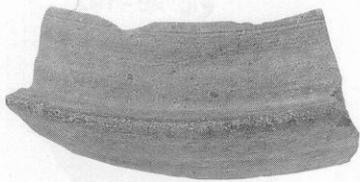


Fig. 50-205

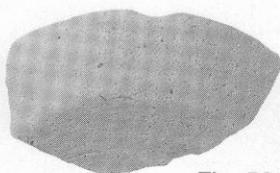


Fig. 50-206

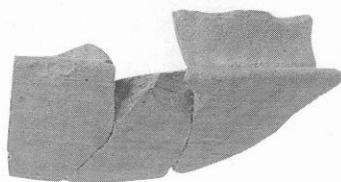
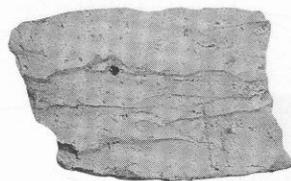


Fig. 51-208

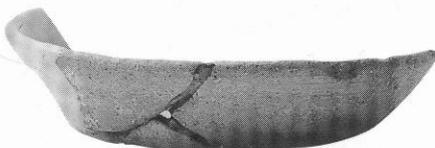


Fig. 51-209



Fig. 51-210



Fig. 51-211

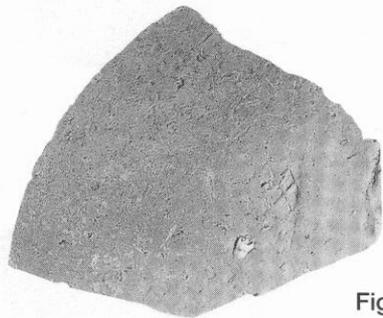


Fig. 51-212

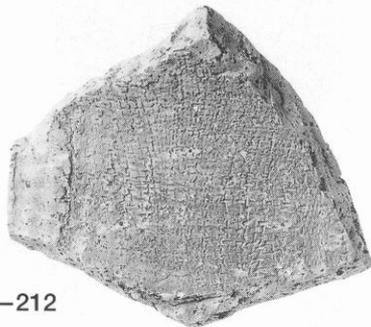


Fig. 51-214

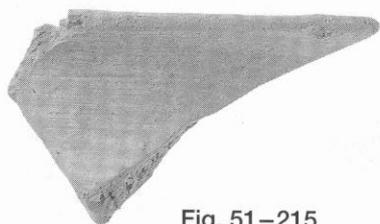


Fig. 51-215

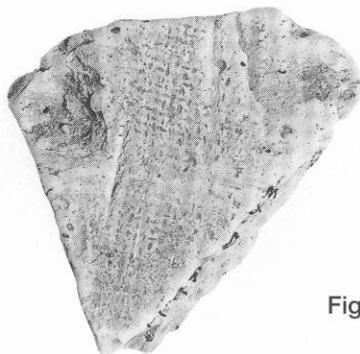


Fig. 51-213



Fig. 52-218

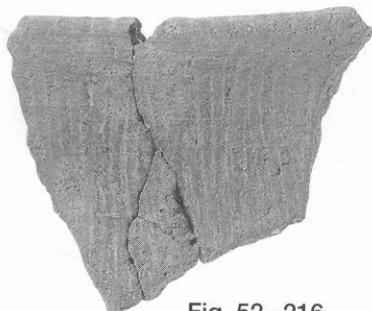


Fig. 52-216



Fig. 52-217

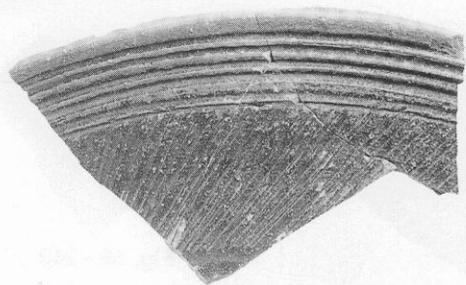


Fig. 52-219

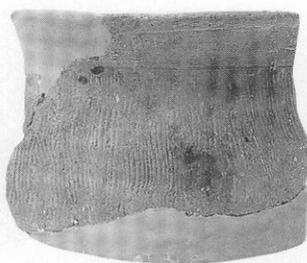


Fig. 52-220



Fig. 53-221

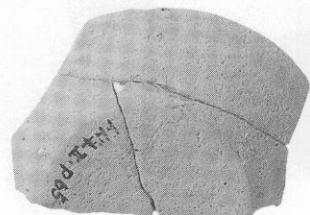


Fig. 53-222



Fig. 53-223

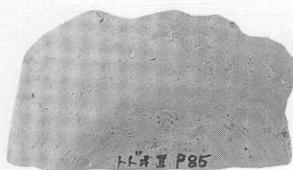


Fig. 53-224

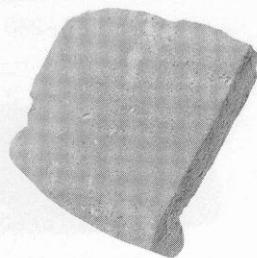


Fig. 54-225

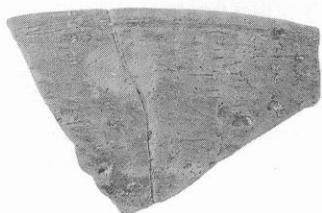


Fig. 54-226

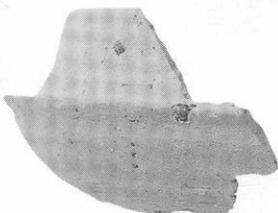


Fig. 54-228

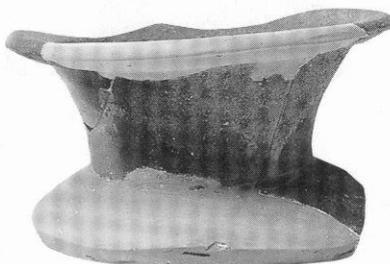


Fig. 54-227

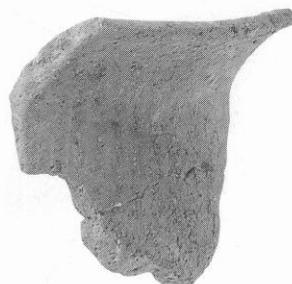


Fig. 54-229

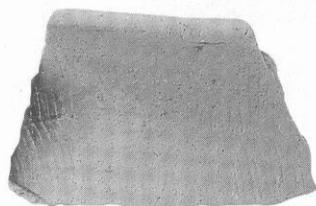


Fig. 54-230

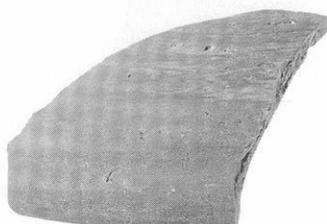


Fig. 55-231

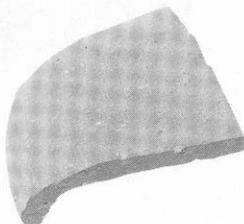


Fig. 55-232

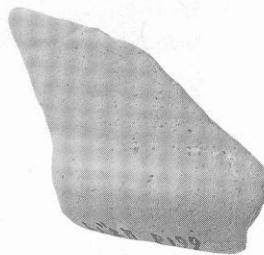


Fig. 55-233

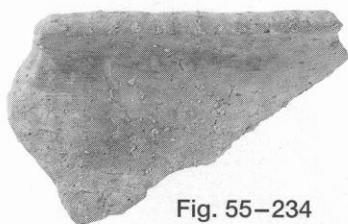


Fig. 55-234

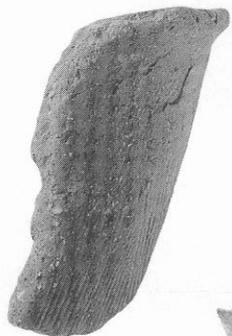


Fig. 55-235



Fig. 55-236

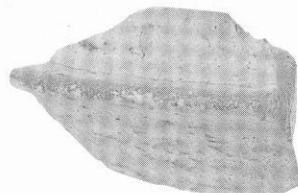


Fig. 56-238

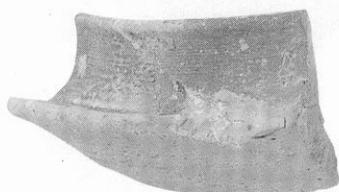


Fig. 56-240



Fig. 56-241

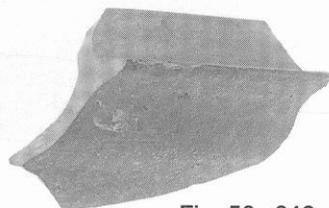


Fig. 56-242



Fig. 56-245



Fig. 56-239

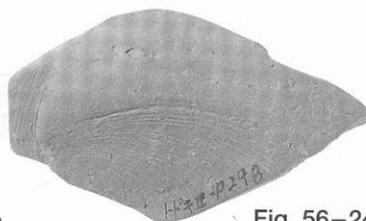


Fig. 56-243

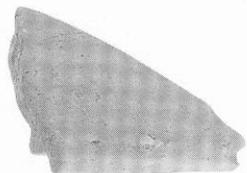


Fig. 56-244



Fig. 56-248



Fig. 56-246

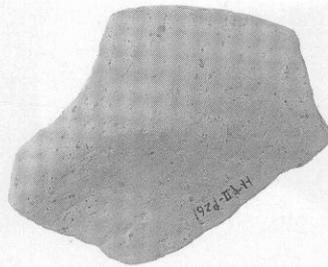


Fig. 56-247

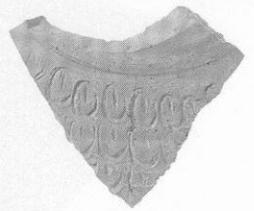


Fig. 56-249



Fig. 56-250



Fig. 56-251

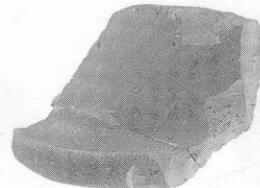


Fig. 57-253

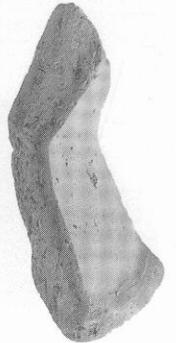


Fig. 56-252

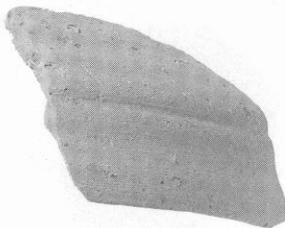


Fig. 57-254

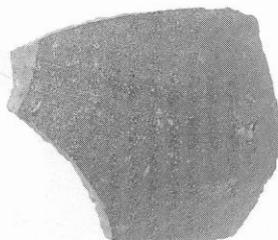


Fig. 57-255



Fig. 57-256

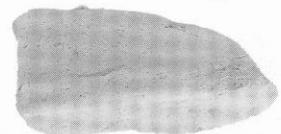


Fig. 57-257



Fig. 57-258

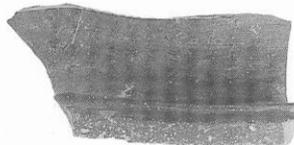


Fig. 57-259

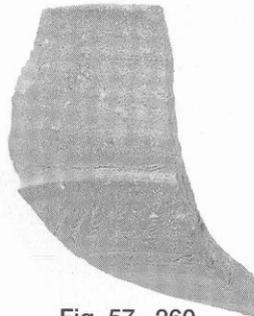


Fig. 57-260



Fig. 57-261

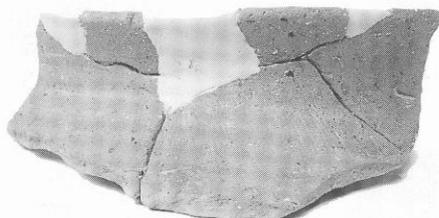


Fig. 57-264

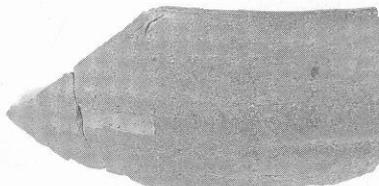


Fig. 57-263

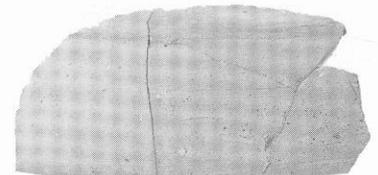


Fig. 57-262

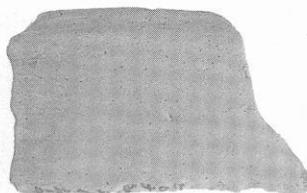


Fig. 58-265

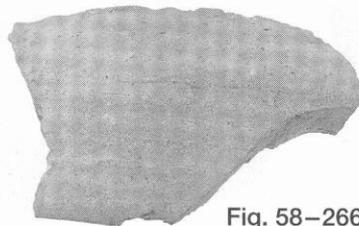


Fig. 58-266



Fig. 58-267

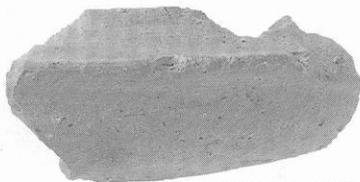


Fig. 58-268



Fig. 58-269



Fig. 58-270

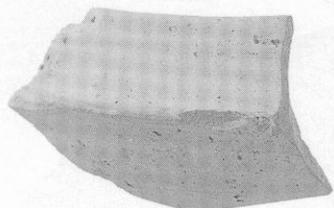


Fig. 58-271

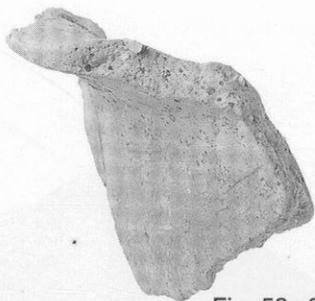


Fig. 58-272



Fig. 58-273

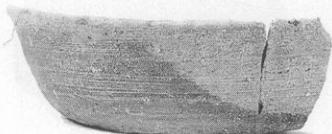


Fig. 59-274

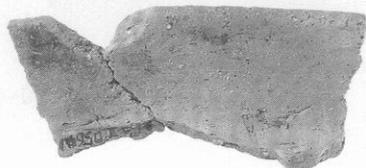


Fig. 59-280

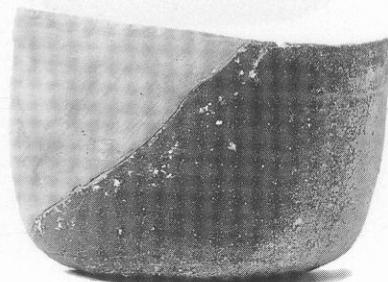


Fig. 59-285



Fig. 59-281



Fig. 59-276

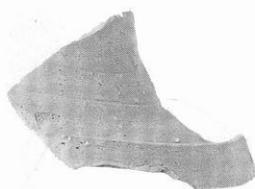


Fig. 59-282



Fig. 59-286

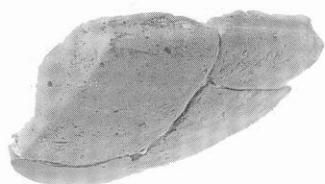


Fig. 59-275

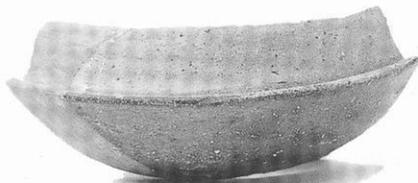


Fig. 59-283



Fig. 59-287



Fig. 59-277



Fig. 59-279



Fig. 59-284



Fig. 59-288



Fig. 60-289



Fig. 60-293



Fig. 60-295



Fig. 60-290



Fig. 60-294



Fig. 60-291

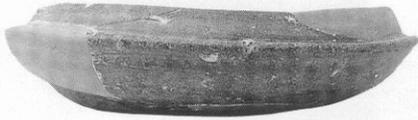


Fig. 60-292

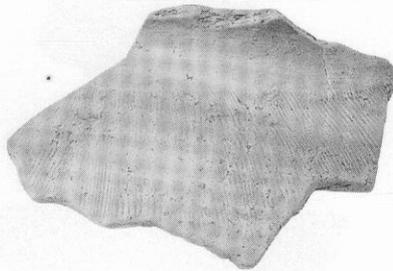


Fig. 60-296

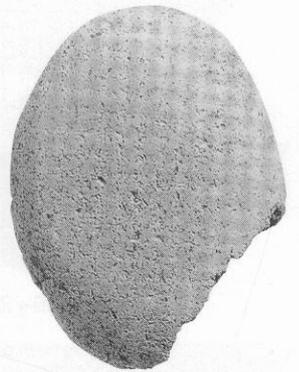


Fig. 60-297



Fig. 6-32



Fig. 24-108



Fig. 11-58



Fig. 42-168



Fig. 49-204



Fig. 56-237



SX-8

# 報告書抄録

フリガナ	トドキイセキⅡ							
書名	トドキ遺跡Ⅱ							
副書名	九州自動車道筑紫野I・C取付部県道建設に伴う発掘調査報告							
巻次	第58集							
シリーズ名	トドキ遺跡							
シリーズ番号	Ⅱ							
編著者名	渡邊 和子							
編集機関	筑紫野市教育委員会							
所在地	〒818-8686 福岡県筑紫野市大字二日市753-1 TEL 092-923-1111(代)							
発行年月日	西暦 1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
トドキ遺跡	福岡県筑紫野市 大字古賀	402176	170361	33° 28' 13"	130° 31' 30"	19970201 ) 19970331	2800m <sup>2</sup>	九州自動車道 筑紫野I・C 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
トドキ遺跡	集落	弥生時代 ) 古墳時代	溝・土坑・住居跡・ Pit		弥生土器 鉄器・石器 土師器 須恵器			

九州自動車道筑紫野I・C取付部県道建設  
に伴う発掘調査報告

## トドキ遺跡Ⅱ

筑紫野市文化財調査報告書  
第58集

発行 筑紫野市教育委員会  
福岡県筑紫野市大字二日市753-1

印刷 瞬報社写真印刷株式会社  
福岡市中央区天神5丁目4番16号城戸ビル3F



トドキ遺跡Ⅱ遺構配置図(S1/100)